



# 青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する 心理発達の研究

相澤, 直樹

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2015-12-18

(Date of Publication)

2016-12-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3295号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003295>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する  
心理発達的研究

神戸大学大学院人間発達環境学研究科  
准教授  
相澤 直樹

## 内容

第1章 青年期の心理発達の諸相と対人恐怖傾向，自己愛傾向.....	1
第1節 はじめに.....	1
第2節 青年期の心理発達.....	2
第1項 青年期における自己の発達.....	2
第2項 青年期における対人関係の発達.....	3
第3節 青年期における自己確立の課題と対人恐怖傾向，自己愛傾向.....	5
第1項 青年期の自己確立の課題と心理的葛藤.....	5
第2項 青年期における対人恐怖傾向，自己愛傾向と心理的葛藤.....	6
第4節 本研究の目的と構成.....	8
第1項 本研究の目的.....	8
第2項 本研究の構成.....	9
第2章 自己の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向.....	12
第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における自己の特徴.....	12
第1項 対人恐怖に関する先行研究の概観.....	12
第2項 自己愛人格に関する先行研究の概観.....	15
第3項 青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己の特徴①：自己の価値評価的側面 への意識関心の集中.....	17
第4項 対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己の特徴②：自己の二重構造.....	20
第5項 本章の研究目的と仮説.....	22
第2節 対人恐怖傾向と理想自己－現実自己不一致の関係（研究1）.....	23
第1項 問題と目的.....	23
第2項 方法.....	24
第3項 結果.....	27
第4項 考察.....	29
第3節 対人恐怖傾向，ならびに，自己愛傾向と自尊感情の不安定性の関係（研究2-1）...	33
第1項 問題と目的.....	33
第2項 方法.....	36
第3項 結果.....	37
第4項 考察.....	43

第4節 対人恐怖傾向, ならびに, 自己愛傾向と自己不一致の不安定性の関係 (研究 2-2)	47
第1項 問題と目的	47
第2項 方法	48
第3項 結果	48
第4項 考察	51
第5節 自己の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の規定要因 (研究 3)	55
第1項 問題と目的	55
第2項 方法	57
第3項 結果	58
第4項 考察	63
第3章 対人関係の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向	68
第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における対人関係の特徴	68
第1項 対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な対人関係の特徴	68
第2項 自己愛概念に関する批判的考察①: 見る者の視座を含む自己愛概念の定義について	69
第3項 自己愛概念に関する批判的考察②: フロイトの視座の展開に照らして	75
第2節 原体験理論から見た青年期の心理発達, ならびに, 対人恐怖傾向と自己愛傾向	85
第1項 原体験の概念とその法則, ならびに, 性質	85
第2項 原体験からの成熟の過程	88
第3項 原体験理論から見た青年期の発達	90
第4項 原体験から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向	93
第5項 本章の研究目的と仮説	97
第3節 ロールシャッハ検査法にみる対人恐怖症の心理 (研究 4)	99
第1項 問題と目的	99
第2項 事例研究 1	103
第3項 事例検討 2	107
第4項 事例検討 3	110
第5項 考察	114
第4節 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応 (研究 5)	118
第1項 問題と目的	118

第2項	予備調査	122
第3項	方法	127
第4項	結果	128
第5項	考察	129
第5節	対人葛藤場面における他者の意図の解釈と対人恐怖傾向, 自己愛傾向の関係(研究6)	132
第1項	問題と目的	132
第2項	方法	133
第3項	結果	134
第4項	考察	135
第6節	対人恐怖傾向(社交不安)に対する嫌悪判断と自動思考の効果(研究7)	138
第1項	問題と目的	138
第2項	方法	141
第3項	結果	143
第4項	考察	148
第7節	自己愛傾向に対する敵意帰属と怒りの効果(研究8)	152
第1項	問題と目的	152
第2項	研究1	158
第3項	研究2	162
第4項	総合考察	166
第4章	総合的考察	170
第1節	本研究の概要	170
第2節	自己の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の特徴	171
第3節	対人関係の観点からみた対人恐怖傾向と自己愛傾向	174
第4節	対人恐怖傾向, 自己愛傾向にみる青年期の心理発達の意義	176
第5節	対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通性と差異について	179
第6節	対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者を取り上げることの意義	183
第7節	本研究の課題と今後の展望	184
	関連業績一覧	188
	引用文献一覧	190



## 第1章 青年期の心理発達の諸相と対人恐怖傾向、自己愛傾向

### 第1節 はじめに

本研究は、青年期に広く認められる対人恐怖、ないしは、対人恐怖傾向を心理発達の知見から解明しようとして開始されたものである。当初は、対人場面を過度に恐れ、そこから引き下がろうとする心理の背景に、否定的な自己評価や自信の欠如が想定された。しかしながら、多数の先行研究を検討するうちに、対人恐怖傾向を生み出し維持する心理が必ずしもそのような単純なものではないことが明らかとなった。対人恐怖に悩む人々は、人前で緊張したり不安になったりする自分を非常に恥じ入り避けようとしながら、その背景に、人前での自然な不安や緊張を許容しない尊大で傲慢ともいえるような心理がかいま見られたのである。そのような矛盾葛藤をはらむ心理が青年期における対人恐怖傾向を駆動しているものと考えられた。

一方で、そのような表面には現れないながらも背景で影響している尊大で傲慢ともいえるような心理とは一体何なのかということが問題となった。そこで注目されたのが、同様に青年期に広くみられるものとして知られている自己愛人格、ないしは、自己愛傾向であった。自己愛人格は、自己に関する誇大感や万能感、特権意識や賞賛欲求の強さ、他者に対する搾取性と共感性の欠如を中心的な特徴とする性格傾向のひとつである。ギリシャ神話の中で、水辺に映る自らの姿に囚われた青年ナルシスにその語源を持つように、青年期心性を表す代表的な概念となっている。すでに自己愛人格についても多数の臨床研究、調査研究が報告されていたが、それらを検討するうちに、今度は、一見尊大で傲慢とも見える態度の背景に、傷つきやすさや過敏性などの対人恐怖に類似した特徴がみられることが明らかになった。

以上のように、対人恐怖と自己愛人格は、一見するところ互いに正反対ともいえるような特徴を見せつつも、ともに青年期に広くみられる行動特性であるだけでなく、一方が他方の背景で機能しているような相補的な関係にあることが推測された。このような現象は、青年期にみられる心理的な矛盾葛藤を端的に反映するものと考えられた。これまでの先行研究は、対人恐怖、ないしは、自己愛人格をそれぞれ単独で研究しているものがほとんどであり、それらを同時に取り上げて検討しているものはいまだ少ない。しかし、このような相矛盾する行動傾向の背景にある共通要因や構造特徴を解明することが、対人恐怖と自己愛人格への理解、さらには、そこに現れる青年期心性への理解に貢献するものと考えら

れた。そこで、本研究では、青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向を同時に取り上げ、青年期の心理発達の課題と問題の様相を明らかにすることを目的とした。

## 第2節 青年期の心理発達

### 第1項 青年期における自己の発達

青年期とは、おおむね10歳前後から20歳ごろまでを指す心理発達の段階の一区分であり、日本の学校段階では中学生から大学生にわたるの時期がこれに相当する(二宮, 2013)。Spranger (1924/1973) がこの時期の心理学的な特徴を“自我の発見”と描写したように、青年期は自己に関する意識や関心の様相が大幅な変化を示す時期である。

自己への気づきや意識は幼児期や児童期においてもすでに見られるが、その時点では依然として一時的で不安定なものであったり、目に見える範囲での性質に限定された表面的なものであったりすることが知られている。自分自身への評価は客観的なものではなく、むしろ楽観的で非現実的にポジティブな傾向がみられる(Harter, 1998; 中谷, 2013)。それが青年期になると、かなり持続的に自分自身に注意と関心を向けるようになる。青年期の初期には、自分自身の外見的特徴や容貌を過度に気にするようになり、他者からどのように見られているか、どのように思われているかに強い関心を抱くようになる。そのため、いわゆる自意識過剰な状態が続き、周囲の評価に一喜一憂する過敏さにもつながる(永井, 1994)。同時に、外見的側面だけでなく、自分自身の性格や能力などの内面的な特徴にも目をむけるようになる(Montemayor & Eisen, 1977)。つまり、自分自身の内気さや気の小ささなどの精神的な特徴を気に病んだり、社交性や知的な才能などにこだわったりなど、自己の抽象的な側面の特徴に意識を向けるようになる。また、時間的にも今現在のことだけでなく、将来や先行きを見越して自分自身のことを考えるようになる(都筑, 2013)。そして、先々の進路選択や就職、結婚といった出来事を意識して、自分自身のことを現実的にとらえるようになる。以上のように、青年期においては全般的に自己への意識や関心がかなりの一貫性とまとまりを持つようになる(Bernstein, 1980; 溝上, 2014)。外面的特徴から内面的特性までを含む自己の多様な側面にわたって、先行きを見すえた時間的な広がりや対人関係を中心とした広い社会的関係の中で、自己を一貫して意識するようになるといえる(溝上, 2014; 中谷, 2013)。

以上のような自己意識の変化は、さまざまな複雑な発達の要因に支えられて生じてくると考えられる。そのひとつに、この時期の知的側面における発達の影響が考えられる。児



童期後期から青年期にかけて仮説演繹的思考の確立に代表されるように、抽象的な法則や規則の優位性が認識されるようになる (Piaget, 1949/1960)。それにともなって、自分や他者の認知についても外見的な特徴だけでなく、個人的な信念や動機づけ、対人関係上の特徴などの、主に抽象的な側面が意識されるようになる (村山, 1979)。もうひとつ、青年期の心理発達上の重要な変化として、性的衝動と性への関心の高まりがあげられる。第二次性徴の発現にともなう性的衝動の芽生えは、青年期前期の心理状態に多大な影響を及ぼす (辻, 1972)。とくに、異性への関心は、異性に対する自己の印象や魅力についての意識を高め、必然的に青年期特有の自意識を増強する。また、思慕する対象に思いを寄せさまざまな思念を巡らせることは、気分や感情などの主観的な体験に対する理解と実感を深めるとともに、欲求不満や葛藤への耐性を身につける契機ともなる (藤井, 2014)。

同時に、この時期の青年の心理に大きく影響する要因として、社会や文化から寄せられる社会的自立への要請を無視することはできない。青年期は、それまで慣れ親しんだ家庭内での生活から成人期以降の経済的、精神的に自立した生活に向けての猶予期間に相当する (Erikson, 1959/1973)。自立した社会生活を送るためには基本的には自分自身だけが拠り所となるため、否応なく自分自身への意識や関心が高まる。当然すぐに自立した生活へと向かうことができるわけではなく、家庭内での生活にとどまりたいという甘えと、それに対する抵抗感から、母親的对象を中心に関係が複雑化していわゆる第二反抗期とよばれる現象も生じてくる (辻, 1972)。また、家庭内から見知らぬ大人社会へ移行する中間的な段階の受け皿として、同世代同年輩の友人の重要性が著しく増大する。そのような友人関係の中でお互い認め合ったり比較し合ったりすることで、広い社会的な関係の中における自分自身について学んでいく。

以上のような内的外的要因に影響されて、児童期から青年期にかけて自己への意識や関心のあり方は大きく変容する。その変化は、おおむね不安定で表面的、主観的、過度にポジティブな性質のものから、自意識が高く内面的な特質も含み、社会的、ならびに、時間的な広がりのあるものへと向かうものとまとめることができる。そして、このような自意識過剰な状態は、自立的な社会生活の実績に裏付けられた現実の自分への自覚と信頼が形成される成人期に至るまで持続することとなると考えられる。

## 第2項 青年期における対人関係の発達

青年期は、対人関係の面でも大きな変化が体験される時期である。第一に、それまで比較的密着した関係を形成してきた両親との関わりに変化が生じる。いわゆる第二反抗期と

よばれるような親子間での葛藤的關係が生じ、親や教師に対する甘えや依存の気持ちが低下して、対立や反抗の意識が高まりはじめる。近年、このような反抗期の存在についてはさまざまな研究成果から批判の目が向けられている（平石，2014）。確かにすべての青年が親に対する否定的な感情を抱くわけではないのかもしれない。ただし、少なくとも後述する友人關係の重要性の高まりを背景に、両親との關係が児童期のような重要性を持たなくなることは確かなことのように思われる（鈴木・江口，1974）。

以上のような家庭内での關係の変化とは対照的に、青年期の前期においては同世代同年輩の友人關係の重要性が飛躍的に高まることが知られている。児童期の友人關係は、家の近さや座席の位置などの相互的な近接性により発生、維持されるものであったが、青年期前期の友人關係ではお互いの同情や愛着といった内面的交流が重視されるようになる。それらは、内面的な互いの類似性に基づく一体感を特徴とするチャム關係の形成に結びつく（保坂・岡村，1986）。このチャム關係は、他者をモデルとする社会スキルの学習の場として機能するとともに、青年期特有の不安定感や緊張感を緩和し安心感を与える機能も果たすものとされている（松井，1990）。したがって、この時期の青年にとって信頼しうる友人關係をもつことは、自己意識や自尊感情の安定に直結するような重大な影響を持つものとなる（須藤，2010）。また、友人關係における信頼感や安心感といったポジティブな感情だけでなく、不安感や心配などのネガティブな感情体験も親和欲求や同調欲求を高める（榎本，2000）。このようにして、青年期前期は友人關係に対する同調欲求が最も高まる時期となる（鈴木・江口，1974）。以上の変化は、同世代同年輩の友人關係が、青年期特有の社会的自立の課題を背景に、家庭から社会への移行の中間段階にあたる機能を果たすことを示唆している。

一方で、青年期における友人關係は、とくに青年期後期にかけてまた別の意義を持つようになる。この時期のもっとも重大な発達の課題の一つに自我同一性の確立がある。自我同一性の感覚とは、“内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的意味での個人の自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験から生まれた自信”と定義される（Erikson, 1959/1973, p.112）。したがって、自分自身の意味や価値に一貫性を感じ取っているだけでなく、それが他者との間でも共有されるということが重要となっている。その意味では、自分自身の不変性と連続性だけでなく、自分自身が社会的現実の中で意味のある方向へ発達しつつあるといった側面が特に重要となってくるといえる（谷，2008）。青年期における社会的關係を構成する重要な要因として、同世代同年輩の友人關係

があることは前述のとおりである。したがって、自我同一性の確立に求められる社会的現実自己との出会いは、おもに友人関係において活発に体験されると考えられる。実際、青年期の対人関係を取り扱った研究では、その機能として、精神的な安定の基盤となるだけでなく、他者からの評価や他者との比較による自己の明確化や客観視の体験を提供することをあげるものが少なくない（中間, 2014, 宮下, 1995）。青年は、同じような立場や境遇にある同世代の他者と自分とを活発に比較検討し、外見的魅力、心身の面での成熟、対人関係能力などの様々な側面の自己の現実と直面する。また、青年期中期から後期にかけて、互いに気をつかうことなく本音をぶつけ合う傾向が高まる中で、ある意味では容赦のない評価や批判をこうむる機会が増える（落合・佐藤, 1996）。そして、そのことにより他者からみた現実の自分自身の姿と直面する機会が増加するものと考えられる。

以上のように見ると、青年期の対人関係においては、児童期以前の親子関係のかわりに同世代同年輩の友人関係が一体感や安心感をもたらす受け皿として機能するとともに、社会的現実としての自分自身に出会う場としての意義を担うようになることが理解される。このようなかたちで、青年期においては同年代同年輩の友人関係が飛躍的に重要なものとして体験されることになる。そして、そのような関係は、現実の自分自身についての見方が安定するとともに、友人に対しても自分と異なる独立した一人の人間として尊重してつき合うことが可能となる成人期に至るまで継続すると考えられる。

### 第3節 青年期における自己確立の課題と対人恐怖傾向、自己愛傾向

#### 第1項 青年期の自己確立の課題と心理的葛藤

以上のように、青年期においては、自己への意識関心の面でも対人関係の面でも、児童期とは異なった独自の発達的变化が体験されることになる。自己の面では、目に見える外見や能力だけでなく、目に見えない性格や価値観などの広範にわたって、また、時間的にも一貫したものとして自分自身を意識するようになり、特に、他者から見られる自分に過敏に反応するようになる。対人関係の面では、親子関係を中心とする児童期までの家庭内での関係が重要性を低め、かわりに同世代同年輩の友人関係が青年に安心感と一体感を提供するとともに、その中での友人との比較や友人からの評価が現実自己を知る機会ともなると考えられる。以上のようないわば成人期の社会的な関係への過渡的な段階で、児童期までに家庭内での関係で抱いていた自己意識が社会的現実の中で確認され修正される過程が進むものと考えられる。そして、それらの過程が比較的穏やかに進めば、成人期に至る

までに社会的現実の中での自分を自覚的に認識することが可能になり、青年期の自己確立の課題が一定程度達成されることになると考えられる。

ただし、このような変化は様々な面での葛藤を含むものと考えられ、必ずしもそのように穏やかに進むとは限らない。とくに、友人関係における現実の自己への気づきは、それだけでも児童期までに抱いていた主観的でポジティブな自己イメージとは相いれないものである可能性が高く、不慣れさを感じさせたり戸惑いをもたらしたりしかねない。その中ではどうしても現実の自分の否定的な側面にも気づかざるを得ず、必然的に自己への評価は低下する傾向にある。また、この時期の友人関係は、自意識が高まっているもの同士がかなり辛辣な評価をしあうようなことにもなりかねず、そのような中で友人関係での衝突も多くなりがちである。したがって、青年期の友人関係はかなり葛藤含みなものともなりやすい。その際、自分自身の主観的な評価のみを重視して友人との比較や友人からの評価を無視するという方向性も考えられるが、この時期の友人関係は、自分自身の受け皿として非常に重要であるために、それも完全には難しいことが多い。反対に、友人関係ばかり気にしては振り回されるばかりで、自分自身の独自性や個性を見失いかねない。そのようなかたちで、この時期の青年は、自分自身についてさまざまな面で悩みやすく、特に対人関係について多くの悩みを抱きやすくなる（高井, 2008; 高木, 2013）。以上のような友人関係における葛藤体験を模式的に示せば Figure 1-3-1 のようになる。

## 第 2 項 青年期における対人恐怖傾向、自己愛傾向と心理的葛藤

一方で、青年期に見られる対人関係上の悩みとしては対人恐怖がこれまでよく取り上げられてきた。対人恐怖とは、対人場面において強い不安感や緊張感を体験し、そのために他者に不快な感じを与えるのではないかと、嫌われるのではないかと懸念し、対人場面から退避しようとする神経症のひとつとされる（笠原, 2011）。同様な特徴は、必ずしも精神科診療や心理療法の対象にならないような、一般の青年男女に一過性にみられることが知られており、対人恐怖傾向や対人恐怖心性と呼ばれる（笠原, 1972）。かつて対人恐怖は日本文化独自の精神疾患とされていたこともあり、とくに文化論的観点を含めた研究が活発になされてきた。

青年期の対人関係に密接にかかわる心理的な悩みである対人恐怖傾向は、前述の青年期における心理的葛藤の問題に何らかの形で関連する可能性が考えられる。実際、従来の対人恐怖に関する研究は、その背景に前述の心理的葛藤と同様の二面的な矛盾対立構造を論じるものが少なくない。たとえば、谷（1997）は、自我同一性理論の観点から青年期の問

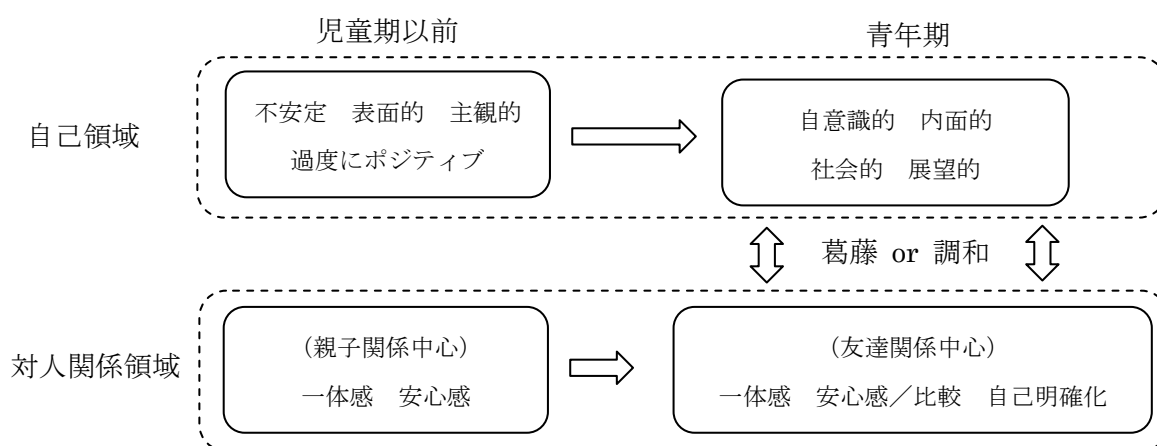


Figure 1-3-1 青年期の自己確立へ向けた心理発達の模式図

題を「個」としての自己と「関係」の中での自己との矛盾対立構造としてとらえ、「個」－「関係」の葛藤と概念化している。そして、他者との関係の中で自己を定義する日本の相互協調的自己観の下では、自我同一性の確立を目指す個への方向性は他者との間に葛藤をもたらしやすい、そのことが対人恐怖的な悩みを生み出すものと論じている。また、河合（1976）は、西洋的な個の論理と日本的な場の論理を対置させ、西洋的な個の確立が日本的な場の論理を乱れさせることが羞恥や対人不安の体験に結びつくとしている。さらには、近藤（1970）は、日本文化に特有の“他人に良く思われなければならない”という配慮的要請と“他人に優越しなければならない”という自己主張的要請の矛盾緊張関係が対人恐怖的な対人関係を発生させるものと論じている。そのほか、内沼（1977）の没我性と我執性、三好（1970）の“うぬぼれ”と“うぬぼれ切れなさ”の対立構造といった論述も同様の点を指すものと考えられる。以上のような知見は、前節で論じた青年期の対人関係における葛藤の中で、対人関係の影響を強く受ける状態になった際に、対人恐怖的な悩みが生じうることを示唆している。

一方で、自己への意識や関心の領域、つまり、自分自身の主観的な思いや評価を能動的に主張する方向性に向かう場合には、具体的にはどのような姿になるのであろうか。それが青年期心理を代表するもう一つのキーワードとされている自己愛人格である。自己愛人格障害とは、行動面と空想面での誇大感や万能感、特権意識や賞賛欲求の強さ、他者に対する共感性の低さや搾取的態度などを中心とする人格障害のひとつである（American Psychiatric Association, 2013）。ただ、一般の人々にもよく見られる自己愛的な性格傾向としても知られており、とくに青年期において一過性的に高まることが指摘されている（中山・中谷, 2006; 小塩, 2004）。また、近年では攻撃性との関連でもしばしば取り上げられている

(Bushman & Baumeister, 1998)。

対人恐怖傾向と自己愛傾向は、前者が人前での緊張のしやすさや回避傾向を特徴とするのに対して、後者は傲慢で自己主張的な態度を主要因とする点で、一見するところ相反する性質を持つかのように思われる。しかしながら、上記のように見てくると、それらはともに青年期における自己確立に関わる葛藤の表現型であることが理解される。これまで、対人恐怖傾向と自己愛傾向のそれぞれに関する研究は比較的多くなされてきた（小塩・川崎, 2011; 福井, 2007)。ただし、それぞれの研究領域においても青年期の心理発達との関連についていまだ明らかになっていない部分も多い。さらに、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者の側面から青年期の心理発達との関連を検討した研究は必ずしも多くはない（清水・川邊・海塚, 2008a, 2008b; 清水・海塚, 2002)。前項で示した観点からも、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両側面からこの時期の自己意識と対人関係の発達をとらえることは、青年期の心理発達の課題をより広範に解明することに寄与するものと考えられる。くわえて、対人恐怖傾向と自己愛傾向はともに対人恐怖症と自己愛人格障害という心的障害に由来する概念である。したがって、一般青年を対象として対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理を検討することは、それぞれに対応する心的障害に関するアナログ研究としての意義も有するものと思われる。

以上のように、本研究では、青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を検討することを通じて、青年期の心理発達の諸相を解明することを目的とする。とくに、自己への意識関心の領域と対人関係の領域のそれぞれの観点から解明することを通じて、上記の課題をより広範囲に検討することを目指す。

## 第4節 本研究の目的と構成

### 第1項 本研究の目的

青年期は、子どもから大人へと成長する過渡的な段階であり、心理面でもさまざまな変化や発達が体験される。その中で、成人としての自立した社会生活へ向けての準備として、さまざまな社会経験を通じて現実の自分自身への気づきと自覚を獲得する自己確立の課題は特に重要なものと考えられる。一方、青年期の自己意識と密接に関連する心理的な悩みとして対人恐怖傾向と自己愛傾向が知られている。これらの傾向は、表面的には一見するところ相反するような特徴を見せながらも、ともに青年期の自己確立の課題と関連するものと考えられる。これまで、対人恐怖傾向と自己愛傾向のそれぞれについては青年期心性

との関連でさまざまな研究がなされてきたが、これら両者を同時に取り上げて検討した研究はいまだに少ない。しかしながら、両者を同時に取り上げその相互関連を検討することは、青年期の心理発達の課題をより広範な視点から検討することを可能にすると思われる。同時に、両者はともに臨床場面における心的障害に由来する概念であり、それらの一般青年における現れを検討することは、当該の心的障害に関するアナログ研究としての意義も持つ。

以上のことから、本研究では、青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を一般青年男女を対象とした調査研究により解明することを通じて、青年期の心理発達を検討することを目的とする。とくに、自己に関する観点と対人関係に関する観点に分けて、それぞれについて対人恐怖傾向と自己愛傾向の特徴を明らかにすることに取り組む。

## 第2項 本研究の構成

本研究は4つの章により構成される。第1章においては、青年期の自己への意識や関心と対人関係の発達について概観し、青年期の心理的葛藤の基本的な構造を提起するとともに、それらと青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向との関連を検討し、本研究の目的と構成を論じる。以上のことを踏まえ、第2章においては、自己への意識関心の観点から、対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を解明する研究に取り組む。第2章第1節においては、これまでの先行研究の知見を収集整理することを通じて、対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通性としての自己への意識関心の集中、ならびに、差異としての自他への関心の方向性を示すとともに、両者を説明する基礎的な理論として、理想自己（誇大自己）と現実自己（委縮自己）の二重構造を提示する。その理論の上に立って、第2章第2節（研究1）では、対人恐怖傾向と理想自己と現実自己の不一致との関連を検証し、第3節、第4節ではそれぞれ、対人恐怖傾向と自己愛傾向について、自尊感情の不安定性（研究2-1）、ならびに、自己不一致の不安定性との関連（研究2-2）を検証する。第5節（研究3）では、以上の研究結果を受けて、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者を説明する統合的なモデルを構築し、一般青年男女を対象とした調査研究を通じてその妥当性を検討する。

第3章においては、対人関係の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向を検討することを目的とする。第3章第1節においては、対人恐怖傾向と自己愛傾向の対人関係における共通特性として否定的な他者認知を取り上げるとともに、先行研究を広く射程に含めて自己愛概念の問題点を批判的に検討する作業に取り組む。そして、第2節においては、そのことを受けて、辻（2003, 2008）による原体験理論から青年期の心理発達、ならびに、対人恐怖

傾向と自己愛傾向の形成過程を論じる。第3節（研究4）では、上記に示された対人恐怖の心理構造を臨床素材に基づき検討するため、自己臭恐怖を呈したロールシャッハ検査法の事例研究に取り組む。以上の理論的な検討を踏まえて、第3章第4節（研究5）では、対人恐怖傾向と自己愛傾向それぞれに特有な他者に対する否定的な認知判断傾向を、嫌悪判断と敵意帰属と概念化し、それぞれの個人差を測定する尺度を作成する。第5節（研究6）では、それらの尺度を用いて、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向との関連を検討する。以上の成果を踏まえ、第6節（研究7）では、対人恐怖傾向における否定的な解釈の偏りの特徴をより詳細に検討するため、嫌悪判断と自動思考の対人恐怖傾向に対する影響を比較検討する。第7節（研究8）では、第5節で考察された研究上の問題点を踏まえ、調整変数として怒りの情緒反応を導入して敵意帰属の自己愛傾向に対する効果を検討する。

第4章においては、以上のすべての研究成果について総括的な考察をおこなうとともに、本研究の限界と今後の展望について論じる。



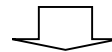
## 本論文の構成

### 第1章 青年期の心理発達の諸相と対人恐怖傾向, 自己愛傾向



### 第2章 自己の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向

- 第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における自己の特徴
- 第2節 対人恐怖傾向と理想自己－現実自己不一致の関係 (研究1)
- 第3節 対人恐怖傾向, ならびに, 自己愛傾向と自尊感情の不安定性の関係 (研究2-1)
- 第4節 対人恐怖傾向, ならびに, 自己愛傾向と自己不一致の不安定性の関係 (研究2-2)
- 第5節 自己の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の規定要因 (研究3)



### 第3章 対人関係の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向

- 第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における対人関係の特徴
- 第2節 原体験理論から見た青年期の心理発達, ならびに, 対人恐怖傾向と自己愛傾向
- 第3節 ロールシャッハ検査法にみる対人恐怖症の心理 (研究4)
- 第4節 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応 (研究5)
- 第5節 対人葛藤場面における他者の意図の解釈と対人恐怖傾向, 自己愛傾向の関係 (研究6)
- 第6節 対人恐怖傾向 (社交不安) に対する嫌悪判断と自動思考の効果 (研究7)
- 第7節 自己愛傾向に対する敵意帰属と怒りの効果 (研究8)



### 第4章 総合的考察

## 第2章 自己の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向

### 第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における自己の特徴

#### 第1項 対人恐怖に関する先行研究の概観

対人恐怖症とは、“他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型”とされ、“亜型として、赤面恐怖、視線恐怖、正視恐怖、体臭恐怖、醜形恐怖、吃音恐怖等々がある”と定義される（笠原, 2011）。この症状を最初に精神医学の分野において本格的に取り上げたのは、森田療法の創始者の森田正馬である。森田（1960）は、独自の神経質理論に基づいて赤面恐怖を代表とする対人恐怖の諸症状を強迫観念症のひとつの位置づけ、自ら人前を気にすることを恐怖するという点に着目して羞恥恐怖と総称した。その後、対人恐怖は、当初は欧米諸国には見られない日本文化独自の心的障害と考えられていたこともあって、多くの研究者により論じられてきた。笠原（1972）は、対人恐怖を単一の神経症症状としてだけでなく病態に一定の広がりを持つ症候群としてとらえ、①平均者の青春期という発達段階に一時的にみられるもの、②純粹に恐怖症的段階にとどまるもの、③関係妄想性をはじめから帯びているもの、④前分裂病症状として、ないしは、分裂病の回復期における後症状としてみられるもの、の4段階に分類した。また、山下（1982）は、このうちの③に相当するものを対人恐怖症の定型例と呼び、“i)相手に不快感をあたえる欠点があると感じている”、“ii)その欠点に関する確信はきわめて強固である”、“iii)その欠点は相手から直観的に感じ取られる”、“iv)症状は一定の状況内に限局している”、“v)症状形成が了解的に把握できる”ことを挙げている。さらに、村上(1994)は、思春期に好発する同様の妄想的訴えを中心とする症状を思春期妄想症と呼び、独自に調査研究を行っている。

以上のように、対人恐怖は、当初の神経症としての位置づけから、思春期青年期に一過性にみられる悩みとしてのもの、妄想的な性質を色濃く持つもの、統合失調症の発症前後にみられるものを含む症候群にまで拡大されてきた。また、症状の特徴としても、妄想念慮的な確信を抱くものが多いことが示され、統合失調症における妄想との異同が問題とされてきた。

以上のような流れの中で、これまで対人恐怖の原因や性格上の特徴などについても多数の研究がなされてきた。とくに性格構造については、森田ら（森田・高良, 1953, 森田, 1960）

において、すでにその後の対人恐怖研究の基礎となるような主要な知見が提示されている。すなわち、森田は、自己の提唱する神経質を、ヒポコンデリー基調（普通にもあり得る身体的感覚や想念、感情を病的異常ととらえ、それを排除しようとする不可能な努力にとらわれる、心気症に代表される精神的傾向）によるものと位置づけ、“ある動機から誰にも、ありがたい感覚、気分、感想を病的異常と考え過ぎ、これに執着、苦悶するようになったもので、いいかえれば、実は病気でも何でもないものを、我と我心から、次第々々に病気に組み立て、こねあげたもの”としている（森田・高良, 1953, p.11）。これによって、従来神経系の異常や体質の脆弱性、ないしは、成育歴における外傷体験に起因するものとされていた心的障害は、当人の心構えの問題として位置づけなおされた。このような知見にたつて、森田は、対人恐怖の心理を“恥かしがる事を以て、みずからふがないことと考へ、恥ずかしがらないようにと苦心する『負けおしみ』の意地張り根性”と解釈している（森田・高良, 1953, p.17, 傍点原文のまま）。つまり、人前で恥ずかしいと感じる自然な体験を受け入れることができず、それをあつてはならないものと過度に抑えようとするために、ますます人前での羞恥心や緊張感を強く感じてしまうようになるのである。対人恐怖に関する病理学的研究の多くは、このような二面的な矛盾葛藤構造の影響を論じるものとなっている。たとえば、内沼（1977）は、独自の人間学的観点から対人恐怖の体験構造を検討し、強気、大胆さ、自負心の高さと、そのためにかえって現実場面で先鋭に感じられる羞恥心や気の弱さを見出し、“強気と弱気の二面的矛盾性”と呼んでいる。また、西園（1970）は、精神分析的観点から対人恐怖を分析し、幼児期の過保護や過剰な期待のために自我理想が過補償的に形成されていること、それゆえに、自己に対してマゾヒスティックな姿勢を身に付けていることを考察している。以上の理論は、いずれも森田が指摘したような理想と現実の矛盾や不一致体験を対人恐怖の駆動要因に位置づけている。

一方、従来対人恐怖的な悩みは、特に臨床的な治療の対象とならないような一般の人々にも比較的広く認められることが指摘されており、対人恐怖傾向、ないしは、対人恐怖心性として多くの関心が寄せられてきた。中でも、前述のとおりこの心的障害が日本独自のものと考えられていたこと、さらにその中で青年期心性に深く関連するとの知見が示されたこともあり（笠原, 1977）、比較文化的な観点、ないしは、青年期心性との関連で検討されることが多かった。その最早期の研究が小川らによるものである（小川, 1974; 小川・林・永井・白石, 1979; 小川・木村・林, 1980; 小川・永井・白石・林, 1979）。小川（1974）は、わが国で初めて一般健常者の対人恐怖的な悩みを測定する尺度を作成してい

る。そして、同尺度を用いて、アメリカ人大学生と日本人大学生、ならびに、対人恐怖症患者との間での因子構造を検討する比較文化的研究（小川・林・永井・白石, 1979）、地域性（都市部か地方か）と家族外成員との接触の有無について各因子得点を比較した研究（小川・永井・白石・林, 1979）、さらには、中学生、高校生を含めて再度同尺度の因子構造を検討したうえで、幼児期の家庭内の雰囲気と比較する研究（小川・木村・林, 1980）をそれぞれ実施している。また、谷（1997）は、青年期の心理発達と文化心理学的観点を統合するかたちで、他者との関わりの中で自己を規定する相互協調的自己観の優勢な日本文化においては、自我同一性の確立に必要な「個」への志向性が「関係」への志向性と対置され葛藤を引き起こしやすくなるとし、「個」－「関係」の葛藤と概念化している。そして、この「個」－「関係」の葛藤と漸成発達論の第Ⅱ段階にあたる“自律性対恥・疑惑”の課題が対人恐怖を引き起こすとの仮説に基づいて、共分散構造解析を用いたモデルの検証を行っている。そのほか、いくつかの研究で対人恐怖傾向の時代的な変遷についても検討がなされている。以前は、対人恐怖傾向の減少や変化を報告する研究が少なくなかったが（岡田, 2002; 福井, 2007）、近年では再び対人恐怖傾向が高まりつつあるとの報告も見られる（堀井, 2011）。

一方で、この領域に関連する最近の最も大きな変化はむしろ欧米圏で生じている。従来対人恐怖のような対人場面における恥や緊張に関する症状は欧米ではあまり見られないとされていたのが、1980年代に入ってアメリカ精神医学会による精神疾患の診断・統計マニュアル（以下、DSMとする）の第3版において、同様の症状が社会恐怖の診断分類名として導入されて以来、にわかに注目されるようになった。当初は、特定の場面や行動に対する恐怖症的反応に限定されていたため、適応の範囲は必ずしも広いものではなかった。しかしながら、その後対人場面全般で不安や恐怖を体験する全般性の存在が主張されるようになって以来（Liebowitz, Gorman, Fyer, & Klein, 1985）、社交不安障害という名称が主に用いられるようになるとともに、急激な増加が報告されるようになった（永田, 2009）。近年の大規模な疫学調査では、欧米圏においてうつ病やアルコール乱用、特定の恐怖症と並んでもっとも高頻度に見られる心的障害のひとつに挙げられている（多田, 2011）。対人恐怖との異同については現在議論がなされている最中ではあるが、おおむね病態の記述的特徴や臨床例の検討からは、対人恐怖傾向を含む対人恐怖の軽症例と社交不安障害はほぼ同一のものとしての認識が主流となりつつある（笠原, 2005）。

## 第 2 項 自己愛人格に関する先行研究の概観

自己愛という用語を最初に心理学の領域に取り入れたのは S. Freud である。Freud は、統合失調症（パラノイア）の心理機制を解明する発達の、理論的枠組みとしてこの概念を用いた(Freud, 1911/1983)。その後、早期の心理学的発達段階としての一次的な自己愛状態とその後の二次的な状態の区別、自我感情や自我理想との関連、対象選択における自己愛型等について詳細な論究をおこない、この概念を精神分析学理論全体に導入している (Freud, 1914/1969)。Freud による自己愛の定義は精神分析学の理論的展開の中で一定の変動がみられるものの (Laplanche & Pontalis, 1976/1997)、おおむね自我（自己）へのリビド一備給（保管）として理解されている (Pulver, 1970)。この定義にも見られるように、Freud による自己愛の概念は精神分析的理論の中で定義されるものであり、直接的に具体的な現象や症状を指すものではない。Freud 自身がこの心理機制を示す人を治療困難とみなしたこともあり、その後の研究の中でこの用語は精神分析的治療が困難な一部の患者たちに広く用いられていたようである。

自己愛の概念が再び頻繁に取り上げられるようになったのが、おもに 1970 年代から 1980 年代に活発化した自己愛人格障害に関する諸研究においてである。なかでも、Kernberg(1975)は、精神分析的な自我発達理論と対象関係論の両者の観点から、また、Kohut(1971/1994, 1977/1995)は自ら創始した精神分析的自己心理学の観点から、それぞれこの病態の心理構造の解明と治療的アプローチの進展に大きく貢献した。それと同時に、Kernberg(1975)による臨床像の記述をもとに、DSM の第 3 版から自己愛人格障害の記述的診断基準が導入されたことで、自己愛的な人物の具体像がより明確なものとなった。この DSM の記述的定義は、その後若干の変遷をたどりながら基本的には同様の内容が維持されている (American Psychiatric Association, 2013)。今日、自己愛、ないしは、自己愛人格という用語は、行動面や空想面での誇大感や万能感、特権意識や賞賛欲求の強さ、他者に対する共感性の低さや搾取的態度を主特徴とする人格障害の一型として理解されている。

一方で、自己愛という概念自体は、もともとは広く知られたギリシャ神話の登場人物に着想をえたものであり、従来一般の人々の精神状態や性格傾向を映し出す用語としてもなじみやすいものであった (Lowen, 1985/1990, 小此木, 1981)。そのため、これまでに必ずしも診断や治療の対象とはならないような人々にみられる自己愛傾向や自己愛心性に関する研究が多くなされてきた。特に、思春期青年期にある若者の心理に関連の深いものとして論じられることが多く、この時期に一過性に自己愛的な傾向が高まることが指摘されて

いる（中山・中谷, 2006; 小塩, 2004）。身近な経験からも、自立の課題に直面して自意識や自己関心が高まるこの時期において、一時的に現実の裏づけのない誇大な自惚れや慢心を抱いたり、また、自分が賞賛され特別な扱いを受ける場面をひそかに望んだり、さらには、自己関心の高まりの中で他者への思いやりや配慮に欠ける言動をしてしまうといったことは容易に想像できる。このような行動や態度は、青年の対人関係の在り方、ならびに、気分感情状態に多大な影響をもたらすだけでなく、青年期の主要な課題としての自我同一性の形成にも密接に関連するものと考えられる（原田, 2012）。以上のことから、前述のような自己愛人格障害の諸特徴は、青年期に広くみられる自己愛的な性格傾向、つまり、自己愛傾向としても重要な位置にあるものと考えられる（小塩・川崎, 2011）。

前述のDSMによる記述的定義以来、自己愛人格についてはかなり多数の研究が行われている。精神・心理臨床の分野では、この診断基準の妥当性と信頼性を取り上げた研究が多く、他の人格障害との異同、気分障害との関連などが繰り返し検討されている(Blais, Hilsenroth, Castlebury, 1997; Holdwick, Hilsenroth, Castlebury, & Blais, 1998)。また、他の精神障害との関連を検討した研究としては、摂食障害の背景に自己愛人格の影響を見出している研究が比較的多くみられる(Steiger, Jabalpurwala, Champagne, & Stotland, 1997)。一方、Raskin & Hall (1979)による自己愛人格目録（以下、NPIとする）の開発は、一般健常者における自己愛傾向の研究を大幅に推進した。NPIの後もいくつかの自己愛関連尺度が開発され、それらとの関連や尺度の構造に関する研究もかなりの数に上る(Rathvon, Holmstrom, 1996; Soyer, Rovenpor, Kopelman, Mullins, & Watson, 2001)。日本においても、NPIの翻訳版（大石, 1987）をはじめ、有能感・優越感、注目・賞賛欲求、自己主張性の3因子からなる短縮版のNPI-S（小塩, 2004）、自己愛の過敏な側面も含めて測定する自己愛人格尺度（谷, 2004）、Kohut理論に基づく自己愛の脆弱性を測定する自己愛的脆弱性尺度（上地・宮下, 2005）などが開発されており、これらの尺度の妥当性と信頼性に関する研究が多い。また、従来の自己愛関連尺度の構造を検討し自己愛傾向の下位類型を見出したり、それらの尺度を用いて調査協力者を群分けし、相互に比較検討するような研究もいくつかみられる。その中では主に、顕在的・潜在的、誇大的・過敏的、適応的・不適応的などの自己愛の下位類型が見いだされており、それらの相互関係や他の人格特性尺度との関連などが検討されている(Wink, 1991; Sturman, 2000)。また、自己愛と他の行動特性の関連を取り扱ったものの中で、特に目立つのが敵意や攻撃性との関連を扱ったものである。とくに自己愛傾向の一部の側面が他者に対する攻撃行動や反社会的行動に関連することが示

されている(Bushman & Baumeister, 1998; Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。以上のほかに、自己愛人格の形成要因として家庭内の養育態度(Ramsey, Watson, Biderman, & Reeves, 1996)、原因帰属スタイルを検討した研究(Ladd, Welsh, Vitulli, & Labbé, 1997)、自己愛人格と夫婦関係や友人関係などの対人関係との関連を検討した研究なども見られる(小塩, 2004)。以上のように、自己愛人格障害、ならびに、自己愛傾向についてはこれまでにかなり多方面にわたる先行研究が報告されている。

### 第3項 青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己の特徴①：自己の価値評価的側面への意識関心の集中

以上のように、対人恐怖傾向は、対人場面における強い緊張感と当惑、ならびに、そのことにより他者に不快な思いや心情を抱かせることへの不安、そこから生じる対人場面からの撤退傾向に主な特徴がみられる。一方で、自己愛傾向は、尊大で誇大的な態度、他者からの賞賛や特権的待遇への欲求、他者に対する共感性の低さや搾取性を中心的な特徴とするものである。このように両傾向は一見するところ全く相反する行動傾向であるように思われる。しかしながら、これらはともに青年期心性との深い関連が指摘されているものでもある(笠原,1977; 小塩,2004)。実際、両傾向が青年期にかけて高まることを実証的に示した研究もいくつか報告されている(相良,2006; 堀井,2002)。したがって、両傾向は青年期心性に関連する何らかの共通性がある可能性が考えられる。

対人恐怖症の記述的定義については、前項で指摘したとおり、“他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型”というものが最もよく用いられる(笠原, 2011, p.515)。また、山下(1982)が対人恐怖症の定型例の特徴として指摘した、“i)相手に不快感をあたえる欠点があると感じている”, “ii)その欠点に関する確信はきわめて強固である”, “iii)その欠点は相手から直観的に感じ取られる”, “iv)症状は一定の状況内に限局している”, “v)症状形成が了解的に把握できる”もしばしば取り上げられる。そのほか、対人恐怖傾向に関する尺度研究は、対人恐怖傾向の構成要素を明らかにしている。たとえば、堀井・小川(1997)は、一般健常者を対象に対人恐怖傾向の尺度を実施し、因子分析による6因子(①“自分や他人が気になる”悩み、②“集団に溶け込めない”悩み、③“社会的場面で当惑する”悩み、④“自分を統制できない”悩み、⑤“目が気になる”悩み、⑥“生きていることに疲れている”悩み)を抽出している。また、永井(1994)は、“対人状況における行動・態度”について3

因子(①他者との打ち解けた行動の困難さ, ②緊張感の高まり, ③視線の問題), “関係的自己意識”については1因子, “内省的自己意識”については2因子(①自己の不安定さと劣等感、②自己の統制の困難さ)を抽出整理している。

以上のように, 対人恐怖の記述的定義や因子構造は研究者により若干異なるものの, おおむね以下の点では共通しているものと思われる。まず, 第一に, 否定的で萎縮的な自己意識・自己感覚がみられる点である。これは, “情けない, 恥ずべき, 劣った”といった表現で表されるようなものであって, 同時に対人場面において先鋭に感じられるという特徴を持っている。それゆえ, 対人場面では予期的不安が強まる傾向にあり, 他者の反応, 特に軽蔑や侮辱という否定的な反応に注意が向きやすい。これが対人恐怖の第二の特徴, 対人場面における傷つきやすさ, 他者の反応への過敏さを形成している。これらの結果, 対人場面は苦痛に満ちたものになりやすく, そこから, 対人場面や他者注目を回避する傾向, 自己抑制的, 主張性の弱さ等の特徴が派生してくるものと考えられる。以上の特徴をまとめると, 対人恐怖症, ないしは, 対人恐怖傾向は, 自己に関する否定的, 萎縮的な意識や感覚が優勢となっており, それが支配的な位置づけを得て, 対人場面の回避や自己抑制的な対人態度が生じているものと言える。

一方で, DSM 第5版 (American Psychiatric Association, 2013) によると, 自己愛人格障害の記述的診断基準は, おもに①自己の重要性に関する誇大な感覚, ②限りない成功, 権力, 才気などへのとらわれ, ③自分が特別であり, 地位の高い人たちにしか理解されないと感じている, ④過剰な賞賛欲求, ⑤特権意識, 特別な取り計らいを求める, ⑥対人関係で相手を利用する, ⑦共感性の欠如, ⑧他者への嫉妬, ⑨尊大で傲慢な行動, 態度の項目からなる。この診断基準は広範で詳細なものであるが, 項目形式であるため, 具体的な人物像を描き出すにはややまとまりに欠ける印象が持たれる。この診断基準のもととなった Kernberg(1975)による臨床記述では, 自己愛人格障害の患者は以下の様に描き出されている。つまり, “人前でももっぱら自分のことばかり話し, 他者から愛され称えられることを熱望しており”, “他者の気持ちへの共感はほとんどなく, 人から, ないしは, 自分自身の誇大な空想の中で誉めたたえられること以外何ら関心がなく, 他者のまなざしが逸れて自己関心が失われるや否や落ち着きがなく退屈し始める”, “概して人との関係においては搾取的, 寄生的”で, “あたかも他者を操作したり利用したり, さらには罪悪感なく搾取する権利があるかのよう”であるとされている (Kernberg, 1975, p.227-228)。また, 自己愛傾向の測定尺度としてもっともよく用いられる NPI の因子構造としては, ①リーダーシップ-権威,



②自己陶醉－自己称賛, ③ 優越性－傲慢さ, ④搾取性－特権性の 4 因子構造と, ① 権威, ②自己顕示, ③優越性, ④特権性, ⑤搾取性, ⑥自己充足, ⑦虚栄の 7 因子構造が報告されている(Emmons, 1987; Raskin & Terry, 1988)。

以上のような描写や因子構造には若干の違いがあるものの, 自己愛人格障害, ないしは, 自己愛傾向の特徴については, 以下のようにまとめることができよう。まず, 自己愛人格の特徴として, 自己に関する誇大感, 万能感, 優越感を挙げることができる。これは, 自分自身や自分の業績, 社会的立場, 能力等に関する極端に理想化された意識ということができる。同時に, 対人関係的側面についてはやや複雑な特徴を持っており, 一方で他者への共感や配慮は低いものの, 他方で他者からの過剰な称賛や承認を求める傾向は強い。このような対人関係の様式は一見矛盾しているようであるが, 自己に関する特徴と併せて考えるとその一貫性が理解される。それは, 他者が, 肥大化した自己意識, 自己誇大感を支える, あるいは, 保証する存在としてしかとらえられておらず, 独自の存在として他者を尊重したり思いやったりすることができないということである。それゆえに, 他者の気持ちにほとんど関心を抱いていないにもかかわらず, 他者からの称賛や喝采, あるいは, 受容といった側面に関してだけ要求がましいということになる。以上の特徴をまとめるならば, 自己愛人格とは, 肥大化した自己の価値に関する意識・感覚が極めて優勢となっており, それが対人関係でも支配的な位置にある状態と言える。

以上のように対人恐怖傾向と自己愛傾向の特徴を概観してきた。その結果, 対人恐怖については, 自己に関する否定的, 萎縮的な意識や感覚が優勢となっており, それが支配的な位置づけをえて, 対人場面の回避や自己抑制的な対人関係が生じているとまとめることができた。一方で, 自己愛傾向については, 肥大化した自己の価値に関する意識・感覚が極めて優勢となっており, それが対人関係でも支配的な位置にある状態と理解することができた。これらの特徴を比較してみると, 肯定, 否定に違いはあるものの, 両傾向とも自己の価値的, 評価的側面に意識・関心が集中しているという共通特徴を抽出することができる。いずれの場合も, 他者から見た自己の評価に夢中であり, いわゆる自意識過剰な状態にあるものといえる。また, そのことと併せて, 他者との関わりにおいてもそのような自己への意識・関心が中心的な役割を担っている点も共通している。対人恐怖傾向では, 自己への意識や関心は否定的で萎縮したものであるが, 他者はそのような自己意識を照らし返すかたちで, 自分に非難を向けるもの, 侮辱や軽蔑を与えるものと認知されており, これが対人場面での過敏さや回避傾向を形成している。また, 自己愛傾向についても, 他

者は誇大的で肥大化した自己意識を照らし返す存在としてもっぱら認知されており、その反面、他者の独自性や主体性にはほとんど関心が払われていない。そのことが、賞賛欲求や搾取的態度、他者の利用といった態度に結びついていると考えられるのである。

#### 第4項 対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己の特徴②：自己の二重構造

一方で、対人恐怖傾向と自己愛傾向は、自己に対する価値評価的意識の内容自体は正反対となっている。つまり、対人恐怖傾向では、自己評価は否定的で萎縮的である。それに対して、自己愛傾向では自己の評価は肯定的で誇大的である。その意味では、両特性は正反対の自己意識の特徴を示すものと考えられる。しかしながら、対人恐怖も自己愛も、それらの先行研究を精査すると、単に否定的、ないしは、肯定的な自己評価や自己意識があるだけでなく、それと対立するような自己評価も内在化させた矛盾葛藤構造を指摘するものが少なくない。

対人恐怖については、前項で取り上げた通り、すでに森田ら(1960, 1953)が同様の特徴を“思想の矛盾”として取り上げている。思想の矛盾とは、神経質患者全般にみられる特徴で、“かくありたい、こうあらねばならぬと思想することと、事実すなわち、その結果とが反対になり、矛盾すること”を指す(森田, 1960, p.74)。そして、それを対人恐怖の患者にあてはめて、“対人恐怖は、恥かしがる事を以て、自らふがないことと考へ、恥かしがらないようにと苦心する「負けおしみ」の意地張り根性である”(森田・高良, 1953, p.17)とし、この“羞恥の恐怖は、同時に「優越の慾望」であり、“それは同時に「勝ちたがり」であつて、勝てぬ残念、勝てぬかもしれぬという心配が、すなわち『負けおしみ』である”とも述べている(森田, 1953, p.19-20)。つまり、対人恐怖の心理としてふがないと感じる自分の体験の背後に優越の欲望を想定しているである。そのほか、内沼(1977)も、赤面恐怖の背景的な性格構造として、“強力性と無力性の二面的矛盾構造”を指摘している。ここでいう無力性とは、“人前で赤面してしまうこと”に示される気の弱さであり、強力性とは、そのような赤面を許容することができない“負けおしみ”の気の強さを指しており、対人恐怖においては、これらの性格構造のために、自然な赤面が“恥辱”として体験され、それに抵抗を続けることによってますます赤面などの身体反応にとらわれていくことになると思われる。以上のような臨床考察は、対人恐怖にみられる否定的で萎縮的な自己への意識関心の背景に、過度に肯定的で理想的な自己を求める姿勢が潜在していることを示唆している。

一方、自己愛人格については丁度これとは逆の特徴が指摘されている。Kernberg(1975)は、精神分析学的対象関係論と自我心理学の知見に立脚して、自己愛人格障害の精神構造とし

て病的誇大自己と無価値で攻撃的なものと体験される現実経験の対立構造を論じている。ここで、病的誇大自己とは、発達初期の肯定的な現実自己（特別扱いされた経験）、理想自己（補償的な力、富、万能さ、美しさの空想）、理想対象（補償的な愛にあふれ受容的な親）が融合されたものであり、耐えがたい欲求不満をもたらす現実経験（現実自己と現実対象）から自らを守るために防衛的に構成されたものとされている。また、Masterson(1981/1990)も、同様の観点から自己愛人格障害の精神内構造として、発達初期に由来する誇大的な自己と万能な対象が融合した“誇大自己—万能対象融合単位”と、懲罰的な対象と空虚な自己の融合した“攻撃的で空虚な対象関係融合単位”の対立を仮定し、後者に対する防衛として前者が活性化されることを論じている。さらに、Gabbard(2000)は、自己愛人格障害の先行研究を概観し、自己愛人格障害には“傲慢で口うるさいタイプ”と“シャイで物静かなタイプ”があることを指摘している。ここでいう傲慢なタイプとは、自分自身に夢中で攻撃的、自己主張的で注目の的になることを望む人を指すのに対し、シャイなタイプとは、自己抑制的、自己消去的ですからあって、簡単に傷つきやすく注目されることを避けるような人を指す。そして、実際の自己愛人格障害の患者は、両者の特徴を併せ持つものと位置づけているのである。このように、自己愛人格についても、単にポジティブで誇大的な自己意識だけでなく、その背景に否定的に評価された萎縮的な自己意識が潜んでいることが指摘されているのである。

以上のように見えてくると、前項で取り上げた対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己への意識関心の特徴は、背景的には肯定的に評価された誇大的な理想自己と、それに比して過度にネガティブに評価された萎縮的な現実自己の二重構造の表れとして理解できるものと思われる。岡野(1998)は、従来の精神分析的な自己愛と恥の理論に基づいて、以上のような自己愛的人格障害と対人恐怖の性格構造を“理想自己”と“恥ずべき自己”の分極化された自己の構造として定式化している。そのうえで、“この「現実自己」,「理想自己」という、いわば両極性をなす自己の構造においては、自己は常にその極端な理想像である「理想自己」へと同一化する傾向を持つが、この高望みは即座にそれとは対極にある、理想とはかけ離れた自己像である「現実自己」への直面化を導く”としている（岡野, 1998, p.87）。以上の知見に照らせば、対人恐怖傾向は、これらの二重構造の中で否定的で萎縮的な現実自己への意識が優勢な状態であり、自己愛傾向は、逆に肯定的で誇大的な理想自己への意識が優勢な状態として理解できるものと思われる。そして、それらが相互に影響しあって、対人関係の困難が生じているものと仮定することができる（Figure2-1-1）。

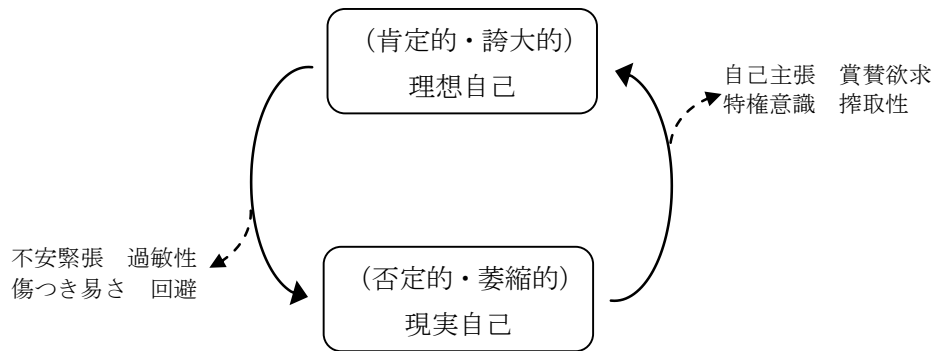


Figure 2-1-1 対人恐怖傾向と自己愛傾向における自己の二重構造

### 第5項 本章の研究目的と仮説

以上のように見てくると、対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己への意識関心の特徴は、肯定的で誇大的な理想自己と否定的で萎縮的な現実自己の矛盾葛藤構造として理解できる。これまでさまざまな先行研究で対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己意識に関する研究がなされてきたが、上記の矛盾構造を実証的に検証した研究は未だ少ない。したがって、本研究では、上記の仮説から導き出される特徴を検証することを通じて、対人恐怖傾向と自己愛傾向の自己の構造を検討することを目的とする。第2節（研究1）では、両者の矛盾構造を理想自己と現実自己の不一致としてとらえ、それと対人恐怖傾向との関連を検討する。理想自己－現実自己不一致と対人恐怖傾向の間に正の関連が仮定されるとともに、自己のどのような側面の不一致が対人恐怖傾向に影響するかについては探索的に検討する。第3節（研究2-1, 研究2-2）では、上記の矛盾構造から自尊感情の不安定性、ならびに、自己不一致の不安定性が生じるものと仮定し、それらと対人恐怖傾向、自己愛傾向との関連を検討する。自尊感情や自己不一致の変動は、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向に正の関連を持つものと仮定される。以上の成果を踏まえ、第4節（研究3）では、上記の自己の二重構造から対人関係の問題が生じるとのモデルを仮定し、共分散構造解析を用いてモデルの妥当性を検証する。

## 第2節 対人恐怖傾向と理想自己－現実自己不一致の関係（研究1）

### 第1項 問題と目的

対人恐怖傾向についてはこれまでさまざまな視点から検討がなされてきたが、その中でも背景的な性格構造として、自分の期待や理想と現実との矛盾相克を指摘している研究が少なくない。第1節で論じたように、そもそもの森田（1960）が、神経質理論の中で同じ特徴を“思必の矛盾”として取り上げている。思想の矛盾とは、“かくありたい、こうあらねばならぬと思想することと、事実すなわち、その予想する結果とが反対になり、矛盾すること”（森田, 1960, p.74）を指している。そのうえで、対人恐怖症者を“恥かしがる事を以て、自らふがないことと考へ、恥かしがらないようにと苦心する「負けおしみ」の意地張り根性である”（森田・高良, 1953, p.17）と描写しているのである。この表現からも、特に対人恐怖について恥ずかしがることを全く許さない理想の高さと、恥を感じてしまう現実との食い違いを見ていたことがわかる。また、内沼（1997）は、対人恐怖症者の性格特徴に、強気、大胆さ、自負心の高さと、そのためにかえって現実場面で先鋭に感じられる差恥心、気の弱さという二面性を見出し、“強気と弱気の二面的矛盾性”と呼んでいる。さらに、岡野（1998）は、対人恐怖の性格要因として、生来の敏感傾向に加えて、過敏性自己愛人絡の病理を読み取っている。そして、極端に理想化された自己イメージと過度に卑下された恥ずべき自己イメージとの双極構造、及び、両者間での自己イメージの変動が差恥心や罪悪感を生み出すと論じている。以上の先行研究は、いずれも対人恐怖の形成要因として自分の期待する自己と現実に経験される自己との食い違いや葛藤を指摘していると言える。理想とする自分の姿と現実に経験される自分の姿のずれが大きい場合、現実の自分への評価や自信が低下し、そのことが対人場面において不安感や恐怖心をもたらすことは十分に予測される関係である。換言すると、これは、自己評価の内的基準と現実自己との不一致の問題である。対人恐怖傾向の研究の中で、この自己不一致との関連を検討したものは未だほとんど見られない。そこで、本研究では、対人恐怖傾向と理想自己－現実自己不一致の関連を検討することとした。

一方、Rogers(1951)が理想自己と現実自己のズレから適応をとらえる観点を提示して以来、理想自己と現実自己の不一致に関しても多くの研究がなされてきた。特に、その初期には、両者の不一致の量的側面のみが注目される傾向にあった。そこでは研究者があらかじめ用意した項目群について、調査協力者が理想と現実を評定し、その差異スコアをも

って自己不一致の測度としていた。しかし、このような方法では、自尊感情との間にあまり有意な相関関係を見出すことができず、仮説や方法の妥当性が問題視されていた (Hoge & McCarthy, 1983)。その中で近年、内的基準の質的な側面に関して詳細な理論化と検証を行ったのがHigginsらによる自己不一致理論である (Higgins, Bond, Klein, & Strauman, 1986; Moretti & Higgins, 1990)。Higgins, Klein, & Strauman (1986) は、内的基準の種類や視点の問題を取り上げるとともに、自己不一致の測定に際して個性記述的な方法を導入した。この個性記述的な方法では、調査協力者自身が自己の重要な特性を自分自身で記述し、それらの特性についてそれぞれ理想自己と現実自己を評定する。Moretti & Higgins (1990) は、従来の法則定立的な自己不一致の測定法と個性記述的な手法を比較検討し、前者では自尊感情との間に有意な相関が見られなかったのに対して、後者では中程度の負の相関が見られたことを報告している。

本研究でも、内的基準の質的な側面に注目する必要があることから、Higginsらの個性記述的な測定手法を採用することが検討された。しかし、日本人は自己の特徴を自由に記述するように求めても十分な反応数が得られないとの報告もあり (Markus & Kitayama, 1991)、予備的な調査の段階でも何らの示唆もないもとの、理想自己の内容について複数産出させることが困難であることが懸念された。そこで、本研究では、理想自己の特性項目の抽出にあたり、用意された多数の特性項目群の中から調査協力者が重要な特性を選択し、その項目について理想自己と現実自己を評定する特性選択的方法を用いた。なお、本研究で検討される仮説は以下のとおりである。

仮説①：自己不一致が大きいほど対人恐怖傾向が高まる。

仮説②：自己の下位側面ごとで自己不一致と対人恐怖傾向の関係は異なる。

なお、②に関して、どの下位側面が対人恐怖傾向に影響するかについては探索的に検討する。

## 第2項 方法

1)調査協力者と調査期間 調査協力者は、一般青年男女209名（男性81名、女性128名：大学生167名、社会人42名：平均年齢22.09歳、 $SD=3.01$ ）であった。調査は、1995年10月から11月の間に実施された。調査の実施にあたっては、調査の趣旨、データの処理方法、プライバシーの保護、質問紙の処分方法等について説明し、同意の上で回答するように依頼し

た。なお、ここで調査協力者の中に大学生と社会人が含まれていることから、両群間でデータの差異が懸念された。そこで、大学生と社会人を含む全体と大学生のみとで各変数の平均値と標準偏差、および、各変数間の相関係数を比較した。その結果、両者で大きな差異は見られなかったため、以下では全体のデータで分析することとした。

2)調査内容 (a)対人恐怖傾向の測定にあたっては、相澤(1997)による56項目の対人恐怖心性質問項目群をさらに整理簡略化したものを用いた。つまり、相澤(1997)のデータを用い、クラスター分析を実施して全項目を4クラスターに分類した。そして、各クラスターからそのクラスターの内容を代表すると考えられる項目を選出した。以上の方法で整理された31項目群を対人恐怖心性の測定項目として、5段階評定(1.全くあてはまらない～5.非常によくあてはまる)で実施した。なお、この項目群は、YG性絡検査の神経質尺度との間に有意な正の相関関係、自尊感情尺度との間に有意な負の相関関係が検証されており、並存的妥当性が支持されている(相澤, 1997)。(b)自己不一致の測定では、以下のような特性選択的方法を用いた。選択肢となる特性項目群は、次の手法で抽出した。まず、加藤(1977)による研究、および、臨床心理学の学生15人に対して行った予備調査から、ポジティブな自己の特性項目を収集した。そして、それらの項目群を、山本・松井・山城(1982)が自己認知の諸側面を分類するために用いた12側面にしたがって分類した。さらに、内容の理解が困難なもの、文章が長すぎるもの、内容が類似するものを削除し、60項目まで整理した。最終的に、下位側面に含まれる項目数が均等になるように枠組みを調整し、7下位側面60項目にまとめ、これを特性項目の選択肢とした(Table 2-2-1)。調査協力者の評定方法については、以下のような手続きを教示した。まず、項目の選択方法としては、調査協力者が一度60項目すべてに目を通すように、はじめに項目全体を読んで“理想として望む姿”と一致する項目にチェックするように求めた(ただし10項目以上)。その後、チェックした項目の中で特に重要な10項目を別の記入欄に転記させた。そして、その10項目について、“理想としてどの程度そうなることを求めているのか”を“1:少しそうなること～4:完全にそうなること”の4段階評定で評定させた。そののちに、同じ項目について、“現実の自分がどの程度そうであるか”を、“0:全くそうでない～4:完全にそうである”の5段階評定で評定させた。(c)本研究では、上述した自己不一致測定法の妥当性を検討するために、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度の山本・松井・山城(1982)による邦訳版を用いた。

Table 2-2-1  
理想自己の選択肢項目群

容姿・服装	表情が豊か 髪形がきれい、かっこいい・スタイルがよい 見た目の印象がよい 清潔な身なりをする 服のセンスがよい 自分の立場やその場にふさわしい服を着る 自分に似合う服を着る
社会的立場	家族の社会的地位がよい 安定した社会的地位につく 経歴がよい 評判のよい学校、会社にいる 金銭に余裕がある 経済力がある 資産が多い 高価なもの(車や宝石など)を持つ
諸能力	知的能力がある 教養がある 世間をよく知っている 体力に自信がある 運動神経がよい 芸術を理解できる 芸術的才能がある
社交性	ユーモアがうまい(人を笑わせるのがうまい) 話上手である 聞き上手である 人付き合いがよい 人とすぐ親しくなれる 人から慕われる 異性から好かれる
精神的強さ	積極的である 活動的である 意志・決断力がある 忍耐強い 精神的に強い 他人に依存しない 個性的である 度量が広い 勇敢である 自分に自信がある
まじめさ	誠実である 責任感が強い 正直である 率直である 規律正しい 礼儀を守る 几帳面である 計画的である 冷静である 落ち着きがある
明朗性	優しい 思いやりがある 寛容である 性格が明るい 性格が前向きである 友好的である 無邪気である 柔軟性がある



### 第3項 結果

1)対人恐怖心性項目群の因子分析 対人恐怖心性項目群の因子構造を検討するために、項目全体に対して因子分析（主因子法）を施した。なお、項目群の一元性の高さから因子間に相関関係が予測されたので、プロマックス法による斜交解を用いることとした。因子数は、説明率と内容的な妥当性から3因子解が適切であると判断された。3因子全体での説明率は45.62%であった。因子パターン行列をTable2-2-2に示す。

Table 2-2-2  
対人恐怖的心性尺度の因子分析

	F1	F2	F3
A18 人が自分のほうを見ると、どのように見られているのかとも気になる。	.77	-.12	-.01
A11 自分以外の人皆しっかりしているように見えて、圧倒されてしまう。	.73	.00	-.11
A08 何か注意されたりちょっと叱られただけで気が転倒し惨めになる。	.70	-.02	.04
A17 他人が見ているところで動作するとき、自分の動作が一々気になりぎこちなくなる。	.69	.12	-.14
A12 周りの人に、自分が変な人に思われるのではないかと、不安になる。	.68	.03	.02
A26 相手のちょっとした優れた面を見て、ひどい劣等感を感じる。	.67	.11	-.16
A14 人といると、馬鹿にされはしないか、軽く扱われはしないかと恐れる。	.56	.06	.13
A02 自分の態度などが、周りの人に不快感を与えるのではないかと、不安になる。	.56	-.16	.19
A25 人といても、相手に迷惑ではないかと、不安になる。	.49	.34	.03
A10 無理をして人に合わせようとして、窮屈な思いをする。	.47	.10	.14
A22 人が大勢いると、圧倒されてしまう	.43	.00	.24
A27 人と心を開いて接することができない。	-.04	.94	-.10
A15 人と心から打ち解けて話すことができない。	-.12	.88	-.01
A04 人と本当になじめない。	-.13	.73	.19
A24 人と自然に付き合えない。	-.01	.71	.15
A21 周りの人は、自分のことを全く分かってくれない、	.19	.70	-.27
A29 仲間で話をするとき、自分のことをざっくりばらんに言えない。	-.05	.58	.10
A20 他人を信じられない。	.11	.58	-.13
A30 自分がみんなの仲間に入ると、気まずくさせてしまう。	.21	.37	.22
A05 異性の知人に会うのを避けてしまう。	-.31	.09	.88
A07 目下の人や後輩に会うのを避けてしまう。	.05	-.12	.62
A01 初対面の人に会うような場面を避けてしまう。	-.04	-.08	.61
A28 異性の知人といるとき、緊張感や不安感などを感じる。	.07	.06	.58
A23 目下の人や後輩などといるとき、緊張感や不安感を感じる。	.21	-.05	.52
A06 同性の知人といるとき、緊張感や不安感を感じる。	.05	.15	.46
A09 目上の人や先輩などに会うのを避けてしまう。	.24	.08	.45
A19 初対面の人に会うと、緊張感や不安感を感じる。	.32	-.21	.44
A03 目上の人や先輩などといるとき、緊張感や不安感などを感じる。	.33	-.17	.43
A31 人が集まっているとき、いつも話ができず孤立して苦しむ。	.05	.33	.41
A13 人が集まっているところへは行きづらい。	.25	.15	.35
A16 同性の知人に会うのを避けてしまう。	.02	.27	.34
因子間相関	F1	F2	F3
F1	-	.51	.65
F2		-	.59
F3			-

因子の命名については、おおむね各因子に属する項目の内容に統一性が見られた。その内容に従い、第1因子は“否定的な公的自意識”，第2因子は“対人場面における違和感”，第3因子は“対人場面における精神的苦痛と回避傾向”とした。この因子構造にしたがい下位尺度を構成し、その粗点の合計をもって各下位尺度得点とした。なお、尺度全体での信頼性係数（ $\alpha$ 係数）は.94、各下位尺度ではそれぞれ.89、.89、.87と十分な値を得た。

2)自己不一致得点の算出と妥当性の検討 以上のようにして得られた評定値から、全体的自己不一致得点と下位側面ごとの自己不一致得点を以下のように算出した。

・全体的自己不一致得点＝

$$\Sigma \{ (\text{各項目の理想自己評定値}) - (\text{同一項目の現実自己評定値}) \}$$

・側面iの自己不一致得点＝

$$\Sigma \{ (\text{側面iに属する項目の理想自己評定値}) - (\text{同一項目の現実自己評定値}) \}$$

なお、調査協力者がある側面に属する項目を一つも選択しなかった場合、そのような重要でない側面に不一致が存在しても不一致としての影響をもたらさないと考えられたので、その側面の自己不一致得点は0に換算した。以上のような手続きで得点算出を行ったが、各側面の項目の選択率を見ると、第2側面“社会的立場”の非選択率が非常に高かった（58.7%）。この側面の項目が重要なものとして選択されなかったことは、本研究の協力者の大半が学生であり、社会・経済的関係に参与する前段階にある人たちで構成されることから十分理解できるものであった。そこで以下では“社会的立場”の自己不一致得点を分析から除外した。

なお、本測定法の並存的妥当性を検証するために、全体的自己不一致得点と自尊感情尺度の総得点との相関係数を算出したところ-.49という十分な値を得た。このことから、自己不一致測定法の妥当性が支持されたものとみなした。

2)対人恐怖傾向と自己不一致の関連 まず、対人恐怖傾向と全体的自己不一致の関連を検討するために、対人恐怖心性項目群の総得点、および、下位尺度得点と全体的自己不一致得点との相関係数を算出した（Table 2-2-3）。いずれの対人恐怖心性得点との間でも有意な正の相関係数が算出された。数値的には.28～.36の範囲にあり、弱い、ないしは中程度の相関関係といえる。

次に、対人恐怖心性と下位側面ごとの自己不一致の関係を検討した。自己不一致得点間

Table 2-2-3  
全体的自己不一致得点と対人恐怖心性尺度との相関

	対人恐怖総得点	否定的な公的自意識	対人場面における違和感	対人場面における精神的苦痛と回避傾向
全体的自己不一致	.36 **	.35 **	.28 **	.28 **

\*\*p<.01

Table 2-2-4  
重回帰分析の結果

	対人恐怖総得点		否定的な公的自意識		対人場面における違和感		対人場面における精神的苦痛と回避傾向	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
容姿・服装	.87	.09	.62	.15 *	.02	.01	.23	.06
諸能力	.86	.11	.28	.08	.38	.15 *	.21	.07
社交性	2.47	.38 **	.96	.33 **	.54	.27 **	.97	.36 **
精神的強さ	1.50	.24 **	.61	.22 **	.39	.20 **	.50	.20 **
まじめさ	.71	.08	.25	.07	.44	.16 *	.02	.01
明朗性	.05	.01	.33	.09	-.29	-.10	.01	.00
$R^2$	.21**		.19**		.15**		.17**	
$F(6, 202)$	9.04		7.84		6.07		6.99	

\*p<.05, \*\*p<.01

に相関が予想されたので、対人恐怖心性項目群の総得点および下位尺度得点を目的変数とし、下位側面ごとの自己不一致得点を予測変数とする重回帰分析を行った（Table2-2-4）。多重共線性の問題を検討するために VIF を算出したところ、1.00 程度の十分に低い値にとどまった。このことから多重共線性の問題は無視しうるものと考えられた。説明率は数値的にはあまり大きくないものの、いずれの場合も 1%水準で有意な値を得た。標準偏回帰係数（ $\beta$ ）を見ると、対人恐怖心性尺度のいずれの得点にも第 4 側面“社交性”と第 5 側面“精神的強さ”に一貫して有意な値がみられた。以上の結果から、主に“社交性”と“精神的強さ”の側面における自己不一致が、対人恐怖傾向に正の効果を与えていることが示唆された。また、対人恐怖傾向の“否定的な公的自意識”に“容姿・服装”における自己不一致が、“対人場面における違和感”には“諸能力”および“まじめさ”における自己不一致が、それぞれ弱いながらも効果を及ぼしていることが示唆された。一方で、その他の側面における理想と現実の不一致は、対人恐怖傾向に対し実質的な影響力を持たないことが示された。

#### 第 4 項 考察

本研究では、内的基準の個人差に注目した特性選択的な自己不一致側定法を用いて、理

想自己—現実自己不一致と対人恐怖傾向の関係を検討した。その結果、全体的自己不一致で対人恐怖傾向との間に有意な正の相関関係が見られた。このことから仮説①は支持されたと言える。また、重回帰分析を用いて、下位側面ごとの自己不一致と対人恐怖傾向の関係を検討したところ、主に“社交性”と“精神的強さ”の側面における自己不一致が対人恐怖傾向に有意な正の効果を与えていることが示唆された。また、対人恐怖心性項目群の第1下位尺度“否定的な公的自意識”には“容姿・服装”の側面における自己不一致が、第2下位尺度“対人場面における違和感”に対しては“諸能力”と“まじめさ”の側面における自己不一致が、それぞれ弱いながらも正の影響を与えていた。以上のことから仮説②に関しても支持が得られたものと考えられる。これらの結果については次のように考えられる。

まず、“社交性”における自己不一致と対人恐怖傾向との関係については、以下のよう  
に考察することができる。この結果は、社交的能力や対人魅力などで理想と現実のズレ  
を大きく意識している人ほど、より強い対人恐怖傾向を示すことを示唆している。つま  
り、社交的能力や対人的魅力で理想と現実のズレを大きく感じている人は、現在の自分を  
社交的能力の低い、対人的魅力の少ないものとして評価していると考えられる。それゆ  
え、対人場面においては、“うまくふるまえないのではないか”、“何か失態を演じるの  
ではないか”といった予期的な不安を抱くことになるであろう。その結果、他者の評価に敏  
感になって、“周囲からどのように見られているのか”、“他者から悪く思われているの  
ではないか”というような、対人恐怖心性尺度第1下位尺度の“否定的な公的自意識”に見られ  
る特徴が強まるものと考えられる。また同時に、そのような予期的不安を意識する人にと  
って、対人場面での不安感や緊張感は、社交的能力や対人魅力を阻害するものとして一層  
注意・関心をひきつけるものになると思われる。その結果、対人場面が苦痛に満ちたもの  
として経験されることになり、対人場面の回避傾向が強まる。以上のことから、第3下位  
尺度“対人場面における精神的苦痛と回避傾向”が高まるものと考えられる。さらに、対人  
場面では、常に自分の社交的能力の弱さや魅力の少なさが露呈するのではないかという不  
安感や緊張感が働くために、“対人場面でくつろぐことができない”、“人となじむことが  
できない”というような、第2下位尺度の“対人場面における違和感”に見られる諸特徴が生  
じることにもなると考えられる。

次に、“精神的強さ”に関する結果については、積極性や意思の強さ、精神的な強靱さとい  
った側面における理想と現実の不一致を経験している人ほど、強い対人恐怖傾向を示す  
ことを示唆している。つまり、自分の積極性や精神的強靱さについて、理想と現実のズ

レを大きく感じている人は、現実の自己を非常に消極的で精神的に弱いものと評価すると考えられる。そのため、対人場面においては、自分の消極性や精神的な弱さが露呈することについての予期的な不安が強まることになる。その結果、“周囲からどのように見られているのか”と過剰に気にし、“他人に悪く思われているのではないか”と不安になるといったような“否定的な公的自意識”が強まることになると考えられる。同時に、そのような予期的不安のために、精神的な弱さや消極性の身体的・情動的表現である緊張感や不安感を過剰に気にするようになり、それを苦にして対人場面から引き下がる傾向が強まるものと考えられる。このことが、“対人場面における心的苦痛と回避傾向”につながるものと予想される。さらに、常に対人場面では精神的な弱さや消極性が露呈するのではないかと不安感や緊張感が働くために、“対人場面でくつろぐことができない”、“人となじむことができない”というような“対人場面における違和感”の諸特徴に結びつくことにもなると考えられる。

その他の関係については、以下のように考察できる。まず、“容姿・服装”の側面における自己不一致に否定的な公的自意識との関係が見られた点は十分予測しうるものである。なぜならば、この結果は主に外見に理想と現実の大きなズレを感じている人ほど、“周囲からどのように見られているのか”と過度に気にしたり、“悪く思われているのではないか”と不安になることを示唆しているからである。外見的な面で自分を否定的にとらえている人がこのような過敏さや不安を抱くことは十分理解し得ることである。一方で、対人場面における違和感と“諸能力”や“まじめさ”における自己不一致が関係していた結果については、にわかには両者の関係が推測しがたい。むしろ、この結果は、自己不一致の全面化が“対人場面における違和感”と関係していることを示唆しているように思われる。つまり、この下位尺度は、対人場面における漠然とした孤独感や溶け込めなさを意味しており、他の二つの下位尺度が対人場面での活発な感情体験を意味している点で若干性質の異なるものである。このような経験は、特定の側面における自己不一致だけでなく、全般的な側面における不一致からもたらされる自尊感情の低下や抑うつ感などが特に関係しているのかもしれない。そのような自己不一致の全面化と“対人場面における違和感”との関係が、6つの側面のうち4つの側面で自己不一致との間に有意な関係が見られた結果につながったのかもしれない。

また、本研究の結果を先行研究と照らし合わせると、以下のように考察できる。第2章第1節で論じたように、森田（1960）は、対人恐怖の背景的特徴として恥ずかしがること

を“フガイなし”とする“負けじ魂の意地張り根性”を指摘しているが、ここで不甲斐なさと一般には意気地がない、だらしないといった精神的な軟弱さを指すものである。また、内沼（1977）も、対人恐怖の背景的な性格構造として、強気、大胆さ、自負心の高さとそのためにかえって先鋭に感じられる羞恥心や気の弱さの二面性を見出し、“強気と弱気の二面的矛盾性”と呼んでいる。以上の指摘は、いずれも対人恐怖における理想と現実の不一致や矛盾が、精神的な強さと弱さの次元に関連していることを示唆している。さらに、本研究では、自己愛傾向と関連する理想自己と現実自己の不一致を仮定しているが、岡野（1998）は、境界例人格における“良い”と“悪い”の双極構造に対して、自己愛人格の双極構造が主に“強い”と“弱い”の対比構造になることを指摘している。本研究では、“精神的強さ”における理想自己と現実自己の不一致が特に対人恐怖傾向に関連することが示唆された。このような結果は、これまでの先行研究の知見と整合するものと考えられる。

また同時に、本研究では“社交性”の側面における自己不一致が対人恐怖傾向と正の関係にあることが示唆された。このことは、対人恐怖傾向の高い人が、現実自己からかけ離れた社交的能力や対人魅力を理想として求めていることを示唆している。つまり、単に“精神的強さ”としての理想的自己像を追い求めるだけでなく、それが周囲の人々との間で発揮され認められることをも望んでいることを示唆している。その意味では、対人恐怖傾向が単に自分自身に関係した悩みであるだけでなく、あくまで他者という存在を前提にしているものと位置づけられる。このことは、対人恐怖傾向における理想自己が自己愛的な性質を持つことをより一層示す結果といえるであろう。そういった意味でも、本研究の結果は前項までに論じてきた、自己愛傾向とも関連する自己の二重構造の仮説を支持するものと考えられる。

以上のように、本研究においてはおおむね仮説を支持する結果が得られた。しかしながら、重回帰分析における説明率は比較的低い値にとどまった。これらは、今回取り上げた予測変数のみでは対人恐怖傾向を十分には説明できないことを示唆している。その意味では、その他の関連要因なども取り入れて、対人恐怖傾向の全体をより広く説明するモデルを構築することが今後必要になってくるものと考えられる。

### 第3節 対人恐怖傾向，ならびに，自己愛傾向と自尊感情の不安定性の関係（研究 2-1）

#### 第1項 問題と目的

理想自己と現実自己の不一致の問題は，James(1892)により自己感情（自尊心）を決定づける主要な要因と位置づけられて以来，自己に対する評価的感情としての自尊感情に影響を与えるものとされてきた。つまり，自分の現状が理想自己に近いものであれば近いものであるほど，その人の自尊感情は高まるとともに心理的な適応状態は改善され，逆に，自分の現状が理想自己からかけ離れたものになればなるほど，その人は自信を失い適応状態は悪化すると考えられた。これまで理想自己の測定方法にはさまざまなものが開発されており，また，自尊感情や自己評価との関連を検討した研究も多数なされているが，おおむね上記の仮説どおりの関連が検証されている（遠藤，1991）。したがって，第2章第1節で論じてきた理想自己と現実自己の二重構造も何らかの形で自尊感情に影響を及ぼすものと考えられる。

前節までで，対人恐怖については，理想自己と現実自己の対比の中で，理想自己に比して過度に否定的に評価された現実自己の方に意識関心が向いている状態として考察した。したがって，対人恐怖の背景には低い自尊感情の影響が推測される。対人恐怖の体験様式を見てもこのような関連は容易に推測できる。他者の目の前で緊張して嫌われたり避けられたりすることを過度に恐れる心理の背景に，当然ながら自分自身への自信のなさ，内気さ，引っ込み思案な心情が関連しているものと考えられる。実際，対人恐怖傾向と自尊感情の関連を検討した研究もいくつかなされており，その中では一貫して中程度から強い負の相関関係が検証されている（上地・宮下，2009；鈴木・有賀・森野・北村，2011；岡田・永井，1990）。以上の結果は，対人恐怖傾向の背景に理想自己と現実自己の二重構造を論じた本研究の仮説と基本的に一致するものである。

自己愛人格も明らかに自尊感情と密接な関連が推定されるものである。自己愛は文字通り“自己を愛すること”をその中に含んでおり，基本的には自分自身への肯定的な感情を指している。また，自尊感情も，“自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情”との定義どおり，まさしく自己に関する肯定的な感情の程度を反映するものである（遠藤・井上・蘭，1992）。したがって，両者は実際上かなり類似した特徴を有していることになる（小塩，1997）。自己愛傾向と自尊感情の関連についてもこれまで幾度となく

検討されており、自己愛傾向の下位側面ごとで結果が異なるものの、自己愛の中心となる自己誇大感や自己中心性については一貫して中程度の正の相関が示されている。これらの結果は、前述した自己の二重構造の中で、自己愛傾向は理想的な自己イメージの方に意識関心が集中しているとした本研究の仮説と一致するものである。

以上のように見てくると、対人恐怖傾向は自尊感情の低さと、自己愛傾向は自尊感情の高さとそれぞれ関連があるものと推定される。しかしながら、たとえば、後者の関連で見ても、自己愛人格は場合によっては人格障害という不適応状態に結びつく可能性があるものであり、基本的には何らかの心理的問題を含むものである。それに対して、自尊感情は従来心理的適応の指標と意義づけられてきたものであり、肯定的な自尊感情は適応の良さ、思考の柔軟性、良好な対人関係に結びつくものである（遠藤他, 1992）。したがって、両者はともに自己に関する肯定的感情としての共通点を持ちながらも、本質的に異なるものであると考えられる（小塩, 1997）。また、対人恐怖についても、前節までで見てきたように自己否定的で気の弱い人としては説明しきれない心理が働いており、単なる自尊感情の低さとは異なる側面を持つ。以上のように見てくると、対人恐怖、ならびに、自己愛人格と自尊感情の関連については、単なる高低の問題だけでなく他の要因も考慮する必要があると言える。

近年、自尊感情に関する研究の中でも、自尊感情には高低の水準要因以外にも諸種の社会的適応に影響する側面があることが提起されている（市村, 2011）。その代表的なものとして、潜在的自尊感情、随伴性自尊感情、自尊感情の不安定性に関する研究が挙げられる。潜在的自尊感情とは、従来質問紙等で測定されてきた意識的、自覚的な顕在的自尊感情に対し、Implicit Association Test (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)等の特殊な実験的手法で測定される無意識的、無自覚的な自己に対する態度をさし（川崎・児玉, 2010）、とくに排他的な集団行動との関連などが検討されている（原島・小口, 2007）。随伴性自尊感情とは、何らかの外的な基準により決定される自尊感情と定義され、自己の内発的な基準による真の自尊感情と対比されるものである（伊藤・児玉, 2006）。この随伴的な自尊感情は、アルコールや攻撃性の問題に関連することが示唆されている（市村, 2011）。さらに、自尊感情の不安定性は、従来安定的で特性的なものとしてきた自尊感情の高低水準に対し、比較的短期間での変動しやすさをとらえようとするものである。自尊感情の水準とは独立したものと考えられており、不安定性の高さは怒りの感情や敵意、ならびに、他者からの評価に対する反応性に影響するものとされている（Kernis, Grannemann, &



Barclay, 1989; Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993)。

第2章第1節で論じた自己の二重構造とは、理想自己と現実自己の矛盾葛藤を内包するものであり、通常理想自己と現実自己の不一致という視点でとらえられるような固定的なものではない。つまり、対人恐怖の場合には、否定的で萎縮的な現実自己へと意識関心が向かっているが、それはむしろ過度な理想自己を求める気持ちが強いからこそ通常誰もが体験するような現実経験を許容できないことによっている。したがって、実際の日常体験の中では、常に理想とする自分自身に近づくことを期待しつつ、その中で理想とはかけ離れた現実自己に直面することの繰り返しとなる可能性が高い。自己愛人格についても同様であり、過度に理想化された理想自己に意識と関心が向かいやすく、誇大的で誇張された自己評価を保持しているものの、それは否定的に評価された現実自己に対する防衛ともなっている。したがって、日常生活の中でどうしても避けがたい現実経験に直面した際に、理想的な自己評価が一時的にでも低下することになると考えられる。以上のように見ると、対人恐怖と自己愛人格の背景に自己の二重構造を仮定した場合、自尊感情の高低水準だけでなく不安定性が重要な要因として浮かび上がってくるものと考えられる。

自尊感情の不安定性については、Kernisらの研究グループがすでに多くの報告を行っている (Kernis, 2005)。そこでは、調査協力者の普段の生活の中で繰り返し自尊感情を測定する手法がとられており、そのようにして得られた自尊感情の不安定性と怒り、敵意の感情、他者からの評価に対する反応等との関連が検証されている (Kernis et al., 1989, 1993)。また、いくつかの先行研究で自尊感情の不安定性と自己愛人格との関連が検討されている。Rhodewalt, Madrian, & Cheney(1998)は、Kernisらと同じ測定方法を用いて自己愛傾向と自尊感情の不安定性の関連を検討し、両者の間に中程度の有意な正の相関関係を見出している。また、小塩(2001)も同様の手法を用いて弱いながらも有意な相関を検出している。これらの研究ではいずれも自尊感情の不安定性との間に有意な関連が示されているが、おもに両者の相関関係を検討することに主眼が置かれており、自尊感情の水準の問題を同時に取り入れた検討は行われていない。しかしながら、これまでの考察をもとにすると、自尊感情の不安定性だけでなく高低水準も含めて同時に検討する必要がある。また、対人恐怖については、これまでのところ自尊感情の不安定性との関連を検討した研究は見受けられない。そこで本研究では、対人恐怖傾向と自己愛傾向のそれぞれについて、自尊感情の水準、ならびに、不安定性との関連を検討することを目指す。本研究の仮説は以下のとおりである。

仮説①：自尊感情の水準が低く、かつ、不安定な人が最も高い対人恐怖傾向を示すであろう。

仮説②：自尊感情の水準が高く、かつ、不安定な人が最も高い自己愛傾向を示すであろう。

## 第2項 方法

1)調査内容 (a)対人恐怖傾向の測定にあたっては、相澤(1997)による56項目の質問項目の中から、因子負荷量の高い39項目を5段階評定(1.全くあてはまらない~5.非常によくあてはまる)で実施した。なお、この項目群は、YG性格検査の神経質尺度との間に有意な正の相関関係、自尊感情尺度との間に有意な負の相関関係が検証されており、並存的妥当性が支持されている(相澤, 1997)。(b)自己愛傾向の測定にあたっては、Raskin & Hall(1979)によるNPIの大石(1987)による邦訳版を用いた。この尺度は、54個の項目で構成される二者択一式の質問項目群であり、調査協力者が自己愛傾向の意識や体験を意味する選択肢を選んだ場合に1点と得点化される。先行研究では、MPI, YG性格検査, EPPS, ならびに、攻撃性との間で妥当性を支持する結果が得られている(福田・大石・篠置, 1987; 大石, 1988)。(c)自尊感情尺度の水準を測定するために、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度の山本・松井・山城(1982)による邦訳版を用いた。下記に示す自尊感情の不安定性の尺度と区別するために、“普段のあなた自身の気持ちを思い起こして”評定するように教示されている以外は、通常のもので同一である。5段階評定(1.あてはまらない~5.あてはまる)で回答を求めた。(d)自尊感情の不安定性の測定については、普段の生活の中で繰り返し評定を行う生活内評定法と自己報告法の2種類を用いた。前者については、Kernisらが用いている方法に基本的に遵守し、調査協力者に日常生活の一定の時刻に自尊感情尺度10項目へ回答を求める手法を用いた。評定頻度については、調査協力者への負担を考慮して1日1回(午後6時~12時の間)の5日間評定とした。また、評定期間については5日間連続で評定することを基本条件に設定したものの、1, 2日の間が空いてしまうことは許容し、できるだけ5回分の評定を完成させることを優先するように教示した。質問紙には5日間分の自尊感情尺度が含まれており、評定期間や頻度が把握できるようにそれぞれの評定の直前に評定日時を記入するように求めた。評定に用いた自尊感情尺度は、“今のあなたの気持ちを答えるように”と教示が追加され、かつ、細かな自尊感情の変動を

反映できるように7段階評定（1. 全くあてはまらない～7. 非常によくあてはまる）に修正が施された。また、調査協力者が以前の回答に影響されにくいように、“前日の記録等を見たりせずに”回答するよう教示するとともに、項目の順序をその日ごとにランダムに入れ替えたものを用いた。一方、自己報告法による不安定性の測定については、Kernis et al.(1993)が用いた方法に準拠して、自尊感情尺度の各項目に表されたような気持ちなどの程度に変化するかについて5段階評定（1. 全く変わらない～5. 非常によく変化する）で回答を求めた。

2)調査協力者と調査期間 本調査は1997年6月～11月の期間に実施された。回収された質問紙のうち、生活内評定法において1週間以内に4回以上自尊感情評定を行った協力者のみを分析の対象とした。その結果、有効回答数は147(男性57, 女性90; 平均年齢21.3歳,  $SD=1.7$ )となった。なお、調査の実施にあたっては、本研究の趣旨、データの処理方法、プライバシーの保護、質問紙の処理について説明し、同意の上で参加するように依頼した。また、調査協力者には相応の謝礼を渡した。

### 第3項 結果

1)対人恐怖心性尺度の分析 本研究の調査協力者数では、各尺度の因子分析を実施する上でデータ数の不足が懸念された。そこで、並行して実施していた同様の調査質問紙(反復評定期間が2日間である点を除いて本調査と同じ)から得られた125名（男性41, 女性84; 平均年齢21.2歳,  $SD=1.9$ ）のデータと併せて、272人の回答結果をもとに分析した。対人恐怖心性尺度の各項目に極端な分布の偏りは見られなかった。そこで、39項目全体に対し主成分分析（バリマックス回転）を実施した。その結果、得られた固有値の減衰に大きな段差はみられなかったものの、6因子構造で内容的にもっとも意味のある主成分構造がみられたので、これを採用した。その後、主成分負荷量.04以下の3項目、ならびに、二つ以上の主成分に同程度に付加する3項目を除外し、最終的な6主成分構造を確定した（Table 2-3-1）。

各主成分の名称は、項目の意味内容から第1主成分は“対人場面における違和感”，第2主成分が“否定的な公的自意識”，第3主成分が“異性に対する心的苦痛”，第4主成分“他者優位”，第5主成分“多数の人に対する心的苦痛”，第6主成分“対人場面における身体反応”とした。その後、この構造にしたがい粗点の合計による下位尺度を構成したところ、信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、順に.85, .82, .82, .80, .76, .73 と十分な値を得た。

2)N P I の分析 各項目の項目分析(度数分布, 項目一総得点間相関の検討)を行った結

Table 2-3-1  
対人恐怖心性尺度の主成分分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
3 人と心を開いて接することができない	.83	.07	.09	.18	.15	.02
26 人と心から打ち解けて話すことができない	.81	.06	.13	.08	.12	.11
1 人と本当になじめない	.72	.21	.12	.25	.14	-.07
10 人と自然につき合えない	.65	.26	.26	.13	.25	.19
5 仲間で話をするとき、自分のことをざっくばらんに言えない	.60	-.11	.13	.36	.04	.25
4 周りの人は自分のことを全くわかってくれない	.58	.14	.16	.08	.11	.00
20 他人を信じられない	.56	.34	.10	.00	-.14	-.07
24 人が集まって笑いあっていると、自分のことが笑われているように思ってしまう	.09	.73	.14	.05	.06	.02
30 周り人に、自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	.05	.67	.13	.48	.00	.08
7 人がいると、自分の表情などが変ではないかと、強い不安を感じる	.27	.55	.17	.17	.06	.08
35 何か注意されたりちょっと叱られただけで気が転倒しはじめになる	.17	.53	-.02	.25	.17	.04
36 人といると馬鹿にされはしないか、軽く扱われはしないかと恐れる	.10	.52	.15	.41	-.04	.16
12 人が自分のほうを見ると、どのようにみられているのか気になり緊張する	.01	.50	.17	.15	.38	.19
14 周りの人の視線が気になり、落ち着かない	.24	.45	.35	.09	.38	.19
37 異性の人と話ができない	.24	.10	.83	.12	.06	.16
38 異性といると、特に緊張する	.16	.15	.80	.07	.08	.26
11 異性に近づきたいにもかかわらず、避けてしまう	.20	.05	.70	.24	.19	.14
39 初対面の人には、目もむけられず緊張する	.04	.09	.64	.20	.27	-.01
33 人に向かって思ったことが言えず、言いなりになる	.11	.17	.43	.38	.14	-.04
23 自信がもてず相手次第になってしまう	.09	.19	.21	.62	.17	.17
32 周りの人に認められたいができない	.14	.22	.19	.62	.06	.13
31 人との話に間が空き、話せなくなることがありつらい	.26	.13	.36	.57	.13	.05
6 自分がみんなの仲間に入ると、気まずくさせてしまう	.34	.21	.07	.54	-.05	.30
22 自分以外の人が皆しっかりしているように見えて圧倒されてしまう	.10	.33	.12	.51	.28	.20
19 他人と関わることを望んでいるのに、避けてしまう	.37	.12	.28	.45	.32	.02
9 人が大勢いると、圧倒されてしまう	.04	.15	.15	.07	.78	.13
13 人が集まっているところには行きづらい	.31	.11	.15	.02	.72	.05
15 大勢の人の前で話すとき、圧倒感を感じる	.06	-.11	.14	.24	.54	.31
8 初対面の人に会うのが怖い	.16	.29	.41	.26	.50	-.07
28 人前では、自分の言っていることがぎこちなくなる	.18	.17	.19	.35	.46	.26
18 人といると、顔がこわばったり赤くなって緊張する	.10	.15	.12	.16	.07	.81
16 人と対応するとき、顔がこわばったり赤くなるのではないかと怖い	.14	.12	.16	.23	.27	.70
17 人が見ていると食事や仕事を思うようにできない	.07	.30	.19	.05	.35	.51

果、著しい分布や低い項目—総得点間相関を示した15項目を分析から除外し、残りの39項目による主成分分析を施した。なお、主成分の回転については、NPIの先行研究から斜交回転を用いるのが妥当とされていることから (Emmons, 1987; 福田, 1989) , 斜交回転(プロマックス法)を用いた。その結果、内容的に妥当な主成分構造として5主成分が抽出された。さらに、主成分負荷が.35以下の6項目を削除し、最終的な5主成分構造が確定された (Table2-3-2)。主成分の命名は、負荷量の高い項目の内容から第1主成分は“権威願望・注目願望”, 第2主成分“統率性・他者の操作”, 第3主成分“自己耽溺”, 第4主成分“主張性・顕示性”, 第5主成分“特権性・特殊性”とした。その後、これらの構造にしたがい素点の合計を持って下位尺度を構成したところ、信頼性係数は順に.76, .72, .66, .61, .46となった。

Table 2-3-2  
NPIの主成分分析（プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	F5
44 私は、注目的になってみたいという気持ちがある	.70	.24	.31	.33	-.01
12 どちらかといえば、私は注目される人間になりたい	.64	.25	.43	.42	.02
38 私は支配欲が強いほうだと思う	.62	.40	.23	.22	-.05
13 私は必ず成功してみせる	.61	.16	.21	.29	.08
48 私はえらい人だと言われる人間になりたい	.58	.34	.08	.19	-.04
28 ここというときには、私は人目につくことを進んでやってみたい	.57	.22	.31	.40	.10
17 私は人を従わせられるような権威を持ちたいと思う	.50	.46	.04	.09	-.03
25 世間の目から見て、かなりの生活ができていなくては満足できない	.50	.13	.11	.13	.28
35 ほしいものは全部どうあっても手に入れないと気が済まない	.40	.08	.21	-.15	.15
37 自分自身の気持ちに忠実に生きることが、まずもって重要である	.40	.04	-.02	.04	.12
45 これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし、今後もそうしたいと思う	.37	.11	.19	.25	.28
15 私は良いリーダーになれる自信がある	.29	.79	.13	.35	.40
47 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている	.33	.68	.17	.42	-.01
19 自分の思い通りに人を動かすことは、それほど難しいことではない	.17	.54	.25	.11	.11
14 私は才能に恵まれた人間だと思う	.26	.53	.13	.35	.40
46 周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる	.44	.52	.31	.33	.07
8 もしこの私が世界を自由にすることができるのなら、もう少しましな世の中できると思う	.20	.47	.12	.03	.07
43 自分自身では要領もいし賢明さも備えていると、私は思っている	.31	.43	.27	.18	.30
21 私は自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	.22	.23	.69	.15	.08
42 私は鏡を見るのが好きだ	.26	-.10	.69	.02	.16
26 私は自分の体を見るのが好きだ	.07	.37	.66	.15	.14
7 周りの人たちが自分のことをよい人間だと言ってくれれば、自分でもそうなんだろうと思う	.17	.20	.48	.16	.07
36 私は人からほめられることを望んでいる	.33	.16	.43	.05	.09
39 私は人より先に流行を取り入れるのが好きだ	.28	.37	.43	.10	.24
33 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	.16	.24	.20	.77	.17
32 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる	.12	.10	.24	.63	.37
3 どうやら私は、控えめな人間ということには程遠い人間だと思う	.35	.18	.08	.61	-.12
16 私は自分の意見をはっきりいうほうだ	.21	.26	.00	.59	.20
49 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	.09	.13	.09	.00	.64
22 私には、人の気持ちをずばり読み取る力があると思う	.19	.02	.09	.31	.61
41 人に好かれるのは、私自身にどこか魅力的なところがあるからだと思う	.06	.14	.21	.00	.50
9 私に接する人間はみんな、私という人間を自然に気に入ってくれるようだ	.11	.03	.31	.27	.51
1 感受性の鋭さという点では、私は誰にも負けないものを持っている	-.04	.18	.04	.23	.44

注) 自己愛項目のみ表記。

第5下位尺度で特に低い値となったことから、分析に際しては注意して取り扱うこととした。

3) 自尊感情の不安定性尺度の分析 生活内評定法については、回答の実施状況を見ると5日分すべてに回答できている調査協力者だけでは分析に十分な人数を確保できなかったため、4日分以上評定しているデータを分析に用いた。不安定性の測度としては、Kernisらの手法に従い、5回、ないしは、4回分の自尊感情総得点の標準偏差値を用いた。平均値は2.81、標準偏差は2.03であった。自己報告法による測定については、各項目の度数分布では、極端に分布に問題がある項目はなかった。項目—総得点間相関ではおおむね0.4以上の値を示し、全10項目の信頼性係数も.79を示したことから、総得点を用いて不安定性の測度とした。

4) 自尊感情の水準、ならびに、不安定性と対人恐怖傾向の関係 生活内評定法による自尊感情の不安定性の測度を用いて、対人恐怖傾向と自尊感情の関係を検討するために、対人

恐怖心性尺度の総得点，ならびに，各下位尺度得点に対し，自尊感情の水準と不安定性を要因とする2要因分散分析を実施した。群分割の基準には自尊感情の水準，ならびに，不安定性得点の上位下位各50人を用いた。得られた平均値（Table 2-3-3）をみると，“異性に対する心的苦痛”と“対人場面における身体反応”以外は，低水準—高不安定群が最も高い値を示した。しかし，分散分析の結果では，“否定的な公的自意識”以外のすべての得点で水準の主効果のみが有意となり，自尊感情の低い方ほど対人恐怖傾向が高いことが示された（総得点 $F(1,70)=26.48, p<.01$ ; F1  $F(1,70)=14.31, p<.01$ ; F3  $F(1,70)=6.71, p<.05$ ; ; F4  $F(1,70)=31.17, p<.01$ ; F5  $F(1,70)=14.66, p<.01$ ; F6  $F(1,70)=4.59, p<.05$ ）。一方，“否定的な公的自意識”においては，自尊感情の水準の主効果，不安定性の主効果がともに有意となり（ $F(1,70)=18.93, p<.01, F(1,70)=7.82, p<.01$ ），自尊感情が低い人ほど，かつ，不安定性が高い人ほど強い否定的な公的自意識を抱いていることが示された。

自己報告法による自尊感情の不安定性得点を用いて，同様の2要因分散分析を行った。その結果をTable 2-3-4に示す。平均値の値は，すべての得点において低水準—低不安定群が最も高い値を示した。検定の結果，水準の主効果のみが有意となったのは，第3下位尺度，第5下位尺度，第6下位尺度であった（F3  $F(1,70)=8.84, p<.01$ ; F5  $F(1,70)=8.60, p<.01$ ; F6  $F(1,70)=4.63, p<.05$ ）。一方，総得点，“対人場面における違和感”，“否定的な公的自意識”，“他者優位”では有意な交互作用が見られた（総得点  $F(1,70)=5.81, p<.05$ ; F1  $F(1,70)=8.60, p<.01$ ; F2  $F(1,70)=4.06, p<.05, F4 F(1,70)=4.03, p<.05$ ）。ただ，単純主効果検定の結果，不安定性の効果が見られたのは“対人場面における違和感”のみであり，しかも，低水準—低不安定群が低水準—高不安定群，ならびに，高水準—低不安定群よりも有意に高い値を示すとともに，高水準—高不安定群が高水準—低不安定群よりも有意に高い値を示すことが検証された（Figure 2-3-1）。以上の結果は，自尊感情の低水準—低不安定群が最も高い“対人場面における違和感”を示すことを示唆しており，基本的に仮説①とは逆の関連を表すものと言える。

##### 5) 自尊感情の水準，ならびに，不安定性と自己愛傾向の関連

NPIと自尊感情の関係を検討するために，NPIの総得点と各下位尺度得点に対して自尊感情の水準と不安定性を要因とする2要因分散分析を行った。群分割には上位下位各50人を基準とした。平均値の値は，“主張性・顕示性”，“特殊性・特権性”以外のすべての得点で，高水準—高不安定群が最も高い値を示した（Table 2-3-5）。しかし，分散分析の結果では，総得点，“主張性・顕示性”，“特権性・特殊性”で水準の主効果のみ有意となり，自尊

Table 2-3-3  
対人恐怖心性尺度の各得点の群ごとの平均値(1) (不安定性の測度：生活内評定法)

総得点	水準		対人場面における違和感		否定的な公的自意識			
	低	高	低	高	低	高		
不安定性								
低	110.29	85.43	20.71	16.09	20.71	19.41		
高	115.54	89.92	21.62	17.07	28.00	22.57		
異性に対する心的苦痛	水準		他者優位	水準		多数の人に対する心的苦痛		
	低	高		低	高			
不安定性			不安定性			不安定性		
低	16.00	12.73	低	22.71	16.81	低	18.42	13.95
高	15.62	13.07	高	24.79	17.43	高	17.42	14.07
対人場面における身体反応	水準							
	低	高						
不安定性								
低	8.07	7.05						
高	8.08	6.07						

Table 2-3-4  
対人恐怖心性尺度の各得点の群ごとの平均値(2) (不安定性の測度：自己報告法)

総得点	水準		対人場面における違和感		否定的な公的自意識			
	低	高	低	高	低	高		
不安定性								
低	121.08	78.5	23.75	13.85	29.25	18.81		
高	110.57	91.75	20.25	17.50	26.50	21.50		
異性に対する心的苦痛	水準		他者優位	水準		多数の人に対する心的苦痛		
	低	高		低	高			
不安定性			不安定性			不安定性		
低	16.25	12.04	低	25.17	15.07	低	18.25	13.22
高	15.68	12.50	高	23.04	18.00	高	17.21	15.00
対人場面における身体反応	水準							
	低	高						
不安定性								
低	8.42	6.11						
高	7.89	7.25						

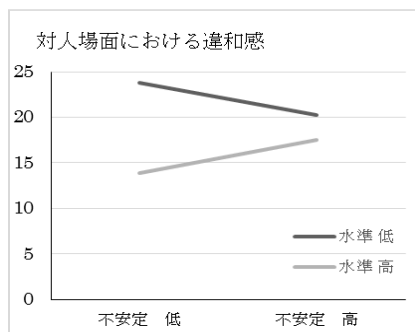


Figure 2-3-1  
対人恐怖傾向尺度の単純主効果の検定の結果 (不安定の測度：自己報告法)

Table 2-3-5  
NPIの各得点の群ごとの平均値(1) (不安定性の測定: 生活内評定法)

総得点	水準		権威願望・注目願望		統率性・他者の操作	
	低	高	低	高	低	高
不安定性						
低	43.71	46.81	15.64	16.68	8.14	8.59
高	42.25	49.92	15.79	17.38	7.79	9.69
自己耽溺						
不安定性						
低	8.29	8.41	5.07	5.77	6.57	7.14
高	7.67	10.23	4.88	5.77	6.12	6.85

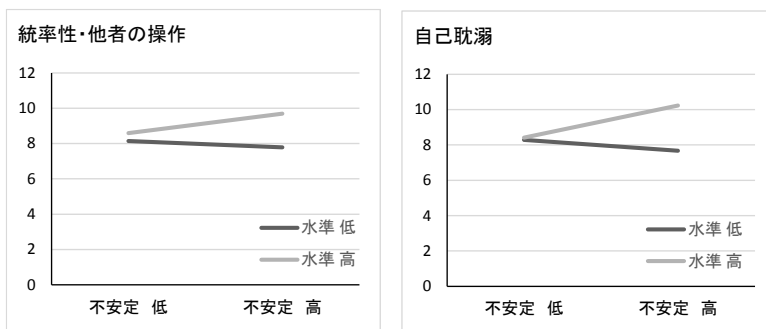


Figure 2-3-2 NPIの単純主効果の検定の結果 (不安定の測定: 生活内評定)

Table 2-3-6  
NPIの各得点の群ごとの平均値(2) (不安定性の測定: 自己報告法)

総得点	水準		権威願望・注目願望		統率性・他者の操作	
	低	高	低	高	低	高
不安定性						
低	37.92	47.54	14.00	16.81	7.25	9.00
高	42.93	44.88	15.64	15.75	7.82	8.38
自己耽溺						
不安定性						
低	6.67	8.81	4.50	5.85	5.50	7.08
高	8.04	8.38	5.00	5.88	6.43	6.50

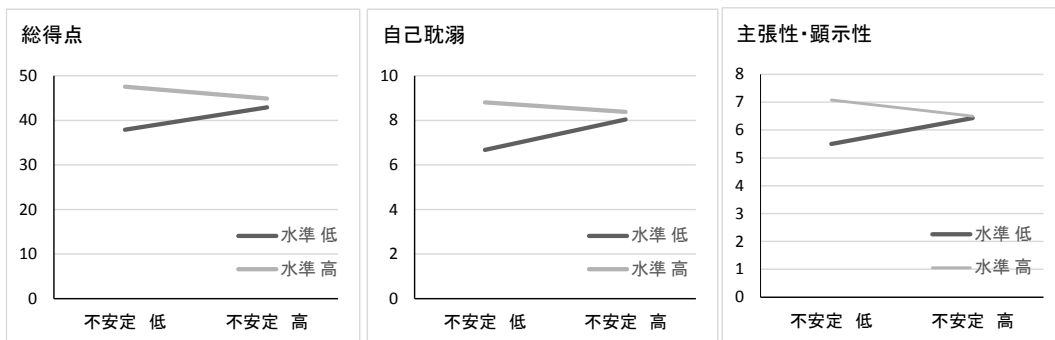


Figure 2-3-3 NPIの単純主効果の検定の結果 (不安定の測定: 自己報告法)



感情の高い人の方がより高い得点を示すことが示唆された(総得点  $F(1,68)=17.28, p<.01$ ;  $F4 F(1,69)=7.32, p<.01$ ;  $F5 F(1,69)=4.64, p<.05$ )。一方, “統率性・他者の操作”と“自己耽溺”で有意な交互作用が検出された( $F2 F(1,69)=3.97, p<.05$ ;  $F3 F(1,69)=9.20, p<.01$ )ので, 単純主効果の検定を行った。その結果, 両下位尺度において, 高水準—高不安定群が高水準—低不安定群, 及び, 低水準—高不安定群よりも有意に高い値を示すことが検証された (Figure 2-3-2)。以上の結果から, 高水準—高不安定群が, 高水準—低不安定群と低水準—高不安定群よりも強い“統率性・他者の操作”と“自己耽溺”を表すことが示された。

自己報告法による測度を用いて, 同様の2要因分散分析を行った。その結果をTable 2-3-6に示す。平均値の値は, すべての場合で高水準—低不安定群が最も高い値を示した。しかし, 分散分析の結果, “権威願望・注目願望”, “統率性・他者の操作”, “特殊性・特権性”において水準の主効果のみが有意となり, 自尊感情が高いほど各得点が高いことが示された( $F1 F(1,70)=4.94, p<.01$ ;  $F2 F(1,70)=9.49, p<.01$ ;  $F4 F(1,70)=12.54, p<.01$ )。一方, 総得点, “自己耽溺”, “主張性・顕示性”では有意な交互作用がみられたので, 単純主効果の検定を行った。しかし, いずれの場合も, 高水準—低不安定群が低水準—低不安定群よりも, 低水準—高不安定群が低水準—低不安定群よりもそれぞれ有意に高い値を示したのみで, 高水準—高不安定群と高水準—低不安定群の間で有意差は検出されなかった。したがって, 仮説②を支持する結果は得られなかったものと言える (Figure 2-3-3)。

#### 第4項 考察

本研究では, “自尊感情が低く, かつ, 不安定な人が最も高い対人恐怖傾向を示すであろう”との仮説に基づき, 対人恐怖心性尺度の各得点の平均値に対し2要因分散分析を行った。その結果, 生活内評定法を不安定性の測度とした分析では, “否定的な公的自意識”で自尊感情の水準と不安定性の主効果がともに有意となった。この結果は, 自尊感情が低く, かつ, 不安定性が高くなればなるほど, 否定的な公的自意識が高まることを示唆しており, 基本的に仮説①を支持する結果といえる。この下位尺度に含まれる項目群は, 他者からの否定的な評価に対する予期的な不安で構成されており, とくに対人場面における意識関心の特徴を反映したものとなっている。否定的な現実自己に意識や関心の中心がありながらも, 理想的な自己像への接近を求めて自尊感情が揺れ動く心理状態のもとで, 対人場面において“嫌われるのではないか”, “避けられるのではないか”という予期的不安や意識過剰が生じやすいことは容易に想定される。また, そのような予期的不安や意識の過剰のために, 対人関係における他者からの反応に敏感に反応してしまい, より自尊感情が変

動しやすくなるという相互作用の影響も考えられる。これらの関連のために“否定的な公的自意識”の下位尺度との関連が検出されやすかったのではないかと推測される。他方、これ以外の他の下位尺度は、対人場面での緊張や身体反応、違和感など、どちらかといえば行動的側面の特徴を反映しているものが多い。内面における自尊感情の不安定さを抱えていたとしても、それがどのような身体的反応に結びつくのか、また、どのような相手に対する緊張や不安につながるのかについては、その他の個人的な要因が関与するものと思われる。その影響でこれらの下位尺度では仮説どおりの関連が検出されにくかった可能性が考えられる。

他方で、自己報告式の尺度得点を不安定性の測度とした場合には、自尊感情の低水準—低不安定群が最も高い“対人場面における違和感”の得点を示した。このことは、自尊感情が低い水準で安定している人が最も高い対人恐怖傾向を示すことを意味しており、基本的に本研究の仮説に反する結果である。この点については測定法の違いによる影響があるのではないかと考えられる。自己報告式の不安定性の測定では、調査協力者は普段の自分の体験を振り返って回答することになる。ところが、第2章第1節で論じた二重構造について、内沼（1977）が赤面恐怖の臨床経験の中で“赤面する弱気な意識のみが前景化して、強気の意識は盲点に落ち込む”と指摘しているように（内沼, 1977, p.104）、対人恐怖傾向が高い人では、否定的な現実自己ばかりが意識化されて理想自己の方は意識から抜けおちやすいことが推測される。つまり、その日その日の自尊感情を測定する生活内測定法では理想自己へ向けての自尊感情の一時的な高まりが得点に反映されたのに対して、振り返って評定する自己報告式ではそのような理想自己の影響が意識されにくく、常に低い自尊感情にとどまっていたかのように回答された可能性がある。そのため、不安定性の低い方が対人恐怖傾向が高いという一部の結果に結びついたのではないかとと思われる。

自己愛傾向については、本研究では“自尊感情が高く、かつ、不安定な人が最も高い自己愛傾向を示すであろう”との仮説のもとに、自尊感情の水準と不安定性の2要因でNPI得点の平均値の分散分析を行った。その結果、生活内評定法による不安定性の測度を用いた場合、“統率性・他者の操作”と“自己耽溺”で仮説を支持する結果を得た。しかし、総得点や他の下位尺度得点では不安定性の有意な効果は見られなかった。“統率性・他者の操作”に有意な結果が見られた点については、この下位尺度自体はリーダーシップに関する項目が高い負荷を示すように、必ずしも否定的なものではない。ただ、この点については文化的背景の影響が考えられ、北山(1995)が相互協調的自己観として指摘するような日本文化

の中では、このような積極的な行動は必ずしも歓迎されるものではなく、場合によっては否定的な反応を引き出す可能性がある。そのために、自尊感情の不安定性につながりやすく、今回のような結果に至ったのかもしれない。また、“自己耽溺”に有意な結果がみられた点については、調査対象が青年期の男女であったことと関係すると思われる。この下位尺度に含まれる項目は、自分の容姿への自信や身体的魅力への耽溺を意味するものである。青年期は一般に成熟した異性関係を形成することが重要な発達課題となっており、自己の外見的な魅力の重要性が高まる時期である(山本他, 1982)。それゆえ、青年期の理想自己は身体的魅力への陶醉という形で現れやすく、自己愛的な人格構造との関係が密接であったと考えられる。そのことが上記のような有意な関連の検証に結びついた可能性がある。

一方、自己愛傾向との関連においても、自己報告式の不安定性測定とした場合には仮説を支持する結果は得られなかった。つまり、いずれの場合も基本的に自尊感情の高い人が高い自己愛傾向を示すことが検証されたのみで、自尊感情の高水準の中で有意な不安定性の効果は得られなかった。このような結果となった点についても、対人恐怖傾向と同じような意識関心のあり方が影響している可能性が考えられる。つまり、自己愛傾向における誇大的で誇張された理想自己は、それに比して否定的に評価される現実自己に対する防衛としての働きを有している(Kernberg, 1975; Masterson, 1981)。したがって、生活内評定法によって示されたように日々の生活の中で否定的な現実経験に直面することで自尊感情が不安定化することはあっても、それらの体験に意識関心が向けられることはなく、回顧的に回答を求めた自己報告法では不安定性の体験をうまく測定できなかったことが懸念される。そのために、不安定性の効果について有意な結果が得られなかったものと推測される。

以上のように、本研究では、自尊感情の不安定性という視点を導入して対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向と自尊感情の関係を検討した。その結果、生活内評定法を用いた分析で部分的に仮説を支持する結果が得られた。このことは、対人恐怖傾向と自己愛傾向の背景に不安定な自尊感情が潜んでいることを示唆しており、第2章第1節で論じた自己の二重構造の仮説を支持しているものと考えられる。ただし、今回の結果では、仮説を支持する結果が限定された範囲のものにとどまった。この点については、第一に自尊感情の不安定性の測定方法の複雑さの影響が考えられるであろう。生活内評定は、確かに調査協力者の自尊感情の変動を計測する方法ではあっても、やはり生活状況は調査協力者によって、

また、同じ調査協力者であっても時期によって異なることが考えられ、それらの未統制な要因が結果に影響した可能性は十分考えられる。この点については、実施条件の統制、測定方法の簡略化等が今後の課題であろう。また、今回自己報告式の結果では、仮説に反する結果となった。この点については、前述の通り調査協力者の意識関心のあり方の影響が考えられるため、今後それらに影響を受けにくい測定法等の開発が必要であると思われる。以上のような方法論上の改善により、より幅広い範囲で対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向と自尊感情の不安定性との間で有意な関連が検出されうるものと考えられる。

#### 第4節 対人恐怖傾向，ならびに，自己愛傾向と自己不一致の不安定性の関係（研究 2-2）

##### 第1項 問題と目的

第2章第1節において，対人恐怖，ならびに，自己愛人格の背景的な自己意識として，過度に肯定的で誇大的な理想自己と，それに比して否定的に評価された萎縮した現実自己の二重構造を仮定した。これらの二重構造は，固定的で静的なものではなく，両者の間で変動する性質を持つものである。つまり，岡野（1998）が，“この「現実自己」，「理想自己」という，いわば両極性をなす自己の構造においては，自己は常にその極端な理想像である「理想自己」へと同一化する傾向を持つが，この高望みは即座にそれとは対極にある，理想とはかけ離れた自己像である「現実自己」への直面化を導く”としているように（岡野，1998，p.87），否定的な現実経験に意識関心があるときでも常に理想自己に近づこうとし，逆に，誇大的な理想自己に意識関心があるときでも思い通りにはならない現実経験の影響を避けることはできない。そのような意味では，これまで理想自己－現実自己の不一致としてとらえてきたことにも不安定さや変動性がみられるものと推測される。

以上の特徴と類似した概念として，自己像の不明確さや不安定さがある。とくに，自己愛人格については，従来の自己愛人格障害に関する臨床研究が自己概念の空虚さ，不安定さ，不明確さなどを指摘していることを受け，自己概念への接近可能性や複雑さ，明確さに関する調査研究が多数なされてきた。たとえば，Tschanz & Rhodewalt(2001)は，特性用語に対する反応時間実験を用いて，自己愛的な人の自己概念への接近可能性について検討している。また，Rhodewalt & Morf(1995)は，特性が書かれたカード分類の結果をもとに，自己愛と自己概念の複雑性の関連を検討している。さらに，小塩（2001）は，Rosenberg(1965)の自己像の安定性尺度を用いて自己愛傾向との関連を検討し，両者の間に正の相関関係を見出している。このように自己愛人格と自己像の関連についてはさまざまな観点から研究がなされているが，結果としては仮説に一致するものとそうでないものが混在している印象を受ける（Morf & Rhodewalt, 2001）。

ただし，自己の二重構造論を背景に考慮すると，自己愛人格における自己像の不安定さや不明確さは，純粋な自己像や自己イメージの問題というだけでなく，理想自己と現実自己の不一致の不安定性という観点からとらえることが可能である。つまり，純粋な自己像や自己イメージというよりも，自身が理想とする姿と現実の自分の姿のずれが日常生活の中で変動する体験である。このことは，自尊感情や自己像の変動に直結するものであり，

自己への評価的な側面に意識関心が集中することを特徴とする自己愛人格においては特に重要となる可能性が考えられる。この点については、対人恐怖についても同等と考えられ、対人恐怖の高い人は日常生活の中で、理想自己と現実自己の不一致が変動することが推測される。

そこで、本研究では、前節の調査と同時に実施した理想自己と現実自己に関する生活内評定の結果をもとに、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向と自己不一致の不安定性との関連を検討することとする。本研究で検討される仮説は以下のとおりである。

仮説①：自己不一致の不安定性が高い人ほど、高い対人恐怖傾向を示すであろう。

仮説②：自己不一致の不安定性が高い人ほど、高い自己愛傾向を示すであろう。

## 第2項 方法

1)調査内容 (a)対人恐怖傾向と自己愛傾向の測定については、前節の研究2-1と同じである。(b)理想自己と現実自己の不一致の測定については、長島・藤原・原田・斎藤・堀(1967)によるセルフ・ディファレンシャル尺度の47形容詞対の中で、先行研究における6因子構造において因子負荷量の高い16対を用いた。これらの項目について、研究2-1と同じ教示によって5日間、“あなたが理想とする姿”としての理想自己と“現実のあなたの姿”としての現実自己をそれぞれ7段階評定で繰り返し評定するように求めた。なお、調査協力者が以前の回答の影響を受けないように、“前日の回答等は見ることなく”答える旨教示に記すとともに、日によって項目をランダムに配置する工夫を施した。また、基本的には5日間連続で評定するように求めたが、困難な場合には1, 2日空いても5日分完成させる方を優先するよう指示した。

2)調査協力者と調査期間 本調査は1997年6月～11月の期間に実施された。回収された質問紙のうち、生活内評定法において1週間以内に4回以上自己不一致評定を行った調査協力者のみを分析の対象とした。その結果、有効回答数は139(男性55, 女性84; 平均年齢21.3歳)となった。

## 第3項 結果

1) 自己不一致の不安定性得点の算出 長島他(1967)の6因子構造(向性, 情緒安定性, 強靭性, 誠実性, 過敏性, 理知性)に基づき、各回の側面ごとの自己不一致得点(絶対値)を算出した。そして、その4回、ないしは、5回分の調査協力者内での標準偏差値をもって

Table 2-4-1  
自己不一致の不安定性得点の平均値と標準偏差

	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	理知性
平均値	1.42	1.47	1.63	1.24	1.16	1.13
SD	0.78	0.83	0.96	0.64	0.64	0.58

Table 2-4-2  
対人恐怖心性尺度と自己不一致の不安定性得点との相関

	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	理知性
対人恐怖心性						
対人場面における違和感	-.02	.11	-.02	-.08	-.11	.01
否定的な公的自意識	.23 **	.23 **	.06	.30 **	.08	.08
異性に対する心的苦痛	.11	.07	-.14	.11	-.20 *	.04
他者優位	.11	.10	-.04	.13	-.04	.16
多数の人に対する心的苦痛	.01	.01	-.08	-.04	-.14	.11
対人場面における身体反応	-.04	.03	-.23 **	.00	-.10	-.02

\* p<.05, \*\* p<.01

不安定さの測度とした。不安定性得点の平均値と標準偏差値をTable 2-4-1に示す。

2) 対人恐怖傾向と自己不一致の不安定性との関係 対人恐怖心性尺度の各下位尺度得点と各側面の自己不一致の不安定性得点との相関係数を算出した(Table 2-4-2)。その結果、対人恐怖心性尺度の“否定的な公的自意識”において、“向性”、“情緒安定性”、“誠実性”の側面における自己不一致の変動性と弱いながらも正の有意な相関が検出された。この結果は、否定的な公的自意識を強く抱いている人ほど、“向性”や“情緒安定性”、“誠実性”の側面における自己不一致が不安定であることを示唆している。一方、“異性に対する心的苦痛”と“過敏性”、また、“対人場面における身体反応”と“強靱性”の間では仮説に反する弱い負の相関が検出された。

以上の結果は、自己不一致の変動を標準偏差値に換算したものであり、実際の変動の様子を検討するには限界があると考えられた。そこで、仮説を支持する結果について、調査協力者の実際の自己不一致の変動の様子を知る参考とするために、5日間分回答のあった調査協力者の中で“否定的な公的自意識”得点の高い順に10名、低い順に10名をそれぞれ抽出し、その変動の様子を確認した（グラフの錯綜を防ぐため、各5名分の結果をFigure 2-4-1に示す）。その結果、高得点者、低得点者のいずれにも大きな変動をしめす者、あまり変動を示さない者がともに見られた。しかし、低得点者では高得点者よりもほぼ水平的な推移を示すものが比較的多く、その中に一時的に大きな変動を示すものが1、2名含まれていて、自己不一致が比較的安定している様子うかがわれた。それに対し、高得点者で

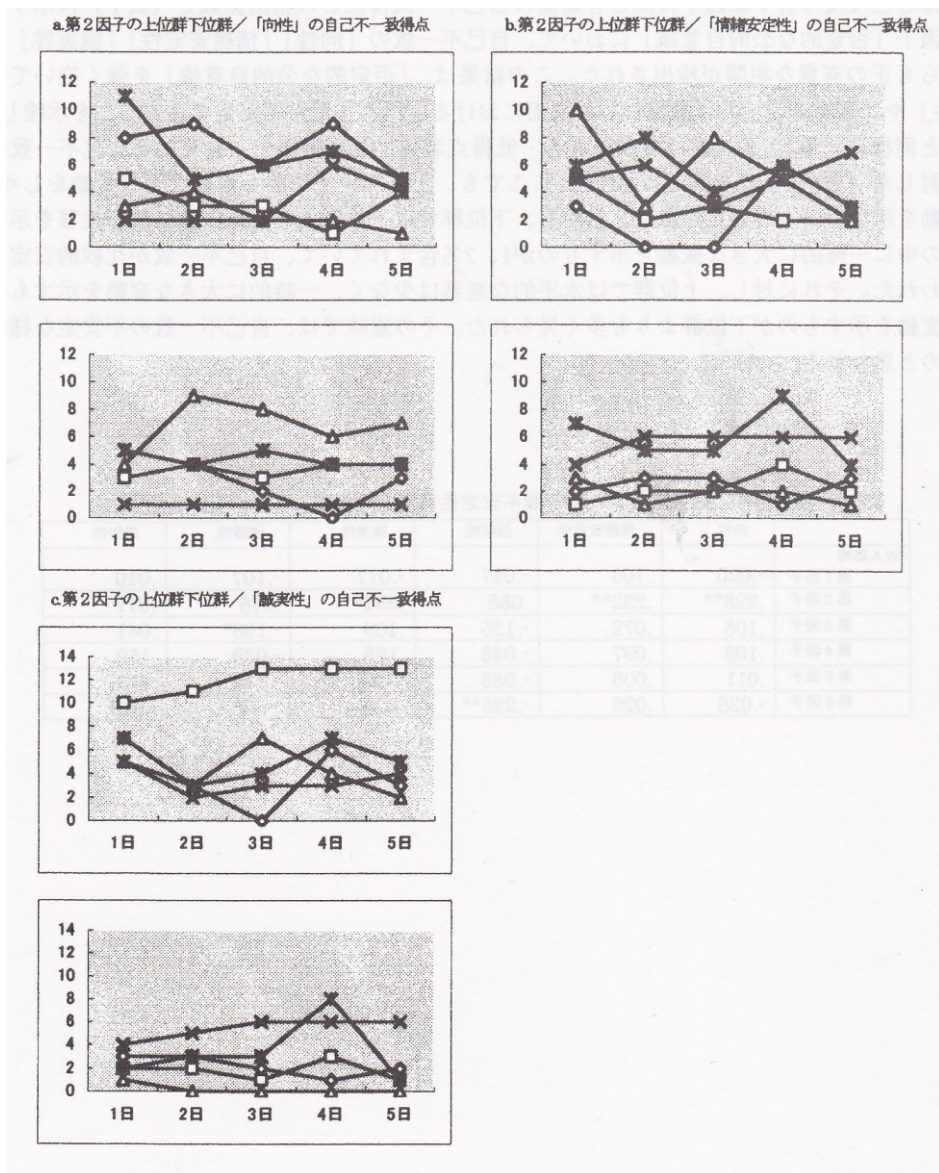


Figure 2-4-1 第2下位尺度“否定的な公的自意識”の高得点者，低得点者の自己不一致の変動の様子

注) 上が高得点群，下が低得点群

は水平的な推移は少なく，一時的に大きな変動を示すものやジグザク的な変動を示すものが下位群よりも多く見られた。以上のことから，自己不一致の不安定な様相が実際にも観察されたものと思われる。

3) 自己愛傾向と自己不一致の不安定さとの関係 NPIの各下位尺度得点と各側面の自己不一致の不安定得点との相関係数を算出した (Table 2-4-3)。その結果，“自己耽溺”で“向性”，“情緒安定性”，“過敏性”との間に，“特権性・特殊性”で“強靱性”，“過敏性”との間で弱いながらも正の相関関係が検出された。前者の結果は，自己耽溺が高い人ほど“向



Table 2-4-3  
NPIと自己不一致の不安定性得点との相関

	向性	情緒安定性	強靱性	誠実性	過敏性	認知性
NPI						
権威願望・注目願望	.12	.07	.11	.10	.11	-.04
統率性・他者の操作	.10	.10	.18 *	.17	.09	.05
自己耽溺	.29 **	.20 *	.17	.05	.23 **	.01
主張性・顕示性	.03	-.09	.15	-.08	.08	-.15
特権性・特殊性	.07	.08	.28 **	.09	.23 **	.08

\*p<.05, \*\*p<.01

性”，“情緒安定性”，“過敏性”の側面における自己不一致の不安定さが高く見られることを示している。後者の結果は，特権性や特殊性が強い人ほど“強靱性”，“過敏性”の側面における自己不一致の不安定さが高く見られることを示している。

また，対人恐怖傾向の場合と同様に，ここでも各下位尺度の高得点者，低得点者を抽出して，5日分の実際の変動の様子を確認した(Figure 2-4-2)。ここでもほぼ同様に，上位群にもあまり変動を示さないものが見られ，逆に下位群でも大きな変動を示すものが見られた。しかし，下位群では上位群に比べて急激な変動が少なく，一時的な変動を除けばおおむねなだらかな曲線的・連続的変動であり，日常的経験が穏やかに自己像に影響を与えている様子が伺われた。それに対し，高得点者群ではグラフ上でジグザクの・非連続的変動が多く見られ，自己像が理想自己像への接近と離反を繰り返している様子が観察された。以上のことから，自己耽溺や特権意識が強い人の自己不一致の変動性の様子がある程度確認されたものと思われた。

#### 第4項 考察

本研究では，対人恐怖傾向と自己不一致の不安定さとの関係を検討するために，対人恐怖心性尺度と生活内評定法による自己不一致の不安定さとの関係を検討した。その結果，“否定的な公的自意識”にのみ“向性”，“情緒安定性”，“誠実性”の不安定さとの間に有意な正の関係がみられた。この点については次のように考えられる。“否定的な公的自意識”は，他者の否定的な評価への不安や恐れを意味する項目群であり，否定的な自己への意識関心の集中を特徴とする対人恐怖傾向にもっともよく対応する側面である。自己の二重構造の観点からも，否定的な現実自己への関心の集中は当然他者からの否定的な評価への不安につながると考えられ，このような不安に直接結びつくものと理解できる。それに対し，その他の下位尺度は，対人場面における違和感，特定の他者に対する心理的苦痛，身体反応など，具体的な反応や行動を問う質問項目となっている。これらの体験については，実際にどのような他者を苦手とするのか，どの程度の身体的な反応を起こすのかにつ

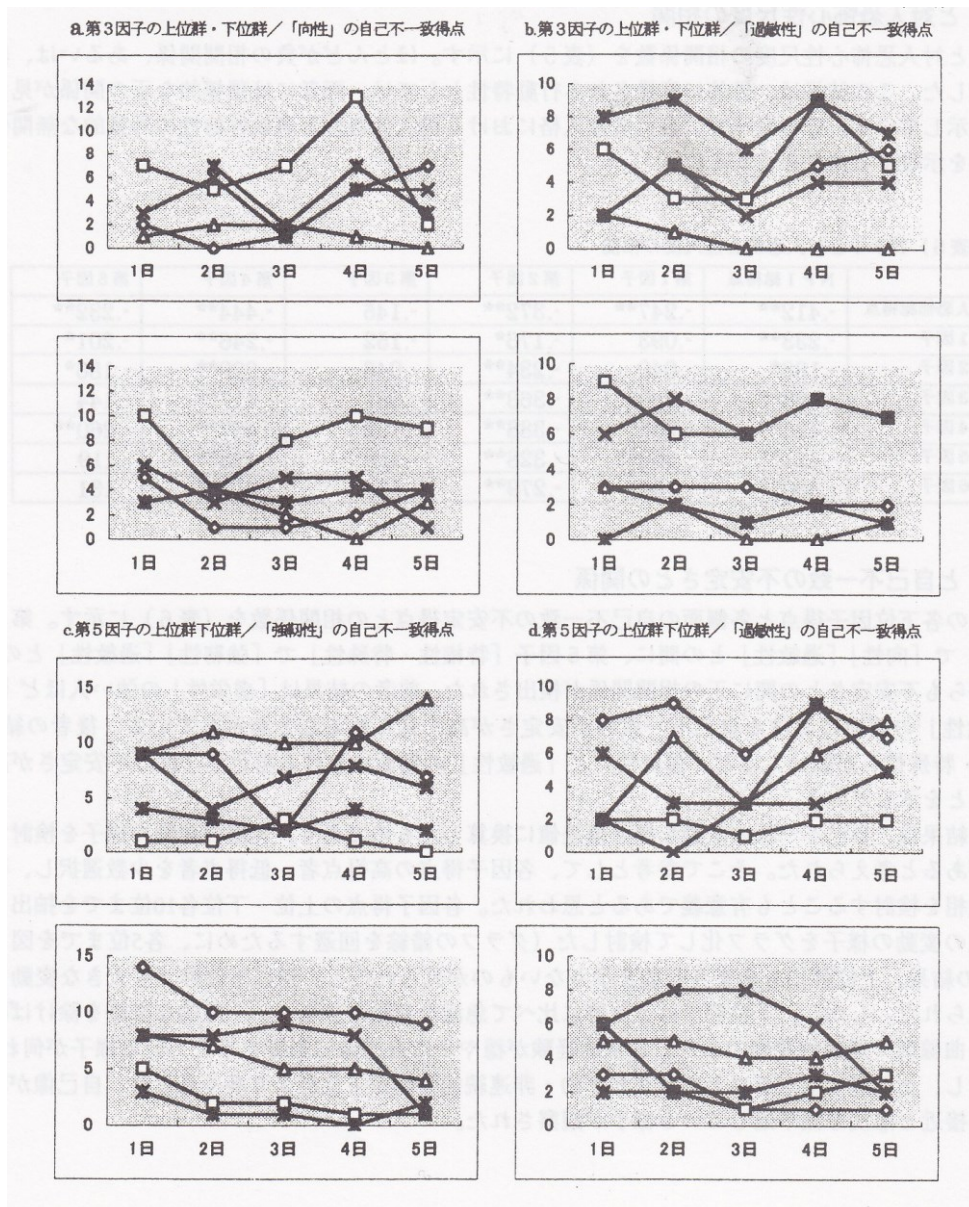


Figure 2-4-2 第3下位尺度“自己耽溺”，第5下位尺度“特殊性・特権性”の高得点者，低得点者の自己不一致の変動の様子  
 注) 上が高得点群，下が低得点群

いては、自己不一致の変動性以外にもさまざまな個人的要因が関与してくるものと考えられる。そのため、それらの下位尺度得点と自己不一致の不安定性との関連が希釈化されやすく、有意な結果が得られなかった可能性が考えられる。

次に、有意な自己不一致の不安定性がみられた側面との関係については、以下のように考えられる。まず、他者の評価への過敏さを意味する下位尺度で“向性”との間に有意な関係が見出されたのは妥当なものであると思われる。“向性”は対人関係に直結する特性であり、そこで理想的な姿を求める気持ちが強いと現実の自分を恥ずべきものと感じざるを得

ない。そのとき恥ずべき自分に意識が集中すると、他者からの否定的な評価を予期することになり、否定的な公的自意識に示されるような不安が高まりやすいと推測される。また、同じく“情緒安定性”との関係では以下のように考えられる。情緒面における理想的な安定を望む気持ちが強いと、ちょっとした動揺・緊張も許容できなくなるであろう。特に対人場面においてはある程度の緊張や動揺は避けがたいと思われるので、そのような側面で不安定性を示す人は、現実経験を恥ずべき自分の露呈として体験しやすい。そのため、他者から嫌われるのではないかと、避けられるのではないかと不安が高まりやすいものと思われる。一方、“誠実性”の側面との間に有意な関係が見出された点は若干意外なものといえる。まじめさや誠実さの理想と現実の不一致が対人場面における不安に何らかの影響を与えている可能性が示唆される。一方で、“強靱性”について有意な関連が得られなかったことは、前節における結果に照らすとやや不整合な結果であると言える。以上の点については、やはり測定方法の複雑さや条件統制の不足が影響しているのかもしれない。

一方、本研究では、自己愛傾向と自己不一致の関係を検討するために、NPIと自己不一致の不安定性の関係を検討した。その結果、“自己耽溺”において“向性”、“情緒安定性”、ならびに、“過敏性”の側面の自己不一致の不安定性との間に、また、“特権性・特殊性”においては“強靱性”、“過敏性”の不安定さとの間に、それぞれ弱いながらも有意な正の相関が検出された。前者の“自己耽溺”については、項目の内容としては、自分の外見に対する肯定的な評価を意味する項目からなり、自分自身の外見への耽溺を反映するものである。外見的側面への耽溺は、日常的な対人関係とは直接には関係のないものであり、これらが生活内での自己不一致の不安定性に関連している結果は若干意外かもしれない。しかし、このような外見へのとらわれは思春期青年期の自己愛傾向の高まりを典型的に示す特徴であると考えられ、そのために有意な結果が算出されやすかった可能性が考えられる。この時期の自己不一致の変動しやすさから自身の自己評価を防衛するために、そういった外見的側面への耽溺が生じるといった関連が結果に結びついた可能性がある。一方、特権性・特殊性に有意な結果が得られたのは、それよりも容易に了解が可能である。現実の自己像を反映する日常的な体験から距離をとり理想自己を保持するために、他者とは異なる特権的な立場にあると思ひこむことはある程度理解できることであるし、また、そのような特権意識を強く抱いていることで日常的な自分の姿が価値のない、無意味なものとして体験しやすく、自己不一致を強く意識する機会が増えることも十分に起こりえるものと考えられるからである。

自己不一致の各側面については以下のことが言える。まず，“自己耽溺”が“向性”に関係が見られたことは，対人恐怖傾向において考察したのと同様に十分予測されうる結果である。また，“情緒安定性”，“過敏性”の側面と有意な結果が見られた点については、次のように考えられる。“情緒安定性”と“過敏性”はともに脆弱さ・弱さを関連する自己の側面であり，この側面で極端な理想を求める人は，日常生活で直面する現実的な自分を恥ずべきものとして受け入れがたく感じるであろう。そのため，それを否認し理想的な自分を守るために，外見や服装に対してこだわり没頭することになると考えられる。“特権性・特殊性”において，“強韌性”との間に有意な結果が見られた点については，やはり“強さ一弱さ”に関する理想と現実の不一致が自己愛傾向に関連するという，これまでの仮説に最も適合する結果であろう。また，“過敏さ”の側面に結果がみられた点も同様に了解できるものである。

本研究では，理想自己と現実自己の二重構造を検証するために，対人恐怖心性尺度，ならびに，NPIと自己不一致の不安定性との関係を検討した。その結果，仮説を部分的に支持する結果が得られた。この結果は，一見相反するような対人恐怖傾向と自己愛傾向の背後に自己不一致の不安定性という共通要因を見出した点で意義があるものと考えられる。しかしながら，有意な結果が得られたのは，それぞれの下位尺度の中でも，また，自己不一致の側面の中でも限られた範囲にとどまるものであった。とくに，対人恐怖傾向と“強韌性”との間に有意な結果が得られなかった点は，前節の研究結果を考慮しても不整合なものであると考えられた。この点については，今回用いた生活内評定法の複雑さ，ないしは，条件統制の困難さから生じている可能性があり，今後改善を要するものと考えられる。

## 第5節 自己の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の規定要因（研究3）

### 第1項 問題と目的

前節まで自己の二重構造から予想される諸事象について、実際の調査研究により検討してきた。第2節（研究1）では、対人恐怖傾向と理想自己—現実自己不一致の関連性を検討したところ、社交性と精神的強さの側面を中心に対人恐怖傾向と自己不一致の間に正の関連がみられた。また、第3節（研究2-1）では、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向と自尊感情の不安定性の関連を検討したところ、実生活内での自尊感情の不安定性と対人恐怖傾向の否定的な公的自意識、自己愛傾向の統率性と他者の操作、自己耽溺傾向との間で有意な関連が検証された。さらに、第4節（研究2-2）では、自己不一致の不安定性との関連を検討したところ、ここでも対人恐怖傾向については否定的な公的自意識と向性、情緒安定性、誠実性の側面における自己不一致との間で、また、自己愛傾向については、自己耽溺傾向と向性、情緒安定性、過敏性の側面、および、特権性と強靱さの側面の自己不一致の不安定さとの間で、それぞれ有意な正の相関が検証された。以上のような結果は、おおむね自己の二重構造の仮説を支持するものと考えられる。したがって、これらの成果により自己の二重構造の仮説を総合的に検証するための準備が整ったものと考えられる。

本研究の主眼は、一般青年男女にみられる対人恐怖傾向と自己愛傾向の解明を通じて、青年期の心理発達 of 諸相を探求しようとするものである。これまでも同じような観点に立った先行研究がいくつか見られる。なかでも、清水らの研究グループの提示する対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルは、これまで論じてきた研究主題とかなり近似するものとみなすことができる（清水・海塚, 2002, 2005; 清水・川邊・海塚, 2006, 2007, 2008ab; 清水・岡村, 2010; 清水・岡村・川邊, 2011）。この対人恐怖心性—自己愛2次元モデルは、Gabbard（2000）による自己愛人格障害の下位類型、ならびに、それを恥と罪悪感の精神分析的理論をもとに精緻化した岡野（1998）の知見を基礎に、青年期一般の心理を対人恐怖心性と自己愛傾向の二次元の相互作用により説明しようとしたものである。清水・川邊・海塚（2007）は、従来用いられてきた対人恐怖心性尺度（堀井・小川, 1997）と自己愛人格目録短縮版（小塩, 2004）の各下位尺度に対して二次因子分析を実施し、対人恐怖心性と自己愛傾向に対応した2因子を抽出するとともに、確認的因子分析でその妥当性を検証している。そして、この2因子モデルにより調査協力者を5つの類型（過敏特性優位型、誇大—過敏特性両高型、誇大—過敏特性両貧型、誇大特性優位型、中間

型)に分類したうえでの類型間比較,ならびに,相関分析や重回帰分析を用いて,自己意識特性や対人信頼感,志向性との関連(清水・川邊・海塚,2007),自我同一性の様相や心理ストレス反応との関連(清水・川邊・海塚,2008a),5因子性格特性との関連(清水・川邊・海塚,2008b),ネガティブな反芻,完全主義,不合理な信念,自己嫌悪感などの認知特性との関連(清水・岡村,2010)等,幅広い個人特性との関連を検討している。また,この類型の安定性を検討するとともに(清水・岡村・川邊,2011),2因子モデルを簡便に測定する短縮版尺度の開発も行っている(清水・川邊・海塚,2006)。

以上の清水らの研究と本研究のモデルは,同じ岡野(1998)の知見をベースにしながらも以下の点で異なっている。清水らの対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルでは,対人恐怖心性と自己愛傾向そのものが二つの因子となっているのに対し,本研究における自己の二重構造では,対人恐怖傾向と自己愛傾向の背後に,過度に肯定的で誇大的な理想自己と,それに比して否定的に評価された萎縮的な現実自己の2つの潜在要因を仮定するものである。前者では,そのように仮定された2次元を用いて一般成年男女を類型化することが目的となっているが,本研究の目的は,そのような類型化を目指すものではなく,あくまで対人恐怖傾向と自己愛傾向という,ともに青年期に高まるとされる対人関係の関わる心理適応上の問題を自己への意識や関心の観点から説明することを目指している。また,そのことと関連して次のような違いも生じてくる。清水らの知見では,青年期にみられる対人恐怖心性と自己愛傾向の体験全体を2因子で説明するモデルとなっているが,本研究の自己の二重構造の仮説は,対人恐怖傾向と自己愛傾向の諸側面の中で,自己に関する意識や関心の特徴が2要因で規定されていると論じているにすぎない。したがって,それ以外の対人恐怖傾向や自己愛傾向の下位側面,とくに両傾向で最も重要となる対人関係領域については,理想自己と現実自己の二重構造だけでは説明しきれないことになる。このことは,対人恐怖傾向と自己愛傾向の全体を説明するためには,これらの2つの自己に関する要因とそれ以外の対人関係に関わる要因の,少なくとも3要因が必要になることを示唆している。以上のように見ると,本研究の仮説と清水らの研究グループによるモデルとは,実質的にはかなり異なるものとみなし得る。

以上の清水らのグループによる先行研究は多数報告されているものの,その他では青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造について同時に論じたものはほとんど見られない。しかし,前述のようにこれらの傾向は,単に青年期に一過性にみられる個人的特性であるだけでなく,自己形成や対人関係の様態に直接かかわるものであり,青年の心理発達

に重大な影響を及ぼすものと考えられる。しかも、これらはともに臨床対象となるような心的障害由来の概念であり、それらの問題に関するアナログ研究としてもその背景にある心理的要因を検討することは重要な課題である。そこで、本研究では、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者について自己の二重構造を含む潜在的な要因モデルを作成し、その妥当性を検討することを目的とする。

なお、以上のような目的の調査研究の中で、近年特に頻繁に用いられている統計的分析手法が共分散構造分析である。共分散構造分析は、質問紙法等により得られた多数の観測データを分析し、尺度得点などの観測変数とそこから推定される構成概念（潜在変数）の性質、ならびに、それらの関連を調べるものである。その特長としては、研究者の仮説に応じて柔軟なモデル構成が可能であり、さまざまな変数間の関係を分析することが可能な点が挙げられる（豊田, 1992, 1998; 狩野, 1997）。また、データに対するモデルの適合度を多様な指標から検討できるとともに、複数のモデル間の比較も可能である（豊田, 2007; 朝野・鈴木・小島, 2005）。本研究においても構成概念（潜在変数）を含む変数間の関係を検討する必要があるため、上記の共分散構造分析を使用することとした。

また、本研究では、これまでのところ、対人恐怖傾向と自己愛傾向の背景的な要因となる過度に肯定的で誇大的な自己への意識関心を理想自己、ならびに、それと比較して極端に否定的で萎縮的なものと評価される現実の自己を現実自己と呼称してきた。それは、前節までの研究の方法が、従来自己意識や自己評価の研究領域で用いられてきた自己不一致や自尊感情といったテーマに関連していたことによる。しかし、本研究の自己の二重構造における理想自己は、非現実的なほどに理想的な姿を自己に求めるものであって、その意味では通常の自己評価の内的基準としての理想自己と必ずしも同じものであるとはいえない。同時に、ここでいう現実自己についても、そのような高い理想自己のために否定的に歪めて認知された現実の姿であり、通常の意味で現実的な自己像とは異なるものである。以上のことから、一般的に用いられている理想自己、現実自己という概念をそのまま用い続けることには無理があるように思われた。そこで、以下では、理想自己の方を誇大的で膨張した自己への意識関心という意味で誇大自己、現実自己のほうはそれに比して否定的で弱いものと体験せざるを得ない自分の現状として萎縮自己という概念を用いることとした。

## 第2項 方法

1) 調査協力者と調査期間 調査協力者は、関西の大学生・大学院生545名(男性249名、

女性296名；平均年齢20.3歳,  $SD=1.8$ )であった。質問紙の配布方法は、ほとんどが大学の講義終了前後になされ、その場で回収されたものと後日回収されたものがあった。一部は郵送により配布と回収を行った。調査の実施にあたっては、本調査の趣旨、データの処理方法、プライバシーの保護、質問紙の処分方法について説明し、同意の上で回答するように依頼した。調査期間は、2000年12月～2001年6月であった。

2) 調査内容 (a) 対人恐怖傾向と自己愛傾向を同時に測定する心理尺度を作成するため、先行研究を参考にして質問項目群を作成した。自己愛傾向を測定する項目群は、Raskin & Hall(1979)のNPIの大石(1987)による邦訳版、Murray(1938)による自己愛性格項目の外林(1961)による邦訳版、O'Brien(1987)のオブライアン多面的自己愛目録、Mullins & Kopelman (1988)の自己愛項目群、高橋(1998)によるナルシシズム的人格尺度を参考に構成した。対人恐怖傾向を測定する項目群は、田中・穂苺・福田・小川(1994)、ならびに、相澤(1997)による対人恐怖傾向尺度を参考として項目を構成した。以上の項目群を著者と臨床心理学の大学院生2人で上位項目群に整理し、その項目群から代表的なものを2項目ずつ選択した。その結果、自己愛傾向に属する34項目、対人恐怖傾向に属する33項目が収集された。最終的に文体に若干の修正を施し、5段階評定(1. あてはまらない～5. あてはまる)で対象に実施した。(b) 本研究では、以上の尺度の妥当性を検討するために、YG性格検査(辻岡, 1965)の下位尺度のうち関連が予想されるもの、すなわち、D(抑うつ性)尺度、C(回帰性傾向)尺度、I(劣等感)尺度、N(神経質)尺度、O(客観性の欠如)尺度、Co(協調性欠如)尺度、Ag(愛想の悪いこと)尺度、T(思考的外向)尺度、A(支配性)尺度、S(社会的外向)尺度の10下位尺度を3段階評定(1. あてはまらない～3. あてはまる)で実施した。

### 第3項 結果

1) 対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群の分析 項目ごとに度数分布を検討した結果、特に極端な問題を示す項目はなかった。そこで、対人恐怖傾向の項目と自己愛傾向の項目に分けて、項目-総得点間相関を算出した。その結果、前者の2項目(項目7,14)、後者の5項目(項目9,14,23,29,32)が.20以下の値を示したので、以後の分析から除外した。その後、項目全体に対して探索的因子分析(主因子法)を実施した。因子回転は因子間の相関を許容する斜交回転(プロマックス法)を用いた。因子数は、内容的妥当性と分散の説明率を考慮して、8因子解を採用した。しかし、複数の因子に同程度に負荷する項目が見られたので、これを削除した(項目番号4,5,7,11,16,17,19,24,29,30,33)。結果、第



8 因子に高く負荷する項目が 1 項目のみとなったためこれも削除し（項目番号 9），因子数を 7 因子として再度因子分析を施し，最終的な 7 因子構造を確定した。因子全体での累積寄与率は 42.11%であった。結果を Table 2-5-1 に示す。

次に，各因子に高い負荷を示す項目の内容から，因子の意味について検討した。いずれの項目群も内容的に概ね統一性が見られた。それぞれの内容から，第1因子は“対人過敏”，第2因子は“対人消極性”，第3因子は“自己誇大感”，第4因子は“自己萎縮感”，第5因

Table 2-5-1  
対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	FAC. 1	FAC. 2	FAC. 3	FAC. 4	FAC. 5	FAC. 6	FAC. 7
T03. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる	.79	-.12	-.11	.04	.05	-.05	-.01
T17. 自分が他人にどのような印象を与えているのか、とても気になる	.76	-.14	-.07	-.03	.29	-.18	.04
T22. 人といくと、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる	.70	.18	.02	-.16	-.05	.13	-.04
T26. 周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる	.67	.12	-.08	-.15	-.08	.03	-.08
T11. 周りの人の視線が気になり落ち着かない	.63	.23	.08	-.13	-.09	-.18	.07
T21. 周囲の視線が気になって、動作がぎこちなくなる	.60	.24	.10	.00	-.04	-.15	-.00
T05. 失敗するのではないかといつも不安になる	.56	-.11	.01	.37	.03	.13	.02
T15. 少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する	.50	-.03	.01	.07	.16	-.18	.25
T16. 先のことをよくよく考えすぎる	.50	-.12	.13	.34	-.04	.05	-.02
T08. 何かにつけ、他人の方が上手くやっているように感じる	.48	-.06	-.15	.26	.04	.14	.07
T24. 自分に自信がない	.46	.12	-.21	.27	.01	.09	-.10
T18. 人としても自分だけが取り残されたような気持ちになる	.45	.30	-.05	.01	.04	.13	-.02
T10. 大勢の人の前にいると、自分が圧倒されてしまう	.37	.13	.13	.21	-.15	-.20	.04
T30. 人と自然につき合えない	.02	.81	-.02	-.08	-.09	-.09	-.04
T32. 人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない	-.04	.73	-.10	.05	.02	-.02	.06
T23. 人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず、人を避けてしまう	.17	.72	.03	-.08	.06	.04	-.10
T06. 人と心から打ち解けて付き合うことができない	-.09	.67	-.15	-.04	-.08	.23	-.01
T33. 内気な方である	-.16	.55	.01	.40	-.10	-.00	.08
T31. 人と対面すると、相手を意識して緊張する	.20	.50	.01	.07	-.01	-.08	.06
T03. 知っている人を見かけても、顔を合わさないように道を避ける	.16	.42	-.00	.02	.07	.03	-.04
T02. 無理して人に合わせようとして、窮屈な思いをする	.21	.33	.04	.18	.14	-.04	-.01
N20. 私にはもって生まれた素晴らしい才能がある	-.03	-.06	.73	.00	-.02	-.07	.02
N31. 他の人とは違って、自分はたぐいまれな存在である	.08	.03	.62	.03	-.07	.17	-.05
N10. 自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ	-.01	.01	.57	-.00	.16	-.05	-.05
N12. 自分の思想や感性にはかなり自信がある	-.10	.03	.54	-.05	.01	-.00	.12
N18. 自分はきっと将来成功するのではないかと思う	-.09	-.02	.54	.05	.20	-.13	-.04
N02. 私は今までにたぐいまれな経験を積んできた	.11	-.26	.46	.02	-.21	.09	.00
N08. 自分の体を人に自慢したい	-.12	.05	.40	.13	.07	.16	.03
N03. 自分自身では、要領もいしい賢明さも備えていると思う	-.10	.09	.36	-.29	-.01	-.02	-.05
N15. 自分が偉大な人間になっているような空想をする	.10	.10	.34	.09	.13	.23	-.10
T01. 気が弱い	.12	.02	.03	.71	.05	.08	.01
T25. 決断力がない	.14	.02	-.07	.54	.06	.10	-.12
T28. 引っ込み思案である	-.05	.43	.05	.49	-.06	-.01	.04
T13. 自分の意見が正しいかと思っても強く主張できない	.28	.11	.14	.43	-.05	-.08	-.13
N27. 人の注目を浴びるのが好きだ	.03	-.08	.08	.06	.78	.07	-.07
N21. 人から賞賛されたいという気持ちが強い	.19	.11	.01	.03	.63	-.08	.13
N25. こそこそという時には大胆に自己アピールをしたい	-.05	.02	.14	-.10	.35	.10	.06
N04. 人前で発表をしたり演技をしたりするのが得意だ	-.09	-.11	.16	-.18	.29	.20	-.05
N01. 人の話に耳を傾けるよりも自分のことをもっと話したい	.09	-.21	.01	.02	.24	.19	.04
N13. 自分の役に立つかどうかで友達を選ぶことは、正当なことである	-.11	.05	.10	.18	-.04	.49	.13
N26. 人々を従わせられるような権威をもちたい	.13	.04	.10	-.13	.12	.48	.03
N06. 必要ならば罪悪感を感じることなく、人を利用することができる	-.15	.09	.03	-.02	.01	.42	.06
T19. 根気がなく何をするにも長続きしない	-.05	.06	-.17	.25	.08	.38	.02
N28. 私の意見や考えに周りの人を従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのと思う	.12	.03	.23	-.03	.03	.33	.12
T12. 人に軽く扱われたことが、後々腹が立って仕方がないことがある	.12	.04	-.03	-.10	-.03	.18	.65
N34. 人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りを抑えられなくなる	.03	-.07	-.00	-.02	.04	.07	.55
N22. 人から不当な評価を受けることには我慢がならない	-.15	.14	-.01	-.02	.34	.02	.52
T27. 対人場面でその場は何とも思わなくても、後々腹が立つ事がある	.24	-.13	.04	-.07	-.19	.22	.45
因子間相関	F1	-.56	-.11	.41	.04	.21	.48
	F2	-	-.10	.50	-.20	.02	.37
	F3	-	-	.44	.39	.30	.15
	F4	-	-	-	-.37	-.35	.17
	F5	-	-	-	-	.27	.20
	F6	-	-	-	-	-	.21

T・・・対人恐怖項目 N・・・自己愛項目

子は“賞賛願望”，第6因子は“権威的操作”，第7因子は“自己愛的憤怒”と命名された。第6因子には“根気がなく何をするのも長続きしない”という内容的にやや一貫しない項目が含まれていたが，これは権威的操作的態度の背景にある“自分は動きたくない”という態度を反映したものと考えられた。次に，各項目群の構成を見ると，第1因子，第2因子，第4因子は対人恐怖傾向の項目のみが属しており，第3因子，第5因子，第6因子にはほぼ自己愛傾向の項目のみが属している。このことから，これらの因子レベルでも両傾向の項目がほぼ分割されたといえる。第7因子のみが両者の項目を等しく含んでおり，一見どちらに属するとも言い難い。しかし，DSMの診断基準では，自己愛的憤怒は主に自己愛傾向の特徴に含まれていることから，内容的にみて自己愛傾向に属するものと考えられた。なお，因子分析の結果得られた下位尺度ごとに項目—総得点間相関を算出したところ，すべて.30以上の値を示し，ほとんどが.35～.50の値を示した。また，下位尺度の信頼性係数（ $\alpha$ 係数）は，順に.91, .86, .77, .75, .69, .59, .69であった。

2) 対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群とY G性格検査の相関 Y G性格検査の下位尺度ごとに粗点の合計点を算出し，対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群の各下位尺度との相関係数を算出した。対人恐怖傾向の下位尺度とY G性格検査の相関係数をTable2-5-2に示す。それらの値を見てみると，対人恐怖傾向の下位尺度である“対人過敏”，“対人消極性”，“自己萎縮感”のいずれにおいても，ほぼ同様のY G性格検査との関連がみられることがわかる。つまり，Y G性格検査内での情緒不安定性因子(D, C, I, N)と社会不適応因子(O, Co)とはいずれもおおむね中程度以上の正の相関がみられ，主導性因子(A, S)とT（思考的外向）尺度とは中程度の負の相関がみられるのである。このことは，対人恐怖傾

Table 2-5-2 対人恐怖傾向とY G性格検査の相関

	対人過敏	対人消極性	自己萎縮感
D（抑うつ性）	.64**	.52**	.38**
C（回帰性傾向）	.44**	.28**	.22**
I（劣等感）	.81**	.57**	.65**
N（神経質）	.73**	.57**	.44**
O（客観性欠如）	.44**	.37**	.19**
Co（協調性欠如）	.53**	.44**	.23**
Ag（愛想の悪さ）	.01	-.12**	-.30**
T（思考的外向）	-.46**	-.38**	-.22**
A（支配性）	-.45**	-.67**	-.67**
S（社会的外向）	-.42**	-.70**	-.53**

\*\*p<.01

Table 2-5-3  
自己愛傾向とY G性格検査の相関

	自己誇大感	賞賛願望	権威的操作	自己愛憤怒
D (抑うつ性)	-.06	.02	.29 **	.39 **
C (回帰性傾向)	.02	.20 **	.31 **	.41 **
I (劣等感)	-.24 **	-.10 *	.18 **	.32 **
N (神経質)	-.01	.06	.32 **	.53 **
O (客観性欠如)	.15 **	.18 **	.30 **	.37 **
Co (協調性欠如)	.10 *	.13 **	.49 **	.48 **
Ag (愛想の悪さ)	.37 **	.43 **	.34 **	.44 **
T (思考的外向)	-.16 **	-.06	-.21 **	-.28 **
A (支配性)	.30 **	.45 **	.02	-.07
S (社会的外向)	.20 **	.40 **	-.04	-.13 **

\*p<.05 \*\*<.01

向の高い人が、抑うつ傾向、劣等感、神経質さなどの情緒面での問題、ならびに、客観性の欠如や協調性の欠如などの社会適応上の問題を高く示すとともに、のんきさやリーダーシップ、外向性に欠けることを示唆している。このような関連は、対人恐怖傾向の特徴から十分予測しうるものであり、本尺度の妥当性を支持しているものといえる。

また、自己愛傾向の各下位尺度とY G性格検査との相関係数をTable 2-5-3に示す。まず“自己誇大感”でY G性格検査のAG (愛想が悪いこと) 尺度、A (支配性) 尺度、S (社会的外向) 尺度との間に弱いながらも正の相関が得られ、I (劣等感) 尺度との間には負の相関がみられた。また、“賞賛願望”でも、AG 尺度、A 尺度、S 尺度で正の相関が示されるとともに、C (回帰性傾向) 尺度との間でも弱いながらも正の相関が得られた。以上の結果は、自己愛傾向の中の誇大性や賞賛願望の特徴と一致するものであり、これらの下位尺度の妥当性を支持する結果といえる。また、“権威的操作”と“自己愛的憤怒”については、O (客観性の欠如) 尺度、Co (協調性の欠如) 尺度、Ag 尺度との間で正の有意な相関が得られた。これらの関連は、権威的に他者を操作したり他者に怒りを向ける人は、客観的に物事をみる力が弱く、他者との協調性を欠き、気が短く攻撃的であることを示唆している。以上の関連は権威的操作や自己愛的憤怒の特徴と合致するものであり、これらの下位尺度の妥当性を支持する結果であるといえる。

一方、対人恐怖傾向と異なり、自己愛傾向では上記のとおり下位尺度によりY G性格検査との関連に目立った違いがみられた。つまり、“自己誇大感”、“賞賛願望”と異なり、“権威的操作”と“自己愛的憤怒”ではY G性格検査の中のいわゆる情緒不安定性因子(D, C, I, N 尺度)とも一貫して正の相関がみられたのである。このことは、権威的操作や自己愛的憤怒を示す人は、情緒の不安定さや劣等感、神経質さをも一定程度示すことを示

唆している。

3) 対人恐怖傾向と自己愛傾向の相関について 共分散構造分析におけるモデルの構成の参考とするため、対人恐怖傾向と自己愛傾向の相関係数を算出した(Table 2-5-4)。その結果、対人恐怖傾向の下位尺度と自己愛傾向の下位尺度間の関連に相違がみられた。つまり、自己愛傾向の中の“自己誇大感”と“賞賛願望”は、対人恐怖傾向の3つの下位尺度と軒並み負の相関関係を示した。とくに、“自己萎縮感”と“対人消極性”とは比較的明確な負の関連がみられた。一方で、“権威的操作”と“自己愛的憤怒”は、対人恐怖傾向の一部の下位尺度とむしろ正の相関を示した。とくに、“対人過敏”とはかなり明確な正の相関を示した。以上のような関連は、対人恐怖傾向と自己愛傾向が単純な2要因により構成させるのではなく、より複雑であることを示唆するものといえる。

4) 共分散構造分析を用いたモデル検討 本研究の目的は、これまで論じてきた自己の二重構造の仮説に照らして、対人恐怖傾向と自己愛傾向を説明するモデルを構築し、共分散構造分析によりその妥当性を検証することにあつた。そこで、自己の二重構造の仮説とこれまでの分析結果を参考に、以下のようなモデルを作成した。

まず、前述の相関係数の結果では、“自己誇大感”と“賞賛願望”は、“自己萎縮感”ならびに“対人消極性”と負の関連を示した。前者の下位尺度が自己愛傾向の中でも特に誇大で肯定的な自己意識に近く、後者は対人恐怖傾向の中の否定的で萎縮的な現実自己に近いことを考えると、以上の関連は誇大自己と萎縮自己の矛盾葛藤を反映している可能性が推測された。そこで、“自己誇大感”と“賞賛願望”の両観測変数に対して“誇大自己”の潜在変数、“自己萎縮感”と“対人消極性”の両観測変数に対して“萎縮自己”の潜在変数をそれぞれ仮定した。一方で、前述の対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群の下位尺度間相関では、対人恐怖傾向の中の“対人過敏”が自己愛傾向の中の“権威的操作”，ならびに、“自己愛的憤怒”と正の相関を示した。これらの下位尺度は、それぞれの傾向の中での対人関係上の問題、とくに対人場面における傷つきへの不安や恐れ、ないしは、怒りや抵抗を意味するものと

Table 2-5-4  
対人恐怖傾向と自己愛傾向との相関

	自己愛傾向			
	自己誇大感	賞賛願望	権威的操作	自己愛的憤怒
対人恐怖傾向				
対人過敏	-.17 **	-.06	.40 **	.20 **
対人消極性	-.14 **	-.19 **	.28 **	.15 **
自己萎縮感	-.31 **	-.20 **	.10 *	-.01

\*p<.05, \*\*<.01

考えられた。その意味では、対人恐怖傾向と自己愛傾向における対人関係上の問題を反映するもので、それらが比較的強い関連にあるものと理解された。そこで、これら3つの観測変数から一つの潜在変数を仮定し“対人的傷つき易さ”とした。そのうえで、自己の二重構造の仮説から考えると、“誇大自己”と“萎縮自己”の両者から“対人的傷つき易さ”が生じるとする因果関連が推測されたので、そのような影響関係をモデルの中に含めた。また、最後に、対人恐怖傾向の中の“対人過敏”は、“自己萎縮感”や“対人消極性”との関連も強く、かつ、“自己誇大感”との間に明確な負の相関がみられることから、“萎縮自己”からの影響も強く受けているものと考えられた。そこで、“萎縮自己”の潜在変数からのパスも仮定し、全体のモデルを完成させた（モデル1, Figure 2-5-1参照）。なお、モデルの比較のために対人恐怖傾向と自己愛傾向をそれぞれ対応する2つの潜在変数から説明する2因子モデルも作成し、同時に分析を行った（モデル2, Figure 2-5-2参照）。

以上の2つのモデルに対して共分散構造分析を実施し、係数の推定と適合度指標の算出を行った。その結果、モデル1については、仮定したすべての影響関係で有意な係数が得られた。また、モデルの適応について検討したところGFIが.96, AGFIが.89という十分な値が得られた。このことから、モデルのデータに対する当てはまりは良いものと考えられた（Figure 2-5-1）。一方で、モデル2のほうも、各パス係数そのものはいずれも有意なものとなったが、GFIが.86, AGFIが.70とかなり低い値となり、モデルのデータに対する当てはまりが不十分であるとみなされた（Figure 2-5-2）。以上の結果より、自己の二重構造から対人場面における諸問題が生じることを仮定したモデル1の妥当性が示されたといえる。

#### 第4項 考察

本研究では、自己の二重構造の仮説を下敷きに、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向を規定する潜在的モデルを作成し、共分散構造分析によりその妥当性を検討した。その結果、自己の二重構造から対人場面での傷つき易さが生じると仮定するモデル1については比較的良い適合度が示された。一方で、対人恐怖傾向と自己愛傾向のそれぞれに対応する2因子構造を仮定するモデル2は十分な適合度を示さなかった。以上の結果は、自己の二重構造の仮説を基本的に支持する結果であると考えられる。

両モデルの比較という点では、適合度に反映される両者の違いは主にはその潜在変数の数にあると考えられる。つまり、上記の結果は、対人恐怖傾向と自己愛傾向の全体像を説明するためには、同傾向に対応した別々の2因子を仮定するだけでは不十分であり、誇大

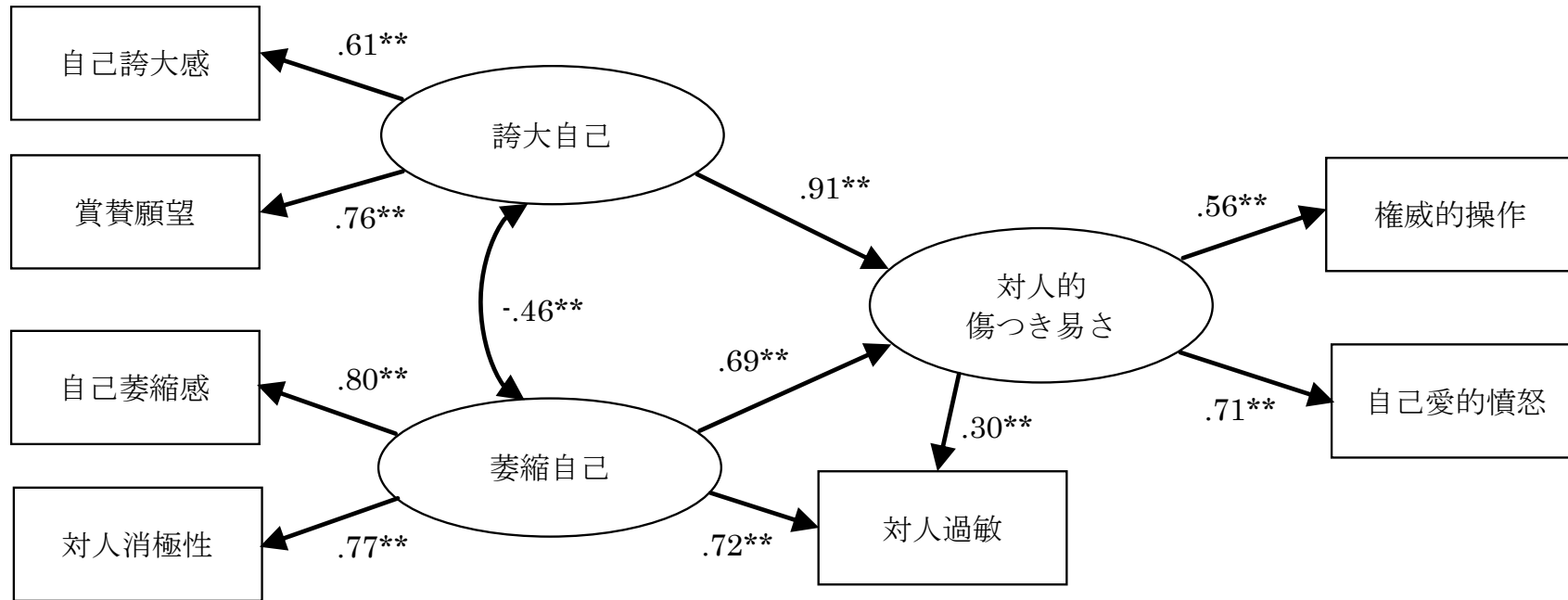


Figure 2-5-1. モデル 1 による共分散構造分析の結果  
 注) 誤差変数は省略。図の数値は標準化係数を示す。  
 \*\* $p < .01$

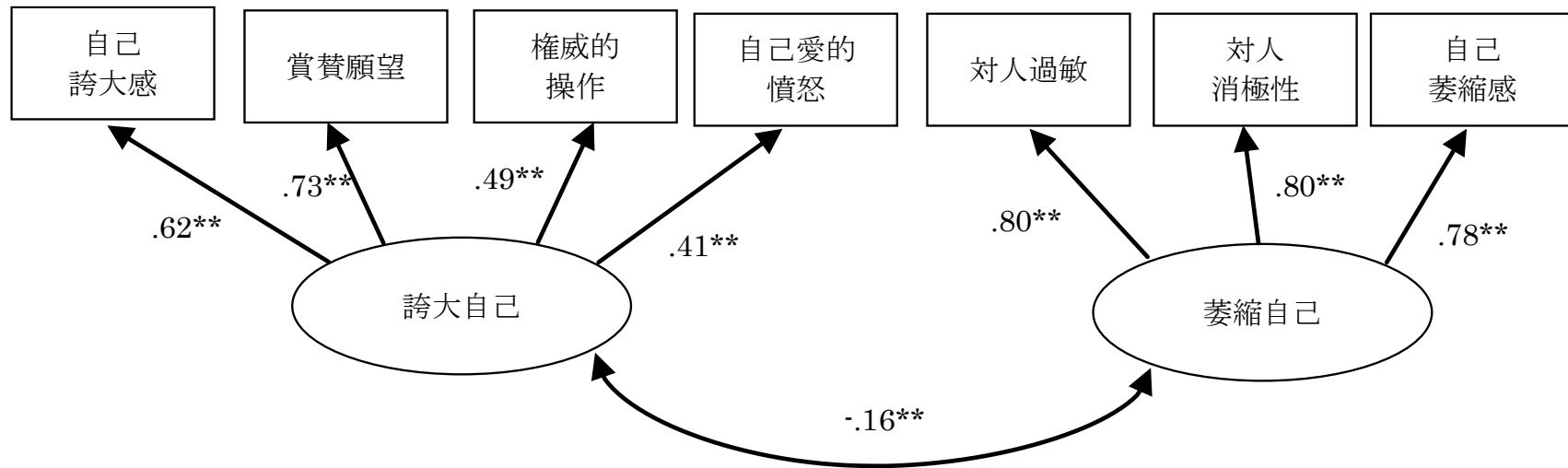


Figure 2-5-2 モデル2による共分散構造分析の結果

注) 誤差変数は省略。図の数値は標準化係数を示す。

\*\* $p < .01$

自己と萎縮自己、及び、対人的傷つき易さの3因子を仮定する必要があることを示唆している。

次に、モデル1における各変数間の関係については、以下のように考えられる。まず、各潜在変数から観測変数への係数を見ると、誇大自己は“自己誇大感”，および，“賞賛願望”と同程度の強い正の関係を示している。また、萎縮自己も“自己萎縮感”と“対人消極性”に対して同程度の強さの正の影響を与えている。以上の結果は、当初予測された関係が再現されたものといえる。したがって、潜在変数の意味づけは妥当なものであったと判断できる。一方、対人的傷つき易さと各観測変数の関係は幾分複雑なものである。この潜在変数は、“自己愛的憤怒”と最も強い関連を示しており、反面，“対人過敏”，ならびに，“権威的操作”との関係は相対的に弱いものとなっている。したがって、今回のモデルにおける対人的傷つき易さは、他者からの不本意な評価や対応に対して苛立ちや怒りで反応するような傷つき易さを特に意味するものと考えられる。自己愛的憤怒が内容的にみて自己愛傾向の中に含まれるように、また、以下に示す潜在変数同士の関連からも、自己愛的傾向における傷つき易さの特徴に近いものかもしれない。ただし、もともとこの因子に高く負荷する項目には、対人恐怖傾向を測定するものとして準備された2項目が含まれているように、広い意味では他者からの否定的な評価に傷つくという点では、対人恐怖傾向が示す対人関係上の問題にも関連が深いものと考えられる。したがって、やはり対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者に共通する対人的な傷つき易さという意味を十分に含んでいるものと考えられる。

また、同じ点について、“対人過敏”と潜在変数との関連をみると、対人的傷つき易さよりも萎縮自己の方が強い影響を与えている。この点は、“対人過敏”が主に対人場面における不安を意味する項目からなることを考慮すると、意外な結果かもしれない。しかし、対人恐怖の諸研究の中では、このような対人場面における不安や恐怖が、実際の対人関係における齟齬や他者からの否定的な反応の基づくものというよりも、予期的な不安としての性質が強いことが指摘されている。その意味では、過度に否定的に評価された現実自己から生じる不安という関連のほうが、実際の対人場面での傷つき易さという性質よりも強いかもしれない。このようなことが上記の結果に結びついた可能性が考えられる。

次に、潜在変数間の関連については以下のように考察される。まず、誇大自己と萎縮自己はともに対人的傷つき易さに正の影響を及ぼしている。この結果は、誇大自己と萎縮自己の二重構造が対人的傷つき易さを生む、という本研究の基本仮説を支持している。ただ



し、数値的には誇大自己のほうの影響が大きく現れている。この点については、前述のように、本研究における対人的傷つき易さの潜在変数が、どちらかといえば自己愛傾向を強く反映するものとなったことによる影響が考えられる。ただし、それでも萎縮自己からも十分な効果が示されているので、やはり対人恐怖傾向にみられる傷つき易さとも関連するものであると考えられる。

また、誇大自己と萎縮自己の潜在変数間の関係に目を向けると、両者の間には負の相関が示されている。このことは、誇大自己を強く持つ人ほど萎縮自己が低くなり、萎縮自己を強く持つ人ほど誇大自己が低くなるといった関連を示している。したがって、極端に肯定的で誇大的な自己への意識関心を持つ人は、それに比して現実の自分を否定的で弱いものと体験するといった仮説に矛盾する結果といえる。ただし、この点については以下のような説明も可能である。岡野(1998)は、極端に理想化された理想自己と、過剰に否定的に評価された恥ずべき自己の双極性の中で、個人がいずれを拠点とするかによって、尊大で他者に無関心な特徴と他者の反応に敏感で回避的な特徴が生じうる可能性を示唆している。つまり、このような矛盾葛藤の中で、自分が思い描く非現実的に肯定的で膨張した自分の姿にしがみつこうとすると、現実的な自分自身の姿や体験は意識されにくくなる可能性があり、そうなるとう萎縮的な自己を反映する質問項目に対する回答は否定的なものとなりやすい。逆に、非現実的に否定的で価値のないもの、弱いものとして体験される現実自己の方に目が向いていると、背景に働いている誇大自己には気づきにくく、それを含む質問項目には否定的に回答することになりやすい。以上のような意識関心の方向性の影響が結果に現れた可能性が考えられる。ただし、これらの問題は本研究の範囲を超えたものであり、今後の研究により検討されなければならない。そのためには、当人の意識関心の影響受けにくい行動面や反応面に注目した手法を用いるなど、より詳細な調査・研究が必要になると考えられる。

### 第3章 対人関係の観点から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向

#### 第1節 対人恐怖傾向と自己愛傾向における対人関係の特徴

##### 第1項 対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な対人関係の特徴

第2章では、自己の観点からみた対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造について、自己の二重構造を仮定して検討してきた。その結果、これらの仮説がおおむね支持されるとともに、第5節において共分散構造分析による統合的モデルの検討をおこなったところ、誇大自己と萎縮自己の両者から対人的傷つき易さが生じるとの関連が示された。このことは、対人恐怖傾向と自己愛傾向に共通する要因として、対人場面における傷つき易さや過敏さ、それに対する反動や怒りなど対人関係上の問題がみられることを示している。したがって、第2章までの成果を踏まえた場合、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者に関わる対人関係上の特徴を検討することが次の課題となると言える。

実際、対人恐怖傾向と自己愛傾向は、これまでみてきたように自己に対する意識や関心の点ではほぼ正反対といえる特徴を示すものの、対人関係の観点から見れば比較的類似した特徴を持つものと思われる。前節の分析結果から示唆されるように、対人恐怖傾向と自己愛傾向のいずれにおいても対人関係が否定的に体験される傾向が推測されるのである。対人恐怖傾向においては、そのような対人場面における否定的体験こそがまさしく悩みの中心となっている。対人恐怖傾向の高い人は、人前でわずかに赤面したり緊張したりするだけで、他者に嫌われるのではないかと、他者に避けられるのではないかと強い不安を抱く。また、自分の容貌上のわずかな欠点や行動面での不自然さ、ちょっとした言葉のつまずき漠然と感じ取られる臭いのせいで、自分が相手に不愉快な思いをさせたり迷惑をかけたかと思ってしまう。対人恐怖傾向が高い人は、以上のような対人関係上の悩みが昂じて、対人場면을回避したり引きこもったりしやすい。このように、対人恐怖傾向では基本的に対人関係は非常に否定的なものとして体験されている。

それに対して、自己愛な人は、一見するところ対人関係を肯定的なものとして体験しているかのように見える。DSMの自己愛人格障害の診断基準の中に、周囲に過度な賞賛を求めることや特権的な取り扱いを期待すること、特別に地位の高い人々との付き合いを求める傾向などが含まれていることから、比較的肯定的な人間関係が維持されているかのように受け取れる。しかし、それらは、主に自己愛的な人の欲求を満たす人々との間でのごとであり、それ以外の対人関係ではむしろ否定的な側面が際立ってくる。前述のDSMの

診断基準においても、自己愛的な人の対人関係が一般に深みにかけ共感性に乏しく、しばしば操作的、搾取的であることが指摘されている (American Psychiatric Association, 2013)。また、Akhtar & Thomson(1982)は、そのような表面的な特徴の背後に、他者を蔑む気持ちや羨望、さらには他者の脱価値化を秘めているとともに、その反面として自己評価を維持するうえで過度に依存しやすい特徴なども指摘している。さらに、Kernberg(1975)や Masterson (1981) は、自己愛人格障害の患者との治療経験の中から、周囲の他者が無価値で意味のないものとみなされるだけでなく、攻撃的で敵意に満ちたものとして体験されることも示唆している。このように、自己愛人格においても、その表面的な特徴とは裏腹に、実際にはかなり対人関係を否定的なものとして体験しやすい傾向が見受けられるのである。

以上のように考えれば、対人恐怖傾向と自己愛傾向には共通して対人関係を否定的に体験しやすい傾向がみられることになる。とはいっても、実際に対人恐怖傾向の高い人が周囲の人たちから否定的に見られていたり、自己愛的な人の周りには実際に価値が低く攻撃的である可能性は低い。むしろ、このような否定的な対人関係の背景には、対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の特徴が関連しているものと考えられる。したがって、両傾向の対人関係の特徴の検討に向けては、なぜそのような否定的な他者認知が生じるのかといったことが問題になる。以下では、とくに発達の観点からこれらの問題の解明に取り組むが、その前に、前節までで論じてきた自己の二重構造の仮説においていまだ明らかとはなっていない論点についての考察が必要となる。それは、誇大自己、すなわち、自己愛概念の再検討の試みである。

## 第2項 自己愛概念に関する批判的考察①：見る者の視座を含む自己愛概念の定義について

第2章において検討してきた自己の二重構造の仮説では、過度に肯定的に評価された理想的な自己意識を抱いているために、通常の現実的な自己に関する経験が極端に否定的で萎縮的なものと体験されることが理解された。したがって、そのような矛盾対立する自己への意識や関心の様相を維持強化しているのは、原則的には誇大自己の作用ということになる。その意味では、自己の二重構造のさらなる解明にあたっては誇大自己についての探求が第一に重要な課題になるといえる。過度に理想化された万能的な自己イメージである誇大自己は、自己愛的とみなされる行動特徴の中核を構成しており、従来自己愛的な心理や心性として扱われてきた心理学的特徴そのものといえる。したがって、上記の論点は、自己愛とは何かといった問題意識に直結するものとみなすことができる。

本研究が参考としている岡野（1998）の自己愛理論においては、自己愛は“他人から自分の存在を認めて欲しい、大事にされたい、あるいは自分自身を価値のある人間だと思いたいという基本的な願望”と定義されている（岡野, 1998, p.7）。したがって、分極された自己の双極構造を構成する理想自己（誇大自己）も、そのようないわば人間の基本的な欲求の表れとして位置づけられている。これと類似した自己愛の定義を行ったのが、自己愛人格障害の理解に誇大自己という概念を最初に導入した Kohut (1971, 1977) である。Kohut は、人間は、周囲の母親的環境に自己の主張的な欲求が共感的に応答されることを前提に生まれてくるものとし、それが自己の誇大さや万能さが共感的に鏡映されることを期待する誇大自己欲求を形成すると考えている。したがって、Kohut(1971, 1977)の考え方においても、原初的な自己愛的欲求は生まれながらに人間に備わっているものと位置づけられている。以上のような自己愛の定義は、日常的な感覚に近いものであるために理解しやすい面がある一方で、自己愛的な欲求をある意味ア priori に規定するものともなっており、それ以上の概念上の探求を困難にするものとも思われる。

広く精神分析的な理論の中で、自己愛的な精神状態の基礎にある誇大的で万能的な自己の状態という考え方は、やはり Freud (1914) の一次性ナルシシズムの概念に端を発するものと思われる。この着想は、Freud(1911)が、今日でいうところの統合失調症（パラノイア）の症例に関する精神分析的考察をおこなう中で提起したもので、性欲動との関連では同性愛欲求に対応するものである。リビドー発達理論の中では、欲動が無秩序なかたちで満たされている自体愛の段階から、まとまった形で対象に向けられる対象愛の段階に至るまでの中間的段階として、自分自身が愛情の対象となっている段階を指す(Freud, 1914)。また、リビドー経済論的観点からは、自我（自己）へのリビドー備給（保管）として定義されている（Stolorow & Lachmann, 1980）。

したがって、自己愛概念の整理を推し進めるにあたって、この一次性ナルシシズムをいかに位置づけるかは避けては通れない重要な課題となる。しかしながら、この一次性ナルシシズムへの評価に関しては、精神分析学理論の中でもいまだに統一的な見解には達していないものとされている（Laplanche & Pontalis, 1967）。中でも、Pulver (1970) は、この概念の使用に関して系統だった批判を展開している。Pulver (1970) は、今日の自己愛概念の使用が大幅に混乱していることを指摘し、その起源には Freud 自身によるこの概念の多義的な用法があることを示した。そのうえで、自己愛そのものを一つの心性としてではなく、記述的な現象として“自己への意識関心の集中”ととらえなおし使用することを提案したの

である。確かに Pulver(1970)の指摘の通り、自己愛的とみなされる特徴はかなり広範囲な心理現象に当てはまるものであると同時に、精神分析的なメタ・サイコロジー的観点からの定義も確立されていない。ただし、概念の多義的な使用そのものは必ずしも批判されるべきものではないし、Pulver の結論自体がこれまで自己愛概念に向けられてきた批判そのものを解決しているとも言い難い。むしろ、そのような多義的な使用や概念的な混乱がなぜ生じてきたかを明らかにすることが必要である。

一方で、自己愛的な心性、ないしは、一次性ナルシズムといった概念は通常の検討ではかなり理解が困難であると思われる。背景には、実際かなり多種多様な心的障害に自己愛的とみなせる特徴を見出しうるものが関係しているように思われる。これまでの研究では主なものだけでも、強迫性障害、ヒステリー、心気症、非行、嗜癖、対人恐怖症、摂食障害の背景に自己愛的な心理が関連することが指摘されている (Kernberg, 1975; Kohut, 1971, 1977; 岡野, 1998; Steiger, Jabalpurwala, Champagne, & Stotland, 1997)。しかも、それぞれの場合で自己愛的とされる特徴が異なっており、どのような理由でそれらの特徴が自己愛的と包括されるのかが必ずしも明確ではない。

また、通常自己愛的とみなされるような人であっても、自分自身ではそのような自覚が欠けていることが少なくないことも影響している。これらの特徴は、自己愛人格障害の患者たちにみられる特有の防衛機制として分割や乖離の機制がしばしば言及されていることに関連している。Kernberg(1975)は、境界例人格障害の原始的防衛機制としての分割について“衝動派生物は、十分に感情的にも観念的にも運動的にも感じ取られることにはなるが、それ以外の自覚的な精神的体験の区域からは完全に分離されている”ことを指摘しているが、同じ特徴は基本的に自己愛人格障害にも当てはまるものと考えられる (Kernberg, 1975, p.26, 引用者訳)。また、Kohut(1971, 1977)も、前述の誇大自己について垂直分割と水平分割という2つの原始的な防衛機制がみられることを論じており、いずれにおいても誇大な自己イメージは意識されにくいとしている。以上のように、自己愛的な人が自らそのように自覚していないという特徴は、自己愛的とみなしうる人々の境界線を曖昧化することに一役買っているものと考えられる。

以上のような問題が関連して、自己愛概念の定義を明確にすることはかなりの困難が伴うものと考えられる。それは、ある意味宙をつかむかのような作業となり、結局何らかの明確化をおこなおうとすると、前述のように先験的に、あるいは、ごく自然なものとして自己愛的欲求を定義せざるをえなくなるのではないかと思われる。しかしながら、これま

での発達心理学的知見は、乳幼児が生まれながらにして誇大的であるとか万能感を持っているとかいった仮説を必ずしも支持していないし、たとえそのような特徴が観察されてもかすかな兆候程度にすぎないものなのである (Mahler, Pine, & Bergman, 1975; Piaget, 1964)。

このような自己愛概念の定義に関する困難さを検討する中で、それらの問題に一定の解決をもたらすものとして、通常の心理学的概念に関する検討の枠組みを超えて、“見る者の視座を含めた検討”をおこなうことが有効であると考えられた。つまり、従来の心理学的な考察では、ある種の特性や心性は主にその人自身の内面的な構造的な機能に由来することが前提とされてきた。しかし、ここで言う“見る者の視座を含めた検討”は、ある特定の人を“自己愛的である”とみなす過程に、その人自身の内面的な特徴や傾向だけでなく、そのようにみなす側の受け取り方やとらえ方の問題も含めようとするものである。そして、そのような検討枠でとらえなおした場合、自己愛は“幼若な心性に対して、それに関わる者が成熟した‘自分（主体）’を前提におこなう解釈”と定義できるのではないかと考えられた。このように仮定することにより、これまで見てきた自己愛概念の利用に関するさまざまな困難が一定程度解決されうるものと予想されたのである。

以上のような検討枠は、近年の哲学的、心理学的パラダイムの中において広く社会構成主義と呼ばれる知見を参考としている。たとえば、Gergen(1999)は、社会構成主義的な考え方が 20 世紀初頭のソシュールによる一般言語学（記号論）、その後のフーコーによるイデオロギー批判（言説分析）やウィトゲンシュタインの論理哲学（言語ゲーム論）などのポストモダンの思潮から生じてきたものであり、その主な主張のひとつとして“記述や説明、そしてあらゆる表現の形式は、人々の関係から意味を与えられる”とのテーゼを挙げている (Gergen, 1999 東村訳, p.72)。社会構成主義は、物事を実体的、個人主義的にとらえる従来の観点を批判し、あらゆる現象を個別的な対人関係やより広い社会的文脈の相互作用の中で構成されるものと位置づける。前述の自己愛概念に関する“見る者の視座を含めた検討”も、自己愛概念の発生と使用に関して、社会的な関係性、とくに、治療場面を中心とする臨床実践場面での治療者と患者の関係性の役割を重視するものである。

また、そのような臨床場面における治療者と患者の相互作用を理解するうえで、森岡 (2002) による“ミメシス”論が有用であると思われる。森岡 (2002) は、治療者と患者間での臨床的聴取場面における関係性を“ミメシス”の概念でとらえうることを提唱している。このミメシスとは、アリストテレスが『詩学』の中でさまざまな叙事詩や悲劇、喜劇、音楽等の芸術表現の作用を意味するものとして用いたものであり、必ずしも定訳は

存在しないものの、模倣的再現、再現、描写等と訳されている。言葉や身体、楽器などのさまざまな媒体を通じて、観客や聴衆と一体になって普遍的な人間の生を再現する作用を抱合的に意味する概念であると理解される。森岡（2002）は、臨床的聴取場面において共感、投影、転移などの面接者—被面接者間における全般的なかかわりの中で、被面接者（あるいは面接者も含む）の潜在的な心的現実が再現され再構築される過程をミメシスの概念が最も適切な表現しうるものとしている。さらに、面接者と被面接者で構成される場面感覚をミメシスするものとして、身体的感覚と心理的体験とを結ぶ心身相関概念である“トーンズ（緊張）”の作用に着目している。そして、トーンズそのものは肯定的にも否定的にも作用する中立概念であるとしつつも、統合失調症を中心とする重篤な患者との間で治療者が体験するプレコックス感を例に引いて、トーンズが自己と関係の中における異質性の感受に反応するものであることにも言及している。以上の森岡（2002）による論考は、前述の自己愛の定義についての理解を深化させるものと思われる。つまり、成熟した心理を持つ人が幼若な心理に接して生じた際に生じるトーンズのひとつの方向性が、自己愛という理解枠を生み出すと考えられるのである。同じような転帰について、Freud(1911)は、当時の統合失調症患者に対する医師の一般的反応として描き出している。つまり、“臨床家として精神科医がこのような妄想形成 *Wahnbildung* に寄せる関心は、彼が妄想に支配された行動を確認し、患者の現実生活遂行に及ぼす妄想の影響を判定した暁には、消え去ってしまうのが普通である”としているように（Freud, 1911 小此木訳, p.289）、そのような患者に対して自己愛的と診断することは特有の反応を引き出すものである。ただ、従来精神分析の領域で自己愛的であると診断することは治療不可能とみなすことを意味していたように（Rosenfeld, 1987）、相互の関係性におけるこのようなトーンズの方向性は治療に役立つような共感的なものとはなりにくい。

以上のような構成過程をより具体的に示すものとして、以下では Handler と Hilsenroth（2006）による自己愛的人格障害の事例報告（Norton）を取り上げて検討したい。この事例に示される治療者—患者関係の展開が、前述した自己愛概念の構成過程を一定程度例示しうると考えるためである。事例の Norton 氏は、地域の精神科クリニックに訪れた 30 代のアメリカ人男性である。主訴は、“深刻な抑うつと意欲の欠如、人生を正しい筋道に戻りたいという望み”とされている。行動上の問題としては、軽度な違法行為と賭博癖が付加されている。しかし、ここまでのところ“自己愛的”とみなしうる情報は何ら含まれていない。彼がそのような診断を受ける経緯には、以下のことが主要な根拠になっているものと思わ

れる。

Norton氏は、治療の枠組みにしたがうことと料金を支払うことを拒否し、ぎりぎりになり予約をキャンセルするか、無断で欠席をするという行動を示した。くわえて、治療者からの支払いの請求に対してひどく憤慨した。さらに、Norton氏は、治療者が彼に即座の援助を提供しないことにも憤慨し、治療者が彼の（おそらく逸脱）行動を止めることを要求したのである。これらの特徴を受けて、報告は、“むしろ彼は、自分が非常に多くの大変深刻な問題を抱えていることにより、特別な配慮に値するものと感じていた”としている（Handler & Hilsenroth, 2006, p.244）。こののち、治療者の報告として、彼が誇大な態度を示したこと、容姿に過度の関心を示したこと、また、自分には芸術的才能と知性があり、他とは異なる特別な存在であると話したことなどが挙げられているが、いずれも部分的で補足的な情報に位置づけられているように見える。したがって、上記の引用部の所感が、彼の診断を確定する上で主要な位置にあったものと推測される。

以上の情報が、Mr.Nortonに関するもののほとんどすべてであって、実際にどのようなことが本人、ならびに、本人と治療者との間に生じていたのかは十分に知ることができない。ただ、その範囲内で推測するならば以下のような点が考えられる。つまり、記述に含まれる臨床場面でのNorton氏の行動は、具体的な出来事であるから事実であることには疑いがないであろう。それに対して、引用の“特別な配慮に値するものと感じていた”という個所は、彼の内面の解釈になっているため、治療者による推定が関与している可能性が高い。そこには、次のような治療者側の判断が介在しているものと思われる。つまり、料金の支払いや治療上の約束に従うことを拒み憤慨する行動に接して、治療者が行った“おそらく彼は、自分だけは特別に料金を支払わなくてもよい人間であり、治療の枠組みにも従う必要がない人間だと思って（望んで）いるようだ”という推測である。また、すぐに援助を与えてくれなかった治療者に対して不満と憤慨を述べる彼に接しては、“彼は、自分がいつでも援助が準備されているような特別な配慮に値する人間だと思っているようだ”と推測することである。もちろん、このような治療者による推定が必ずしも間違っているとは言えない。しかし、実際のところは、前者の行動（治療の枠組みを守らない）と後者の治療者による解釈（守らなくても良いと思っている）とは直接的に結びつくものではない。そこには彼の行動にもとづく治療者側の推定があって、はじめて引用部のNorton氏の内面の解釈が成立しているものと思われるのである。

このようにして、幼い心性の持ち主であるNorton氏に対し、成熟した立場にある治療者



が彼の行動から相手の内面を推測した時に、“自己愛的である”という判断を行うことになるのである。本節で取り扱っている自己愛に対する“見る者の視座を含めた定義”とは、このようにして関わる側と関わられる側の相互作用の中に自己愛概念を位置づけようとするものなのである。

### 第3項 自己愛概念に関する批判的考察②：フロイトの視座の展開に照らして

以上のような“見る者の視座を含む定義”は自己愛概念の理解の整理に寄与するものと考えられた。しかしながら、上記のような考察以上にこれらの問題を理論的に説明することには困難が感じられ、このような定義の妥当性を示すためには、実際にある人のことを自己愛的とみなした者の視座のあり様についての検討が不可欠であると思われた。通常、そのような検討に耐えうるものとしては、比較的長期にわたる治療者－患者関係に基づく事例検討をおいてほかには考えられない。ただ、残念ながら筆者にはそのような検討素材を準備することができていない。したがって、実際の臨床素材を用いてこれらの概念上の問題を検討することは現時点では不可能であると考えられた。

一方で、前述のとおり精神医学的、心理学的現象の理解に自己愛という概念を導入したのは Freud である。当然ながら、Freud は膨大な臨床事例に接する中である種の患者たちを自己愛的とみなすことに至ったものと考えられ、その意味では自己愛という判断を最初に構成した研究者であるといえる。したがって、“見るものの視座を含む定義”の妥当性を検討する前述の作業は、Freud の歴史的な視座の変遷と彼の自己愛概念の構成の過程をたどることで、一定程度代替的に可能であるものと考えられた。幸いにして Freud は、多種多様な論考の中で、比較的頻繁に理論的構築にあたっての自身の動機や迷い、困難さ等の個人的な感想について綴っている。したがって、それらをつぶさに検討することで、一定程度各論文執筆時の Freud の意図や彼を取り巻く状況を推定することが可能になると思われた。以下では、Freud の視座の変遷と自己愛概念の歴史的な変化をたどることで、上記の自己愛概念に関する定義の妥当性を検討する試みを行いたい。

Freud の視座は、長年にわたる精神分析学的研究の中でかなり大幅な変遷を示している（小此木, 1985）。もっとも初期の代表的な著作である“ヒステリー研究”（Freud, 1895）においては、かなり素朴な視座からヒステリー発生の規制について論じていることがうかがわれる。このことは、“エリザベート・フォン・R”と題された症例報告の末尾に付された“批判的総括”の中で、フロイト自身が、“まるで小説のように読むことができ、いわゆる科学としての真剣な印象を欠いているように見える点はわれながら奇妙な感じがする”と述べ

ていることにも示されている (Freud, 1895 懸田訳 1974, p.133)。その後執筆した“性欲論三篇” (Freud, 1905) において、Freud は、リビドー概念を導入するとともに、さまざまな性的倒錯と小児の性愛に関する緻密な検討を通じて、リビドー発達論の基礎的なモデルを提示している。その後、“ナルシシズム入門”においては、それまでのリビドー理論を改変して自我リビドーと対象リビドーの概念を導入するとともに、自我感情、自我理想、自己愛的対象選択など、主に自我に関する構造論を展開している。さらに、“トーテムとタブー” (Freud, 1913) においては、未開とされる人々にみられるトーテムの構造を詳細に検討し、その起源にエディプス・コンプレックスを位置づける考察をおこなっている。さらに、トーテムだけでなく、広く今日の文明社会の宗教、文化、道徳をも、エディプス・コンプレックスの支配に発するトーテムの名残として考察するという、大規模な試みに取り組んでいる。以上のように、Freud の視座は、初期にみられた比較的素朴なものから、リビドー理論を中核にすえて、性的倒錯、精神神経症、心理発達、性格傾向、ならびに、文化や社会までも広くとらえようとする一般的な視座へと拡大していったことが推察される。

また、後期の研究になると、いわゆるメタ・サイコロジーと呼ばれるより抽象的な理論展開へと志向していく。つまり、“本能とその運命” (1915a) において、神経生理学的な仮説に基づいて、本能刺激に対する緊張の低下を快とし、緊張の増大を不快とする快・不快原則を整理するとともに、本能の変遷について主体 (自我) - 対象 (外界)、快 - 不快、能動 - 受身の 3 つの対極性においてとらえる視座を提示している。また、同じ年に書かれた“無意識について” (1915b) においては、Freud は、無意識という概念の記述的な意味と体系的な意味を区別することを論じ、無意識を体系的な観点からとられるものとして局所論的見解を提示している。そして、無意識的な表象形成の過程を心的エネルギーの経済論的観点で説明するとともに、従来からのリビドーに関する力動論的観点をも踏まえて、以上の 3 つの観点を“メタ・サイコロジー的な叙述”と呼ぶことを提唱している。さらに、その後、“快感原則の彼岸” (1920) においては、それまでの自我リビドーと対象リビドーの本能論が、“自我または死の本能”と“性または生の本能”へと更新されるとともに、“自我とエス” (1923) において、知覚 - 意識体系、前意識体系、自我、エス、超自我から構成される最終的な局所構造論へと至っている。以上のような Freud の視座の変遷はかなり複雑で大規模なものではあるが、おおむね相対的、抽象的で体系化された方向性へと進展していったものと推定される。

以上の Freud の全般的な視座の変遷の中であって、1914 年に自己愛の概念を本格的に取り扱った“ナルシシズム入門”が公表される。この論文の内容は、基本的には“シュレーバー・ケース”として広く知られる“自伝的に記述されたパラノイア（早発性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察”（1911）において示されていた着想を整理発展したものである。つまり、発達段階としての自己愛については、発達原初にあたる“一次的な正常なナルシシズム”と、精神病症状にみられる外界からのリビドーの撤退による“二次的な”自己愛とが明確に区別される。さらに、パラノイアの発症原因に位置づけられていた同性愛願望<sup>注1</sup>は、正常者にみられる対象選択の一類型としての“ナルシシズム型”に拡充され、また、“シュレーバー・ケース”において同性愛的願望の友情、団結心、公共心への昇華として論じられていた経過は自我理想の形成として整理される。以上の中で、本稿の課題にとって特に重要なのが一次性ナルシシズムについての記載である。そこでは、“自我にふりあてられた根源的なリビドーの割り当て”としての自我における“リビドーの格納”という考え方が提示されるとともに、“ナルシシズムを形成するためには、自体愛になにかほかのものが、つまりひとつの新しい心的作用がつけ加わらなければならない”としているのである（Freud, 1914 懸田・吉村訳, p.112）。ここで述べられている“ひとつの新しい心的作用”こそ、自体愛と自己愛を区別する要点であり、自己愛概念の成立の根拠となるものと考えられる。したがって、そのような心的作用がいかに説明されるかが重要な論点となるといえる。

以上のような点を考察するにあたって、前述の Freud の全般的な視座の変遷に照らしてこの“ナルシシズム入門”の位置を再度確認しておく必要がある。ストレイチー（北山監訳, 2005, 所収）によると、この論文の原題の直訳は“ナルシシズムという概念の導入について”とする方が妥当なものであり、ここでの導入とは精神分析学に向けての自己愛概念の導入のことを意味しているとのことである。つまり、この論文において Freud は、それまで断片的に言及してきた自己愛に関する諸考察を精神分析理論全体の中に位置づけるべく意図しているのである。したがって、ここでいう“入門”とは、すでに完成された理論を読者に向けてわかりやすく解説した意味での入門なのではなく、精神分析学に対するこの新しい概念の導入の試みとしての“入門”とみなすのがふさわしいと考えられる。

そして、Freud (1914) は、本文の中でこの主題に取り組むに至った経緯を弁明して、“その（リビドー理論が統合失調症の解明に挫折したという批判）ために私は、できるならしないですませたかった最近のいくつかの詳論を行わざるをえなくさせられたのである”と

---

注1 この場合の同性愛願望は精神分析学理論の枠内でのものであり、必ずしも現実の同性愛傾向や同性愛志向と同一のものではない。

述べている通り (Freud, 1914 懸田・吉村訳 1969, p.115 括弧内引用者), その背景にはリビドー理論に対する批判といういわば外圧に対抗する意図があったものと考えられる。おそらく本来的に Freud の意図としては, 臨床素材のより十分な吟味検討の上でこの課題に取り組みたかったものと推察される (“私はむしろ, シュレーバー (Schreber) の症例を分析したさいにたどった道を, その諸前提に関しては沈黙をまもったままで, 最後まで歩いていきたいと思っていた”, Freud, 1914 懸田・吉村訳 1969, p.115)。そのために, やや早急にこの課題に取り組まざるを得なかったものと考えられ, 本文中で何度も自己愛の概念を取り扱うことの困難さに言及する結果となったと思われる (“ナルシズムを直接に研究することにはこれを妨げるいくつかの特別な困難があるように思われる。”, Freud, 1914 懸田・吉村訳 1969, p.116)。以上のように見れば, この“ナルシズム入門”は, 統合失調症に関するそれまでの考察を初めてまとめたかたちで整理しようとしたものであり, その中で Freud 自身もやや時期尚早なところを感じ取っていたのではないかと思われる。

以上のことに加えて, Freud が“ナルシズム入門”の中で自我に関する考察に取り組もうと意図していたことも, この論文の位置づけを理解するうえで重要である。このことは, 本論文自体では触れられていないものの, 晩年の著作“文化への不満” (Freud, 1930) のなかで言及されている (“けれども, われわれの研究が抑圧されるものから抑圧するものへ, 対象欲動から自我へと進んでいった時, 決定的な役割を演じたのは, ナルシズムの概念が導入されたこと (以下略)”, Freud, 1930 浜川訳 1969, p.474)。確かに, ナルシズムとの関連においてなされている自我に関する詳細な論考, とくに, リビドーの貯蔵庫としての自我, 自我感情, 自我理想, (後の自己愛的同一性の議論につながる) 自己愛的対象選択は, 後年に展開される自我に関する理論的展開の端緒となるものばかりである。その意味では, Freud は自我の起源や発生, 発達に主な関心を持ちつつ本論を展開したことが予想されるのである。

以上のようにみてくると, “ナルシズム入門”執筆時の Freud を取り巻く状況や意図として以下の2点が推定されるものと思われる。つまり, 第一に, 精神分析に対する批判等の外圧もあり, 統合失調症 (パラノイア) の心理に関する精神分析学的理解を早めに推し進めようとした意図があったこと, ならびに, その際に自我に関する理論的展開に関心が向いていたことである。統合失調症 (パラノイア) の心理は, 一般に人間の原初的な心の性質により構成されているものであり, それは発達的にみればより幼若な心理の現れと位置づけることができるものと考えられている。このことはおもに記述的現象学的精神医学の考

察により示唆されている(Alietti,1957)。また、Freud 自身も人の心の病の原因をその人生の早期にたどる発生論的観点に立って、重篤な統合失調症を精神神経症の患者が固着するエディプス期より以前の発達初期の段階に起因するものとしている。以上のことと、上記の“ナルシシズム入門”に関わる 2 点の Freud を取り巻く状況や意図を併せて考慮すると、本節で提起している自己愛の“見る者の視座も含めた定義”，つまり，“幼若な心性に対して，それに関わる者が成熟した‘自分（主体）’を前提におこなう解釈”を一定程度支持するものと考えられる。つまり、Freud (1914) は、統合失調症（パラノイア）患者が示す幼若な心理を“自我”を重視する視座から解明しようとして、精神分析学全体の中に自己愛の概念を導入しようとしたものとみなすことができるのである。そのようなかたちで、原初的な体験様式に主体（自我）の働きを前提として見ることにより、自己愛の概念を構成したものと推定されるのである。

前述のとおり、Freud は、それぞれの発表論文の中で比較的頻繁に執筆にあたっての意図や当時の状況を示唆する言明をおこなっているものの、もちろんいずれも部分的で限定的な範囲にとどまるものである。そのため、Freud の当時の視座についてもある程度推定できる程度にしか知ることはできない。したがって、上記の支持も憶測の範囲にとどまらざるを得ないものと思われる。ただし、当然ながら Freud の視座は、自己愛とそれに関連する事象に関する考察の内容や変遷に影響を及ぼしている。したがって、そのような概念上の変遷をたどることにより、同様の点を検討することがここでも可能となると考えられる。以下では、その主なものとして同性愛に関する考察と“ナルシシズム入門”以降の自己愛概念の変遷を取り上げる。

同性愛は、シュレーバー・ケースにおける最重要主題であり、以下のように説明されている。つまり、自己愛的な段階では、愛情の対象は自己の身体、なかでも自己の性器が中心的な役割をになう。このことは、自分のそれと類似した性器をもつ対象の選択に結びつく。この同性愛的対象選択は、後々には異性愛的な対象選択に取って代わられるものではあるけれども、基本的には成人の精神生活の中においても残存していく。なかでも、成人の同性愛的願望は、この初期の自己愛的な対象選択がそのまま優勢であることに基づいて生じると解釈されるのである。

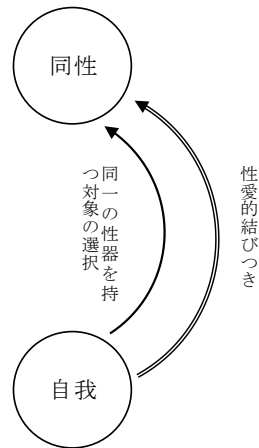
一方で、同性愛に関する精神分析的解釈は、わずか一年前に公開された論文“レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出” (Freud, 1910) のなかにもみられる。ここで、Freud は、歴史的な資料の中からダ・ヴィンチに潜在的な同性愛的傾向をみいだす考察に取り組

んでいるのであるが、その中で同性愛的願望の展開は以下のように論じられる。つまり、早期に母に対する非常に強い性愛的な結びつきを経験した場合、その母との結びつきは抑圧されつつも維持されて、そのために情愛を新たな異性対象に向けかえることに困難が生じる。その際、時として次のようにして性愛的欲求が実現される。つまり、“子供は自分自身を母の位置におき、母と一体化し、彼自身を手本にして、その手本に似た者から新しい愛の対象を選ぶ”というものである (Freud, 1910 高橋訳 1969, p.118)。成人になって同性愛を示す者は、母親との強い情愛的結合を、母の位置に自分が立ち、自分の位置に自分に似た同性の対象を置くことによって、同性愛として反復しながら維持するものとみなされている。

以上の同性愛に関する解釈は、いずれも単独でみれば筋が通っているように思われる。しかしながら、それをそのままうけとめると、Freud がほぼ同時期に同じ主題について二つの解釈を示したことになる。もちろんある種の現象についていくつもの解釈があること自体に問題はなく、この時期に Freud が 2 種類の同性愛モデルを構想していた可能性も十分に考えられる。ただし、もしそうであれば、同時期に示された同主題にかかわる理論の相互関係について、Freud による何らかの言及があってもよいと思われるのであるが、筆者の確認したかぎりでは、Freud の著作の中にはそのような個所は発見できなかった。また、それだけでなく、“ナルシズム入門”以降の後期の著作の中では、シュレーバーにみられる同性愛解釈についてはほとんど言及がなく、ダ・ヴィンチの同性愛解釈が主要な発生過程として繰り返し登場することになるのである。

その意味で、このような 2 つの同性愛に関する解釈について、フロイトの視座の影響を考慮に入れて理解することもひとつの方法であると思われる。その場合、以下のように考えられる。つまり、まずダ・ヴィンチの同性愛解釈においては、母親、すなわち、対象の役割が重視されている。そこでは、男児の自我は、初期の母親との強い性愛的な結びつきを維持するために、母親に性的リビドーを差し向ける。ただし、この強い性愛的結びつきは抑圧されるためにそのまま実現することはないが、一方で、母親 (= 身体, 性器) と自分自身を一体化させて、同時に、自我の役割を新たに獲得された同性の対象に譲り渡すことによって同性愛的願望を定着させる。以上の解釈では、母親という対象の働きが特に重視されていることがわかる。一方で、同じ構造について、自我の方に重点を置いて、つまり、対象の働きを省略して記述することも可能である。その際には、一体化した対象 (母親) に性的リビドーが差し向けられた状態は、性的リビドーが自然発生的に自己から発し

シュレーバーの同性愛解釈



ダ・ヴィンチの同性愛解釈

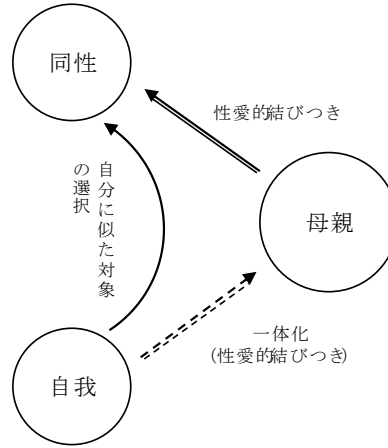


Figure 3-1-1 シュレーバーとダ・ヴィンチの同性愛の構造

注)ダ・ヴィンチの同性愛解釈“母親”の項を削除し、代わりに“自我”をそこに移動させるとシュレーバーの同性愛構造になる。

て自己（の身体と性器）に向かうようなものとして、自己自身に向けられた性的欲求を自らで満たすような閉じられた状態としてみえてくる。それと同時に、前述の自我の役割を新たな同性の対象に譲るという関係は、同一の身体（と性器）をもつ対象を選択する働きに読み替えることができるのである。つまり、ダ・ヴィンチの解釈において母親対象を含み、自我と新しい同性の対象とを含む関係は、そこから母親対象とそれに関わる情愛的関係を見捨てるようにしてながめてみると、ちょうどシュレーバーにおける同性愛解釈で示されたものと同様にみることが可能なのである（Figure 3-1-1）。

以上のように考えると、ここで論じられている2つの同性愛解釈は、個々別々のものではなく、フロイトの視座の推移によって同一の出来事が二様に解釈されたものと推定できる。つまり、ダ・ヴィンチの同性愛解釈は、対象である母親の役割を重視する視座に立って同性愛の体験構造を解釈したものであり、シュレーバーの同性愛解釈は、自我の役割を重視する視座に立って同じ体験構造を描きだそうとしたものと理解できる。そして、シュレーバー型の同性愛解釈がおおむね“シュレーバー・ケース”と“ナルシズム入門”の中にしか登場せず、それ以後の論考の中ではダ・ヴィンチ型の同性愛解釈が繰り返し登場することを考慮すると、以上の同性愛解釈の違いは、一次的なナルシズムの着想を得た時期に、Freudの視座が自我（主体）を重視する位置にあったことを傍証することになると考えられるのである。

一方、“ナルシズム入門”以降、Freudの一次性ナルシズムに関する見解は徐々に変化していったように見られる（Laplanche & Pontalis, 1967）。その背景には、Freudの視座が徐々に自我から対象を重視する方向に変遷していくことが関連しているように思われ

る。実際、Freud は、これ以降の主要な論文において、対象との同一化の起源を発達早期にまで位置づける考察を行っている。3年後に執筆された“悲哀とメランコリー”ですでにその影響が見受けられる。Freud(1917)は、正常な悲哀と病的なメランコリーを比較検討する中で、悲哀では対象の喪失として体験されるものが、メランコリーでは自我の喪失となっている矛盾点を取り上げ、そこでみられる自責の表明が、本来は失われた対象に向けられる攻撃の自我への転嫁であるとの解釈にいたる。そして、このような体験の成立を可能とする働きとして“自己愛的同一化”過程を提示する。そこでは、何らかの事情により対象に充当されていたリビドーが撤退させられるが、そのリビドーは他の対象に向けかえられることなく対象と自我の同一化にもちいられるのである。このように、“ナルシズム入門”においては、対象から自我へと撤退したリビドーは対象の性質とは全く関係のないものであったが（“彼（パラフレニアの患者）は自己のリビドーを外界の人間や事物から実際に撤退してしまい、これらのものを空想の中で他の者によって補充することはないように思われる”, Freud, 1914 懸田・吉村訳 1969, p.110, 括弧内引用者）、そこに対象の性質が添付されることとなっている。このような自己愛概念の使用の変化には、発達早期における対象の役割の重視が関連している。本論で Freud(1917)は、対象との同一化の起源を発達早期に位置づける考察を行っている（“同一視は対象選択の前の段階であって、自我が対象を選び出す最初の方式—両立的な表れをする—である”, Freud, 1917 井村訳 1970, p.142）。

以上の点を補足するために、ほぼ同時期（1916年から1917年）に執筆された“精神分析入門”を参考とすることができる。自己愛について一章（第26講、リビドー論とナルシズム）が割り当てられて、ここまでで取り上げてきた論点が広く言及されているが、その中で、Freud は、リビドー理論の発展と自己愛の着想を概略した後に、自己愛の一般性と発達の起源について述べる中で、“多くの性の欲動は、はじめは自己の身体によって、われわれの言葉でいえば自体愛的に満足せしめられるものであるもの”であり、“自体愛はリビドー処理のナルシズム的段階における性的活動”であると述べているのである（Freud, 1916-1917, 懸田・高橋訳 1971, p.342）。ここでは、その前後の論旨の流れからいっても、一般にみられる自己愛的な心性が自体愛の性的活動に対応するような記述となっており、特に後半の引用は、それまで個別の発達段階と位置づけられてきた自体愛段階と自己愛段階を同等とみなすような表現になっている。このようにみれば、この時期の Freud の論考の中で、自体愛と自己愛の区別が重視されなくなっている節をうかがい知れる。

以上のような変化がよりはっきりと示されるのが、後年に記載された“集団心理学と自我



の分析”である (Freud, 1921)。Freud は、ル・ボンの“群集心理学”に対する詳細な検討と批判的な考察を経て、集団形成と指導者の役割をリビドー理論により解明しうる可能性を提示している。集団内における指導者を含む強い一体感の体験を成員間の同一化と自我理想としての指導者の役割に起因するものとして、集団の形成過程を“同一の対象を自我理想とし、その結果お互いの自我を同一視しあう個人の集まりである”と公式化している (Freud, 1921 小此木訳 1970, p.231)。そして、そのことを踏まえて、集団心理から得られた対象との“二重の結合様式—同一視と対象を自我理想のかわりに置くこと—への還元”に示されるような“このような一段階を自我について仮定する試み”に取り込まれる。ここには、自我形成における対象の役割を探求しようとするフロイトの本来の意図を読み解くことができる。

Freud (1921) は、この“集団心理学と自我の分析”の中で、同一化の働きを発達の原初的段階にまでさかのぼる考察を行っている。つまり、同一化は、“他人にたいする感情結合のもっとも初期の現れ”であり、“対象にたいする感情結合の根源的な形式”であるとされる。また、対象備給との対比において、たとえば男児の場合には、同一化は、“父親を理想にする”ことであり、性的な意味合いを本来的には含んではおらず、“父親（そしてまた男性一般）に対する受け身的な、あるいは女性的な態度とは何の関係もなく、すぐれて男性的なものである”とされる。そして、対象備給の働きと合わせて初期の対象との結びつきは、“母親に対する自然な性的な対象備給と、父親に対する典型的な同一視”としてまとめられる (Freud, 1921 小此木訳 1970, p.222)。

このようにして対象との同一化が重視されるようになる半面、自己愛については自我理想に関する考察の中で、“それ（自我理想）は、小児の自我が自己満足を得ている根源的な自己愛の継承者であることもすでに述べた” (Freud, 1921 小此木訳, p.226) とされるとともに、躁病の機制を論じる箇所では、“われわれは、出生とともに絶対的な自己満足にまどろむ自己愛から、変転する外界の知覚へと進み、対象の発見がはじまり... (略)”という記述がみられる。これらはともに、自己愛の発達段階における原初的な性質を強調していると同時に、自己愛と自体愛をほとんど同じものとみなすかのような表現になっており、両者の区別が重要性を失いつつあることが推測される。このことは、“ナルシズム入門”において言及されていた“ひとつの新しい心的作用”が一次的な自己愛について重視されなくなったことを意味している。ただ、それでは、この自我形成の起点になる“ひとつの新しい心的作用”がフロイトの視座から完全になくなってしまったのかといえ、そうではないと

思われる。それはむしろ、人生早期にはじまる対象との同一化の過程を経て徐々に形作られるものと位置づけなおされているのである（“同一視が、‘手本’Vorbild とみなされた他我に似せて自我を形成しようと努力していることだけはたしかである”，Freud, 1921 小此木訳 1970, p.223）。

以上のように，“ナルシシズム入門”以降，Freud の視座が自我から対象へと移行していくにつれて，一次性ナルシシズムの明確な区別が重視されなくなっている。このことは，逆に一次性ナルシシズムの着想が自我に重点を置く視座から得られたものであることを示唆しているものと思われる。そういった意味では，本稿で取り扱っている自己愛の“見る者の視座を含めた定義”を支持しているように思われる。つまり，統合失調症（パラノイア）における幼弱な心性に対して自我，すなわち，“自分（主体・自我）”を前提にみることにより，万能感や誇大感，全能感を患者自身が思ったり考えたりしているものと解釈したことが，自己愛の発達段階の着想に結びつたものと推定されるのである。

## 第2節 原体験理論から見た青年期の心理発達，ならびに，対人恐怖傾向と自己愛傾向

### 第1項 原体験の概念とその法則，ならびに，性質

前節でみてきたように，第2章までの自己への意識関心の観点から見た研究成果を踏まえると，つぎに対人恐怖傾向と自己愛傾向の対人関係上の問題に目を向ける必要性が示唆された。そして，その点に関する先行知見によると，対人恐怖傾向，自己愛傾向ともに否定的な対人関係の体験がみられることが推測されるとともに，なぜそのような否定的な他者認知が生じるのかといった問題意識が得られた。くわえて，自己の二重構造の発生要因としての誇大自己，ならびに，自己愛について考察を行い，その結果として，それらが“幼若な心理に対して成熟した自分(主体)を前提におこなう解釈”と定義しうることを論じた。後者の考察は，誇大自己の背景に発達的に初期の幼若な心理が潜んでいることを示唆しており，対人恐怖傾向と自己愛傾向のさらなる探究には，そのような発達初期の心理状態を考慮することを要請するものである。以上のように，これまでの考察では，否定的な他者認知を解明すること，ならびに，発達初期の心理状態を考慮する必要があることの2点が問題意識として得られたといえる。

以上のような問題提起に回答を与えるものとして，本研究では辻（1997, 2003, 2008）による“原体験理論”を取り上げたい。辻（1997, 2003, 2008）は，精神科医としての長期にわたる統合失調症を中心とする治療体験とロールシャッハ検査法の解釈ワークを経て，患者たちの原初的な心の状態を人間の母体内での胎内体験に比定することで了解できるという視座に至り，それを“原体験”と呼んだ。<sup>注1</sup>かつての精神医学，ならびに，臨床心理学の中で統合失調症の患者たちは了解不能であるとされ，かつ，患者自身もその病的体験に圧倒される中で自分自身が人間同士の結びつきから外れてしまったという“脱落体験”に追い込まれることが多く，当事者，ならびに，関係者ともに人間的なつながりを見失う傾向にあった（辻, 1981）。それに対して，統合失調症の患者を正常発達的一段階に位置付ける原体験の視座は，そのような人間的結びつきを取り戻すことであり，いわば，“ここを病むことで人間であることから外れる”といった体験の仕方から，“人間であるからこそここを病む”という視座へと転換をもたらすものである。

---

注1 “比定する”とは，通常実体的にとらえることができない物事について，それと類似する既知のものに対応させてとらえることを一般的に意味するが，考古学の中で歴史的な国や墳墓等をさまざまな資料からある場所や地域に位置づけ考究することの意味で用いられることが多いようである。ここでもそのような使用方法になぞらえて，人間のかつての心の営みを胎内という場に位置づけて考察するという意味で用いられているものと思われる。

そのよう原体験理論では、人間の原初的体験は以下のように理解される。出生以前の胎内体験である原体験世界は、外的現実にはいまだ接しておらずいわば思っているだけといえるような未分化な状態にある。“まだ現実と出会っていない原体験世界では、「見分ける」「区別する」ということは問題になっていない、いかえるとすべてが合体的に体験されているはずである”（辻, 2003, p.27）。胎内の空間は、胎児にとって受け皿として働いているが、その空間もそこでの体験もせいぜいわずかに感じられるだけであっていずれも気づきの対象にはなっていない。本来的には、胎児といえども身体的な成熟が整ってくると、後々には内面的とされるような胎児の内側での体験が生じているはずであるが、当然そのような区別はいまだ全くないに等しく、そのことも含めてすべてが胎内での空間と一体として体験されている。のちに形成される現実に対する諸種の認識や知的な理解はもちろんのこと、比較的後間もないころから始まる感覚や反射を介した外界との交流に基づく記憶や反応もまだ全く身についていらず、いわば白紙のような精神状態にあると推測される。ただ、たとえば泣くことに代表されるように、その後の精神的な営みに結びつくような心理的な作用が生後間もないころから生じることを考慮すると、この原体験の状態においてもすでに何らかの心の営みは生じていたと考える方が自然である。その意味では、全くの白紙というわけではなく、最も原初的といえる原体験にも一定の法則性や機能が存在していることになる。

辻(2003, 2008)は、そのような原体験の主導原理として“なじみの原則”と“ポジティブ・ネガティブの原則”を見出している。のちに取り上げるように、原体験は直接的な性質を持つ体験であり、この直接的な体験においては体験の間接化もそこからの検討考察も生じえず、通常成熟した精神の持ち主がよりどころとする現実原則や合理性に基づく意義や区別は問題とならない。直接的な体験の主導する中では、第一に“すでに体験している・いない”によって体験の意味や意義が決定されることになり、“その実感自身がすでに存在した実感になり、その有無は理屈抜きでの存在の決定的な保証の有無になる”（辻, 2003, p.48）。このようにして、“それまでの状況の持続へのよりかかり傾向”としてのなじみの原則が原体験世界を主導する一つの原理となる。もうひとつは、Freud が現実原則に対して快・不快の原則として定式化したものに相当し、“好ましいとでも表現すべきポジティブな性質の体験は、求め・近づいて一体化しようとし、好ましくないネガティブな体験は、遠ざけ・排斥するか、遠ざかろうとする”という原理である。この“ポジティブ・ネガティブの原則”も直接的な体験が支配する原体験世界において、本人が自覚しているかどうかは別としても、

それぞれの体験の意義を決定し反応を引き起こす役割を担うものと考えられる。

生れ出て以降人は成熟への道を歩いていくが、辻（2003, 2008）の原体験理論では、そのような発達の中でも上記の原体験の原則が背景的に働いていると考えている。前述のような胎内体験から出生にともない体外に出ると、間もなく乳児は授乳や排せつの世話などを中心に母親との関係に入ることになり、この母親が最初のポジティブなものもネガティブなものも含めた自己の体験の受け皿となる。そして、その後、知覚や認知機能が進展し活動領域が拡大するにしたがって、自分がかかわる空間としては、自分の部屋から家、学校、地域、社会、国、世界へとなじみの原則とポジティブ・ネガティブの原則を基底とした体験の受け皿が拡大していくことになる。また、自分の関わる対象としては、前述の母親から、父親、祖父母、兄弟といった身近な家族、地域や学校の友達、先生、配偶者、会社の同僚などが、それぞれの発達段階に応じて体験の受け皿としての機能を担っていく。このようにして、それぞれの成熟と発達の段階において、慣れ親しんだものとそうでないものといったなじみの原則、また、ポジティブな体験には近づきネガティブな体験は避けるといったポジティブ・ネガティブの原則を下敷きに、人間は、その都度その都度の受け皿となる空間や対象との関係を中心に、現実との接触を活発化させていくと考えられる。

一方で、原体験の性質は以上のものに限られるわけではない。最も原初的な体験の中に

Table3-2-1

未成熟と成熟との対比(辻, 2008, p. 42 より転載)

未成熟（原体験）側		成熟側
思っているだけの内的世界	⇔	外界現実との関係を心得て、重視する
見えている存在のみ	⇔	見えない実在（こころ）にも気づく
直接的な体験	⇔	間接化が参加して全体を管理・統制する
融合・合一的な世界	⇔	区別を知り、自分が独立していることを心得る
受け身の世界	⇔	能動・主体性へ
述語が支配し、主導する	⇔	主語が支配し主導する
葛藤を忌避し、排除する	⇔	葛藤を内包する

においては前述の2つの原則が作用するのみのほぼ未分化な体験世界が想定されるが、そこからさまざまな方向への精神的な発達が生じてくるにしたがって、その成熟との対比において原体験はさまざまな性質を帯びることになると考えられている。この点について、辻(2008)は、Table 3-2-1に示すような7つの軸として原体験の性質を示している。ここで“思っているだけの内面世界”とは、まだ外的現実を知らない原体験においては内面において思っていることがすべてであり、後々思い通りにならない外的現実の重要性を知るという成熟した体験との対比では、“思いどおりになる”と表現できるような体験になっていることを指す。また、“直接的な体験”とは、その時その場での体験がすべてという性質の体験であり、“それだけ”、“それがすべて”と表現できるような体験の性質を指す。人間の情動、衝動、欲求が直接的な性質を持つ体験の代表的なものであり、それらはもともと原体験由来の体験に位置づけられる。“融合・合一的な世界”とは、前段まで論じてきた原体験の代表的な特質であり、物事の区別や自覚の重要性を心得る方向性に成熟が進むと、それに対比して、原体験は未分化で未自覚といった性質を担うこととなる。“受け身の世界”とは、原体験は受け身なままで必要なものが与えられる体験世界であり、成熟に伴って能動的な姿勢が求められることになる。“述語が支配し、主導する”とは、人間は原初的には“自分が何ものとして存在しているのかが問題になる以前に、先だつてすでに成立しており、まずどのようなか、つまり述語・状況性が支配し、主導する”状態にあると考えられる(辻, 2003, p.45)。前述のなじみの法則でみてきたように、原体験はその都度その都度に成立する状況の方に反応する傾向があるといえる。また、外的現実に出会う以前の原体験世界は、内面的な葛藤やもつれの体験を知らない体験世界であって、基本的になじみのないネガティブな体験として“葛藤を忌避し、排除する”方向に向かいやすい。最後に、これはもう少し成熟した段階での話となるが、幼少児は、基本的に目に見えるわかりやすい体験に夢中になる“見えている存在のみ”ともいえるかのような発達段階を経過するが、やがてころや自分自身などの目に見えない体験の重要性に気づいていくと考えられる。以上のように、原体験はそれぞれの精神的な成熟過程との対比において、さまざまな性質を示すことになると考えられている。

## 第2項 原体験からの成熟の過程

辻(2003, 2008)によると、おもに上に示した7つの軸にそつて人間の心理は発達していき、それに応じて原体験はその発達との対比において前述のような性質を示すようになる。その中でももっとも総合的で重要なものと考えられるのが、“融合・合一的な世界”から“区

別を知り、自分が独立していることを心得る”という軸である。この軸は、前述した人間の原初的な心の働きを出生以前の胎内体験に比定することができるという原体験の視座に最も関連する融合・合一的な体験の状態から、“見分けと区別”が成立していく過程と整理することができる。“人間の成長は、見分けの旅といってもいいほどで、「区別する」「見分ける」ということは重要な位置を占めている”のである（辻, 2008, p.28）。

ここでの見分け区別するという事は、第一に外的世界を見分け区別してとらえるということにある。そこには、もちろん外的な事物を区別してとらえることも含まれるが、とくに外界の他者を区別してとらえるということが重要となってくる。外的な他者を区別することは、それぞれが分離した身体を持つ独立主体であることを認知することを意味しており、特に母親的对象をそのように分離してとらえることが乳幼児の発達過程で重要な画期を形成することがこれまで報告されてきた(Mahler, Pine, & Bergman, 1975/1981)。また、一方で、この見分け区別することについては、対象の問題だけでなく体験の質の区別も重要となってくる。感情や思いなどの内面主観的体験と、実際に目に見える外的現実体験、あるいは、論理的思考や合理的判断の知的営為の体験など、それぞれの体験に応じた質の違いを区別することも重要となってくる。また、このことと関連して、前項で確認したように、最も原初的な体験においてもなじみの原則とポジティブ・ネガティブの原則に示されるように何らかの区別が働いている。しかしながら、成熟した成人にとって最も重要なのは、合理性や論理性に基づく見分けと区別であり、それを下支えする抽象的な検討力や認識力が重要になると考えられる。以上のような見分けと区別の発達が統合される形で、成人期以降の自立した社会生活にとって重要な自分自身に対する見分けと区別の定着、すなわち“自覚”が形成されてくるものと考えられる。

以上のように、原体験からの成熟の過程は、これまで見てきたような見分けと区別の広がり過程であり、そのことが自分の見分けと区別につながっていくものと整理できる。これらの点を踏まえて、Figure 3-2-1 に示す成熟と未成熟の対比の成熟側の特徴をおさえていくと、ほとんどの軸がこのことに関連していることが理解される。つまり、“思っているだけの内的世界”から“外界現実との関係を心得て、重視する”の軸について言えば、前述のとおり外的事物、ならびに、外的対象を重視することは、それらを見分け区別することに直結するものであり、しかも、そのことが自分の見分けと区別を準備するものでもある。また、“直接的な体験”から“間接化が参加して全体を管理・統制する”の軸について言えば、“それがすべて、それだけ”と表現できる直接的な体験だけでは見分けや区別が生じるはず

はなく、そのためには体験を間接化して捉え直す営みが必須となると考えられる。“受け身の世界”から“能動・主体性へ”の軸について言えば、受け身の体験のままでは十分な区別や見分けが不可能で、物事を正確に区別し見分けるためには能動的な姿勢を欠くことはできない。さらに、“述語が支配し、主導する”から“主語が支配し主導する”への軸は、対象と自分の区別と見分け、すなわち、独立性の認識が身についてこそ可能となるものである。以上のように見てくると、見分けと区別の成立、とくに自分自身へのそれは、それぞれの原体験の性質の多くの面に関して、未成熟側から成熟側へと進むことが求められる体験であることが理解される。

以上の検討は、原体験から見分けと区別に至る過程の重要な側面を明らかにするものと思われる。Table 3-2-1 に示した未成熟（原体験）側と成熟型の関係は、前者に対して後者は性質の異なるものとなっており、そこに“葛藤”や“内面的なもつれ”の感覚が生じる関係になっている。たとえば“思っているだけの内的体験”の軸を見てみると、思っているだけの内的体験においては前述したように“思い通りになる”とでも表現できるような体験であり、個人の都合では一般に動かしがたい外的現実に接することは大きな葛藤をもたらすものといえる。あるいは、“直接的な体験”の軸について言えば、“それがすべて、それだけ”というシンプルな直接的体験に対し、それから距離を取って検討し統制することはそれだけ体験の複雑さが増すことになり、ここにも葛藤やもつれの感情が生じる。“受け身の世界”の軸について言えば、受け身な体験は基本的に安楽であるのに、能動・主体的な姿勢に立つには面倒さが伴う。このように見てくると、それぞれの軸において、未成熟側から成熟側への展開には葛藤や内面的なもつれが生じることが理解される。さらに、ここで問題にしている見分けと区別の過程、とくに、自分の見分けと区別についてはこれらの軸のほとんどの面での発達に関係するのであるから、このことは自分の見分けと区別を体験することが大幅な葛藤体験となることを示唆していると考えられる。そして、原体験の性質の一つとして示されている“葛藤を忌避、排除する”から“葛藤を内包する”の軸への発達がこの点においては決定的に重要となり、この時点で体験される幅広い葛藤体験を自分の中におさめ耐える力の発達があって、はじめて自分自身への見分けと区別、ひいては自立した社会生活に必要な自覚が獲得されることになると総合的には理解されるのである。

### 第3項 原体験理論から見た青年期の発達

本稿の第1章において、先行研究に基づいて青年期の自己と対人関係の発達について概観してきた。そして、青年期の自己の発達については、それ以前の児童期の特徴と比較し



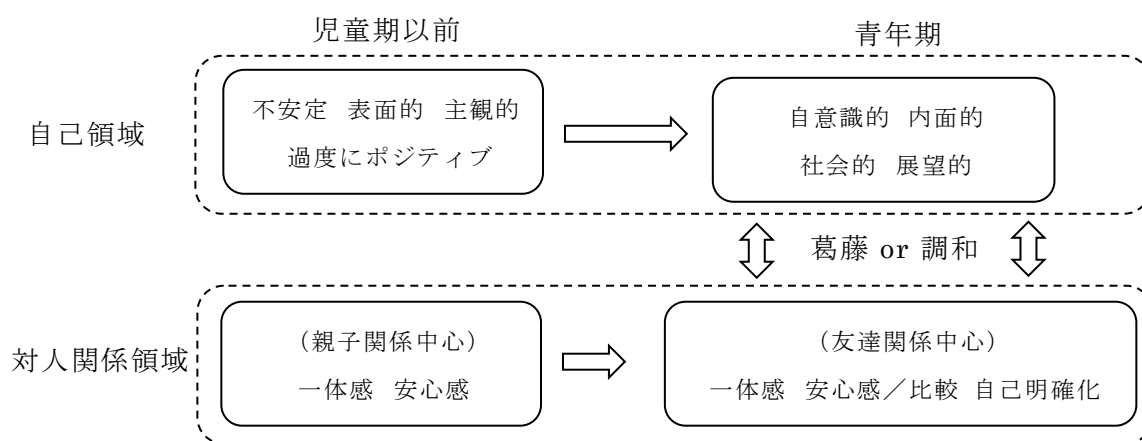


Figure1-3-1 青年期の自己確立へ向けた心理発達の模式図（再掲）

て、かなり持続的に自己への注意関心が高まるようになり、その範囲が外見的特徴から目に見えない内面的特徴まで広まるとともに、将来や先行きを見越して自分自身をとらえるようになることを見出した。その意味で、青年期の自己の発達の特徴は、外面的特徴から内面的特性までを含む自己の多様な側面にわたって、先行きを見すえた時間的な広がりと同対人関係を中心とした広い社会的関係の中で、自己を一貫して意識するようになるとまとめられることを論じた（溝上, 2014; 中谷, 2013）。同時に、対人関係の領域でも青年期には大きな変化が生じ、代表的なものとしてはそれまでの親子関係の重要性が速やかに低下し、かわって同世代同年輩の友人関係が重要性を増し、とくにチャム関係と呼ばれるような一体感の強い密着した関係の中で情緒的安定を得ようする傾向がみられた。また、同時に、それだけではなく、青年は、そのような友人関係の中で、友人と自分を活発に比較し友人からの忌憚ない評価を受けて、現実の自分に直面する経験を重ねることにもなる。そのようにして、青年期の対人関係は、精神的な安定と安心をもたらす受け皿として体験されるとともに、現実の自分自身に直面する場ともなる。青年は、以上のような自己と対人関係の両面での発達を経て、社会的に自立した生活を送るうえで必要な自覚を獲得していくものと考えられた（Figure 1-1-1, 再掲）。

以上みてきた青年期の発達の様相は、前項までで取り上げた原体験から見た心の発達の理解とかなりの面で符合するものといえる。つまり、自己の側面について言えば、原体験から成熟への推移の中での“外的現実との関係を心得て、重視する”ということは、青年期の自己意識の特徴として見られた、広い将来展望と社会的関係の中で自己を意識するという変化に対応している。また“見えない実在（こころ）にも気づく”という変化は、それこそ内面的、抽象的な特徴も含めて自己を意識するようになることと同じである。さらに、

“間接化が参加して全体を管理・統制する”という変化も、その時その場だけでなく広い時間的展望と社会的関係の中で自己を意識することと同等のことを指している。そして、このような過程を経て、“区別を知り、自分が独立していることを心得る”という成熟への方向性は、青年期の自己確立の過程そのものに対応しているといえる。

対人関係の領域においても同様に、先行研究で指摘された友人関係を中心とする特有の変化は、原体験からの成熟といった見方と符合する点が多い。つまり、本節第1項で、人間の胎内体験に比定される原体験の観点から、原初には人間の体験は受け皿となる胎内の空間と合一的に体験され、そこから知覚や認知の発達をともなって外的世界へのかかわりが広がっているが、その背景には、原体験の主導原理としてのなじみの法則とポジティブ・ネガティブの法則が作用しているという点を論じた。この視点でいえば、青年期のチャム関係における密着した一体感は、そもそもは胎内体験にあった合一対象が母へと移行し、その後身近な家族への移行を経て、友人関係に広がってきたものとして理解することができる。その点で、青年期の若者と同世代同年輩の友人との関係を、乳幼児と母親との関係になぞらえると次のように表現できるであろう。つまり、乳幼児は、年齢相応の社会的な関係の中で原体験から見分けの過程に至る葛藤を体験し、その体験をなじみのあるポジティブな対象との間で解消しようとして母親のもとに駆け寄っていく。それと同じように、青年は、年齢相応の社会的関係の中で、原体験から見分けの過程に至る葛藤を体験し、それをなじみのあるポジティブな対象との間で解消しようとして、友人との関係に密着していくものと理解できるのである。また、その際、幼児においてもその葛藤は完全に解消されず、母親との一体感の中でそれを合一的に体験し、母親との関係でしきりにむずかりながら、最終的には母親のその際の反応様式を身に付けて、徐々に葛藤を受け入れていくことを学んでいく。その点でも同様に、青年は、友人関係の受け皿の中でも葛藤を完全に解消することができず、場合によってはその体験を友人と合一的に体験して、友人との間でさまざまなトラブルを体験しながら、最終的には、現実の自分を受け入れるやり方をお互いを参考に身に付けて、未知の成人社会に出ていく自信を身に付けていくようになると理解できる。このようにみると、青年期の一連の対人関係上の変化は、原体験から成熟へと向かう視座から見れば、乳幼児期の母子関係と同質のものとして広く理解することができるのである。

以上のように、青年期における自己と対人関係の変化は、原体験の視座から見た理解とかなり整合性があるように思われる。そして、第4項で見たように、原体験から見分けと

区別に至る過程、とくに、自分の見分けと区別に至る過程は、原体験から成熟へと向かう幅広い変化に関連し、その意味で大幅な葛藤と心のもつれをともなうものと考えられる。このことは、青年期の自己確立の課題が“疾風怒濤” (Hall, 1905/1910) という表現に代表されるような心理的な不安定さや混乱をともなうものであることを指摘する従来の先行知見と整合するものである。このようにして、青年期は、原体験に由来する未分化で合一的な心の名残から現実の自分を区別し見分ける過程として、大きな葛藤体験や精神的不安定をもたらす可能性がある時期として理解できるものと思われる。

#### 第4項 原体験から見た青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向

前節までで対人恐怖傾向と自己愛傾向は、一見するところ正反対といえるような特徴を示しながらも、ともに他者との関係を否定的に体験するという点で共通性がみられた。そのうえで、なぜそのように他者との関係を否定的に体験するのかが問題となっていた。この点について、以上に論じてきた辻 (2003, 2008) による原体験の視座は一定の理解を与えるものと思われる。

前述のとおり、人間の発達には、原初の胎内体験に比定しうる融合・合一的な原体験の世界から、見分けと区別が育ってくる過程と位置づけられるが、青年期には自分の区別と見分けが問題となり、そのことには上記に示すような葛藤や心のもつれが伴うものと考えられる。この葛藤やもつれの体験は、青年の中に“不安”や“恐れ”といった否定的な感情を引き起こすものと考えられ、それゆえにこの時期の若者の心理状態は不安定化しやすくなるといえる。その際、青年は、その時点で受け皿として一体的に体験する対象となっている同世代同年輩の友人関係との間で、葛藤やもつれ、ないしは、それに伴う不安や恐れを合一的に体験するものと推測される。本来見分けと区別が育ってきて現実の自分が見えてくる中で、そのことに対して葛藤や心のもつれが生じるのは、本人の心の中においてである。しかしながら、これまで見てきた原体験を基盤とする融合・合一的な体験を背景にして、それらを受け皿としての友人関係の方に位置づけて体験するということは比較的自然に生じてくるものと考えられる。言い換えるならば、青年期の若者は、自分が自分自身に対して感じている不安や恐れを友達関係の中で一体感を持って体験し、相互に共感しあい支え合うことになる。そして、このことが青年期特有のチャム関係の形成につながると考えられる。あるいは、場合によっては、自分の感じている不安や恐れを友だちが感じているものと体験して、友人の反応に過敏になったり傷ついたりして悩むといったことも生じてくるものと考えられる。このような体験構造は、青年期一般に広くみられるものと

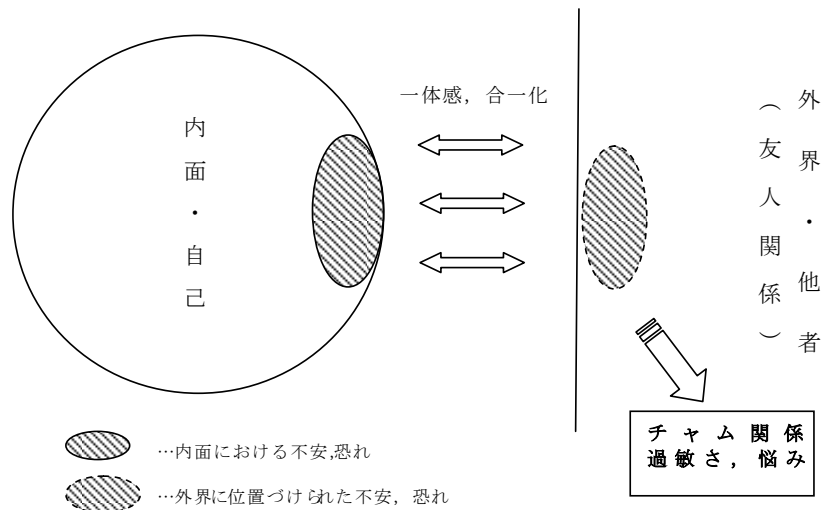


Figure 32-1 青年期における対人関係の体験構造

考えられるので、青年期における友人関係への密着感や過敏性を生み出す基本的な要素と考えられる。これらの関連を Figure 3-2-1 に図示する。そして、これらの基本的な体験構造に対する反応として、以下に述べるような経過を経て対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な対人認知が生じてくると考えられるのである。

まず第一に、対人恐怖傾向の場合には、前述の体験構造の中に生じる不安や恐れに対して、基本的には受動的な姿勢で対応する点にその主な特徴があるものと思われる。つまり、対人恐怖傾向の高い人は、区別して見えてきたなじみのない現実の自分について体験する不安や恐れに対して、“避けたい”、“嫌だ”と受動的、回避的に反応するように思われる。そして、このような受動的な体験の仕方に基づいて、次のようなことが生じてくると考えられる。つまり、これまで見てきたように、見分けと区別の発達の中で、青年期以降特に自分の見分けと区別が重要な課題となり、そのようにして見えてきた現実の自分とそれに伴う葛藤や心のもつれに対して不安や恐怖を感じることもあるが、本来的にはそのような体験はすべて当人自身の中で生じているものである。その意味で、そのように体験しているのは自分自身であるにも関わらず、これまで見てきた原体験に由来する合一的な体験の仕方を背景として、その体験を受け皿となる同世代同年輩の友人に位置づけて体験することになる。その結果、“避けたい”、“嫌だ”という体験は他者が感じたり思ったりしているものとして体験されることとなり、そのことが他者から“避けられている”、“嫌われている”という否定的な他者認知に結びつくことになると考えられる。換言すれば、本来自分が自分自身に対して体験する忌避感や嫌悪感を周囲の他者が体験しているものと位置づけていることになるが、前述のような原体験の理論を背景に考えると、受け皿となる合一

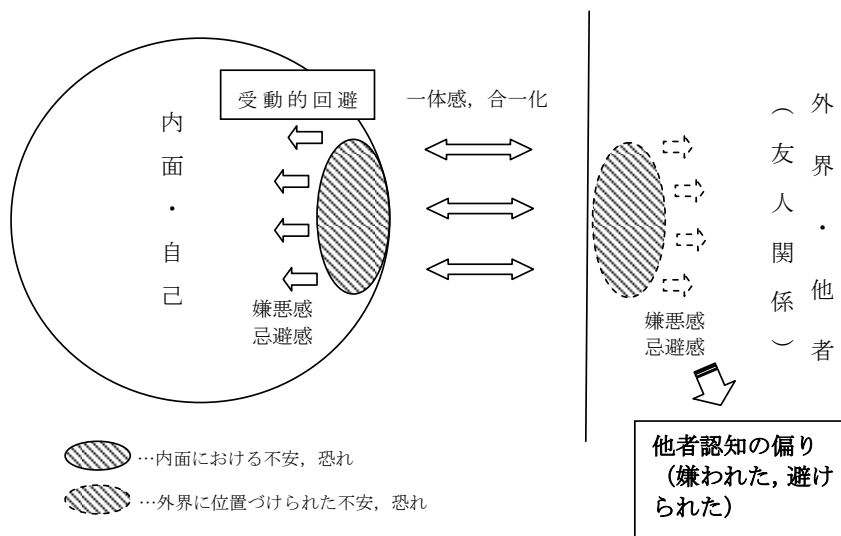


Figure 3-2-2 対人恐怖傾向における対人関係の体験構造

的な対象との間ではこのようなことは比較的 naturally 生じうるものと理解できる。そして、このことは、逆に周囲の人に受け入れてもらったり認めてもらったりすることで、それらの心の負担が受動的に解消されることを期待していることにもなる。さらには、この忌避感や嫌悪感は、周囲の他者に位置づけられているものの、本来的にはその人自身の内面に生じている感情体験であるので、それ自体に本人も影響を受けざるを得ない。つまり、そのような否定的な感情にここでも受動的に影響されて、基本的に自分自身がネガティブなものとして体験されるやすくなり、このことが対人恐怖傾向にみられる劣等感や自己否定に結びついているものと考えられる。以上のような関連を図式化すると Figure 3-2-2 のようになる。

一方で、自己愛傾向においては、それとは対極的にこのような不安や恐れ of 体験に対して能動的に対応する点に特徴があるように思われる。つまり、これまでに見てきた青年期における見分けと区別の発達にともなって自分の区別と見分けを形成するようになると考えられるが、それは前述のように葛藤をとまなうことで基本的には“恐れ”と“不安”の体験につながるものと考えられる。その意味で、自己愛的な人も、青年期の発達に伴って起こってくるそのような変化に対してネガティブな体験を内在化させるものと考えられるが、自己愛的な人の特徴は、そのような恐れや不安の体験に対して、“苛立ち”や“怒り”の情動反応を引き起こすことで、それらをより能動的に排斥していこうとする点にある。恐れや不安の体験は、自己愛的な人にとっては脅威となるもので、それに積極的に対抗する姿勢でその意義や価値を否定していく方向に反応する。その結果、もともとの恐れや不安の体験は、さまざまに異なって体験されるようになる。たとえば、それらの体験は“蔑むべき”、

“弱い”ものとして低く評価されるかもしれない。あるいは，“無意味”，“無価値”などと脱価値化して体験されるようになるかもしれない。このようにして，自己愛的な人は，現実の自分に直面する体験にともなって，恐れや不安の否定的な感情，苛立ちや怒りの攻撃性，弱いや蔑むべき，無価値，無意味といった否定的な評価などのさまざまな感情を抱くことになると考えられる。本来，これらの感情体験は，自己愛的な人が自分自身に対して抱いているものである。しかしながら，対人恐怖傾向の場合と同じように，ここでも受け皿となる合一的な対象としての同世代同年輩の友人関係の中で，そのような感情を一体的に体験するものと考えられる。その結果，多様な否定的感情は友人が体験するものと位置づけられ，友人が“臆病”で“弱い”，“無価値”で“意味のない”，さらには，“敵意的”で“攻撃的”なものとして否定的に体験されやすくなるのではないかとと思われるのである。このようにして自己愛傾向特有の否定的な他者認知が生じるものと考えられる。自己愛的な人は，以上のように他者を否定的に体験することになるが，それにより現実の自分自身を知ることから生じる葛藤と心のもつれを内側に体験しなくて済むようになる。そして，そのことにより自己愛的な人は比較的葛藤や心のもつれのない自分自身を維持することができるようになると考えられる。同時に，この点でも自己愛的な人はより積極的で能動的であるように見える。つまり，そのような恐れや不安を体験することがないポジティブな自己イメージを維持し高めるために，誇大的で誇張された空想を能動的に活性化するようになると考えられるのである。このことが，前章までで取り上げてきた過度に肯定的に評価された誇大な理想的自己意識を形成するようと思われる。自己愛的な人は，このような自己イメージを維持するために，恐れや不安に対抗して継続的に苛立ちや怒りの情緒反応を示さなければ

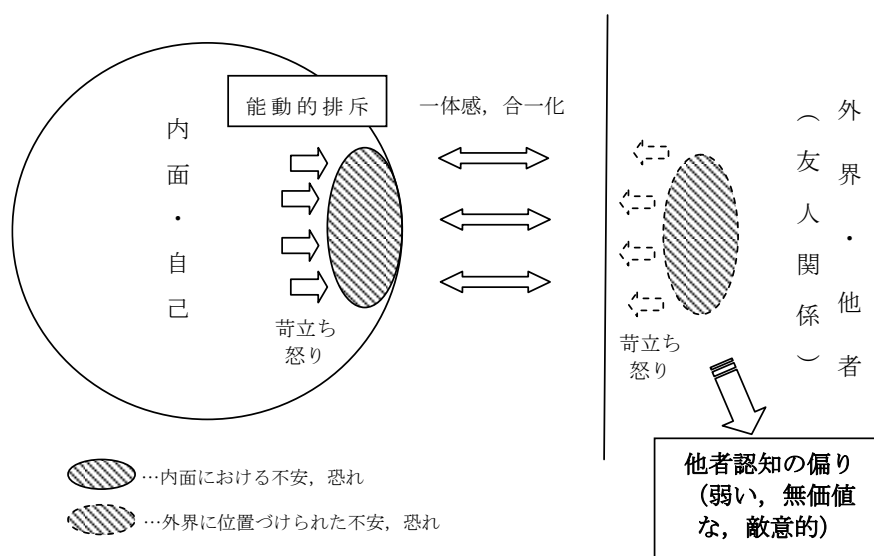


Figure 3-2-3 自己愛傾向における対人関係の体験構造

ばならない。このことにより、本来自分自身への感情であるはずの否定的な体験が身の周りの友人に位置づけられることになると考えられるのである。これらの体験構造を図示するならば Figure 3-2-3 による。

以上のように見てくると、対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な対人関係の特徴は、原体験理論の観点からかなりの程度理解されるものと思われる。それらは、ともに青年期に至っての見分けと区別の過程で生じてきた葛藤と心のもつれの体験、さらにそこから生じてきた恐れや不安の感情に対するそれぞれの反応の結果であると考えられる。そして、それらを受け皿となる一体化の対象である同世代同年輩の友人関係に合一化して体験することにより、他者に対する否定的認知が生じるものと推測されるのである。

### 第 5 項 本章の研究目的と仮説

以上のように見てくると、対人恐怖傾向と自己愛傾向には否定的な他者認知傾向がみられるものと推測される。それらの特徴は、前章で検討した自己への意識関心の特徴と並んで、両傾向の主要な要素を構成するものと考えられる。しかも、対人恐怖傾向においても自己愛傾向においても、悩みや困難、あるいは、トラブルや問題となるのはむしろこの対人関係の領域であるので、そういった側面の問題の構造を知ることは、青年期における対人恐怖的な、あるいは、自己愛的な悩みを理解するうえで一層重要なものとなると考えられる。そこで、本研究では、対人関係の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の特徴、とくに否定的な他者認知に焦点をあてて、一般青年を対象とした調査研究を通じてそれらの特徴を検討することを目指す。

まず、第 3 節（研究 4）では、第 2 節で推測した対人恐怖の体験構造について臨床素材をもとに確認する目的で、対人恐怖症（自己臭恐怖）を示した 2 事例のロールシャッハ検査法の解析をおこなう。そのうえで、第 4 節（研究 5）では、従来の先行知見を踏まえ、対人恐怖傾向と自己愛傾向における他者に対する否定的な認知判断傾向をそれぞれ嫌悪判断、ならびに、敵意帰属と概念化し、それらを適切に測定する場面想定法による尺度を開発することを目指す。青年期の男女が日常生活の中で体験しやすいような対人葛藤場面を構成し、それらに対する自由記述回答を分析することを通じて、最終的には評定尺度法を用いた尺度を作成し、信頼性と妥当性の検討をおこなう。第 5 節（研究 6）では、この場面想定法による尺度を用いて他者に対する否定的な認知判断傾向と対人恐怖傾向、自己愛傾向との関係を検討する。以上の成果を踏まえて、対人恐怖傾向と自己愛傾向の他者認知の特徴をより詳細に検討するために 2 つの発展的な研究を実施する。第 6 節（研究 7）に

においては、対人恐怖に特有の認知の偏りである嫌悪判断と、抑うつなどの広範な心的障害に関連するとされる自動思考を取り上げ、それらの対人恐怖傾向に対する効果を比較検討する。この研究により、嫌悪判断が対人恐怖傾向に対して否定的自動思考とは異なる作用を及ぼすかどうかを考察される。第7節（研究8）では、自己愛傾向にみられる他者認知としての敵意帰属が自己愛傾向に与える効果が検討する。その際、両者の関係に対して怒りの情緒反応が調整変数として作用することが仮定されるため、階層重回帰分析により敵意帰属と怒りとの交互作用の検討をおこなう。以上の分析を通じて、自己愛傾向にみられる複雑な否定的他者認知の特徴を実証的に検証する。



### 第3節 ロールシャッハ検査法にみる対人恐怖症の心理（研究4）

#### 第1項 問題と目的

前節までで対人恐怖傾向と自己愛傾向について、心理発達の観点から特に辻（1997, 2003, 2008）の原体験理論をもとにその心理構造について考察した。その結果、両傾向ともに、原体験の融合・合一的体験から見分けと区別の体験が進み、青年期に至ってそれが自分自身への見分けと区別に至る際に生じる葛藤や心のもつれに対する不安や恐れへの反応であることが推測されるとともに、対人恐怖傾向についてはそのような不安や恐れを受動的に回避しようとする点に特徴がみられるのに対して、自己愛傾向ではその不安や恐れの体験を能動的に排斥しようするものと考えられた。以上のような心理構造については、自己愛傾向に関してはすでに類似の内的特徴が Kernberg(1975)や Masterson(1981)により指摘されている。いずれも、幼少期の母子間で生じた強度の欲求不満体験に対して、肯定的な自己と対象のイメージを融合させ誇大自己を形成するとともに、そのような現実体験に伴う失望や幻滅、怒りや攻撃性などの否定的な体験をすべて他者の側に位置づけるものと論じているのである。一方、対人恐怖については、これまでも発達心理学な観点からの検討がなされてきたが、上記のような心理構造を指摘したものは見られない。その意味では、対人恐怖症に関する心理臨床的な素材に基づいた考察が一定程度必要であると思われる。

一方、ロールシャッハ検査法は、長年にわたり精神・心理臨床の領域を中心に人の心理を知る方法として活用されてきた投影法心理検査のひとつである。10枚のインクのシミでできた図形について“何に見えるか、何に似ていると思うか”を問うこの検査法において、注目されるのは個々の被検者の反応の内容ではなくその形式性である（Rorschach, 1992/1958）。通常何かの事物の写真を見せて“何に見えるか”を問うても答えに紛れが生じることはなくテストとしての意義は生じない。しかし、ロールシャッハ検査法の図版はインクのシミでできた漠然図形であるため、見る者の見方に対する規定性が相対的に低く、インクのシミ以外のさまざまなものになぞらえて見ることができる。もともとはインクのシミにすぎないものであるため、それをそのまま見ると“インクのシミ”と答えるしかない。通常ロールシャッハ検査法では、インクのシミ以外のものに見られるのが普通であるから、そこで被検者はインクのシミの何かを用いて何かを用いていないことになる。その選択と決定のあり方に被検者の平素の姿が現れるというのがロールシャッハ検査法の形式性、つまり、形式・構造的投影の側面である（辻, 1997）。この形式・構造的投影の側面はロール

シャッハ検査法のさまざまな因子が関わるが、主には“その図形は全体として、あるいは部分として理解され判断されたのか、そしてそれはどの部分か？”という反応領域の因子と“答が図形の形態によってのみ決定されたのか、あるいはそのほかの、図形の運動やその色彩によって決められたのか？”という反応決定因の因子が中心となる（Rorschach, 1992 東京ロールシャッハ研究会訳, p.6）。

反応領域の選択は、基本的には全体かそうでなければ部分しかなく、部分を用いるのであればその分割の様態にさまざまなものがある。検査結果の反応領域に示される個人の把握の様式は把握型と呼ばれ、発達的には、幼児期には漠然とした未分化な、未熟な全体反応に示される融合・大域的把握の様式が支配的であるのに対して、学齢期の初期には明確な形体認知である定形識別的な形体認知に基づく部分把握が増加するようになり、初期集約的把握型と呼ばれる（辻, 1978, 1997）。この初期集約的把握型は、“対象把握に際して正確性が重要であることを知り、そのためには識別的な外輪郭形体による対象の把握が、他の条件による把握よりも重要さにおいて抜きん出ていることを認知したこと”を意味しており（辻, 1997, p.33）、その点で対象の限界と独立性への気づきに結びつくものであり、そのような対象の独立性への気づきは、やがて自分自身の独立性への気づき、すなわち、“自己の個体化”と“自我境界の確立”につながるものと考えられる。以上のような構造的関連から、ロールシャッハ検査法の反応領域の選択の様態には、原体験に由来する融合・合一的体験から外的対象の見分けと区別、ひいては自分自身に見分けと区別に至る発達段階の投影を読みとることが可能となる。

また、反応決定因については、ロールシャッハ検査法において反応に用い得る素材は図版にある形体と色彩、さらに、被検者の内面にあると考えられる運動がある。前者についていえば、図版にある素材すべてを用いるとすれば、ここでも“インクのシミ”と答えるしかないので、被検者は図版にある何かを用いて何かを用いていないことになる。その素材の選択の中に被検者の個性が示されることになるのが体験型と呼ばれる。この選択はそれぞれの素材、つまり、形体と色彩、ないしは、形体と運動という構造的対比の中での選択ということになり、そのひとつである形体と色彩の対比についていえば、知覚刺激としての性質から、色彩はどちらかと言えば受動的で直接的な体験であり、即座的な行動を掻き立てるような刺激であるのに対して、形体は能動的注意を必要とするものという関係にある（Schachtel, 1966/1975）。また、曖昧な形体や単純な形体の把握はまだしも受動的な姿勢で処理できるものであるが、正確に見られた全体反応に代表されるような形体認知では、

正確に見れば見ようとするほどに不一致部分が目立ってくるというロールシャッハ検査法特有の葛藤的状况の中で、必要な一致部分に目を向け、不必要な不一致部分を無視するという選択と決定が必要となると考えられ、この点で被検者に能動的な対応が必要となってくる。以上のような形体と色彩という素材の用い方、ならびに、用いられた形体の質という点に受動性から能動性にわたる被検者の姿勢を知る手がかりが得られる。

以上のように見えてくると、ロールシャッハ検査法の反応領域に示される把握型の様態からは、被検者の原体験由来の融合・合一的体験から対象、ならびに、自分の見分けと区別の発達の様子、また、反応決定因に示される体験型の様態からは、被検者の受動性から能動性に至るまでの態度を知る手がかりが得られるといえる。したがって、前述の対人恐怖の心理構造を確認するうえでも大変適切な手法と言える。

従来ロールシャッハ検査法を用いた対人恐怖に関する研究も比較的多くなされてきた。古くは武岡（1970）が赤面恐怖症患者を対象にロールシャッハ検査法を実施し、主要なロールシャッハ指標、DeVosの感情カテゴリー、Fisherらの身体像スコアについて非臨床統制群と比較している。その結果、主要スコアについては、赤面恐怖症群ではF%（形体反応率）、A%（動物反応率）が高く、(H)+(Hd)（非現実的な人間、人間部分反応の数）が多く、かつ、P反応（平凡反応数）、VIIカードでの人間反応が少なく、反応内容の幅が狭いことが示された。また、梶塚・青野・渡辺・海野（1977）は、同様に主要ロールシャッハ指標と身体像スコアについて対人恐怖症者、境界例患者、統合失調症患者、ならびに、臨床統制群の比較を行っている。その結果、対人恐怖症群については、他のすべての群よりも多くの反応数、非臨床統制群よりも高いF%、統合失調症群よりも高いR+%（正確な形体認知の比率）と多いP反応を見出している。さらに、村澤（2003）は、対人恐怖症の時代的変遷を踏まえて、対人恐怖症患者と非臨床統制群との比較を行っている。その結果、対人恐怖症群に高いF%とWsumC%（重みづけした色彩反応の比率）を見出すとともに、M%（人間運動反応率）、FK%（通景・立体反応率）、pureH%（人間反応率）、Cloth%（衣服反応率）の低さを見出している。

その他、対人恐怖傾向の高い非臨床群を対象とした研究もいくつか行われている。神谷（2000）は、大学生男女を対象に対人恐怖傾向の高群、中群、低群に分類し、主要なロールシャッハ変数、ならびに、対人恐怖との関連が予測される変数について比較している。その結果、M（人間運動反応数）、(VIII-X)/R%（VIII～Xカードの反応数の比率）、H%、Cloth%に有意傾向の群間差がみられたが、多重比較の結果では前三者についてはいずれも中群が

低い値を、Cloth%については低群が高い値を示した。また、相河（2004）は、対人恐怖に特有と考えられる“顔”反応に着目し、ロールシャッハの主要スコアについて、対人恐怖傾向の高群低群で比較を行っている。その結果、対人恐怖傾向の高群に正面像の“顔”反応と輪郭のない“顔”反応の多さを見出すとともに、M-反応（不正確な人間運動反応）とFM反応（動物運動反応）の多さ、(VIII-X)/R%の高さ、ならびに、F%とF+%（正確な形体認知による反応の比率）の低さを見出している。さらに最近の研究では、野崎（2007）が女子大学生、大学院生の中で対人恐怖傾向の高群と低群を比較しているが、主要なロールシャッハ変数については、F/C（不自然形体色彩反応）にわずかに傾向差を見出すのみとなっている。

以上のように、対人恐怖については臨床群、非臨床群を対象としてロールシャッハ検査法を用いた研究がこれまでもなされてきている。しかしながら、対人恐怖症者を対象とする研究においてF%の高さが共通してみられる点以外、一貫性のある結果は未だ得られていない。このような結果となった理由としては、ひとつには対人恐怖症の多様性が関連するものと思われる。つまり、対人恐怖症と一言で言っても、赤面恐怖、視線恐怖、醜貌恐怖、吃音恐怖などのさまざまな亜型が存在しており、それぞれによってロールシャッハ検査法上の特徴が異なる可能性が考えられる。同時に、ロールシャッハ検査法そのものの性質による可能性も考えられる。ロールシャッハ検査法のスコア結果は、検査の実施状況や被検者の状態だけでなく、スコアリングにあたる検査者の姿勢など、さまざまな要因により大幅に影響される。そのため、スコア結果のみに着目した数量的研究では、ロールシャッハ検査法に現れた各病態の構造を把握しきれないところがある。以上のように考えれば、対人恐怖症の中でも疾患的特徴がより明確なものを取り上げるとともに、個別のロールシャッハ検査法結果に対する詳細な事例検討が求められる。

さまざまな対人恐怖症の亜型の中で、比較的臨床事態の明確なものに自己臭恐怖がある。自己臭恐怖は、森田（1960）が“人前や電車中で放屁したような感じがして、きまりが悪く、たつてもすわつてもいられないというようなもの”（森田, 1960, p.55, 傍点原文どおり）として、すでに対人恐怖の中に含めている。その後、足立・間島・小河原（1960）が“私は嫌な臭いを発散させている”と訴える症例をまとめて報告したことを最初に、比較的多くの精神医学的研究がなされてきている。以上の先行研究を受けて、笠原（1972）は、自己臭恐怖の体験を“1）自分の身体のどこからか特有の臭いが漏れでており”，“2）それが傍にいる他者（達）に不快を与え”，“3）その結果、他者（達）にさげすまれ忌避される”と確信

することとまとめている。この自己臭恐怖に関しても少ないながらもロールシャッハ検査法を用いた研究がみられ、木場・榎戸・越野（1976）は、身体像スコアの **Barrier** 得点と **Penetration** 得点について神経症群、ならびに、統合失調症群との比較を試みている。その結果、両得点ともに神経症群と統合失調症群の中間にあたる得点が得られた。田中・奥村・雨宮・雨宮・脇・東條・小関・牛山・石井・成田・内田（1992）は、口臭を訴える自己臭患者のロールシャッハ検査結果を検討し、（統計解析は実施していないものの）W%（全体反応率）の高さ、FC<CF+C（色彩優位の色彩反応）の多さ、R+%の低さ、M<FM（動物運動反応の優位性）の多さが観察された。

本研究では、自己臭恐怖を呈したロールシャッハ検査法の自験例 2 例について検討を加えることにより、その心理を探求することを目的とする。第 2 節の理論的考察から、自己臭恐怖症には原体験に由来する融合・合一的体験の名残と体験の受動性が示されるものと推測される。しかしながら、後者の体験の受動性については、ロールシャッハ検査法の結果にどのように現れるのか未だ明確ではない。そこで、以下では、受動的な体験姿勢を代表する強迫性障害を呈した事例のロールシャッハ検査法結果について検討し、そこに示される受動的な体験の特徴を明らかにしたうえで、それとの比較において自己臭恐怖の事例に関する検討をおこなうこととする。

## 第 2 項 事例研究 1

### 1)目的

受動的な姿勢を典型的に示すと考えられる強迫性障害の事例検討を通じて、被検者の受動性のロールシャッハ検査法における現れ方について検討する。おもに、反応領域と反応決定因に注目してロールシャッハ・プロトコルの特徴を検討し、強迫性障害の心理構造の解明に取り組む。

### 2)事例U

事例は、34 歳男性（技術系会社員）であった。主訴は、事件・事故・災害に関する強迫観念と確認行為である。ロールシャッハ・プロトコル（抜粋）は Table 3-3-1 のようになった。また、主要な集計値を Table 3-3-2、無色彩カードと色彩カード別の反応領域の分布を Table 3-3-3 に示す。なお、スコアリングの枠組みは阪大式（辻・福永, 1999）によった。

### 3)結果

①反応数、反応時間、反応表現等について 事例の R（反応数）は 26 で、おおむね一般青年、ならびに、成人の反応数が 20～30 とされていることから平均範囲内であると思われる

Table 3-3-1  
事例Uのロールシャッハ記録（抜粋）

領域番号, スコアリングは阪大式

スコア記載順<Location: Determinant: Basic Form Level, Specification, Organization, Rating: Content: Sentence Type>

「」は検査者の言葉。「Q」は「なぜそう思いましたか?」

Card	Test Proper	Inquiry
I ^8''		
①	蜂というか、アブというか昆虫の類です。触覚というか、羽根を感じますが…ん、まあ…	①まつ、こう細く突き出ている部分[d3]、ここがですね、人間とかと違ひまして二つハサミ状になっている。そこから昆虫か甲殻類とかのものだと。それで、この丸い部分[d5]は蜂とかに限らないですけど、昆虫の口、わりと動きが単純であるというか、人間のように動かず挟んで食べるので昆虫。(以下、胴体[D1]、羽[D3]を説明。) <W: F: F+p, , , 1: A: CS.>
②	マスクというかお面のように言えなくもないかなあと…	②中央部が大きく4つの空白部分(s)があるのですが、上の二つは目ないしは下の二つは口ないしは食べる所。(以下、横に広め[D2]、装飾[d8]を説明) <WSs: F: F+, , , 1: Mask: CdS.>
③	あと逆に見ると、あの一、甲といいますかね。何かのかぶり物といったところで	③逆に見ますと、全体の輪郭が人間の頭を思わせるんですが、中央の突起を見ますと(d7)、西洋の甲といいますか、中央部に突起というのを。<W: F: F+, , , 1: Crown: CdS.>
1' 07''	す。	
II ^10''		
①	うーん、赤くなっているからかもしれません、肛門と言いますか、排泄器官のようなものを感じますね。	①中央部分の色が薄くなっているところがあたり[d4]、肛門とか女性の排泄器官とかに見えるかなと。あと下に流れているのが、そういう感じを益々強く感じさせます。<b?>まあ…排泄であったり肛門であったり(中略)出血するというイメージがあるんですね。(略) <(D): F with C/F: Fpm, 𠄎, 0: Sex・Blood: CS.>
②	あとはそうですね、肛門とかから横を追っていくと、子宮とか膈とかいうのを形から感じますね。骨盤ですか。	②黒というかグレーの部分が骨であって、真ん中のところ(中央S)が何かを内包するところから、あと肛門という連想から子宮かなと思うのですが、赤いところから子宮につながるのかもしれない(略) <WSs: F with C/F: F+, 𠄎, 1: Sex・Ant: CdS.>
1' 12''		
IV ^11''		
①	えー、そうですねー、これはまあ、何か動物かなんかを広げて床にしいてあるような動物の毛皮…を下の方から上に向けて見た感じですか。	①下のほうの左右に張り出したのが足[D3]に見えます。頭が小さいので上のほうにやや飛び出した部分の左右にシワというかヒダのようなものがある[d1の両側]とそれがトラや豹といった猛獣類の頭を連想させる。(略) <W: TVF: F+, 𠄎, 1: A・Obj: QS.>
②	あと中央部分は竜の頭の感じですかね。	②(略)中央部分の両端に見えるところが角という感じがします、目[d5]。猛々しいという、日常的にいない動物。あと突起が多い。<(D: F: F+, , , 1: (Ad): CdS.>
③	まあ、牛タンのようにでもあると思います。もとの位置に戻していますが。	③全体の形が舌、ペロですね(舌を出す)。それと頭のシワに見える部分が牛タンの溝の感じを感じさせる。<W: TF: Fpm, 𠄎, 0: Food: CdS.>
1' 35''		

(Ames, Metraux, & Walker, 1959; 片口,1987)。各カードの最初の反応までの所要時間の平均である平均初発反応時間 (RIT(Av.)) も 11.8 秒であり、おおむね 10 秒から 20 秒を通常の平均とするデータからこれもおおむね平均的なものであるといえる(片口,1987)。一方、反応の文末表現のスコアである文章型で、とくに条件型 (CdS) がかなり多い。この条件型の文章型は、“(しいて言えば) ~に感じますが”や“~と言えなくもない”と言ったように反応による不全感を減免しようとする表現とされる(辻・福永,1999)。

②反応領域について W%が 69.2%と比較的多くを占める全体反応優位の把握型である。辻(1997)は、ロールシャッハ検査法における部分と全体の構造的関連を検討する中で、“これは何に見えるか?”を問う本課題には“課題は本来全体で”という規定が働いており、そのために全体反応は“状況に対する主体の受動性”につながることを指摘している。また、Table3-3-3 にみるように、無色彩カードと色彩カードに分けて反応領域の分布をみると、無色彩カードで W が多く、色彩カードでやや部分反応が増加していることがわかる。この

Table 3-3-2  
事例Uのスコア集計結果

I	R=26 TT=18'29'' RT(Av.)=42.7'' RIT(Av)=11.8'' RIT(Av.N.C.)=10.4'' RIT(Av.C.C.)=13.2'' RC(Av.)=0.54 RC(Av.N.C.)=0.38 RC(Av.C.C.)=0.69 (VIII-X)%=30.8
II	W=18(69.2%) [cut-off W=3 (W)=1] D=8(30.8%) [(D)=1] S=5[Ss=4 Sc=1]
III	F=18(69.2%) Mpost=2 VF=1 TF=2 FC=1 CF=1 C/F=6
IV	F+=16(61.5%) [popular=5] Fpm=8(30.8%) F-=2(7.7%) Organization[h:l:n:d]=0:2:1:0 AQ=69.2
V	A=6(23.1%) [A=3 Ad=1 (Ad)=1 dA=1] H=4(15.4%) [H=2 Hd=2]
VI	CS=11(42.3%) AS=1(3.8%) CdS=13 QS=1

Table 3-3-3  
事例Uの反応領域の分布

	N. C.	C. C.
W	10	8
D	3	5
d	0	0
Dd	0	0
合計	13	13

注) N. C.: 無色彩カード C. C.: 色彩カード

ことは、色彩があると分割が促進していることを示唆しているが、このような分割は“既に存在している状況の違いを、受動的に感受して区別する力の存在”を示すとともに、“受け身の感覚的な直接性で感じ取ることができる違いによって、行われている区別”を意味している可能性が高い（辻, 1997, p.85）。以上のように見てくると、事例の W 反応優位な領域選択、ならびに、無色彩カードに対する色彩カードでの部分反応の増加に受動的な把握の様式が示されているものと言える。

③（外輪郭）形体認知の動向について Fpm（許容反応：形体の無関係な概念、形体が不定な概念、形体が単純な概念による反応で図版に適合しているもの）が 8 個（30.8%）と通常に比べて多い。また、正確な形体認知を意味する F+も 16 個（61.5%）みられるが、その中で、IVクラス概念（もともと Fpm に相当する概念が特定化されて明確な形体を持つようになったもの）が 3 個（IIカード②“骨盤”，IVカード①“動物の毛皮”，IXカード①“果物の芯”），形体上の特徴が明確でないものが 3 個（Vカード②“料理に出てくるカニのツメ”，VIIIカード③“紋章”，Xカード②“花としても散在している”），そのほか、反応概念そのもの

が明確でない反応が3個（Ⅰカード①“昆虫の類”，③“何かのかぶり物”，Ⅲカード②“口の強い感じの（虫）”）みられる。以上のことから，被検者の反応には，漠然図形のあいまいな形体特徴をそのまま受動的に受け取ったような，形体特徴が明確でない反応がかなりの多数を占めることがわかる。残りのF+反応ではP反応（平凡反応）が5個と比較的多数みられる。これらはある意味，誰にとっても見やすい形体特徴を受動的に認知して行われた反応とみなすことができる。したがって，これらのF+反応も受動的な形体認知の結果であると推測される。通常，漠然図形に何かをみるロールシャッハ検査法において正確な反応を行うには，正確に見ようとすればするほど図版図形と記憶像との不一致が問題となる中で，必要な一致部分を抽出し不必要な不一致部分を捨てるという“細部の考慮と必要な抽象と捨象”（辻，1997，p.41）という作業が必要になる。このことにより，初めて正確な形体認知により反応を明確化することができるのであるが，それは同時に内面的な葛藤が伴う作業でもあり，能動的姿勢が必要になる。事例Uの上記の受動的反応は，そのような葛藤の許容と能動的姿勢の不全にも対応している。同時に，以上の形体特徴が明確ではない概念による反応が主流を占めることは，発達的には初期集約的把握型に示される識別的な外輪郭形体による認知の支配・主導性が身についていないことを意味しており，初期集約的把握の確立が意味する个体化と自我境界の確立が不全であることに対応するものと推測される。

④色彩反応について 事例の色彩関連反応ではC/F（不定形体による色彩反応）が6個みられる（Ⅱカード①②の“出血”，Ⅲカード①の“火の玉”，Ⅷカード②“胸の部分”，Ⅸカード③“炎”，Ⅹカード①“人玉”）。これらは，いずれも色彩の受動的な感受が主力となる反応である。一方，色彩も形体も同時に参加するCF（色彩形体反応）が1個（Ⅹカード②“花”），FC（形体色彩反応）も1個（Ⅷカード③“紋章”）見られる。これらは，形体，ないしは，色彩のいずれにもしばられない能動性が求められるものであり，その力が発揮されている可能性も考えられるが，全体的な数の分布によればやはり受動的な色彩認知が主流であると考えられる。

⑤その他の特徴について その他の特徴として，事例はかなり多様な反応概念を産出している。実際，反応内容の主なスコアリングの枠組みでも18種類にわたる範囲のものを産出している。そのほか，検査全体を通じてかなり知的な抽象概念や論理的な説明を多用しており，以上の特徴からは内面的，知的な活動性への親和性がみられる。また，質疑での事例の説明を見ると，図版図形の各部分部分に関する細かな説明に終始しており，全体



として何を見立てたかの説明になっていない。このことは、事例が自分の反応を外部の図版状況に位置付けて理解、説明しようとしたことを示唆する。

### 第3項 事例検討2

#### 1)問題と目的

自己臭恐怖を訴えた患者のロールシャッハ検査法の結果を検討することにより、自己臭恐怖の心理的特徴を探る。

#### 2)事例 T1

36歳の男性。1年前より急に汗をかくようになり、臭いがしてしまうようになる。周囲の人が鼻をすすったり鼻に手を当てたりするのが気になり、仕事も休んでしまうことで受診。事例 T1 のロールシャッハ・プロトコルを Table 3-3-4 に、主な集計値を Table 3-3-5、無色彩カードと色彩カード別の反応領域の分布を Table 3-3-6 に示す。

#### 3)結果

①反応数、反応時間、反応表現等について 反応数は15であり、一般的な平均と比較してやや少ない。RIT(Av.)は全体で17.7秒であり、こちらは平均範囲内であると思われる。ただし、RIT(Av.N.C.)（無色彩カードでの平均RIT）が12.0秒、RIT(Av.C.C.)（色彩カードでの平均RIT）が24.8秒と、色彩カードでの初発反応の遅れがみられる。そのほか、“～でいいんですか？”や“見えないんですけど”など、戸惑いや困惑を示す言明が比較的多い。

②反応領域について W%が66.7とほぼ事例Uに近い値となっており、ここでも全体反応優位な傾向がみられる。“課題は全体で”という課題の状況性に受動的に付き従う傾向が高いものと考えられる。また、Table 3-3-6をみると、無色彩カードはすべてW、色彩カードで部分反応が出現しており、事例T1にみられる分割が“受け身の感覚的な直接性で感じ取ることができる違い”による区別であることを示唆している。事例Uがまだしも無色彩カードでも部分反応がみられたのに対して、事例T1では無色彩カードでは部分反応は全く見られず、色彩区分の明瞭な全色彩カードのみでみられることから、上記の特徴がより顕著であると考えられる。

③（外輪郭）形体認知の動向について Fpmが1個見られる。F+は13個（86.7%）みられ、形体認知がかなり正確であることがわかる。しかし、それらの反応も詳細に見ると、Fpmとはならないまでも、反応概念そのものが明確でないもの（Iカード①“顔”②“虫”，IXカード①“甲殻類”，Xカード②“生き物”），形体特徴が明確ではないもの（IIIカード②“熊っぽい人っぽい雪男”，IVカード①“怪獣”），IVクラス概念による反応（IIカード①“骨盤”），

Table 3-3-4  
事例T1のロールシヤツハ記録

領域番号, スコアリングは阪大式

スコア記載順<Location: Determinant: Basic Form Level, Specification, Organization, Rating: Content: Sentence Type>

「」は検査者の言葉。「Q」は「なぜそう思いましたか?」

Card	Test Proper	Inquiry
<b>I</b>		
△3'' ①	顔とかでいいんですかね。あ、2枚目ですね。Impel.	①ここが目で[上S], ここが鼻で, ここが口ですね。で, まあ, この辺が髪の毛[DII×2]。ここが顎。こういう輪郭の顔。「なぜ?」顔に見えたんですけど理由ですか?理由分からないけど最初のイメージで。
▽△<▽		<WSs: F: F+, , , 1: Ad: QS>
△②	虫, たぶんいないと思うんですけど,	②この辺が顔とか手足。この辺が羽みたいに見えたので[DII], 無理やりイメージにすると, 虫, この辺がしっぽなのかと[DIV,
<	虫。	rounding]。<W: F: F+p, , , 1: A: CdS.>
△▽△	さらにですか? 「自由に。」	
2'02''	想像力が。顔以外に見えないんですけど。	
<b>II</b>		
▽△36''	(図版を遠ざける。)	①▽何も見えなかったんですけど, これが足に[DIII]。これは男の骨盤
①	骨盤。	じゃないんですけど, 見えて。ここが, この黒いの全体的に骨盤。
▽<△		「なぜ?」足と, ま, これが男のものに見えて, 骨盤は中が空いていた
②	海に浮かぶ岩。(gesture)	ような気がしたので骨盤[中央S]。<WSs: F: F+, , , 1: Bony At.: AS.>
▽△	...	
▽	ちょっと... (カードを置く。)	②△あ, そうですね, あの, 伊勢の白浜かな, ある海に浮かぶ岩かそんな
2'00''		感じがしたんで, で, この穴の中から見えるというような[S]。ま, こんなにはなかったとは思うんですか[S]。...色も黒っぽいですし。<WSs: [C'F]V: Fpm, ±, , 0: Scene: AS.>
<b>III</b>		
△4'' ①	人が両方から何かを持っているように見えます。	①これが頭[d1]と顔, で, 首で, もう, これは人にしか見えなかった
▽45''		ですね。手と足, もうその人にしか見えない[DII, usual human
②	何か人っぽいものには見えるんですけど... (首をひねる。)ま, 熊っぽい人っぽい雪男みたいなものに見えます。以上	figure]。「もっている?」これが手やと思ったので, つながっている
1'42''	で。	ので, 何かを持っている, つながってるからです。<cut W: M: +p, ±, 1, 1: H: CS.>
		②▽これが手に[DIV], これが足[D I], ここが顔に見えました[DV]。これがサングラスか目かな。蝶ネクタイかな[DIII]。人にしては太っていて, 形も奇抜なので雪男, 怪物に近い<cut W: F: +, , , 1: (dH): CS.>
<b>IV</b>		
9'' ①	怪物に見えます。ここが足で, 何か生えてるみたい。(DI, pointing)	①ここが太い足[DII], これが顔[d1], 本当に遠近法のように遠くに見
▽△▽		えて, この真中のが[D I]何か生えているように見えます。<W: VF:
55''	そうですね, はい。「結構です。」	+p, ±, , 1: (A): CS.>
<b>V</b>		
△▽△		
8'' ①	鳥に見えます。コウモリ?鳥, この顔と足と羽で(各部, pointing)。	①そのままなんですけど[usual Wing Animal], 鳥なんかコウモリって
▽△	見えなければ一つでも。いっぱいあった方がいいんですか。「自由に。」以上	いうとこと。<W: F: +, , , 1: A: CS.>
59''	で。	
<b>VI</b>		
<▽△		
31'' ①	ギターのような楽器。	①全体的にギターの形に似ている。ちょっとこんな出ている部分があ
▽<△	ない, ないですね。	って, 全体的にイメージの中でギターみたいなものしか見えてこな
1'14''		かった。<W: F: +, , , 1: Mus.; AS.>
<b>VII</b>		
▽△9''		
①	人が向かい合っているように見えます。	①この部分は顔に見えまして[DIII-d2], これは鼻ですね, 口, 人の顔を
▽>△		を横からみたように見えるので, で, 後ろ向きなんですけど, これが
	そうですね, 背, 人がこれが良くわからないんですけど (d2), 人が向かい合っているイメージに見えます。	手かなと[d3]。最後まで立ってるのは説明できなかったんですけど。
1'17''		<W: Mpost: +p, ±, 1, 1: H: CS.>

Table 3-3-4  
事例T1のロールシャッハ記録(続き)

VIII	
<V>^	
44''①	動物が何かに登ろうとしている(図をpointing)。
V^	ちょっとこの部分が動物が見えて、何か登ろうとして見えます。以上です。
1'38''	
IX	
V<^>	
V^>V	何も見えないんですけど。(Edging)
^V	無いつていうのはあり?これが何かカブトガニっていうんですか、ピンクのところ
①	が甲殻類。
3'30''	
X	
15''①	こ、ここにー、モルモットというか、何か動物で何か引っかけ合っているものに見えますね、と、
②	この水色の、何か動物か虫か、何か生き物に見えます。
V③	何か顔に見えますね、これが目でこれが口[pointing],
1'30''	以上です。
	①[DIXIV]これがやっぱりしっぽもあるし、足もある。モルモットに近いものが向き合っている。何をしてくままでは考えなかったけど。<D: FM: +, ±, , 1: A: CS.>
	②[D I]ここが目に見えまして[S]。<D: F: +, , , 1: A: CS.>
	③ここが目[DV], ここが口[DIX], でもここが顎。これが鼻かなあ[D VII]。<dr=Sc: F: +, , , 1: Hd: CS.>

反応概念が定まっていないもの(Vカード①“コウモリ?鳥”, VIカード①ギターのような楽器, Xカード①“動物か何か”)が多くみられる。以上のことから、事例T1のF+反応の中では、漠然図形のあいまいな形体特徴をそのまま受動的に受け取ったような、形体特徴が明確でない反応がかなりの多数を占めることがわかる。残りのF+反応はすべてP反応であり(IIIカード①“人”, VIIカード①人, VIIIカード①“動物”),ここでも、誰しものが気づき易いような形体特徴を受動的に感受したことによる反応である可能性が高い。このような形体認知の特徴は、事例Uで見てきたような形体認知における細部の考慮と必要な抽象と捨象に必要となる葛藤の許容と能動性の不全に対応している。また、ここでも事例Uと同様に、発達的には初期集約的把握型に示される識別的な外輪郭形体による認知の支配・主導性が未確立であることにもなり、そのことの意義としての個体化と自我境界の確立不全をも示唆するものと考えられる。

④色彩反応について 事例T1の色彩関連反応は1個のみであり、しかも単彩(白黒)と明暗・陰影を用いたものである。したがって、普通の色彩を用いた反応は全く見られないことになる。辻(1997)は、図版刺激の感受から反応の産出に至るまでの反応産出過程に照らして、形体反応に集中することが感受の段階における色彩刺激の未分化、ないしは、分化を許容できない狭窄により生じうることをとらえ、形体反応が“体験可能性の狭窄化—体験可能性の貧困と未分化”という意義を持ちうることを論じている。本事例の場合、形体

Table 3-3-5  
事例T1のスコア集計結果

I	R=15 TT=16' 53'' RT(Av.)=67.5'' RIT(Av.)=17.7'' RIT(Av. N. C.)=12.0'' RIT(Av. C. C.)=24.8'' RC(Av.)=3.6 RC(Av. N. C.)=5.6 RC(Av. C. C.)=5.2 (VIII-X)%=33.3
II	W=10(66.7%) [W=2 WS=3] D=4(26.7%) Dd=1(6.7%) [dr=1] S=4[Ss=3 Sc=1]
III	F=9(60.6%) M=2[Mpost=1] FM=2 VF=1[C' F]V=1
IV	F+=13(86.7%) [popular=5] Fpm=1(6.6%) F-=1(6.6%) Organization[h:l:n:d]=0:2:0:0 AQ=66.7
V	A=8(53.3%) [A=8 (A)=1] H=4(26.7%) [H=2 (dH)=1]
VI	CS=8(53.3%) AS=4(26.7%) CdS=1 QS=2

Table 3-3-6  
事例T1の反応領域の分布

	N. C.	C. C.
W	6	4
D	0	4
d	0	0
Dd	0	1
合計	6	9

注) N. C.: 無色彩カード C. C.: 色彩カード

認知がかなり正確であること、また、ある程度の運動反応が見られることを考慮すると、体験可能性の狭窄化を反映している可能性が高いものと思われる。

⑤その他 反応内容について、動物反応が7個(46.7%)と比較的多数を占める。その他の反応内容スコアが4種類(人間, 解剖, 風景, 楽器)にすぎず、反応着想の狭さが見受けられる。

#### 第4項 事例検討3

##### 1)問題と目的

自己臭恐怖を訴えた患者のロールシャッハ検査法の結果を検討することにより、自己臭恐怖の心理的特徴を探る。

##### 2)事例 T2

事例 T2 は 26 歳の男性。10 年近く前から臭いが気になって人の多いところで緊張する。近くの人が鼻をすすったりむせたりするため、仕事もうまくできないことで受診。事例 T2 の結果も Table 3-3-7 から Table 3-3-9 に示す。

##### 3)結果

Table 3-3-7  
事例T2のロールシャッハ記録

領域番号, スコアリングは阪大式

スコア記載順<Location: Determinant: Basic Form Level, Specification, Organization, Rating: Content: Sentence Type>

「」は検査者の言葉。「Q」は「なぜそう思いましたか?」

Card	Test Proper	Inquiry
I		
∧1' ''	① コウモリ。いろいろですか? 「そうです ね。」	①黒いっていうのと、この広がってるのが羽、翼?に見えるのがコウモリ [Cover Card]。「コウモリはなぜ?」黒いというのが一番。「羽?」羽はこれですね、羽ばたいている感じが[D3内を縦に lining]。<W:FC':+p, ±, ,1:A:AS>
40' ''	② (首をひねる。) カメみたい。 V (なさそうな仕草) ないです。	②言い方が…仮面です(検査者の聞き間違え)。かぶると目がこう[S] (かぶるgesture)。透けてみるような仮面に見えました。「V向き?」こっちはです(V方向)。こうつけると(gesture), ここの二つが目[下S×2]「なぜ?」んー, なぜ, うーん, パッと見た感じ。<WSs:F:-2, , , -:Mask:CS>
1' 13' ''		
II		
V > V		
< ∧	(首をひねる) 何も思いつかないですね (見続ける。)	
V	分らないです。	
1' 20' ''		
III		
∧12' ''	① 人が向かい合って座ってるような。	①これが顔に見えます, でー, これが足に見えたんで[通常の間像で『手』にあたる個所], で, 人かなと思ひまして。「向かい合って座っている?」んー, これがおしりといったんです[DIV側のDVI下部 round]。あ, これ[DIV]にすわっているのかなと思ひました。「なぜ?」これが椅子みたいに見える[DIV], で, これおしりかなと思ひて, 座ってるのかなと。<D:Mpost:-2, ±, 1, -:H:CS>
< V		
35' ''	② 人が向かいあってなくているような感じが。 > ぐらいしか思いつかないです。	②V反対から見たときに, 次はこっちに顔, ここが後頭部なので[DVIII内側をlining]。で, 向かい合っていないように感じました。「人?」んー, んー, パッと。「もう一度?」ここが頭で, で, この出ている部分が鼻みたいに見えるんで[D VIII外側をlining]。<D:Mpost:-2, ±, 1, -:H:CS>
57' ''		
IV		
V > V		
28' ''	① 黒い鳥。	①これが頭に見えて[D I], これが翼に見えたんで[DIII], 鳥かなと思ひました。「黒い?」黒い (Laugh)。<W:F⇔C':+, ±, ,1:A:AS>
∧ V V		
②	大きな木, 黒い。ぐらいです。	②これが[W-DI]…どうしたらいいかな, これが木という感じで[DI→DV]。で, これが葉っぱみたいな感じから[W-DI, round]。「黒い?」そうですね, 形が木にみえたんで, 黒い木というのはないんですけどどう言ひました。<W:F⇔C':+, ±, ,1:P1t:AS>
52' ''		
V		
V 14' ''	① チョウチョ。	①Vこれが触角[d3], で, これが羽に見えて[D1], チョウチョと思ひまして。<W:F:+p, , ,1:A:AS>
∧ V > ∧		
V < V ∧		
②	鳥。ハイ。	②∧こっち見ると, んー, これが頭で[d1], これが翼[D1]。<W:F:+, , ,1:A:AS>
56' ''		
VI		
V > V		
20' ''	① 木	①これは木の幹[D4]。これは葉っぱかなんか[D2]。それで木かなと。<W:F:-2, , , -:P1t:AS>
∧ V > ∧		
40' ''	② ギター, これしか思いつかないです。	②あんまり知らないんですけど, ここがチューニング[D I -DIV]。「ここ[D II]は?」なんでしょう, 弦があるのかなと。<W:F:+, , ,1:Mus.:AS>
52' ''		
VII		
12' ''	① 人が向かい合っている。	①これが髪の毛ですかね[d2], で, 目, 鼻, 口[DIII], 向かい合ったように見えたのでそう言ひました。「ほかはどう?」んー, これは, んー…正座して向かい合ってるのかと[D II]。<W:Mpost:+p, ±, 1, 1:H:AS>
V < V	・・・ぐらい。	
36' ''		
VIII		
V 14' ''	① きれいな花。	①(V)これが緑の葉っぱ[DVII], で, この赤い部分が花びらに見えてきたのでそう思った[D II +D I ×2]。「なぜ。」チューリップにも似ていますので, 形が違いますので花かなと。<W:CF:+, ±, ,1:P1t:AS>
> ∧	ぐらいです。	
38' ''		

Table 3-3-7  
事例T2のロールシャッパ記録（続き）

<p>IX V14' ① 花。 A② どっちから見ても花に見える感じが。ぐ らいです。 39''</p>	<p>①これが緑の葉っぱで[DII], であるのかなと思って[DI], 花びら。 「どっちから見ても？」&lt;dr:CF:+, ±, , 1:P1t:AS&gt; ②こっちから見ても緑の色で, このオレンジも[DIII]。「オレンジの方 にもある？」ハイハイ。「なぜ？」んー, 形と色がきれいだったの で。「ここは[DIII]？」これはーこれは何でしょ…土かなあ。&lt;dr:CF:- 2, ±, , -:P1t:CS&gt;</p>
<p>X V14' ① 虫がいっぱいいる感じがします。 39' ② メイクした人の顔。ぐらいです。 48''</p>	<p>①V毛虫とかカブトムシとかクワガタとかなんなんかいっぱいいるよ うな感じなので。それで。「どれのこと？」この緑のが毛虫[d1], こ れがクモかな[DI], で, これがカブト虫[D8]かなーっと。&lt;W:F/C:+p, ±, 1, 1:A:CS&gt; ②これが目に見えて[D5×2]。これが眉毛みたいで[DIV], でカラフル でメイクしている感じだったので。&lt;dr=Sc:FC:+, ±, , 1:P1t:AS&gt;</p>

①反応数, 反応時間, 反応表現等について 反応数は16個とやや少ない。RIT(Av.)は全体で14.3秒。無色彩カードと色彩カード別でみてもほとんど差は見られない。IIカードで反応の失敗がみられ, 墨色と赤色が複雑に入り混じるこのカードで対応が困難であったものと思われる。最初の方のカードでは, 首をひねったり, “わからない”, “～ぐらいしか思いつかない”という表現がみられ, 反応の困難さがかいまみられる。文末表現は, 言い切り型のAS(断定型)が68.8%と多数を占めるので, この文章型が示唆する“『なぞらえて見ている』ことへの気づきは不確実である”という特徴が当てはまる可能性がある。

②反応領域について ここでも反応領域はW%が68.8と基本的には全体反応傾向にある。かつ, 無色彩カードではすべて全体反応であるのに対して, 色彩カードでは部分反応がみられる点もこれまでの事例と同様である。いずれも受動的な領域選択を示唆している。

③(外輪郭)形体認知の動向 F+%が68.8と比較的正確な形体認知による反応が多数を占める。ただ, F-となる反応のひとつであるIIIカードの“人が向かい合って座っている”では, 通常みられやすい人間像(DII)の頭部と上半身を認知しながら, 人間の全体像を見ることができていない。その理由としては, 図形上は上半身に当たる部分と下半身(足)にあたる部分の間に隙間があり, 人間の全体像を認知するためには両領域を包含しなければならないが, 事例の場合は, 上半身に当たる部分に頭部を着想したもののその領域に反応がとどまり, わずかに離れた下半身に当たる領域を含めることができなかつたためであると考えられる。図版上の領域の区分に縛られてそれが反応の区分ともなっており, 全体像の正確な認知を重視することができていない。その他にも, 事例には4個のF-反応がみられるが, いずれも部分は正確に見ることができているが全体像の認知に失敗している。辻(1997)は, 形体認知の成立過程として, “①被検者に蓄積された記憶像と図版図形の部分的な一致,

Table 3-3-8  
事例T2のスコア集計結果

I	R=16 TT=6' 35'' RT(Av.)=32.2'' RIT(Av)=14.3'' RIT(Av. N. C.)=15.0'' RIT(Av. C. C.)=13.5'' RC(Av.)=2.4 RC(Av. N. C.)=5.8 RC(Av. C. C.)=1.8 (VIII-X)%=31.3
II	W=11(68.8%) [WS=1] D=2(12.5%) Dd=3(18.8%) [dr=3] S=2[Ss=1 Sc=1]
III	F=5(31.3%) M=3[Mpost=3] FC'=1 F⇔C'=2 FC=1 CF=3 F/C=1
IV	F+=11(68.8%) [popular=4] Fpm=0(0.0%) F-=5(31.3%) Organization[h:l:n:d]=0:4:0:0 AQ=68.8
V	A=5(31.3%) [A=5] H=4(25.0%) [H=3 Hd=1]
VI	CS=4(25.0%) AS=11(68.8%) CdS=1

Table 3-3-9  
事例T2の反応領域の分布

	N. C.	C. C.
W	9	2
D	0	2
d	0	0
Dd	0	2
合計	9	6

注) N. C. : 無色彩カード C. C. : 色彩カード

→②一致をみた部分とそうでない部分との分離，→③一致をみた部分を部分として包含する概念の全体像の確定と，その全体像からのフィードバック”という流れを上げ，③の過程が確立されると，通常はそれが支配・主導性を持つとしている（辻，1997，p.57）。事例 T2 の上記の F-反応の特徴は，この③の過程が十分に働いていないことを示唆している。この全体像認知においては，事例 U と事例 T1 で問題となった“細部の考慮と必要な抽象と捨象”（辻，1997）が必要となってくると考えられる。したがって，ここでもその処理に必要な葛藤の許容と能動性が発揮されていないことになる。その分受動的な形体認知となるが，特に前述のⅢカードの反応において認知した部分領域に縛られてしまうことに現れていたような柔軟性の欠如が問題になると考えられる。実際，事例 T2 には比較的多数の F+反応がみられるが，“鳥”“コウモリ”などの翼状動物の反応が 4 個，“人間”が 3 個，“花”が 3 個，“木”が 2 個，“顔（仮面）”が 2 個と，ほとんど同じ反応の繰り返しによっている。その意味では，F+である以上正確な形体認知であるが，それ以前の同じ反応を繰り返したような柔軟性の乏しいものであることが推測される。

④色彩反応について 事例には色彩を用いた反応が比較的多くみられる。主なものにⅧカ

ードとⅨカードの“花”があり，この“花”反応は，通常色彩と形体の両者が同等に用いられる複雑なもので，“一次性形体色彩複合”とよばれる（辻，1997）。一次性形体色彩複合は，形体と色彩の両者を同程度に重視して用いる能動性が必要とされており，事例の反応もそのような能動性を反映している可能性はある。しかし，Ⅸカードの反応では，カードの正方向でも逆方向でも“どちらに見ても花に見える感じ”としているが，形体上で両方向の見え方はかなり異なる。それにもかかわらず同じ“花”と反応していることは，形体ではなく色彩重視で決定されている可能性が考えられる。

### 第5項 考察

以上のように，典型的に受動的な反応姿勢を示したと考えられる強迫性障害を呈した事例Uに関する解析をもとに，自己臭恐怖を示した事例T1，ならびに，事例T2のロールシャッハ検査結果について検討してきた。事例Uの検討の結果から，ロールシャッハ検査法における受動的な反応姿勢は，反応領域の側面では，全体反応優位な領域選択，ならびに，無色彩カードと色彩カードの対比における色彩カードでの部分反応の増加に示されることが示唆された。また，輪郭形体認知の動向の中では，形体特徴の不明確な反応群やP反応のような形体特徴のわかりやすい反応の多さ，色彩反応では色彩優位な反応決定因に現れることが示唆された。

このような事例Uの受動的な反応姿勢は，平素の強迫性障害に示される受動的な性格傾向を反映しているものと思われる。つまり，強迫性障害は，通常誰もか気になるような不安や心配（事例の場合は，事件や事故，災害への恐怖）にとらわれ，繰り返し確認したり考えたりするために次の行動に移れなくなる点に共通する特徴がある。そのようなかたちで，不安や心配に受動的に支配され，次の行動に移る能動性を発揮できないという側面が上記の特徴に対応するものと考えられる。

以上の特徴を踏まえて事例T1のロールシャッハ検査結果を検討したところ，事例Uにかなり類似した特徴がみられた。つまり，反応領域については，全般的には全体反応優位な傾向がみられ，無色彩カードと色彩カード別で見た場合には，色彩カードでの部分反応の増加がみられた。前者については，この課題本来が持つ“課題は全体で”という規定性に受け身に従う傾向を示唆するものであると考えられ，また，後者については，色彩が持つ“受け身の感覚的な直接性で感じ取ることができる違い”による分割を示すものであり，いずれも領域選択における受動性を反映するものと考えられた。形体認知の動向についても，F+%の値そのものは大きく異なるものの，個々の反応の様態を見ていくと，反応概念が明



確でないもの、形体特徴が明確でないもの、IVクラス概念による反応、反応概念が定まらないものが多数を占める。したがって、漠然図形のあいまいな形体特徴をそのまま受動的に受け取ったような、形体特徴が明確でない反応がかなりの多数を占める点で事例Uと共通していることが示された。そして、このことは、形体認知における細部の考慮と必要な抽象と捨象に必要となる葛藤の許容と能動性の不全に対応しているものと考えられた。また、以上のような形体特徴の曖昧な反応は、ここでも事例Uと同様に、発達的には初期集約的把握型に示される識別的な外輪郭形体による認知の支配・主導性が未確立であることにもなり、そのことの意義としての個体化と自我境界の確立不全をも示唆するものと考えられた。

一方、上記以外の点については、事例Uと事例T1にははっきりとした違いもみられた。つまり、色彩反応については、事例T1では、実質的な色彩反応は単彩（白黒）と明暗陰影を用いた1反応のみであり、それ以外では色彩を用いた反応は見られなかった。反応の時間的特徴の中で色彩カードでの初発反応の遅延が生じていることを考慮すると、色彩を反応に参加させることができない体験可能性の狭窄化が生じているものと推測される。また、事例Uは、その言語表現の特徴や発話量の多さにも表れているように、反応産出過程における迷いや逡巡の表現が明らかに見てとれる。事例Uは、何らかの反応着想を得ているにもかかわらず、語尾を濁したり反応概念を曖昧化したり、あるいは、いずれとも決めないままに反応を終えることを繰り返している。その意味でいえば、事例Uは反応の明確な選択・決定が行えていない点に特徴があり、最終的にはそれを図版側の問題に委ねてしまうためにせいぜい曖昧な形体の反応にとどまっている。それに対して、事例T1では、部分的には迷いの言葉は見られても、それらは全面的なものではない。むしろ、事例T1は、反応することへの戸惑いや自信の無さの表現が随所に見受けられ、前述の体験可能性の狭まりを考え合わせても、何に見えるかという課題そのものに対応することへの戸惑いが目立つ。その意味では、本課題に明確に対応するために必要な、細部の考慮と必要な抽象と捨象の作業、ならびに、そのことに伴う葛藤の許容と能動性の発揮そのものが未だ身についてないことに重点があるように思われる。

事例T2においても、反応領域については事例Uと同様の受動的な領域選択の特徴がみられた。つまり、基本的には全体反応が優位であり、同時に、無色彩カードと色彩カード別では、色彩カードでの部分反応の増加がみられた。一方で、形体認知の様子はかなり異なったものとなった。事例Uにおいては、Fpmとスコアされる反応や形体特徴が不明確な

反応が多数みられたが、本事例ではそのような特徴は見られなかった。むしろ反応概念自体はかなり明確な形体特徴を持つものが多く、かつ、基本的には正確なものが主流を占めた。したがって、一見するところ両事例の反応産出の様態はかなり異なるもののように思われた。しかしながら、F-反応に特徴的に示されるように、部分的には正確にとらえられていても、全体像を識別的な形体で明確にとらえる力には不足がみられた。そして、そのために必要な、細部の考慮と必要な抽象と捨象の処理が働いておらず、それに伴う葛藤の許容と能動性の発揮は見られないものと考えられた。そのような意味では、事例 T2 も受動的な反応姿勢にあるものと推測された。同時に、このことは初期集約的把握型に示される外輪郭識別形体による認知の支配・主導性が身につけていないことを示唆し、自己の個体化と自我境界の確立が未達成であることを反映している可能性がある。

以上のようなかたちで、事例 T2 にも受動的な反応特徴がみられたことになるが、ただし、前述のような反応特徴の違いに示される差異が明確に見受けられた。事例 U の反応表現についてみていくと、迷いや困惑の表現が多く、かつ、やや知的な表現とみなせるような集合概念や抽象概念が少なくない。迷いや困惑は事例の内面的体験に属するものであり、かつ、知的な概念処理も同様であるから、事例 U はかなりの内面的体験への親和性がみられることになる。一方で、事例 T2 をみると、断定的な文末表現に代表されるように、実際のそのもの自体を見るかのような反応表現になっているとともに、基本的には、すべて具象概念による反応となっている。後者の特徴は、ロールシャッハ検査法の中では“具象しぱり”として知られるものであり（辻, 1997）、具象、すなわち、目に見えるものだけに限定された認知の様式を反映するものとされる（辻, 2003）。事例 T2 の形体認知の特徴の中で、類似の反応概念の繰り返しが多い点について柔軟性のなさが指摘されていた。このことを併せて考慮すると、事例 T2 は、事例 U の示したような内面的体験への親和性がなく、むしろ目に見える外的な体験に限定された体験様式が主流になっているものと考えられる。

以上のように見てくると、事例 T1、事例 T2 ともに事例 U と類似している点とそうでない点が見受けられた。しかし、基本的には反応領域、ならびに、形体認知の動向に受動的な姿勢が見受けられ、かつ、後者の特徴が識別的形体による認知の支配・主導性の未確立を示唆するもので、個体化と自我境界の不全に対応しているという点では共通性がみられた。第 2 節において、対人恐怖症の体験構造について、原体験に由来する融合・合一的な体験世界から見分けと区別の働きが育ってきた中で、その見分けと区別が自分自身の見分けと区別にまで至った際に体験される不安や恐怖に対し、受動的に回避しようとする点に

特徴があることを考察した。ロールシャッハ検査法の中にみられる外輪郭識別的形体による認知は、この区別と見分けの働きの発達と対応しているものと考えられるので、事例 T1 と事例 T2 にみられた識別的形体認知の不全の様態は、対人恐怖の体験構造の中で推測された自分自身の見分けと区別の未確立を示唆するものと言える。そして、同時にロールシャッハ検査法の中でみられた受動的な反応姿勢が、両事例の全般的な対応様式の受動性を示唆しているものと考えれば、以上のロールシャッハ検査法上での特徴は前述の不安や恐怖に対する受動的な対応姿勢に一致するものと考えられる。以上のように見ると、事例 T1 と事例 T2 に示された反応特徴は、第 2 節で論じた対人恐怖の体験構造を基本的に支持しているものと考えられる。

## 第4節 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応（研究5）

### 第1項 問題と目的

第3章第1節において、対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な他者認知の様態を確認したうえで、第2章で検討してきた自己の二重構造を駆動すると考えられる誇大自己と自己愛の概念を再検討することにより、その背景に幼若な心理の影響を推定した。第2節においては、原体験理論からこれらの否定的な他者認知の構造を考察し、その結果、そのような否定的な他者認知が、原体験の融合・合一的な体験世界から見分けと区別が発達し、それが自己の見分けと区別に到達した際に体験される不安や恐怖を、受け皿となる同世代同年代の友人関係との間で合一的に位置づけた結果生じるものと推測された。また、そのような体験構造を基盤として、対人恐怖傾向ではそのような体験に対して受け身な回避姿勢で対応し、自己愛傾向では怒りの情動的反応によって能動的に排斥しようとする点に特徴があることが論じられた。そのうえで、第3節においては、臨床資料により対人恐怖の体験構造を確認するために、自己臭恐怖を呈したロールシャッハ事例に対して形式・構造的側面からの解析を行った。その結果、反応領域、ならびに、形体認知の様態に受動的な反応姿勢が確認されるとともに、自己の個体化と自我境界の確立に対応する識別的な外輪郭形体による認知の支配・主導性に問題があることが示唆された。後者について自己の個体化と自我境界の確立がこれまで論じてきた自分の見分けと区別の確立のことを意味していることを考慮すると、以上のロールシャッハ事例の解析結果は、第2節で論じた対人恐怖傾向の体験構造を示唆しているものと考えられた。

以上の検討を通じて、対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な他者認知の構造に関する理論的な整備が行われたものと考えられる。したがって、次の段階としては、そのような否定的な他者認知の特徴を実証的な調査研究を通じて検証する必要がある。しかしながら、以下に示すように対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知を測定する手法はいまだに確立されていない。そこで、本節では、これまでの先行研究を参考に対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な他者認知を測定する手法を開発することに取り組む。

これまで、特に人間の認知や判断の特徴やゆがみに着目した研究の中で、多様な否定的な他者認知のあり方が検討されてきた。その中で、特に比較的広く検討されているものに、対人葛藤場面における否定的な他者の意図の判断がある。この分野で、近年系統だっ

た研究成果を報告しているのがDodgeら (Dodge, 1980; Crick & Dodge, 1994) による“敵意帰属バイアス”の研究である。敵意帰属バイアスとは、攻撃的な児童に特徴的にみられる“対人挑発場面”の認知様式であり、ネガティブな出来事に直面した際それを相手の敵意によるものと認知しやすい傾向を指す (Dodge, 1980; Steinberg & Dodge, 1983)。攻撃的な児童とそうでない児童とを比較した場合、相手の意図 (敵意的であれ善意的であれ) が明白な場面に両者の間で差異は見られないものの、“相手の意図が曖昧な否定的状況”においては、攻撃的な児童はそうでない児童よりもより頻繁に相手の敵意に帰属することが知られている。その結果、攻撃的な児童は、対人挑発場面において相手に対する報復的行動へと向かいやすく、このことが攻撃的行動の頻繁な発生に結びつくものと考えられている。

この敵意帰属は、その後の研究でいくつかの認知処理過程と関係することが明らかにされている。すなわち、認知処理の性急さ (Dodge & Newman, 1981) や対人的手がかりへの注意欠如 (Dodge & Newman; 1981, Dodge, Murphy, & Buchsbaum, 1984), ならびにそれと表裏の関係にあるセルフ・スキーマの優勢 (Dodge & Tomlin, 1987), あるいは、内面的な脅威感情の活性化 (Dodge & Somberg, 1987) などが敵意帰属や攻撃的行動を促進する。以上の研究成果を受けて、Dodgeらは、対人状況の表象化段階から行動の実行段階にまでいたる過程を包括的にとらえた“社会的情報処理モデル”を提起している (Crick & Dodge, 1994)。この社会的情報処理モデルは、その後の膨大な調査実証研究により支持されている (Akhtar & Bradley, 1991; Crick & Dodge, 1994; Orobio de Castro, Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002; 吉澤, 2005)。

また、Dodgeらに始まる敵意帰属研究は、その多くが“場面想定法”と呼ばれる特殊な測定手法を用いている点においても特徴的である。これは、調査協力者に対し、ある具体的な対人挑発場面を提示し、その場面が実際に自分自身に生じたと想定させ、その事態に対する調査協力者の判断を報告させるものである。Orobio de Castro et al. (2002) によると、場面提示方法については、オーディオ機器や調査者の朗読による音声提示が最も多く、次いで、ビデオ映像による提示が主流を占めている。その他、文章による提示、ステージ上での実演、絵画などの手法が用いられている。また、回答方法としては、自由回答、つまり、インタビューやビデオ記録をもとに調査者が評定をおこなう手法がもちいられることが多く、その他、調査協力者自身による多肢選択法、評定尺度法が用いられている。

以上のような特殊な方法がもちいられるのは、第一にはDodgeによる初期の研究の主な

対象者が学童期の児童生徒であったことによるものと思われる。低年齢の調査協力者は、日常的な体験を想起し自己報告することが一般に困難であると予想されるため、このような手法が用いられたのである。加えて、より実際経験に近いかたちで調査協力者の体験を報告させることを重視していることも関係している。敵意帰属のような認知様式は、その状況下で一時的に体験されるものがあり、しかも、体験内容がかなりネガティブなものであることから必ずしも明確に自覚されるとは限らない。そのため、実際経験に近い体験を調査協力者に与え、その時の体験を直接報告させる必要性があったものと考えられる。

以上のようなDodgeらによる敵意帰属バイアスは、他者から何らかの損害を被る対人場面において、それを他者の敵意や悪意によるものと位置づける傾向を指す。その背景には、他者を攻撃的で敵意的なものみなすとともに、卑屈でずるがしこい、自分勝手に横着ななど、否定的に認知する姿勢があるものと考えられる。第3章第2節において、自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の特徴として、他者を攻撃的で敵意的なもの認知するとともに、弱くずるがしこいと否定的にとらえたり、意味がない、無価値なものと脱価値化してとらえることが推定されることを論じてきた。以上のような敵意帰属バイアスの特徴は、そのような自己愛傾向における否定的な他者認知の特徴と符合するものであると考えられる。したがって、対人場面における他者の否定的な意図判断としての敵意帰属は、自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の現れであるとみなすことができる。

一方、同じ箇所でも論じたように、対人恐怖傾向については“他者から嫌われた”、“人から避けられた”といったかたちで他者を否定的に認知しやすい傾向が推測される。したがって、対人葛藤場面における他者の意図の判断としても“他者に嫌われたから”や“他者に避けられたから”とみなしやすいことが推定される。もちろん、このような否定的な意図判断がどのような対人場面においても生じると言うわけではなく、そのような判断を誘発するような他者の行動が関連するものであると思われる。そして、それはおそらくは、何らかのかたちで他者との関係が断たれるような場面であると考えられる。そこで、このような場面を以下では“対人疎外場面”と呼び、そこで生じる否定的な他者の意図の判断を“嫌悪判断”と概念化する。

この嫌悪判断と類似する主題を取り扱った研究としては、Crickを中心とした“関係的攻撃”の研究があげられる。Crick (1995) は、従来の敵意帰属研究が身体的攻撃や言語的攻撃などの顕在的攻撃のみを取り上げていることを指摘し、それらとは性質の異なる関係的攻撃の重要性を主張した。関係的攻撃とは、いわゆる“仲間外れ”や“無視”などにみられよ

うな、仲間関係を介して相手を攻撃することを指している。その意味で、本稿で取り上げている“嫌悪”と類似した現象である。しかしながら、Crickの关系的攻撃においては、嫌悪感の表明や仲間はずれの仕掛けは攻撃の手段に過ぎず、他者の意図としては従来通り敵意のみが問題とされている。したがって、他者の意図そのものとしての嫌悪に焦点を当てる本研究とは趣旨が異なっている。

また、別の研究としては、久木山による“自責帰属”の概念があげられる。久木山（2000, 2002）は、思春期・青年期における引っ込み思案行動を社会的情報処理モデルの観点から研究した中で、引っ込み思案行動を説明する上では敵意帰属のみでは不十分であることを指摘している。そして、アグレッション理論を参考に、社会的情報処理モデルの解釈段階に“自責帰属”を導入し、目標設定段階、反応検索段階、反応実施段階についても新たな改変を施した“社会的情報処理尺度”を作成した。ここでいう自責帰属とは、“意図の不明瞭な場面において自己に過失もしくは欠陥があることを帰属するバイアス”（久木山, 2000, p.226）を指し、本稿で取り上げる嫌悪的な意図との類似性が高いものと思われる。しかしながら、久木山（2000, 2002）による自責帰属の研究は、対人葛藤場面における自己帰属に焦点を当てており、類似の現象を対象とはしているものの、否定的な他者認知の方を問題としている本研究の趣旨とは異なるものと考えられる。

以上のように、嫌悪判断そのものを直接取り扱った研究はいまだほとんどおこなわれていない。したがって、対人恐怖傾向における否定的な他者認知を検討するために、対人疎外場面における嫌悪判断を適切に抽出する手法を開発する必要がある。

なお、青年や成人における敵意帰属の測定手法は、すでにいくつかの研究において作成され調査に用いられている（Epps & Kendall, 1995; Homant & Kennedy, 2003; Tremblay & Belchevski, 2004; Combs, Penn, Wicher, & Waldheter, 2007）。しかし、場面想定法ではかなり具体的で詳細な場面設定が必要となるため（Crick & Dodge, 1994）、それぞれの社会文化的背景を色濃く反映したものとなっている。そのため、欧米圏の青年男女を対象に作成された先行研究の場面内容をそのまま日本人青年に用いるのは妥当ではないと考えられた。相澤（2009）は、この問題意識に立って、前掲の先行研究と久木山（2000, 2002）による研究を参考にしつつ、あらたに一般大学生・大学院生を対象に対人葛藤場面の内容を収集整理し、複数の対人挑発場面と対人疎外場面を作成している。ただし、その後の質問紙調査の結果、準備された場面の多くで敵意判断や嫌悪判断の出現頻度が低く、十分な数の場面を確保するまでには至っていない。

Table 3-4-1  
場面想定法における各場面の内容の概略

<b>【対人挑発場面】</b>
①見知らぬ男性に路上で衝突される場面（衝突） <sup>注)</sup>
②自分が教室で読書しているときに灯りを消される場面（明り）
③タクシーに乗車拒否をされる場面（タクシー）
④授業でプレゼンテーションを非難される場面（発表）
<b>【対人疎外場面】</b>
①電車内で隣の同世代の人に席を立たれる場面（電車）
②自己紹介中に席を立たれる場面（自己紹介）
③路上に屯する若者たちから笑い声が聞こえる場面（笑い声）
④授業のグループ分けに取り残される場面（グループ）

注)カッコ内は場面の略称。

そこで、本研究では、予備調査として、場面想定法に用いる対人挑発場面、ならびに、対人疎外場面を新たに構成し、それに対する自由記述回答を収集分析することで、各場面の妥当性の検討を行った。そして、その中で一定頻度以上に敵意帰属や嫌悪判断に相当する回答のみられた場面について、本調査において評定尺度を付したものを作成し、その信頼性と妥当性を検討することとした。

## 第2項 予備調査

1) 場面作成の手続き 相澤（2009）は、先行研究（Epps & Kendall, 1995; Homant & Kennedy, 2003; Tremblay & Belchevski, 2004; Combs, Penn, Wicher, & Waldheter, 2007; 久木山, 2000, 2002）を参考に、心理学を専攻する大学生、大学院生を対象に意図の不明確な他者による対人葛藤場面を7場面（対人挑発場面4場面、対人疎外場面3場面）収集している。しかしながら、それらを一般大学生に実施したところ、適切に意図判断を抽出しえたものは5 場面（対人挑発場面3 場面、対人疎外場面2 場面）にとどまった。そこで、本研究では、さらに新たな場面（対人挑発場面1場面、対人疎外場面2 場面）を追加したものを使用した。以上の8 場面（Table 3-4-1）を質問紙を介して文章により調査協力者に提示し、その場面が生じた理由を問う質問項目（質問①：どうしてその人は〇〇をしたのだと思いますか？）と、その時の情緒的反応を問う質問項目（質問②：その時どのような気持ちになりますか？）に対して自由記述式による回答を求めた。なお、以上の場面のほかに、緩衝場面として意図の不明確な他者からポジティブな出来事がもたらされる場面を2 場面付加した。

2)調査対象者と調査期間 調査対象者は、関西圏の4年制大学に在籍する学生267 名（男性63 名女性203 名、平均年齢19.50 歳）であった。調査期間は2009 年5 月から6 月であった。調査の実施にあたっては、大学の講義時間中に質問紙を配布しその場で回収した。



Table 3-4-2  
各場面の予備調査協力者の概要

場面	総数	性別（男性：女性）	平均年齢
衝突	233	61：172	19.61
明り	225	60：165	19.68
タクシー	229	59：170	19.62
発表	227	53：174	19.68
電車	231	60：171	19.62
自己紹介	218	59：159	19.70
笑い声	225	60：165	19.60
グループ	219	50：169	19.69

なお、調査開始当初は10場面のすべてを含む質問紙を用いていたが、途中、調査時間が長引きやすく一部の授業内では実施が困難となった。そのため、対人挑発場面と対人疎外場面各3 場面と緩衝場面2場面に場面数を削減した調査質問紙をもちいることとした。実施する場面を適宜選択し、全体として各場面に対する回答者数が同数になるように工夫を試みたが、調査実施の制限上厳密には困難であった。結果的に得られた各場面に対する回答者数はTable 3-4-2 のとおりである。

3)各場面の自由記述回答の分析 各場面に対し得られた質問①②に対する自由記述回答をチェックしたところ、多くの回答で複数の回答内容が含まれていることがわかった。そこで、各回答を内容ごとに分離し項目化したものを、心理学・臨床心理学を専攻する大学生、大学院生、ならびに、臨床心理士1名とともに、字句表現上の同一性をもとに分類整理しそれらを小分類とした。そして、それらの小分類を本研究の目的に照らして検討し、以下のように大分類を決定した。

まず、対人挑発場面に対する質問①への自由記述回答については、場面設定の違いによる影響を受けながらも、相手の否定的な意図（敵意、悪意、いじめ、苛立ち、不機嫌、怠慢、性格の悪さ、自己中心さなど）が各場面で一定程度の割合で認められた。そこで、それに相当する小分類を“敵意帰属”の大分類にまとめた。また、残りの小分類のうち、“わからない”、“その他”以外については、相手の過失や何らかの不可避な事情、偶然、自分自身の要因によりそのような事態が生じたとするもので、いずれも非敵意的な判断となっている。それゆえ、それらをまとめて“非敵意帰属”の大分類にまとめた（Table 3-4-3）。

次に、対人疎外場面に対する質問①への自由記述については、かなり内容的に共通性のある否定的な意図が認められた。それらは、自分に対する嫌悪、忌避、無視、侮辱などによってそのような場面が生じたとする判断である。したがって、それらに相当する小分類を“嫌悪判断”の大分類にまとめた。また、残りの小分類は、前者と同様に非意図的な判断

Table 3-4-3  
対人挑発場面における質問①「どうしてその人は～をしたのだと思いますか」への自由回答反応の整理\*

場面 大分類	【衝突】	【明り】	【タクシー】	【プレゼン】
敵意帰属	<ul style="list-style-type: none"> <li>私が避けると思った(4)</li> <li>苛々していた(29)</li> <li>避ける気がない(10)</li> <li>自分のことしか考えない(8)</li> <li>私が邪魔だった(1)</li> <li>異常な人(4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>性格が悪い(5)</li> <li>いたずら(10)</li> <li>嫌がらせ(52)</li> <li>からかい(18)</li> <li>意地悪(11)</li> <li>わざと(10)</li> <li>調子に乗って(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>機嫌が悪い(3)</li> <li>嫌がらせ(2)</li> <li>乗せたくない(23)</li> <li>めんどくさい(21)</li> <li>仕事をしたくない(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>性格が悪い(10)</li> <li>嫌がらせ(8)</li> <li>気に入らない(18)</li> <li>嫌い(14)</li> <li>気分が悪い(4)</li> <li>八あたり(2)</li> <li>ねたみ(3)</li> </ul>
非敵意帰属	<ul style="list-style-type: none"> <li>考え事をしていた(6)</li> <li>不注意だった(20)</li> <li>酔っていた(2)</li> <li>急いでいて周りが見えない(34)</li> <li>用事で急いでいた(17)</li> <li>急いでいた(65)</li> <li>急いでいて余裕なし(8)</li> <li>偶然(8)</li> <li>人通りが多かった(2)</li> <li>私がぼんやりしていた(2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちのことに夢中(5)</li> <li>自分の存在に気付かず(82)</li> <li>癖で(17)</li> <li>話に夢中(20)</li> <li>誰もいないと思った(21)</li> <li>周りが見えていない(5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>見えなかった(49)</li> <li>気付かなかった(84)</li> <li>急用があった(16)</li> <li>客が乗っていた(39)</li> <li>予約車だった(29)</li> <li>家に帰るところ(3)</li> <li>手の振り方が悪い(4)</li> <li>場所が悪い(2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見・考え方の相違(42)</li> <li>伝わらなかった(5)</li> <li>意味が分からない(22)</li> <li>発表がひどかった(83)</li> <li>準備不足(4)</li> <li>真面目・熱心な人(13)</li> <li>その人なりの考えがあった(11)</li> <li>そう思ったから(15)</li> <li>理解力がない(2)</li> <li>私のために(5)</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>スリ(2)</li> <li>分からない(2)</li> <li>その他(25)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(2)</li> <li>その他(7)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(5)</li> <li>その他(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(3)</li> <li>その他(5)</li> </ul>

\*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、( )内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列には、小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table 3-4-4  
対人疎外場面における質問①「どうしてその人は～をしたのだと思いますか」への自由回答反応の整理\*

場面 大分類	【電車】	【自己紹介】	【笑い声】	【グループ】
嫌悪判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>私が臭い(9)</li> <li>私が気持ち悪い(4)</li> <li>気に入らない(13)</li> <li>私のとなりが嫌(43)</li> <li>迷惑(音漏れ・荷物など)だった(9)</li> <li>誰かが気に入らない(3)</li> <li>気まずい(4)</li> <li>同世代が嫌(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>興味がない(6)</li> <li>つまらない(40)</li> <li>聞きたくない(10)</li> <li>自分のせい(8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>性格が悪い(3)</li> <li>自分が変だった(12)</li> <li>びくついていていてと思った(9)</li> <li>ねたにされた(8)</li> <li>馬鹿にされた(7)</li> <li>容姿がおかしい(12)</li> <li>自分のことを笑った(16)</li> <li>動作がおかしい(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>周りになじめていない(4)</li> <li>私の話しかけにくい雰囲気(3)</li> <li>私に関心がない(8)</li> <li>私と組みたくない(5)</li> </ul>
非嫌悪判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>用事があった(10)</li> <li>降りる都合(68)</li> <li>何となく(8)</li> <li>隣の車両が空いていた(22)</li> <li>隣の車両に友人がいた(31)</li> <li>窮屈だった(14)</li> <li>何らかの事情(9)</li> <li>降りるため(6)</li> <li>偶然(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>携帯電話のため(19)</li> <li>用事があった(55)</li> <li>トイレ(120)</li> <li>抜けたかった(5)</li> <li>体調が悪かった(6)</li> <li>偶然(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話が面白かった(74)</li> <li>何かおもしろいことがあった(35)</li> <li>盛り上がった・楽しかった(51)</li> <li>偶然(7)</li> <li>自分に関係ない(8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から行かなかったから(45)</li> <li>引っ込み思案・人みしり(3)</li> <li>出遅れた(8)</li> <li>親しい友人がいなかった(130)</li> <li>他が顔見知りで固まった(41)</li> <li>タイミング・運が悪い(3)</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(15)</li> <li>その他(8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(5)</li> <li>その他(10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない(6)</li> <li>その他(4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>その他(5)</li> </ul>

\*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、( )内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列には、小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table 3-4-5  
対人挑発場面における質問②「その時どのような気持ちになりますか」への自由記述回答の整理\*

場面 大分類	【衝突】	【明り】	【タクシー】	【プレゼン】
怒り	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ(80)</li> <li>苛立つ(20)</li> <li>礼儀知らず(7)</li> <li>謝れ(55)</li> <li>不快(19)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ(45)</li> <li>苛立つ(16)</li> <li>怒り(13)</li> <li>うっとうしい(12)</li> <li>めんどくさい(30)</li> <li>不快(10)</li> <li>非常識(9)</li> <li>あきれ(9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ(69)</li> <li>苛立つ(16)</li> <li>怒り(22)</li> <li>不快(12)</li> <li>クレーム・請求(9)</li> <li>マナー違反(15)</li> <li>タクシーを利用しない(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ(51)</li> <li>苛立つ(6)</li> <li>反論する(8)</li> <li>人間性を疑う(4)</li> </ul>
傷つき	<ul style="list-style-type: none"> <li>悲しい(8)</li> <li>驚く(25)</li> <li>嫌な気持ち(28)</li> <li>恥ずかしい(10)</li> <li>申し訳ない(5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(20)</li> <li>疑問(10)</li> <li>不安(7)</li> <li>悲しい(30)</li> <li>さびしい(16)</li> <li>悔しい(4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(18)</li> <li>悲しい(13)</li> <li>さみしい(9)</li> <li>恥ずかしい(4)</li> <li>残念(9)</li> <li>ショック・帰りたい(9)</li> <li>落ち込む(8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(11)</li> <li>ショック・泣きそう(19)</li> <li>恥ずかしい・情けない(32)</li> <li>困惑する・焦る(19)</li> <li>やめたい・逃げたい(9)</li> <li>悔しい(11)</li> <li>反省・申し訳ない(24)</li> <li>落ち込む(13)</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>痛い(10)</li> <li>気をつけてほしい(6)</li> <li>怪我がなく良かった(2)</li> <li>すぐ忘れる(8)</li> <li>諦める(6)</li> <li>何とも思わない(7)</li> <li>仕方ない(12)</li> <li>その他(13)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>やる気をなくす(4)</li> <li>周りを見てほしい(8)</li> <li>気にしない(11)</li> <li>仕方ない(20)</li> <li>その他(16)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次を待つ・探す(18)</li> <li>運が悪い(21)</li> <li>仕方ない(20)</li> <li>その他(13)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言い方を考えてほしい(8)</li> <li>そこまで言わなくても(7)</li> <li>大勢の前で言わないでほしい(18)</li> <li>ありがたい(7)</li> <li>悪い点を聞きたい(9)</li> <li>次にかかす(12)</li> <li>仕方がない(6)</li> <li>気にしない(11)</li> <li>その他(17)</li> </ul>

\*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、( )内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列には、小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table 3-4-6  
対人疎外場面における質問②「その時どのような気持ちになりますか」への自由回答反応の整理\*

場面 大分類	【電車】	【自己紹介】	【笑い声】	【グループ】
怒り	<ul style="list-style-type: none"> <li>怒り(4)</li> <li>不快(5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ・不快(13)</li> <li>失礼(17)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>腹立つ(44)</li> <li>不快(11)</li> <li>うっとうしい(2)</li> <li>馬鹿にする(4)</li> <li>迷惑・非常識(9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>めんどくさい(3)</li> <li>先生に不満(6)</li> </ul>
傷つき	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(17)</li> <li>傷つく(9)</li> <li>悲しい(26)</li> <li>不安になる(18)</li> <li>気になる(13)</li> <li>不思議・もやもやした気持ち(12)</li> <li>申し訳ない(11)</li> <li>自分や臭いを気にする(6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(10)</li> <li>悲しい・さびしい(26)</li> <li>傷つく・ショック(16)</li> <li>落ち込む・申し訳ない(12)</li> <li>不安・気になる(11)</li> <li>戸惑う(19)</li> <li>残念(3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(29)</li> <li>悲しい・ショック(6)</li> <li>驚く(4)</li> <li>不安(5)</li> <li>自分のことかと思う(21)</li> <li>気になる(13)</li> <li>恥ずかしい(6)</li> <li>さみしい(3)</li> <li>帰る・立ち去る(11)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>嫌な気持ち(6)</li> <li>悲しい(29)</li> <li>さみしい(65)</li> <li>あせる(14)</li> <li>困惑する(29)</li> <li>不安(10)</li> <li>反省・後悔(14)</li> <li>恥ずかしい(12)</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>疑問(11)</li> <li>どうでもいい(7)</li> <li>気にしない(33)</li> <li>何も思わない(61)</li> <li>何も感じない(5)</li> <li>良かった(12)</li> <li>その他(19)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>疑問(14)</li> <li>終わってからにしてほしい(10)</li> <li>緊張がましに(3)</li> <li>仕方ない(9)</li> <li>気にならない(28)</li> <li>緊張でそれどころではない(7)</li> <li>何も思わない(42)</li> <li>その他(20)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽しそう(15)</li> <li>若い(8)</li> <li>気にならない・どうでもいい(31)</li> <li>何も思わない(38)</li> <li>その他(10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>やっぱり(7)</li> <li>誰かに入れてもらおう(41)</li> <li>誰かに入れてほしい(19)</li> <li>仕方ない(16)</li> <li>何も思わない(7)</li> <li>その他(15)</li> </ul>

\*表中に示す項目は、字句表現上の同一性を基準にまとめられた各小分類の名称、( )内は含まれる項目数。最上段の行は各場面の名称、最左列には、小分類を内容面から整理して得られた大分類である。

Table 3-4-7  
大分類項目の回答人数

場面 (回答者総数)	敵意帰属	非敵意帰属	怒り	傷つき
衝突 (233)	51	160	163	66
明り (225)	105	128	134	75
タクシー (229)	50	182	138	65
発表 (227)	52	180	65	108
場面 (回答者総数)	嫌悪判断	非嫌悪判断	怒り	傷つき
電車 (231)	82	151	9	94
自己紹介 (218)	60	174	30	82
笑い声 (225)	70	171	62	78
グループ (219)	16	205	9	145

となっていることから、“非嫌悪判断”の大分類にまとめた (Table 3-4-4)。

一方、質問②に対する自由記述回答を検討すると、対人挑発場面と対人疎外場面の両者を通じて、各場面特有の回答項目が見られるとともに、情緒的反応の記述としてはかなり共通のものがみうけられた。それらの一部は、相手に対する怒り、苛立ち、不快感、非難、不満など積極的で攻撃的な感情を表明したものとしてまとめられるとともに、また、別のものは、悲しさ、さびしさ、恥ずかしさ、傷つき、落ち込み、不安など消極的な苦痛感情を表明したものとしてまとめられると思われた。そこで、前者に含まれる小分類を“怒り”の大分類に、後者に含まれる小分類を“傷つき”の大分類にまとめた (Table 3-4-5, Table 3-4-6)。

以上の手続きを通じて、予備調査により得られた自由記述回答は、対人挑発場面における質問①については敵意帰属と非敵意帰属、対人疎外場面における質問①については嫌悪判断と非嫌悪判断、質問②については対人挑発場面、対人疎外場面に共通して怒りと傷つきの大分類が得られた。以上の大分類に属する回答を行った調査協力者の数をTable 3-4-7に示す。

以上の回答者数を検討すると、対人挑発場面については、明り場面を除く3つの場面でおおむね50名程度の回答者が敵意帰属を示している。数値的には非敵意帰属を下回るものの、以上の結果はこれらの場面が調査協力者から適切に敵意帰属を引き出しえていることを示している。一方、明り場面のみ、100名程度の多数の調査協力者が敵意帰属を報告している。これは、この場面が他の場面よりも、調査協力者に相手の敵意を推測させやすい特徴を持つことを示している。また、情緒的反応に目を向けると、対人挑発場面ではおおむね“怒り”を報告するものが“傷つき”よりも多くみられた。対人挑発場面が何らかの実際的な損害を被る場面であることを考慮すると、以上の分布は妥当なものであるといえる。発表場面のみで、“傷つき”が“怒り”を上回っている。この場面の状況設定には、実

質的な損害だけでなく他者からの非難や批判としての側面が含まれている。その結果、次に述べる対人疎外場面としての性質も持つことになったものと考えられる。ただし、その発表場面においても、敵意帰属が他の場面と同程度に見られており、かつ、対人疎外場面に比較すると怒りの回答者数が多い。したがって、対人挑発場面としての意義も十分に兼ね備えているものと考えられる。対人疎外場面については、グループ場面をのぞく3場面で対人挑発場面よりも嫌悪判断を示す回答者が多くみられた。これは、敵意帰属よりも嫌悪判断の方が広くみられることを示唆している。ただし、グループ場面ではごく少数の者しか嫌悪判断を回答していない。これは、この場面の状況設定上、非嫌悪判断に回答が集中したためであると考えられる。このことは、この場面が嫌悪判断を導き出すものとしては適していないことを示唆しているといえる。一方、情緒的反応としては、すべての場面で“傷つき”が“怒り”を上回っている。笑い声場面においてのみ“怒り”が“傷つき”と同程度の度数を示している。このことは、この場面が対人挑発場面としての性質もあわせ持つことを示唆している。しかしながら、この場面においても“傷つき”が“怒り”を上回っており、かつ、相当数の嫌悪判断がみられる。このことから、対人疎外場面としての性質を十分に保持しているものと考えられた。

### 第3項 方法

1) 調査協力者と調査方法 調査協力者は、4年制大学に在籍する一般青年男女373名（男性207：女性166）であった。平均年齢は19.71歳（ $SD=1.13$ ）であった。調査の実施に際して、本研究の意義と匿名性、質問紙の保管と処分方法等について説明し、同意する場合にのみ回答をおこなうように求めた。調査期間は2009年7月から12月。なお、調査計画の倫理的配慮について神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会による承認を得た。

2) 質問紙の構成 (a)対人葛藤場面における否定的な他者意図判断傾向を測定するため、予備調査において敵意帰属の出現が比較的多くみられた対人挑発場面3場面（衝突場面、明り場面、タクシー場面）、嫌悪判断の出現が多くみられた対人疎外場面3場面（電車場面、自己紹介場面、笑い声場面）を用いた。予備調査の分析結果をもとに、それぞれの場面にふさわしい敵意帰属認知、非敵意帰属認知、ないしは、嫌悪判断認知、非嫌悪判断認知を表現する項目をそれぞれ1項目作成し、その項目に対して7段階評定（1. まったくそう思わない～7. きっとそうだと思う）で回答を求めた。あわせて、対人葛藤場面における情緒的反応を測定するために、対人挑発場面では怒り、対人疎外場面では不安の

程度を問う7段階の質問項目（1. 全く感じない～7. 非常に強く感じる）を付加した。以上を“対人葛藤場面における他者意図判断測定法”とした。(b)以上の尺度の妥当性を検討するため、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999），公的自意識尺度（菅原，1984），相互作用不安尺度（岡林・生和，1991）を用いた。これらの尺度はいずれも十分な信頼性と妥当性が確認されている。

#### 第4項 結果

1) 場面想定法の各項目の記述統計と性差の分析 場面想定法による各項目得点の男女別の平均値と標準偏差を算出した(Table 3-4-8, Table 3-4-9)。性差について各場面の項目ごとに *t* 検定を行ったところ、対人挑発場面では衝突場面の怒り項目得点と、明り場面の非敵意帰属項目得点において、女性で男性よりも有意に高い値がみられた。対人疎外場面では、電車場面の非嫌悪判断項目得点、自己紹介場面と笑い声場面の嫌悪判断項目得点と不安項目得点において、同様に女性の方で有意に高い値が示された。

次に、対人挑発場面3場面の各項目間の相関係数と信頼性係数（ $\alpha$ 係数）を算出したところ、敵意帰属項目間で $r=.26\sim.30(\alpha=.54)$ ，非敵意帰属項目間で $r=.16\sim.25(\alpha=.43)$ ，怒りの情緒反応項目間で $.44\sim.47(\alpha=.72)$ であった。対人疎外場面3場面については、嫌悪判断項目間で $r=.32\sim.34(\alpha=.60)$ ，非嫌悪判断項目間で $r=.21\sim.27(\alpha=.50)$ ，不安の情緒反応項目間で $.46\sim.51(\alpha=.74)$ となった。非敵意帰属,非嫌悪判断で若干低い相関係数となったが、おおむね正の相関が確認された。信頼性係数は全体的に低い値にとどまったが、項目数の少

Table 3-4-8  
対人挑発場面における各項目の平均値と標準偏差

		敵意帰属		非敵意帰属		怒り	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
衝突	M	3.60	3.52	4.48	4.58	5.22	5.70 **
	SD	1.77	1.57	1.65	1.39	1.47	1.21
明り	M	4.45	4.49	3.64	4.08 *	5.33	5.57
	SD	1.93	1.74	1.90	1.63	1.53	1.35
タクシー	M	3.82	4.08	4.55	4.70	5.32	5.54
	SD	1.84	1.77	1.65	1.46	1.42	1.23

性差 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 3-4-9  
対人疎外場面における各項目の平均値と標準偏差

		嫌悪判断		非嫌悪判断		不安	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
電車	M	3.43	3.39	4.27	4.83 **	3.45	3.69
	SD	1.81	1.59	1.72	1.38	1.94	1.83
自己紹介	M	2.62	3.21 **	5.33	5.21	3.51	4.46 **
	SD	1.47	1.51	1.34	1.15	1.93	1.60
笑い声	M	3.48	4.12 **	5.09	4.90	3.55	4.55 **
	SD	1.82	1.65	1.40	1.30	1.91	1.74

性差 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

なさのためやむを得ないものと考えられた。

2) 場面想定法の各得点間の相関, ならびに, 併存的妥当性の検討 以上のことから, 対人挑発場面3場面の項目得点の各合計を敵意帰属得点, 非敵意帰属得点, 怒り得点, 対人疎外場面3場面の項目得点の各合計を嫌悪判断得点, 非嫌悪判断得点, 不安得点として各得点間の相関係数を算出した(Table 3-4-10)。その結果, 敵意帰属と嫌悪判断, 非敵意帰属と非嫌悪判断, 怒りと不安との間で弱いながらも正の相関が得られた。また, 各得点の併存的妥当性を検討するため, BAQの下位尺度, ならびに, 公的自意識尺度, 相互作用不安尺度との相関係数を算出した(Table 3-4-11)。その結果, 対人挑発場面については, 敵意帰属でBAQの身体的攻撃, 短気, 敵意との間に, 怒りではBAQの身体的攻撃と短気, ならびに, 公的自意識との間で正の相関を示唆する値が得られた。また, 非敵意帰属では弱いながらも負の相関を示唆する値が得られた。対人疎外場面では, 嫌悪判断と不安で, BAQの短気, 敵意, ならびに, 公的自意識, 相互作用不安との間で正, BAQの言語的攻撃性との間で負の相関が得られた。非嫌悪判断では, 短気, 敵意, 公的自意識, 相互作用不安との間に弱い負の相関がみられた。

### 第5項 考察

本研究では, 従来の対人挑発場面における敵意帰属に加え, 新たに対人疎外場面における嫌悪判断の概念を導入し, 一般青年男女を対象に場面想定法を用いた両者の測定法を作成することを目的とした。予備的調査として, 対人挑発場面, 対人疎外場面をそれぞれ4

Table 3-4-10  
対人挑発場面各得点と対人疎外場面各得点の相関

	嫌悪判断	非嫌悪判断	不安
敵意判断	.21 **	-.15 **	.17 **
非敵意判断	-.10	.24 **	-.08
怒り	.18 **	-.04	.30 **

\*\*p<.01

Table 3-4-11  
場面想定法各得点とBAQ, 公的自意識, 相互作用不安との相関

	BAQ				公的自意識	相互作用不安
	身体的攻撃	短気	敵意	言語的攻撃		
敵意判断	.20 **	.29 **	.26 **	.08	.12 *	.10
非敵意判断	-.23 **	-.20 **	-.15 **	-.12 *	-.06	-.05
怒り	.32 **	.32 **	.13 *	.09	.29 **	.14 **
嫌悪判断	.05	.20 **	.32 **	-.24 **	.40 **	.24 **
非嫌悪判断	-.08	-.14 **	-.29 **	.12 *	-.15 **	-.13 *
不安	.07	.25 **	.31 **	-.25 **	.50 **	.32 **

\*\*p<.01, \*p<.05

場面ずつ作製し、一般青年男女を対象としてそれぞれの場面に対する自由記述回答を収集分析した。その結果、1場面（グループ場面）を除く7場面で2, 3割以上の調査協力者が敵意帰属や嫌悪判断にあたる回答を示すことが確認され、それぞれの場面が敵意帰属や嫌悪判断を刺激するのにふさわしい場面であることが示唆された。そのうえで、それらの自由記述回答を参考に、6場面からなる評定尺度法を用いた尺度を作成し、性差、ならびに信頼性と併存的妥当性を検討した。

まず性差についてみていくと、対人挑発場面での有意差は部分的なものにとどまり、衝突場面の怒り項目と明り場面の非敵意帰属項目でのみ、女性のほうが高い値を示した。衝突場面が身体的危害を生じる場面であることを考慮すると、前者の結果は意外に思われるかもしれない。しかし、男性から肩をぶつけられることが、その意図にかかわらずエチケットなどの点からより女性の怒りを喚起しやすかった可能性がある。明り場面の結果については、対人関係における親和性の性差が影響した可能性が考えられる。つまり、女性のほうが他者との親和的な関係を希求する傾向が強いため(榎本,2000;杉浦,2000)、グループの意図をより無害なものとして解釈しやすかったのかもしれない。

一方で、対人疎外場面ではより多くの性差がみられた。電車場面の非嫌悪判断項目、ならびに、自己紹介場面と笑い声場面では、嫌悪判断項目と不安項目において女性が高い得点を示した。ここにも前段と同じような対人関係における性差が影響している可能性がある。すなわち、後者はともに集団からの評価が問題となる場面であるため、他者との親和性を重視する傾向にある女性のほうが否定的な評価に敏感であったのかもしれない。一方で、前者は、電車の中という公共性の強い場面であるため、社会一般に対する自己の通用度を意識しやすい男性のほうが偶然と認知しにくかった可能性がある。

また、併存的妥当性については、まず、対人挑発場面については、敵意帰属と怒りでBAQの身体的攻撃、短気、敵意との間に弱いながらも正の相関関係が示された。敵意帰属や怒りは、攻撃的行動や苛立ち、敵意に結びつきやすいと考えられるため、上記の結果はその妥当性を支持するものである。一方で、怒りと公的自意識との間にも正の相関がみられた点は予想と異なる結果であった。この点は、他者からの危害に対する憤怒であっても、そもそも他者からの待遇や評価を気にする傾向のもとに生じてくることを示唆するのかもしれない。非敵意帰属は、身体的攻撃との間で弱い負の相関を示すのみであった。他者の行為を偶然とみなす判断には、意図帰属以外にもさまざまな要因が関連すると考えられ、そのことが相関を弱めた可能性がある。



一方、対人疎外場面については、嫌悪判断と不安が公的自意識と相互作用不安と正の相関を示したことは、その妥当性を支持する結果である。しかし、BAQの短気や敵意とも正の相関を示したのは意外な結果であった。そのうちの敵意については、BAQのこの下位尺度に他者からの嫌悪や蔑視に関係する項目が多く含まれていることが関係しているのかもしれない。あるいは、短気に関する結果も含め、対人疎外場面の嫌悪判断や不安感が何らかの形で攻撃的行動や怒りの表出に結びつく道筋があるのかもしれない。非嫌悪判断については、非敵意帰属と同様にさまざまな要因が関連して関連を弱めた可能性が考えられる。

以上のような結果が得られたが、性差については今後の再現可能性も含めて慎重に解釈する必要があると思われる。併存的妥当性についてはほぼ支持されたと言えるが、怒りと公的自意識、嫌悪判断ならびに不安と攻撃性との関連については今後検討すべき課題が残されたと言える。

## 第 5 節 対人葛藤場面における他者の意図の解釈と対人恐怖傾向、自己愛傾向の関係 (研究 6)

### 第 1 項 問題と目的

前節までで、対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の表れとして、嫌悪判断と敵意帰属の 2 つの否定的な他者の意図解釈傾向を取り上げ、それぞれを測定する尺度を開発した。したがって、以下では、これらの測定尺度を用いて、対人恐怖と自己愛傾向における否定的な他者認知の様相を検討する研究に取り組む。その第 1 段階として、対人恐怖傾向、自己愛傾向とこれらの意図解釈傾向の関連を検討することとする。

なお、対人恐怖は、わが国の精神・心理臨床の黎明期から研究されてきた精神疾患であり、特に日本文化論や青年期心性との関連で論じられることが多かった。そのため、従来の研究の中では、その認知面や情報処理の側面に着目した研究は必ずしも多くはない。その反面、1980 年代以降欧米において、同様の訴えが社交不安障害として注目されるようになった（笠原，2005）。社交不安障害の研究は、認知行動療法との関連で進展してきたこともあり、その認知的側面を重視する傾向にある（丹野，2001）。

社交不安障害については、すでにいくつかの認知行動モデルが提唱されている（井上，2011）。それらのモデルは、おもに社会的状況とその認知、それに伴う身体反応を含む感情、行動要因により構成される。その中で、社交不安を生み出し維持するものとして、対人場面の解釈の特徴に関心が向けられている（Hirsch & Clark, 2004）。社交不安の強い人が対人場面における他者との体験を否定的で脅威的なものと認知しやすいことが指摘されている。以上の関連は、すでに多くの調査研究により支持されおり、社交不安障害を対象とした臨床研究においても、社交不安の研究においてもほぼ一貫した結果が得られている（Miers, Blote, Bogels, & Westenberg, 2008）。

ただし、以上のような社交不安障害の研究においては、対人場面の否定的な認知は、他者との体験を否定的で脅威的なものと受け取るものとして広く定義されている。そのため、特に“嫌われる”，“避けられる”といった否定的な意図解釈に着目して詳細に検討したものはいまだみられない。また、自己愛傾向と敵意帰属の関連について検証した研究はいまだほとんど報告されていない（Miller, Hoffmam, Gaughan, Gentile, Maples, & Campbell, 2011）。第 3 章第 2 節で論じたように、対人恐怖傾向と自己愛傾向のいずれにおいても、対人関係の問題は重要なものであり、そこでの認知の特徴を詳細に解明することは意義のあること

といえる。そこで、本研究では、第4節で作成した場面想定法による測定尺度を用いて、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向と対人場面における否定的な他者の意図の解釈との関係を検討することを目的とする。また、前節の調査結果により、嫌悪判断と敵意帰属は弱いながらも正の関連にあることが示唆されている。したがって、これらの認知の偏りの双方が対人恐怖傾向や自己愛傾向に関連している可能性が考えられる。そこで、嫌悪判断と自己愛傾向、ならびに、敵意帰属と対人恐怖傾向の関連も含めて同時に検討することを目指す。

本研究で検討される仮説は以下のとおりである。

- 仮説①：対人疎外場面における嫌悪判断，不安が高い人ほど高い対人恐怖傾向を示す。また，対人疎外場面における非嫌悪判断が低い人ほど高い対人恐怖傾向を示す。
- 仮説②：対人挑発場面における敵意帰属，怒りが高い人ほど高い自己愛傾向を示す。対人挑発場面における非敵意帰属が低い人ほど高い自己愛傾向を示す。

## 第2項 方法

1) 調査協力者と調査期間 調査協力者は、関西圏の4年制大学に在籍する大学生 329名（男性150名女性179名，平均年齢19.78歳， $SD=0.93$ ）であった。すべて大学の講義の際に質問紙を配布し，その場で回収した。調査期間は，2012年1月から3月であった。実施にあたっては，調査の目的，匿名性，参加の任意性，質問紙の管理方法等について説明し，同意を得られる場合にのみ回答をするように求めた。なお，本研究は神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

2) 質問紙の構成 (a)嫌悪判断と敵意帰属の測定については，前節で作成した場面想定法による他者意図判断測定法を用いた。対人挑発場面3場面（衝突，明り，タクシー），対人疎外場面3場面（電車，自己紹介，笑い声）の計3場面からなり，嫌悪判断，非嫌悪判断，敵意帰属，非敵意帰属について“1.まったくそう思わない”から“7.きっとそうだと思う”までの，怒り，ないしは，不安の情動反応については，“1.全く感じない”～“7.非常に強く感じる”までのそれぞれ7段階評定で回答を求めた。(b)対人恐怖傾向，自己愛傾向の測定にあたっては，第2章第5節で使用した対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目群を用いた。

Table 3-5-1  
意図判断測定法各得点の平均値と標準偏差

	平均	標準偏差
嫌悪判断	10.04	3.78
非嫌悪判断	14.90	2.98
不安	11.30	4.13
敵意帰属	11.59	3.49
非敵意帰属	13.50	3.20
怒り	15.94	2.94

Table 3-5-2  
対人疎外場面, 対人挑発場面各得点間の相関

	敵意帰属	非敵意帰属	怒り
嫌悪判断	.33 **	-.17 **	.06
非嫌悪判断	-.27 **	.33 **	-.02
不安	.22 **	-.08	.20 **

\*p<.05, \*\*p<.01

### 第3項 結果

1) 場面想定法の各項目の分析 場面想定法の各項目を見ると、極端な天井効果やフロア効果は見られなかったため、各3項目の信頼性係数を算出したところ、対人疎外場面については嫌悪判断で.63、非嫌悪判断で.56、不安で.69、対人挑発場面では敵意帰属で.47、非敵意帰属で.45、怒りで.65と全般的に低い値となったが、項目数の少なさによる影響が大きいものと思われた。とくに、敵意帰属、非敵意帰属で低い値となったが、項目間では弱いながらも有意な正の相関が得られていることから、今回の研究では許容しうるものと考えられた。そこで、それぞれの合計得点を算出し、嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点、敵意帰属得点、非敵意帰属得点、怒り得点とした。それぞれの得点の平均値、標準偏差値をTable 3-5-1に、対人疎外場面各得点、対人挑発場面各得点間の相関をTable 3-5-2に示す。

2) 対人恐怖傾向、自己愛傾向と否定的な他者意図判断傾向の相関 対人恐怖傾向、自己愛傾向質問項目については、第2章第5節の分析結果に従い7下位尺度（対人過敏、対人違和感、自己誇大感、自己萎縮感、賞賛願望、権威的操作、自己愛的憤怒）を構成し、上記の場面想定法各得点との相関係数を算出した（Table 3-5-3）。

Table 3-5-3  
対人恐怖傾向、自己愛傾向と場面想定法各得点の相関

	対人恐怖傾向			自己愛傾向			
	対人過敏	対人違和感	自己萎縮感	自己誇大感	賞賛願望	権威的操作	自己愛憤怒
嫌悪判断	.43 **	.30 **	.30 **	.01	.00	.07	.18 **
非嫌悪判断	-.31 **	-.22 **	-.21 **	.07	.06	-.04	-.08
不安	.51 **	.32 **	.31 **	-.04	.00	-.01	.23 **
敵意帰属	.14 **	.08	.10 *	.05	.01	.07	.20 **
非敵意帰属	-.07	.00	.01	-.04	-.01	-.20 **	-.18 **
怒り	.11 *	.03	.02	.15 **	.13 *	.16 **	.36 **

\*p<.05, \*\*p<.01

その結果、対人恐怖傾向の下位尺度得点と対人疎外場面の各得点との間では、おおむね仮説と一致する結果を得た。すなわち、対人恐怖傾向の各下位尺度得点と嫌悪判断、ならびに、不安との間には正の相関を、非嫌悪判断との間では負の相関を示唆する結果が得られた。一方で、自己愛傾向の下位尺度得点と対人挑発場面の各得点との相関係数は全般的に小さい値にとどまった。敵意帰属が自己愛的憤怒と、怒りがすべての自己愛傾向の下位尺度と有意な正の、また、非敵意帰属が権威的操作、自己愛的憤怒と有意な負の相関を示唆する結果が得られた点は仮説と一致するものであったが、いずれも弱い相関を示唆するものにとどまった。また、対人恐怖傾向と敵意帰属の間、ならびに、自己愛傾向と嫌悪判断の間ではほとんど有意な相関が示されなかった。前者ではわずかに対人過敏が敵意帰属、ならびに、怒りと正の相関、後者では自己愛的憤怒が嫌悪判断、不安と同じく弱い正の相関を示唆する結果が得られた。

#### 第4項 考察

本研究では、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向の否定的な他者認知傾向の特徴を検討するため、それらと対人場面における2つの否定的な他者の意図の解釈、すなわち、嫌悪判断と敵意帰属との関係を検討した。その結果、対人恐怖傾向については、仮説①のとおり嫌悪判断、不安との間に正の相関、ならびに、非嫌悪判断との間では負の相関を示唆する結果が得られた。一方、自己愛傾向と敵意帰属の関連については、全般的に弱い関係を示唆する結果となり、わずかに自己愛的憤怒と敵意帰属、また、すべての下位尺度と怒りの間にかなり弱い正の関係を示唆する結果にとどまった。最後に、対人恐怖傾向と敵意帰属、ならびに、自己愛傾向と嫌悪判断の関係についてはほとんど有意な関連は示されず、

部分的にごく弱い相関が得られたのみであった。

まず、対人恐怖傾向に関する結果については、おおむね仮説①を支持するものといえる。対人場面において、何気ない他者の言動に対して“嫌われたから”、“避けられたせい”と認知する傾向が強いと、対人場面は不安や緊張、恐れを感じさせる場となりやすい。そのような予期的不安が高まるため、人前でのわずかな失敗や動揺も許容することができず大きな苦痛を体験することになると考えられる。そういった相関が結果に現れたものと推測される。また、下位尺度ごとの関連を見ていくと、対人過敏との相関が最も強く、対人違和感や自己萎縮感との関連はそれより弱い関連を示唆する値となっている。対人過敏は、他者からの評価や視線を気にする傾向や、他者から悪く評価されたのではないかと不安に思う傾向の項目からなる。それに対して、対人違和感は、対人場面で自然にふるまえなかったり、集団になじめなかったりする体験、自己萎縮感は、自分自身を内気で引っ込み思案とみなす傾向を問う質問項目からなる。以上のような下位尺度の内容を見ると、嫌悪判断は最も直接的に対人過敏に関連すると予測される。したがって、前述のような相関係数の大小の差異は妥当なものであると考えられる。

一方で、自己愛傾向と敵意帰属の関連はかなり弱いものにとどまった。ただ、その中でも、敵意帰属は自己愛的憤怒と、怒りの情緒反応は自己愛傾向全体と弱いながらも有意な正の関連を示した。つまり、前者については、敵意帰属と自己愛的な憤怒の関連が、後者については怒りの情緒反応と自己愛傾向全体がそれぞれ関連することが示されたこととなり、ともに怒りや憤怒に関連する尺度で有意な関連が得られたといえる。その意味では、怒りや憤りの感じやすさという情緒面での関連が相対的に強くみうけられたが、逆に敵意帰属や非敵意帰属などの認知面での特徴については独自の関連がほぼ見られなかった。唯一、非敵意帰属が権威的操作と弱いながらも有意な負の関連を示した。このことは、対人場面における何らかのトラブルを偶然や過失などの外的要因に帰属することが権威的な欲求や他者の操作を抑制することを示唆しており、仮説②に一致する結果ではある。以上のように見ると、仮説②は全体的には十分には支持されなかったといえる。

そのほか、対人恐怖傾向と敵意帰属、ならびに、自己愛傾向と嫌悪判断の間ではほとんど有意な関連は見られなかった。この結果は、基本的には敵意帰属は対人恐怖傾向を引き起こすものではなく、同時に、嫌悪判断も自己愛傾向を引き起こすものではないことを示唆している。このことは、それぞれの否定的な他者意図判断が対人恐怖傾向、ならびに、自己愛的傾向の間では相互に弁別的に作用することを示唆している。その意味で、以上の

結果は対人疎外場面における嫌悪判断等の尺度と、対人挑発場面における敵意帰属等の尺度の弁別的妥当性を支持する結果といえる。しかしながら、これらの中でも一部で、すなわち、敵意帰属、怒りが対人恐怖傾向の対人過敏との間で、嫌悪判断と不安が自己愛傾向の自己愛的憤怒と、それぞれ弱いながらも正の相関を示した。ただし、これらの対人恐怖傾向、自己愛傾向の下位尺度は、第2章第5節の研究3のモデルにおいて、誇大自己と萎縮自己の双方から影響を受ける対人的傷つき易さの潜在変数に規定されるものであり、その意味では、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者に共通する側面であるともいえる。そのような下位尺度の位置づけが上記のような結果につながった可能性が考えられる。

以上のように、本研究では、対人恐怖傾向と嫌悪判断との関連に関する仮説①はおおむね支持されたといえるが、自己愛傾向と敵意帰属との関連に関する仮説②は十分に支持されなかった。後者の結果については、敵意帰属の尺度にみられた信頼性の低さが関係している可能性がある。また、このような攻撃性や怒りの関連する研究では性差の存在が示唆されており、その影響も考えられる。また、何よりも本章第1節で考察したとおり、自己愛傾向においては否定的な他者認知の発生過程がかなり複雑であることが想定されるため、単純な相関分析では検出できなかった可能性が考えられる。以上の点を含めて、第7節の研究において再度検討を加えることとする。

## 第6節 対人恐怖傾向（社交不安）に対する嫌悪判断と自動思考の効果（研究7）<sup>注1</sup>

### 第1項 問題と目的

第5節の研究の結果、対人恐怖傾向については、対人葛藤場面における否定的な他者の意図の解釈としての嫌悪判断と正の相関を示す結果が得られた。したがって、第3節の考察から推測された仮説は十分に支持されたものと言える。このような成果を受けて、以下ではそれらの認知判断の特徴をより詳細に検討する研究に取り組むこととする。

前節での触れたように、対人恐怖の研究の中では、これまでの歴史的な経緯から認知の様態に着目したものはあまり多くはない。一方、近年になって欧米圏を中心に、対人恐怖と類似した現象が社交不安障害としてにわかに注目されるようになった（多田, 2011）。社交不安障害は、他者から注視されるかもしれない状況において過剰に強い恐怖と不安を体験し、そのために他者から否定的に評価されるような行動や反応をすることを恐れ、対人場면을避けようとする精神障害のひとつとされる（American Psychiatric Association, 2013）。1970年代以前にはあまり注目されなかった病態であるが、最近の大規模な疫学調査ではうつ病やアルコール乱用、特定の恐怖症と並んでもっとも高頻度にみられる精神障害のひとつに挙げられている（貝谷, 2010）。日本においても、従来の対人恐怖に関する研究がやや低調になったところに、上記のような欧米圏の趨勢を受けて、今日社交不安障害が急速に注目されるようになってきている。

社交不安障害、ないしは、社交不安については、認知療法や認知行動療法の普及と軌を一にして広く知られるようになったこともあり、認知面に焦点を当てた研究が多数報告されている。そのなかでも、社交不安障害に特有の認知の偏りに着目したものが多く見られる（Hirsch & Clark, 2004）。たとえば、社交不安障害を示す人は、対人場面において否定的な出来事を予測しやすく、かつ、その影響を大きく見積もる傾向にあることが知られている（Foa, Franklin, Perry, & Herbert, 1996）。また、対人関係に関する否定的な言葉に注意が向きやすく、否定的な表情の顔に対しては注意がそれやすいことも示されている（Asmundson & Stein, 1994; Heinlich & Hofmann, 2001）。さらに、対人場面において他者の意図や言動を否定的なものと解釈しやすいこと、ならびに、事後的にも自身の達成に関

---

<sup>注1</sup> 対人恐怖と社交不安障害の異同についてはなお議論が分かれるところではあるが、本研究が対象とする対人恐怖傾向、ならびに、対人恐怖の軽症例については社交不安障害とほぼ同一とされている（笠原, 2005）。そこで、本研究では、基本的に両者を同一のものとみなし、対人恐怖症、社交不安障害の先行研究の知見に関する個所ではそれぞれの用語を用い、それ以外の個所では対人恐怖症（社交不安障害）、ならびに、対人恐怖傾向（社交不安）という表記を用いることとした。



する否定的な反芻をおこないやすいことがそれぞれ検証されている (Stopa & Clark, 2000; Abbott & Rapee, 2004)。以上のように、社交不安障害を示す人は、対人状況に入る以前から、対人状況を体験している最中、さらに、その事後にわたって否定的な方向への認知の歪みを示すことが知られている。

このような比較的多岐にわたる認知の偏りの中で、とくに頻繁に研究されているのが対人場面における解釈の偏りである (Hirsch & Clark, 2004)。この解釈の偏りとは、対人場面において他者の言動や意図を過度に否定的にとらえる傾向を指す。この分野の多くの研究では、社交不安障害の患者に対し仮想的な対人場面を提示し、そのような場面が実際に自分自身に生じたと想定させ、そこでの認知判断を回答させる場面想定法が用いられている。そして、そこでの解釈を統制群や他の不安障害群と比較した結果、社交不安障害の患者がより否定的な解釈をおこなうことが示されている (Amin, Foa, & Coles, 1998; Stopa & Clark, 2000)。また、以上の関連は、臨床対象だけでなく一般の社交不安傾向の高い人々、ないしは、子どもや青年などを対象とした研究において繰り返し検証されている (Miers, Blote, Bogels, & Westenberg, 2008 ; Vassilopoulos & Banerjee, 2008)。

以上のような流れを受けて、今日では対人恐怖 (社交不安) にみられる対人場面の否定的な解釈の特質のより詳細な解明に関心が向けられつつある。その中でとくに注目されている論点のひとつが、抑うつ、ならびに、抑うつに特有の認知の偏りとの関連である。これまでに、対人恐怖症 (社交不安障害) が抑うつ症状や抑うつ気分と高い割合で合併することが報告されてきた (Brown, Campbell, Lehman, Grisham, & Mancill, 2001)。同じことは、従来の対人恐怖傾向に関する研究にも見ることができる。つまり、これまで広く用いられてきた対人恐怖関連の尺度に無力感や落ち込み、意欲の低下といった抑うつ気分に関連した内容の下位尺度が含まれているのである (堀井・小川, 1996, 1997)。他方で、従来の抑うつ症状の背景にも特有の否定的な認知処理が働いていることが知られている

(Beck, 1976 大野訳 1990)。そのような否定的な認知として、しばしば不合理な信念 (Ellis, 1962) と自動思考 (Beck, 1976 大野訳 1990) が取り上げられる。これらの抑うつの認知の偏りは、いずれも対人恐怖症 (社交不安障害) にみられる否定的な認知の偏りとは内容面で異なるものの、否定的な評価判断であることには変わりはない。したがって、対人恐怖症 (社交不安障害)、ないしは、対人恐怖傾向 (社交不安) そのものやその情報処理の偏りに影響を及ぼしている可能性は十分に考えられる。場合によっては、対人恐怖の症状や対人恐怖的な性格傾向、ないしは、それに関連する否定的な他者認知が抑う

つ的な認知の歪みの一つの現れに過ぎないのではないかと、といった疑問も生じうる。

近年の研究の中にいくつかこの観点から検討をおこなったものがみられる。城月・野村（2012）は、一般大学生を対象として、対人場面におけるコストバイアス、ならびに、不合理な信念が、社交不安に及ぼす影響を検討している。そして、不合理な信念を統制しても、社交不安とコストバイアスとの間に中程度の強さの偏相関係数がみられたのに対し、コストバイアスを統制した分析では、不合理な信念と社交不安との関連がほぼ無相関となったことを受けて、コストバイアスの影響の優位性を論じている。池本・安保・宮崎・根建（2013）は、予測バイアスとコストバイアス、および、不合理な信念が社交不安に及ぼす影響を検討している。パス解析を用いて影響関係を検討した結果、コストバイアスと不合理な信念の両者の正の効果を検証された。また、Cho & Telch（2005）は、非臨床群男女を対象に、対人場面における解釈の偏りと自動思考が社交不安、ならびに、抑うつに与える影響を検討している。その結果、対人場面での肯定的、否定的な解釈の偏りが社交不安のみに、否定的な自動思考が抑うつのみそれぞれ弁別的に作用し、肯定的自動思考のみが社交不安と抑うつの双方に有意な関連を示すとのモデルを検証した。

以上のように、いくつかの研究で不合理な信念や自動思考が対人恐怖傾向（社交不安）に与える影響が検討されている。それぞれの研究において有意義な結果が得られているが、なお研究の量そのものが少なく、十分に一貫した知見が得られているとまではいえない。一方で、第3章第1節において、対人恐怖傾向（社交不安）は、児童期からの心理発達にともなって生じてきた現実の自分への気づきと、そのことに対する恐れと不安に対して受動的に回避する傾向があることを論じた。また、そのような受動的な姿勢のもとで、恐れや不安をとまなう否定的な体験の性質は自己への意識関心へも影響を及ぼし、否定的で萎縮的な自己意識を形成することを見てきた。このような心理構造の特徴から、自分自身への否定的な認知の偏りである否定的な自動思考が生じる可能性も十分に考えられる。そのような否定的自動思考の影響で、これまで見てきた対人恐怖傾向（社交不安）にみられる否定的で萎縮的な自己意識が形成維持され、対人恐怖傾向（社交不安）の諸症状が高まるといった関連も十分に予想されるのである。

第4節（研究5）において、対人恐怖傾向（社交不安）に見られる対人場面における否定的な他者意図の解釈を嫌悪判断として概念化し、場面想定法を用いた尺度を作成した。その後、第5節（研究6）では、対人恐怖傾向尺度との関連を検討し、仮説を支持する正の相関を得た。以上の成果を踏まえて、対人恐怖傾向（社交不安）にみられる認知の偏りの特

徴をさらに詳細に検討する必要がある。そのためには、他の認知の偏りとの関連を検討することで、嫌悪判断を含む否定的な認知の偏りが対人恐怖傾向（社交不安）に与える影響を広く検討することは有意義であろう。上記の先行知見にて照らすと、特に従来抑うつとの関連で知られている自動思考が検討すべき対象として浮かび上がってきている。そこで、本研究では、対人場面における否定的な他者意図の解釈のひとつである嫌悪判断、ならびに、自己への否定的、肯定的な認知の偏りである自動思考を取り上げ、それらの対人恐怖傾向（社交不安）に対する影響を検討することを目指した。

以上の目的に適した分析手法として、共分散構造分析による仮説モデルの検討があげられる。モデルの構成に関しては、これまでの研究の成果から嫌悪判断と自動思考が相互独立的、弁別的に対人恐怖傾向（社交不安）の諸特徴に影響を及ぼすと仮定したモデルと、両者がともに対人恐怖傾向（社交不安）の諸特徴に影響を及ぼすと仮定したモデルが考えられる。本研究では、両モデルの適合度を比較検討することにより、対人恐怖傾向（社交不安）に影響を及ぼす認知要因を明らかにすることを目指す。

## 第2項 方法

1) 調査協力者と調査期間 A県内の大学生 317名（男性 120名、女性 197名：平均年齢 19.06歳、 $SD=.95$ ）であった。2013年4月から11月の期間に講義時間内に調査質問紙を配布し、回答終了後にその場で回収した。一部は持ち帰りで実施し、翌週の講義時間内に回収した。調査協力者に対しては、調査の匿名性と質問紙の管理、参加の任意性を説明し、同意の上で回答するよう依頼した。なお、事前に神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

2) 調査内容 以下の心理測定尺度を調査協力者に実施した。(a)嫌悪判断を測定するため、第3章第4節で作成した場面想定法による他者意図判断測定法を用いた。対人疎外場面は、“電車内で着席した時に隣に座る同世代の人物に席を立たれる”場面、“自己紹介の最中に前の席の人に教室を出て行かれる”場面、“道端に屯する若者たちから笑い声が聞こえる”場面の3場面構成される。嫌悪判断、非嫌悪判断については“全くそう思わない（1点）”から“きっとそうだと思う（7点）”までの、不安については“全く感じない（1点）”から“非常に強く感じる（7点）”のそれぞれ7段階評定で回答を求めた。(b)自動思考の測定については、ATQ-R（Hollon & Kendall, 1980）の児玉・片柳・嶋田・坂野（1994）による邦訳版をもとに、大植・森山・中谷（2012）が作成した短縮版を用いた。ATQ-Rは、日常生活での自己陳述体験として肯定的、否定的な自動思考の頻度を測定するものであり、

直近の1週間にそれぞれの項目に示される思考がどの程度生じたかについて5段階で回答を求める。児玉他（1994）による邦訳版は、抑うつ診断や抑うつ体験との間で妥当性が支持されている（児玉他，1994，坂本・田中・丹野・大野，2004）。本研究では，調査協力者への負担を考慮して，大植他（2012）による短縮版を用いた。なお，実施にあたって項目“消えてしまいたい”は，調査協力者への心理的負荷が大きいことが懸念されたので用いなかった。（c）対人恐怖傾向の測定については，堀井・小川（1996）による対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は6因子構造（“自分や他人が気になる”悩み，“集団に溶け込めない”悩み，“社会的場面に当惑する”悩み，“目が気になる”悩み，“自分を統制できない”悩み，“生きていることに疲れている”悩み）が支持されており，公的私的自意識，YG性格検査との間で妥当性が支持されている（堀井・小川，1996，1997）。

3）分析方法 以下の仮説モデルを構成して，共分散構造分析を実施した。まず，対人恐怖心性については，永井（1994）が対人状況における行動の諸特徴と，関係的自己意識，内省的自己意識の3つの高次因子に分類している。本研究では，この知見にしたがい，それぞれ対応する対人恐怖傾向の下位尺度得点においてモデルに組み込むこととした。つまり，対人状況における行動の諸特徴に対応する下位尺度として“集団に溶け込めない”悩み，“目が気になる”悩み，“社会的場面で当惑する”悩みの3下位尺度に潜在変数を設定し対人緊張とした。また，内省的自己意識に関連するものとして，“自分を統制できない”悩みと“生きていることに疲れている”悩みに潜在変数を設定し自己萎縮感とした。一方，関係的自己意識に対応する下位尺度としては“自分や他人が気になる”悩みしかないため，この観測変数をそのままモデルに導入した。さらに，それらの変数間の関係については，内省的なものであれ関係的なものであれ，意識関心の側面が態度や行動に影響を及ぼすとの因果関係が想定されたので，自己萎縮感と“自分や他人が気になる”悩みから，それぞれ対人緊張にパスを設定した。そのほか，意図判断尺度の得点を観測変数とする潜在変数を嫌悪判断，自己に対する非難と将来に対する否定的評価を観測変数とする潜在変数を否定的自動思考とし，これに肯定的自動思考の観測変数を含めて，以下の2種類の因果モデルを作成した（Figure 3-6-1, 3-6-2 参照）。

**モデル1** これまでの議論を踏まえて，嫌悪判断と自動思考が独立的にそれぞれに対応する対人恐怖傾向（社交不安）の各側面に影響を与えることが推測された。したがって，嫌悪判断が対人恐怖傾向の中での対人場面での過敏な意識関心の特徴を，自動思考が否定的で萎縮的な自己への意識関心の特徴をそれぞれ個別に引き起こすことを仮定するモデル

を設定した。前述の対人恐怖傾向（社交不安）内でのモデルに加え、嫌悪判断から“自分や他人が気になる”悩みにパスを設定し、また、否定的自動思考と肯定的思考から自己萎縮感にパスを設定した。このモデルでは、対人恐怖傾向（社交不安）における“自分や他人が気になる”悩みと自己萎縮感は、別々の認知の偏りから独立的に発生したものと理解される。

**モデル2** 同時に、二つの認知の偏りの双方が社交不安に影響することが推測された。そこで、嫌悪判断と自動思考の両者が対人恐怖傾向の対人場面での意識関心や自己への意識関心を高めることを仮定するモデルを設定した。モデル1に加えて、嫌悪判断から自己萎縮感へのパス、ならびに、自動思考から“自分や他人が気になる”悩みへのパスをそれぞれ追加した。このモデルにおいて、嫌悪判断と自動思考の双方から“自分や他人が気になる”悩み、ならびに、自己萎縮感に有意な効果が得られれば、それぞれの認知の偏りがともに対人恐怖傾向（社交不安）の諸症状に影響していることになる。一方で、いずれかの効果が有意なものとならなければ、他方の認知の偏りの要因のみが有意な影響を持つことを示唆することになる。

### 第3項 結果

1) 各尺度の得点の算出と信頼性の検討 他者意図判断尺度における嫌悪判断の3項目、非嫌悪判断項目の3項目、不安項目の3項目についてそれぞれ信頼性係数を算出したところ、嫌悪判断で.54、非嫌悪判断で.49、不安で.66と先行研究よりも低い値となった。一方で、各場面内の嫌悪判断項目、非嫌悪判断項目、不安項目の相関係数は比較的高く、場面内での各項目の等質性の高さがうかがえた。そこで、非嫌悪判断項目を逆転項目とし

Table 3-6-1  
各尺度の基本統計量および $\alpha$ 係数

	平均	標準偏差	$\alpha$ 係数
他者意図判断尺度（場面ごと）			
“電車”場面(3 <sup>a)</sup> )	10.76	4.11	.77
“自己紹介”場面(3)	9.93	3.96	.82
“笑い声”場面(3)	11.13	3.99	.83
ATQ-R短縮版			
将来に対する否定的評価(6)	9.96	4.27	.80
肯定的思考(6)	18.09	5.04	.83
自己に対する非難(6)	14.02	4.86	.82
対人恐怖心性尺度			
“自分や他人が気になる”悩み(5)	20.58	5.93	.80
“集団に溶け込めない”悩み(5)	19.89	6.98	.91
“社会的場面で当惑する”悩み(5)	20.39	7.00	.89
“目が気になる”悩み(5)	16.75	6.94	.88
“自分を統制できない”悩み(5)	18.57	5.88	.80
“生きることに疲れている”悩み(5)	15.92	5.93	.82

<sup>a)</sup>括弧内は項目数

て、各場面内での嫌悪判断項目、非嫌悪判断項目、不安項目の信頼性係数を算出したところ、項目数の少なさを考慮しても十分な値が得られた。以上のことから、以下の分析では、非嫌悪判断を逆転項目として、場面内での嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点の合計得点を算出し、それらを意図判断尺度の得点として用いた。以上の得点、ならびに、他の尺度の下位尺度得点の平均値と標準偏差、 $\alpha$ 係数を Table 3-6-1 に示す。

2) 各尺度の相関 他者意図判断尺度と ATQ-R 短縮版との間で相関係数を算出した (Table 3-6-2)。その結果、意図判断尺度の各場面得点間で弱い正の相関がみられた。また、ATQ-R 短縮版では、将来に対する否定的評価と自己に対する非難の間で強い正の相関、それらと肯定的自動思考の間で弱い負の相関がみられた。次に、他者意図判断尺度、ならびに、ATQ-R 短縮版と対人恐怖心性尺度の相関係数を算出した (Table 3-6-3)。その結果、他者意図判断尺度の各得点と対人恐怖心性尺度の各下位尺度との間に弱い、ないしは、中程度の強さの正の相関がみられた。特に、他者意図判断尺度各得点と対人恐怖心性尺度の“自分や他人が気になる”悩みとの間に中程度の強さの相関がみられ、対人場面にお

Table 3-6-2  
他者意図判断尺度とATQ-R短縮版の相関

	1	2	3	4	5	6
1 “電車” 場面	—	.26**	.35**	.26**	-.17**	.28**
2 “自己紹介” 場面		—	.32**	.10	-.25**	.13*
3 “笑い声” 場面			—	.26**	-.14*	.27**
4 将来に対する否定的評価				—	-.28**	.77**
5 肯定的思考					—	-.23**
6 自己に対する非難						—

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 3-6-3  
他者意図判断尺度、ATQ-R短縮版と対人恐怖心性尺度の相関

	自分や他人 が気になる	集団に溶け 込めない	社会的場面 で当惑する	目が気に なる	自分を統制 できない	生きること に疲れている
“電車” 場面	.44**	.20**	.17**	.20**	.26**	.27**
“自己紹介” 場面	.29**	.24**	.31**	.19**	.24**	.21**
“笑い声” 場面	.48**	.22**	.24**	.29**	.32**	.28**
将来に対する否定的評価	.46**	.31**	.24**	.30**	.41**	.61**
肯定的思考	-.29**	-.40**	-.33**	-.30**	-.35**	-.52**
自己に対する非難	.55**	.35**	.24**	.35**	.40**	.53**

\*\* $p < .01$

ける解釈の偏りが対人関係における対他的な意識に関連することが示唆された。ATQ-R 短縮版についてもすべて有意な相関が示されたが、中でも将来に対する否定的評価、ならびに、自己に対する非難と、対人恐怖心性尺度の“自分を統制できない”悩み、ならびに、“生きていることに疲れている”悩みとの間に中程度からやや強い正の相関がみられた。この関連は、後者の下位尺度が対人恐怖傾向の中における抑うつ的、自己萎縮的な悩みを反映していることを示唆するものと思われる。

### 仮説モデルの検討

前述の2つのモデルについて、最尤法による共分散構造分析を実施し、各指標の推定値を算出するとともに、適合度指標を通じて各モデルのデータへの当てはまりの度合い、ならびに、モデル間の比較を行った。モデルの適合度を検討するために、 $\chi^2$  二乗検定、GFI、AGFI、CFI、RMSEA を参考とした。また、モデル間の比較にあたっては2種の情報量基準（BIC と CAIC）を用いた（豊田，2007）。なお、ATQ-R 短縮版の将来に対する否定的評価と対人恐怖心性尺度の“生きていることに疲れている”悩みがやや強い正の相関を示した。これは、内容的にみて前者が無力感や挫折感の認知面、後者がその情緒反応面を測定しているといった点で特に強い関連があるものと思われた。そのため、潜在変数間の関係のみでは説明しきれない共変動が仮定されるので、両観測変数の誤差項に共分散を仮定した。また、モデル2では、肯定的自動思考から“自分や他人が気になる”悩みへのパスが有意な値とならなかったため除外した。

各仮説モデルの適合度を見ると、嫌悪判断と自動思考の独立的な影響を仮定したモデル1においては、GFIは.93、AGFIは.88、CFIは.93、RMSEAは.09を示した。また、BICは303.93、CAICは364.93となった。一方、嫌悪判断と自動思考双方からの効果を仮定したモデル2では、GFIは.95、AGFIは.91、CFIは.96、RMSEAは.07を示した。また、BICは298.42、CAICは331.42となった。モデル1でもある程度許容範囲の適合度が示されたといえるが、CFIとRMSEAがやや問題のある値と評価された（Figure 3-6-1）。モデル2においては十分に良好な適合度を示す結果となった。かつ、両モデルのBICとCAICの比較ではモデル2の方が大幅に低い値となっており、モデル2の相対的な適合度の良さが示された。以上のことから、モデル2の妥当性の方がより積極的に支持されたと判断した（Figure 3-6-2）。

モデル2の中での各変数の影響関係をみると、嫌悪判断は“自分や他人が気になる”悩みに対して.68の直接効果、自己委縮感に対して.38の直接効果、対人緊張に対して.38の総

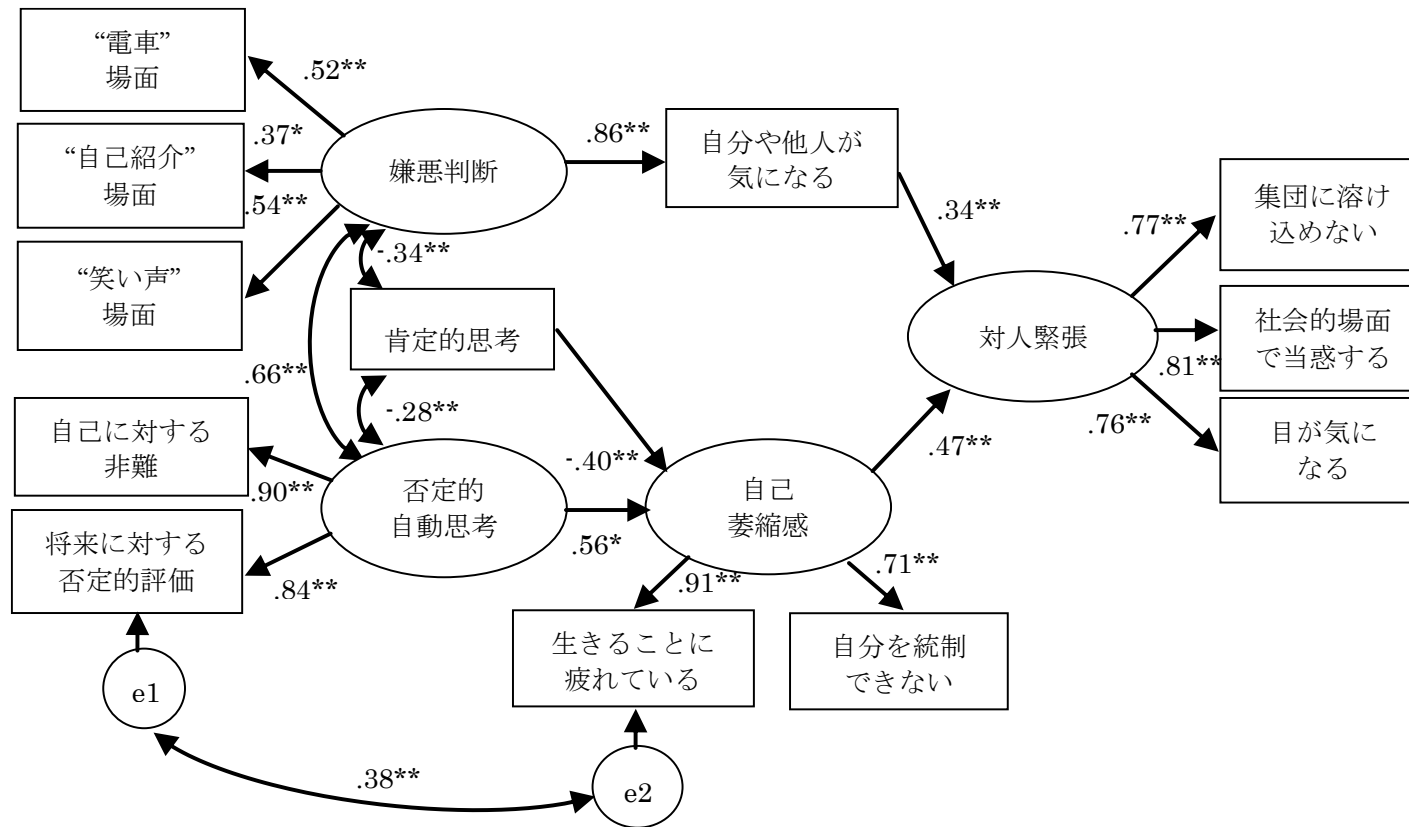


Figure 3-6-1. 対人恐怖心性と嫌悪判断，自動思考との関連（モデル1）

注）相関のない誤差変数は省略。図の数値は標準化係数を示す。

\*\* $p < .01$



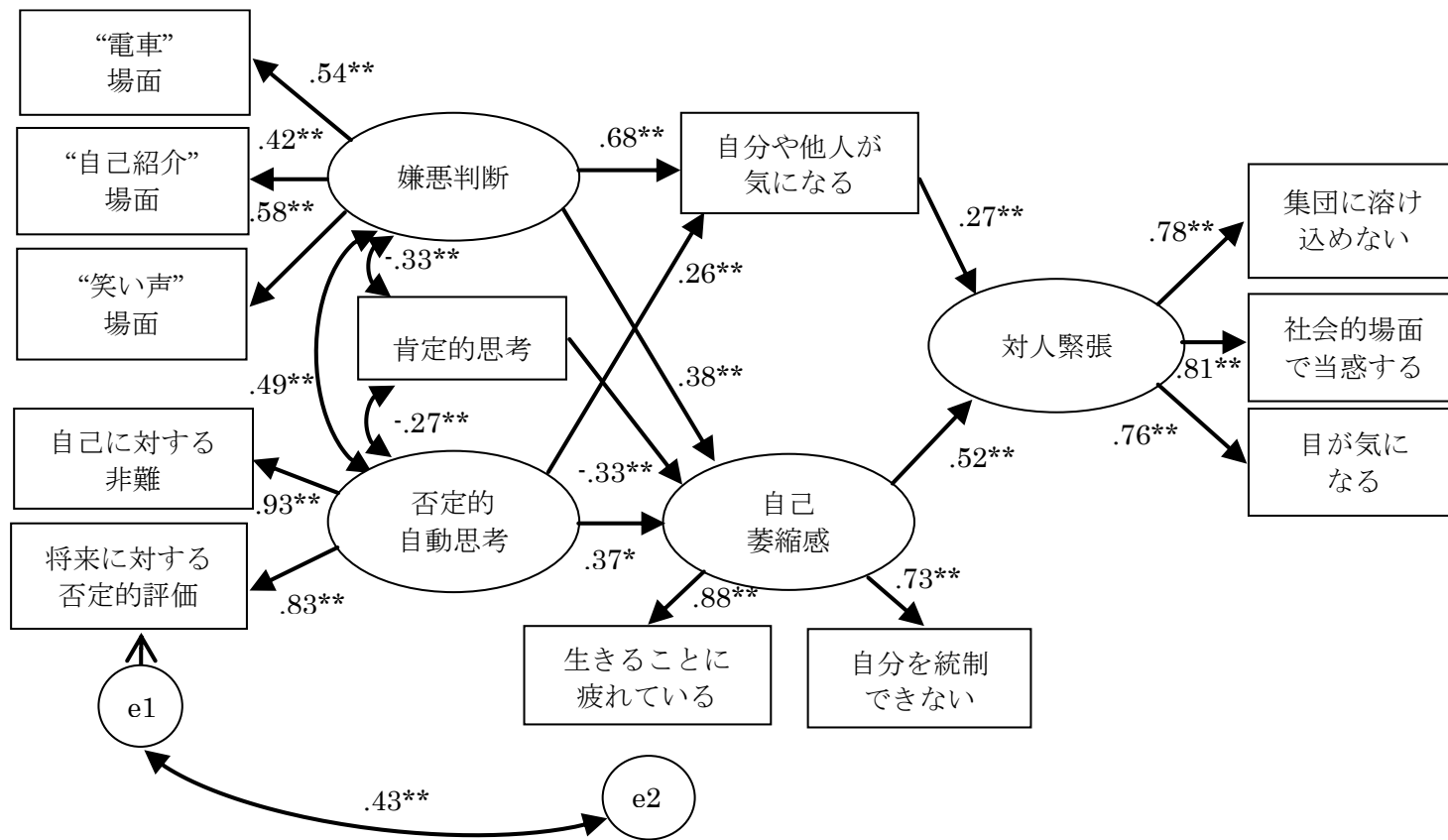


Figure 3-6-2. 対人恐怖心性と嫌悪判断，自動思考との関連  
 注) 相関のない誤差変数は省略。図の数値は標準化係数を示す。  
 \*\* $p < .01$

合効果を示した。否定的自動思考は、自己萎縮感に対しては.37の直接効果、“自分や他人が気になる”悩みへは.26の直接効果、対人緊張に対しては.26の総合効果を示した。また、肯定的思考は、自己萎縮感に-.33の直接効果、対人緊張には-.17の間接効果を示した。

#### 第4項 考察

本研究では、対人場面に関する否定的な解釈の偏りとして嫌悪判断、自己への否定的、肯定的な認知の偏りとして自動思考を取り上げ、それぞれの対人恐怖傾向（社交不安）への影響を検討した。対人恐怖傾向（社交不安）、嫌悪判断、肯定的、否定的自動思考を含む仮説モデルを作成し共分散構造分析による検討をおこなったところ、嫌悪判断、自動思考双方からの影響を仮定するモデルが採択された。

モデル内の嫌悪判断と対人恐怖傾向（社交不安）の関連をみると、嫌悪判断から“自分や他人が気になる”悩みに対して正の効果がみられる。このことは、他者の意図の否定的な解釈が、他者を前にした時の自分や他者に対する過敏さにつながりやすいことを示唆する。人との関係で嫌われた、避けられたと受け取りやすくと、否定的な評価を予期して、対人場面における自分自身の反応や行動、他者からの反応に注意関心が向きやすくなるものと考えられる。同時に、嫌悪判断は、“自分や他人が気になる”悩みを介して、対人緊張に間接的な影響を及ぼしていた。前述のように嫌悪判断によって“自分や他人が気になる”悩みが高まると、対人場面での緊張感や行動のぎこちなさが強く意識され、精神的苦痛が高まることは容易に想定される。したがって、以上のような影響関係は理論的にも妥当なものであると言える。

以上の結果は、対人場面における解釈の偏りが対人恐怖傾向（社交不安）全般に影響を及ぼすことを示唆している。“自分や他人が気になる”悩みについては、森田（1960）が初期に対人恐怖症の症状形成における注意関心の役割を精神交互作用として重視したように、従来の臨床研究は、対人場面における緊張や困惑そのものよりも、それを過度に気にして思い悩む傾向を重視してきた。また、近年の社交不安障害の認知モデルでも、対人場面における自己への意識関心の集中を中心的な要因に位置づけているように（Clark & Ehlers, 2008 丹野訳 2008）、社交不安の形成と維持において主要な要因と位置づけられている。本研究の結果は、そのような対他的な意識に嫌悪判断が大きな影響を与えていることを示唆している。ただし、それだけでなく、本研究では嫌悪判断が自己萎縮感を介して間接的に対人緊張に影響していることも示された。このことは、対人場面における他者の

言動を否定的にとらえることが自信の喪失や意欲の低下などの自己意識面での問題につながり、結果として対人場面での緊張や苦痛に結びつくということを示している。このように、本研究の結果は嫌悪判断が対他的、対自的双方の意識に否定的な影響を及ぼし、対人緊張を高めることを示唆しているといえる。一方で、否定的な自動思考についても、“自分や他人が気になる”悩みへの直接効果、ならびに、それを介しての対人緊張の間接効果がみられた。前者については、否定的な自動思考も、対人場面における自他への意識関心の集中を引き起こしうることを示している。自分自身や自分の先行き、ないしは、自身を取り巻く世界に対して否定的に認知しやすいと、対人場面における自分自身にも自信が持てないであろうし、そのことが対人場面における自他への過敏さをもたらすことは十分に考えうることである。

一方で、否定的な自動思考も、対人恐怖傾向（社交不安）における自己萎縮感を媒介して対人緊張に影響を及ぼしていた。このことは、否定的な自動思考から、自他への過剰な意識関心を経ることなく、直接的に社交不安的な反応や行動が引き起こされることを示唆する。自己や自己の将来、世界に対する否定的な認知は、全般的な活動性の低下や意欲の低下をもたらすと考えられるし、そのことがそのまま対人場面に出ることへの戸惑いや抑制につながることは十分に考えられる。これまでの関連との違いは、特に対人場面における認知判断傾向、あるいは、過敏さや葛藤をとまなわないという点にあると思われる。これについては、近年指摘されている社交不安や対人恐怖の下位類型が関連しているものと思われる。近年の研究では、これらの病態の中に、単に対人場面での不安や緊張を主訴とするものと、対人場面における他者の視線への葛藤を示すものが存在することが示唆されている（清水・岡村，2010）。今回のモデルで示された以上の関連は、単純な不安や恐怖が中心となる対人恐怖傾向（社交不安）の成立過程を反映するものと考えられる。

今回の研究では、肯定的な自動思考の影響もあわせて検討した。その結果、肯定的な自動思考は、対人恐怖傾向（社交不安）の中の自己萎縮感を緩和し、そのことが対人緊張を低下させるとの関連となった。対人緊張に対する総合効果は負の値となっており、肯定的な自動思考は対人恐怖傾向（社交不安）を抑制する効果があると考えられる。

本研究の結果は、嫌悪判断と抑うつ的な自動思考の双方が対人恐怖傾向（社交不安）全般に影響を与えることを示唆するものとなった。このことは、対人場面における否定的な他者認知と自己への否定的な認知の偏りが別々のものではなく、相互に一体となって対人恐怖傾向の各体験を強めることを示唆している。本章第2節において、対人恐怖傾向（社

交不安)における否定的な他者認知の構造を、辻(2003, 2008)による原体験理論による発達過程に照らして論じた。その中で、青年期における対人恐怖傾向は、発達に伴う見分けと区別の進展が現実の自己の見分けと区別にまで及び、そのことに伴う葛藤や心のもつれに対する不安や恐れが生じる中で、それに対して受動的に対応する点に特徴があることを論じた。そして、その結果として、現実の自分を受動的に“嫌がる”、“避けたい”という体験を受け皿となる身近な他者と合一的に体験することが対人関係の否定的な認知判断傾向につながる一方で、そのような否定的な体験の影響を受動的に受けて、自分自身への意識関心も否定的なものとなると仮定した。以上のような理論仮説は、否定的な他者認知と自己認知の双方が現実の自己への気づきに伴う苦痛という共通要因により生じることを示唆している。したがって、本研究のモデルに示された関連は、他者に関する嫌悪判断と自己に関する自動思考が個別にではなく一体となって作用していることを示唆している点において、上記の理論仮説と整合するものと考えられる。

加えて、嫌悪判断と否定的な自動思考の対人恐怖傾向(社交不安)への影響の詳細を見ると、自己萎縮感に対してのみほぼ同等の効果が示されているが、それ以外の対人緊張や“自分や他人が気になる悩み”に対しては、わずかながらも嫌悪判断のほうが大きい効果を及ぼしている。このような差異は、対人恐怖傾向(社交不安)に対して嫌悪判断と自動思考の両者が影響を及ぼしながらも、相対的には嫌悪判断のほうが大きな影響力を持つことを示唆している。このことは、やはり対人恐怖傾向(社交不安)においては対人場面の否定的な認知判断傾向が主要な役割を果たすことを示唆しているように思われる。

ただし、以上のような結果をもたらした可能性のある方法論上の問題点として、以下の2点をあげることができる。一つは認知の偏りの測定法に関するものである。本研究で用いたATQ-R短縮版は質問項目式によるものであるのに対し、他者意図判断尺度は場面想定法を用いている。後者の方法は広く用いられているものであり、繰り返しその妥当性が確認されているが、前述のように全般的に結果の希釈化が生じやすいことが示唆されている(Orobio de Castro et al., 2002)。このような影響を受けて、今回の研究では相対的に否定的自動思考の影響が強く表れた可能性が考えられる。したがって、以上の関連については、同一の測定様式を用いた研究により再度検討される余地が残されている。

また、もう一点も尺度に関するものである。今回は、対人恐怖傾向(社交不安)の中における抑うつ的な特徴をとらえるため、対人恐怖心性尺度の中の下位尺度である“生きていることに疲れている”悩みと“自分を統制できない”悩みを用いた。これらの下位尺度

は、YG性格検査の抑うつ性や劣等感、一般的活動性と妥当な関連が示されており（堀井・小川，1997），社交不安の抑うつ的な側面や意欲低下を反映していると考えられる。ただし、抑うつ症状そのものとは異なることが考えられ、それよりも対人恐怖心性尺度の他の下位尺度や潜在変数と強い関連が出たものと予想される。そのため、自己萎縮感の潜在変数を介して対人緊張に影響を及ぼす自動思考の効果が高くなり、相対的に自動思考の効果が高く表れた可能性がある。抑うつ症状そのものを測定する尺度を用いると、それらの関連はより低くなることが想定される。以上の点も含めて、今後の検討が必要である。

## 第7節 自己愛傾向に対する敵意帰属と怒りの効果（研究8）

### 第1項 問題と目的

第5節（研究6）において、自己愛傾向と対人葛藤場面における否定的な他者の意図判断としての敵意帰属の関連を検討した。しかしながら、両者の間には一部で弱い相関がみられたものの、おおむね積極的な関連を示唆する結果は得られなかった。以下では、これまでに行われてきた自己愛傾向と敵意、攻撃性に関する研究を概観することにより、改めて両者の関連を検討考察することとする。そして、そのことを踏まえて、自己愛傾向と敵意帰属の関連を再度調査研究により検証することを目指す。

前述のとおり、自己愛という用語を最初に心理学の領域に取り入れたのはS. Freudである。Freudは、統合失調症（パラノイア）の心理機制を解明する発達の、理論的枠組みとしてこの概念を導入した。その自己愛の概念をより具体的な行動や態度として明確化したのが1970年から1980年代におこなわれた自己愛的人格障害の諸研究である。なかでも、DSMの第3版において、記述的な診断基準が導入されたことで自己愛的な人物の具体像が一層明確なものとなった。このDSMの記述的定義は、その後若干の変遷をたどりながら基本的には同様の内容が維持されている（American Psychiatric Association, 2013）。今日、自己愛、ないしは、自己愛的人格という用語は、行動面や空想面での誇大感や万能感、特権意識や賞賛欲求の強さ、他者に対する共感性の低さや搾取的態度を主特徴とする人格障害の一型として理解されている。

また、同時期の研究は、自己愛人格障害の精神内構造の解明にも取り組んでいる。その代表的な研究者である Kernberg（1975）は、自己愛人格障害の発生を人生早期の欲求不満体験に起因するとしている。つまり、幼児は、当初その欲求不満状態に強い攻撃性を向けるものの、同時にその不快な体験から自らを守るために、それまでに体験した肯定的な体験、つまり、肯定的な現実の自己イメージ、空想内での理想自己イメージ、さらには、理想の対象イメージを同一視して、防衛的な誇大自己を作り上げる。一方で、それ以外の否定的に体験される現実の欲求不満や欠乏感、あるいは、攻撃性の体験は、周囲の他者に投影されて、実質的な価値を持たない、怒りや敵意に満ちた否定的な他者イメージを作り上げるとされる。以上の Kernberg の理論以外にも多数の自己愛人格障害に関する理論が展開された。ただし、多くの理論が、前述のような防衛的に形成された誇大で肯定的な自己イメージと、無価値で否定的なものに歪められた対人関係上の障害を指摘しているものが少

なくない(Akhtar & Thomson, 1982; Masterson, 1981)。

以上のように、これまで臨床実践分野を中心に、自己愛人格の発生や維持を規定する要因の解明がなされてきた。その流れをうけて、近年ではそれらの臨床現場での知見をより実証的な手法で検証しようとする試みが報告されるようになってきている (Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Morf & Rhodewalt, 2001; 中山, 2008)。そもそも自己愛人格は、自己意識や自己評価、自尊感情など、従来性格心理学や発達心理学が取り扱ってきた心理学的構成概念とかかわりの深い特性である。また、攻撃性や親密性などの社会生活に重要な影響をもたらす要素に関連することが知られており、比較的広い関心を集めやすい側面を持つ (小塩, 2004; 小塩・川崎, 2011)。以上のようなことが関連して、自己愛傾向については、他の心的障害や人格障害と比べても比較的多くの一般健常者を対象とした調査実証的研究が報告されている (Rhodewalt & Peterson, 2009)。

それらの研究は、前述の臨床実践上の知見を引き継いで、過度に肯定的で理想的な自己意識や自己概念に関する側面と、共感性に欠け攻撃的な対人関係の側面にそれぞれ主な焦点を当てている。前者については、従来は過度に高い自尊感情や肯定的な自己像の影響が検証されており (Raskin, Novacek, & Hogan, 1991; Emmons, 1984)、自己に対する全般的な肯定的態度が自己愛人格を生み出す主要因に位置づけられている。さらに、近年の研究では、そのような肯定的な自尊感情や自己像の質の違いに着目して、通常の意味での自尊感情の高さや肯定的な自己像との違いの解明に関心が向けられている。自尊感情については、その高低水準だけでなく、潜在的な自尊感情、自尊感情の不安定性、ならびに、随伴性の影響に関していくつかの研究が報告されている (川崎・小玉, 2010; 中山, 2010; 小塩, 2001)。また、自己像や自己イメージについては、自己像の複雑性、自己像の明確さ、ならびに、不安定性との関係が検討されている (Rhodewalt & Morf, 1995; 小塩, 2001)。以上の自尊感情の質的な側面に関する研究は、測定法の困難さや複雑さから必ずしも一貫した結果は得られていないものの (Morf & Rhodewalt, 2001)、徐々に仮説を支持する報告が蓄積されつつある。

一方、対人関係の側面については、上記の自己に関する特徴とは対照的に否定的な側面が多く含まれている。前述のKernberg(1975)による指摘も含めこれまでの臨床知見から、自己愛的な人は、対人関係が深みかけ共感性に乏しく、しばしば操作的、搾取的であることが指摘されている (American Psychiatric Association, 2013)。また、そのような表面的な特徴の背後に、他者を蔑む気持ちや羨望、さらには他者の脱価値化を秘めているとと

もに、その半面として自己評価を維持するうえでの過度に依存しやすい特徴なども指摘されてもいる (Akhtar & Thomson, 1982)。とくに対人関係上表立った問題になりやすいものとして、他者に対する敵意や攻撃性に多くの関心が寄せられている (Kernberg, 1975)。以上のような否定的な対人関係面での特徴のうち、共感性の欠如や羨望、他者に対する脱価値化などは構成概念としても規定しにくく、実際的にも測定が困難な面があり実証的な検討には困難さがともなう。しかしながら、敵意や攻撃性についてはこれまでも多くの研究知見が蓄積されていることもあり、自己愛人格との関連を検討したいいくつかの研究がみられる。

そのひとつに自己愛傾向の測定尺度と従来の敵意や攻撃性の尺度の関連を検討したものがあげられる。Hart & Joubert(1996)は、一般大学生男女を対象にNPI(Raskin & Hall, 1979)とBuss-Durkee敵意罪悪感目録を用いて調査を行い、NPI高得点群に高い敵意と攻撃、疑り深さを見出している。また、湯川 (2003) は、自己愛傾向と虚構への没入感、攻撃性等の関連を検討するため、自己愛目録短縮版 (小塩, 1998) とBuss-Perry攻撃性質問紙 (安藤他, 1999)、対人孤立感尺度、虚構への没入測度を含む質問紙を一般大学生に実施している。その結果、自己愛傾向と攻撃性の関係については、自己愛人格目録短縮版と短気、言語的攻撃、身体的攻撃との間に正の相関を見出している。以上のような研究では、自己愛傾向と敵意や攻撃性との間に一定程度の正の関連が示されている。しかしながら、NPIはさまざまな下位尺度を含む総合的な尺度であり、全体得点だけでは詳細な関連まで検討することはできない。

その他の研究では、自己愛傾向尺度の下位尺度と敵意、攻撃性との関連が検討されている。Rhodewalt & Morf(1995)は、自己愛傾向と自己像の複雑さや帰属スタイル等を総合的に検討した研究の中で、NPI(Emmons, 1984)とCook-Medley敵意傾向尺度(Cook & Medley, 1954)をもちいて、自己愛傾向と敵意との関連を検討している。分析の結果、NPI全体と正の相関が得られたが、NPIの下位尺度ごとでみると、有意な相関がみられたのは自己没頭／自己賞賛と搾取性／特権性の2つの下位尺度のみであった。Fukunishi, Hattori, Nakamura, & Nakagawa(1995)も、社会的望ましさを統制した分析において、NPI (Emmons, 1984) とCook-Medley敵意尺度との関連を検討している。結果として、ここでもNPIの総得点と敵意得点の間に正の関連を検出しているが、NPIの下位尺度ごとの分析では、権威性と搾取性の2下位尺度とのみ正の相関が確認された。さらに、Witte, Callahan, & Perez-Lopez(2002)は、NPI(Raskin & Terry, 1988)とNavoco怒り尺度(Navoco, 1994)を用いて調査を



おこない、怒り得点を目的変数とした重回帰分析を実施している。その結果、NPIの権威性、特権性下位尺度が怒りに対する有意な正の効果が検証された一方で、優越性、搾取性、虚栄性下位尺度は逆に負の効果を示した。以上のように、NPIの下位尺度と敵意や攻撃性の関連を見た研究では、下位尺度ごとで関係が異なることが示されている。おおむね権威意識、特権意識や搾取性との間で有意な関連がみられるが、有能感、リーダーシップ、自己主張性、賞賛願望との関連では仮説を支持する正の関連がみられない傾向にある。

以上の研究で敵意と関連がみられたのは、自己愛傾向の中でも従来の研究で不適応的、ないしは、過敏な側面とされてきたものである (Emmons, 1987; Raskin & Novacek, 1989; Wink, 1991)。そのような不適応的な側面に特に敵意や攻撃性が関連するということは十分に考えられる (Rhodewalt & Morf, 1995)。ただし、優越感、リーダーシップ、主張性などに反映される誇大的で過度に理想的な側面も自己愛傾向の中で特に重要な側面である。なにより、前述のKernberg(1975)の自己愛理論にも示される通り、そのような自己愛人格の過度に肯定的に評価された誇大自己は、空虚で無価値、ないしは、敵意的で攻撃的な他者像に対する防衛として生じてきていると仮定されている点では、理論的に直接関連のあるものである。したがって、そういった意味では、有能感、リーダーシップ、主張性などの側面についても敵意との有意な正の関連が検出されるはずである。

以上のような結果となった理由として、おもに以下の2点が考えられる。第一に、自己愛人格においてしばしば指摘されている歪曲や否認の影響が挙げられる。自己愛的な人は、自分自身に関わる否定的な特徴については防衛的な観点からゆがめて認知したり正確に報告しなかったりすることが指摘されている (Miller, Pilkonis, & Clifton, 2005; Oltmanns, Gleason, Klonsky, & Turkheimer, 2005)。前述の研究では、すべて自己報告式の質問紙尺度により敵意と攻撃性の測定がなされている。これらの尺度は、調査協力者が平素の自分の経験を回顧し回答する手法がとられる。その意味では、自己愛人格特有の自己に関する情報の歪曲や否認の影響を受けやすい手法とも考えられる。そのようなことが影響して仮説どおりの結果が得られなかったことが考えられる。

このように考えると、敵意や攻撃性の測定にあたって工夫が必要となる。そのための有効な手法の一つが、これまで攻撃的な児童に関する心理学的研究で多用されてきた場面想定法による敵意帰属の測定である (Dodge, 1980; Crick & Dodge, 1994)。場面想定法とは、調査協力者に何らかの媒体を通じて架空の対人葛藤場面を提示し、そのような出来事

が実際に自分自身に生じたと思わせて、その際の認知や感情などを測定する手法である。敵意帰属の研究においては、意図の曖昧な他者から何らかの阻害を受ける対人挑発場面を調査協力者に提示して、その際の相手の意図や自分自身の感情、その際の行動などを回答させることで、認知の偏りや反応の特徴の測定がおこなわれる。媒体としては、映像や音声、文章、実際場面などさまざまなものが用いられているが、いずれも実体験に近い認知や感情の特徴を抽出するものとして、攻撃的な行動や報復行動などとの関連で頑健な結果が示されている (Orobio de Castro, Veerman, Koops, Bosch, & Monshouwer, 2002)。したがって、このような手法を用いることで、調査協力者の回顧や内省を頼りとする手法では避けがたい回答の歪みや否認の影響を抑制することができる可能性がある。

しかしながら、本章第3節で上記の課題に取り組んだところ、敵意帰属と自己愛傾向の下位尺度にはほとんど有意な正の相関がみられなかった。このような結果となったことには、次に示すような自己愛人格の構造そのものの複雑さが関係しているものと思われる。前述のKernberg(1975)の自己愛人格論では、重要な他者との間での欲求不満体験に対する防衛的な誇大自己の形成を仮定するとともに、その結果としての否定的に評価された空虚で敵意的な他者イメージを論じているが、その中で特に攻撃性の役割が重視されている。自己愛的な人は、欲求不満に対するさまざまな否定的な体験を他者に位置付けて否定的で敵意的な他者認知を形成すると考えられるが、同時にそれに対して攻撃的な感情を向けることで、敵意的な他者の攻撃から誇大自己を守っているものと考えられる。実際、近年の研究では、自己愛的な人が示す攻撃的行動に研究の関心が向けられている (Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。そこでは、自己の行動に対する他者からの否定的な評価に対し、自己愛的な人がより高い攻撃性を示すことが繰り返し検証されている (Bushman & Baumeister, 1998; Bushman, Baumeister, Thomaes, Ryu, Begeer, & West, 2009)。

第3章第2節においても、青年期には、見分けと区別の働きの発達に伴って自己の見分けや区別が認識されはじめ、そのことには葛藤や心のもつれが伴うために不安や恐れが感情が生じやすくなるが、自己愛傾向の高い人は、それに対して能動的に排斥しようとする点に特徴があるものと考察した。そこで生じる不安や恐れ、ならびに、怒りの否定的な体験は、受け皿として合一的に体験されている周囲の他者に一体化して体験され、それが否定的な他者イメージを作り上げるもの論じた。以上の過程においても、怒りや攻撃性の役割が重要な働きをするものと考えられ、否定的に体験される他者に対して能動的に怒りを向けることで、不安や恐れを感情を体験しなくて済むようにしているものと考えられる。

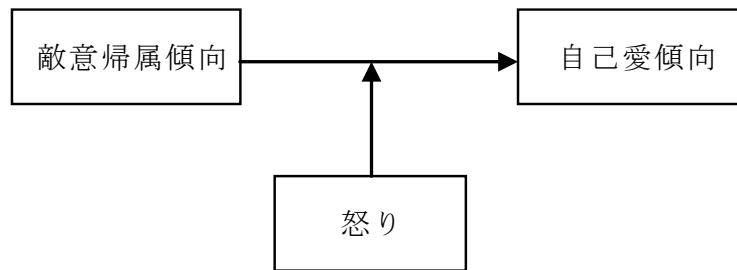


Figure 37-1 自己愛傾向の調整変数モデル

近年の心理学的研究は、不安や恐れ、怒りなどの情動的な反応性を生得的なものと位置づける傾向がある。そのような観点に立つならば、上記のような関連は、自己愛傾向に対する、怒りの情緒反応を調整変数とする敵意帰属の効果モデルとして理解できる(Figure 3-7-1)。つまり、第3章第3節で論じたように、青年期に至り内面に生じた否定的な体験を身の回りの他者に合一的に位置付ける傾向が他者への否定的で敵意的な認知を高めるが、それに対しても能動的な怒りの反応により対抗することで、過度に肯定的に評価された誇大な自己意識を維持することができると考えられる。しかしながら、他方で、怒りで対抗できない場合には、誇大的な自己イメージを守ることができず、自己評価が低下していわゆる自己愛的な抑うつ体験が高まると考えられる。

前述したように、臨床実践分野における先行知見から、自己愛傾向を維持増進する要因として、否定的で敵意的な他者認知のゆがみが指摘されているにもかかわらず、それらを支持する実証的な成果はいまだ十分に示されていない。自己愛人格傾向の諸特徴の中で、対人場面における否定的な他者認知は適応上の問題につながる重要な要因であり、それらの関連が明らかにされることは、自己愛傾向に対する理解と対応を検討するうえで大変意義深いものと考えられる。そこで、本研究では、自己愛傾向に対する、怒りの情動反応を調整変数とした敵意帰属の効果を検討することで、自己愛傾向における対人認知の様相を検討することとした。

なお、近年心理学分野における調整変数の処理に関する統計手法として、交互作用項を含む階層的重回帰分析が用いられることが増えてきている。交互作用の検討は、従来複数要因による分散分析で検討されることが多かったが、その場合、群分けに際して連続変数を質的変数に変換せざるを得ず、情報量の損失が問題視されていた。それに対し、交互作用を含む階層重回帰分析は、連続変数同士のみで交互作用の検討を可能としたものである (Aiken & West, 1991; Cohen, Cohen, West, & Aiken, 2003)。この分析手法では、複数の予

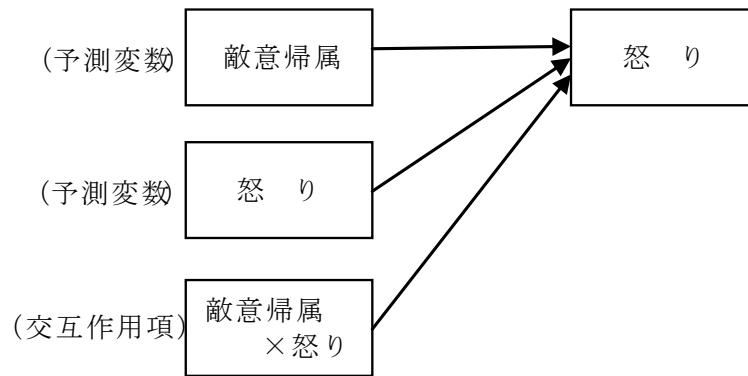


Figure 37-2 本研究の階層重回帰モデル

測変数から目的変数を予測する従来の重回帰分析に加えて、予測変数同士の積で計算される交互作用項が新たな予測変数として投入される (Figure 3-7-2)。そして、この交互作用の効果が有意であることは、一方の予測変数の高低により他方の予測変数の効果が変わることを示唆し、一般的に、正の有意な交互作用は、他方の変数が高くなればなるほどもう一方の予測変数の効果が高まる調整効果を示し、負の有意な交互作用は他方の変数が高くなればなるほどもう一方の予測変数の効果が低下する調整効果を意味する。本研究での独立変数にあたる敵意帰属と怒りの情緒反応はいずれもが連続変数であることから、最も適する分析手法として上記の交互作用を含む階層重回帰分析を用いることとした。

## 第 2 項 研究 1

### 1) 目的

一般大学生を対象とした質問紙調査により、自己愛的傾向に対する、怒りを調整変数とする敵意帰属の効果を検討することを目的とした。なお、怒りや攻撃性の研究については社会的望ましき等からの抑制の影響が懸念されたので、今回はその抑制が相対的に低いと考えられた男性のみを調査協力者とした。

### 2) 方法

①調査手続き 調査協力者は、関西圏の大学生男性 304 名 (平均年齢 19.06 歳,  $SD=1.02$ ) であった。2013 年 7 月に講義時間内において調査質問紙を配布し、回答終了後にその場で回収した。調査に際しては、匿名性や参加の任意性などを説明し、同意の上で回答するよう依頼した。なお、事前に神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た。

②調査内容 以下の心理測定尺度を調査協力者に実施した。(a)敵意帰属の測定にあたっては、第 3 章第 4 節で作成した他者意図判断測定法の中の対人挑発場面 4 場面 (見知らぬ男

性に路上で衝突される場面、自分が教室で読書しているときに明りを消される場面、タクシーに乗車拒否される場面、授業の発表を批判される場面)について、その原因を相手の敵意に帰属する敵意帰属、不可避な条件や偶発的な要因に帰属する非敵意帰属、ならびに、その際に感じる怒りの程度を問う質問項目を設定したものをを用いた。敵意帰属、非敵意帰属については“1.全くそう思わない～7.きっとそうだと思う”までの、怒りについては“1.全く感じない～7.非常に強く感じる”のそれぞれ7段階評定で実施した。この測定法については、先行研究において身体攻撃性や短気、敵意との間、ならびに、対象攻撃性や猜疑心との間で妥当性を支持する有意な正の関連が示されている(紺・相澤, 2011)。本研究では、敵意帰属項目4項目、ならびに、非敵意帰属項目の項目得点を逆転した4項目の合計得点、ならびに、怒り項目の4項目の合計得点をそれぞれ敵意帰属得点、怒り得点とした。(b)自己愛的傾向の測定にあたっては、谷(2006)による自己愛人格尺度短縮版と原田(2009)による自己関心・共感性の欠如尺度を用いた。前者は、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己愛性抑うつ、自己愛的憤怒の5因子構造からなり、十分な等質性、再検査信頼性、ならびに、自我同一性、自尊感情、対人恐怖的心性との関連で妥当性を支持する結果が得られえている(谷, 2004a,b)。後者は1因子構造からなり、同じく十分な信頼性と妥当性が示されている(原田, 2009)。なお、調整変数の分析については交互作用項を含む階層的重回帰分析を用いた。統計解析にはPASW18.0とHAD(清水・村山・大坊, 2006)を用いた。

### 3)結果

①基本統計量と相関係数の算出 場面想定法の各項目得点の度数分布を確認したところ、敵意帰属ではやや低得点側に、非敵意帰属と怒りではやや高得点側に偏る傾向がみられたものの、極端なL型分布を示すものはみられなかった。そこで、敵意帰属項目、ならびに、得点を逆転した非敵意帰属項目の合計を敵意帰属得点、怒り項目の合計を怒り得点とした。また、自己愛人格尺度、自己関心・共感性の欠如尺度については、先行研究にならい、それぞれ各下位尺度得点を算出した。各得点の平均値と標準偏差、信頼性係数、ならびに、各尺度間の相関係数をTable 3-7-1に示す。信頼性係数では、敵意帰属と怒りでやや低めの値となったが、項目数の少なさの影響によるものと考えられた。

②自己愛的傾向に対する敵意帰属の効果の検討 自己愛傾向に対する、怒りを調整変数とする敵意帰属の効果を検討するため、自己愛人格尺度の各下位尺度、ならびに、自己関心・共感性の欠如尺度を目的変数、敵意帰属と怒りを予測変数とする、交互作用項を含む

Table 3-7-1  
研究1における各尺度の記述統計, 尺度間相関および信頼性係数

	M	SD	下位尺度間相関								α 係数
			1	2	3	4	5	6	7	8	
1. 敵意帰属	29.23	7.21	-								.71
2. 怒り	19.95	3.99	.42 **	-							.67
3. 有能感・優越感	17.62	6.18	.02	.14 *	-						.85
4. 自己主張性・自己中心性	18.46	5.72	.07	.04	.52 **	-					.78
5. 注目・賞賛欲求	21.40	6.41	.03	.23 **	.55 **	.43 **	-				.86
6. 自己愛性抑うつ	19.48	5.44	.05	.31 **	-.04	-.14 *	.26 **	-			.76
7. 自己愛的憤怒	16.02	5.35	.27 **	.48 **	.22 **	.15 **	.33 **	.44 **	-		.77
8. 自己関心・共感の欠如	37.60	10.64	.16 **	.23 **	.31 **	.27 **	.27 **	.17 **	.49 **	-	.83

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

階層重回帰分析を実施した。分析にあたっては、Aiken & West (1991) の手法に従って、Step1 において各変数を平均値で中心化したものを予測変数として投入し、Step2 においてそれらの積を交互作用項として投入した。結果を Table3-7-2 に示す。

その結果、自己愛的憤怒を除くすべての下位尺度で有意な交互作用が得られた。そこで、Aiken & West (1991) の手法に従って、標準偏差を基準とする怒りの高低 1SD で単純傾斜を算出し、その有意性を検討した(Figure 3-7-3~Figure 3-7-8)。その結果、有能感・優越感では、怒りが高い場合には有意な効果が得られなかったが ( $\beta=.08, ns$ )、低い場合に敵意帰属の有意な負の効果がみられた ( $\beta=-.27, p<.01$ )。また、自己主張性・自己中心性では、怒りが高い場合に敵意帰属の有意な正の効果がみられたのに対し ( $\beta=.17, p<.05$ )、怒りが低い場合には有意な効果が得られなかった ( $\beta=-.108, ns$ )。注目・賞賛欲求について

Table 3-7-2  
研究1における階層的重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

目的変数	有能感・優越感		自己主張性・自己中心性		注目・賞賛欲求	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
敵意帰属	-.044	-.091	.070	.033	-.077	-.109
怒り	<b>.155 *</b>	<b>.183 **</b>	.008	.031	<b>.260 **</b>	<b>.279 **</b>
敵意帰属×怒り		<b>.213 **</b>		<b>.171 **</b>		<b>.142 *</b>
$R^2$	.020 *	.064 **	.005	.033 *	.057 **	.076 **
$R^2$ 変化量		.044 **		.028 **		.019 *
目的変数	自己愛性抑うつ		自己愛的憤怒		自己関心・共感の欠如	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
敵意帰属	-.092	-.056	.088	.067	.084	.055
怒り	<b>.348 **</b>	<b>.327 **</b>	<b>.442 **</b>	<b>.455 **</b>	<b>.192 **</b>	<b>.210 **</b>
敵意帰属×怒り		<b>-.164 **</b>		.095		<b>.134 *</b>
$R^2$	.103 **	.129 **	.236 **	.244 **	.058 **	.075 **
$R^2$ 変化量		.026 **		.009		.017 *

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

ては、怒りが高い場合には有意な効果が得られなかったのに対し ( $\beta=.01, ns$ ), 怒りが低い場合に敵意帰属の有意な負の効果がみられた ( $\beta=-.23, p<.01$ )。さらに、自己愛性抑うつでは、怒りが高い場合に有意な負の効果がみられたのに対し ( $\beta=-.19, p<.01$ ), 怒りが低い場合には有意な値とはならなかった ( $\beta=.08, ns$ )。最後に、自己関心・共感性の欠如については、怒りが高い場合に敵意帰属の有意な正の効果がみられたのに対し ( $\beta=.16, p<.05$ ), 低い場合には有意な効果は見られなかった ( $\beta=.06, ns$ )。

### 3) 考察

以上の結果から、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己愛性抑うつ、自己関心・共感性の欠如について有意な交互作用が示された。有意な交互作用は、調整変数である怒りの高低により自己愛的傾向に対する敵意帰属の効果が異なることを示唆している。有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己関心・共感性の欠如における正の交互作用は、怒りが高くなるほど敵意帰属の正の方向への効果が強まること、逆に、自己愛性抑うつにおける負の交互作用は、怒りの効果が低くなるほど敵意帰属の正の方向性への効果が強まることを示す (Aiken & West, 1991; Cohen, Cohen, West, & Aiken, 2003)。以上の結果は本研究の仮説を支持するものといえる。

単純傾斜の分析の結果、自己主張性・自己中心性と自己関心・共感性欠如については、怒りが高い場合に敵意帰属の正の効果がみられた。このことは、対人葛藤場面において敵意帰属が高まる際に、怒りの感情で反応する人は、自分勝手な自己主張や振る舞いを取りやすくなること、また、自己都合を優先させ他者への配慮を欠いた行動をおこないやすくなることを示唆しており、本研究の仮説を支持する結果といえる。一方で、有能感・優越感と注目賞賛欲求では、怒りが低い場合にのみ敵意帰属の負の効果がみうけられた。このことは、怒りにより対抗できない場合、敵意帰属の高まりは肯定的な自己イメージの低下や他者からの賞賛や注目を求める気持ちの減少につながることを示唆している。以上の結果は、自己愛的傾向の低下につながる方向性での本研究仮説に一致するものではあるが、怒りが高い場合の仮説には一致していない。この点については、適度な肯定的自己評価としての自尊感情の影響が想定される。つまり、これらの肯定的な自己愛的傾向の側面には適度な肯定的自己評価である自尊感情の影響が混在しやすく、そのことにより敵意帰属の効果が希釈化された可能性が推測される。以上のことから自尊感情を統制したうえで、上記の関連を再検討する必要があると考えられる。

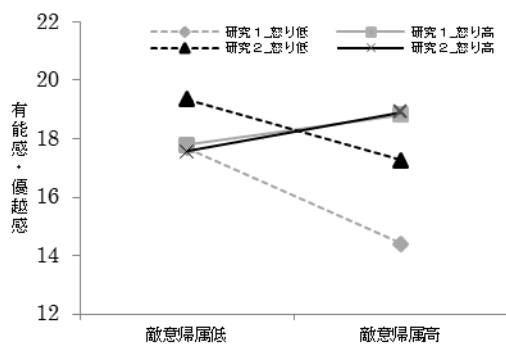


Figure3-7-3 有能感・優越感の交互作用の効果

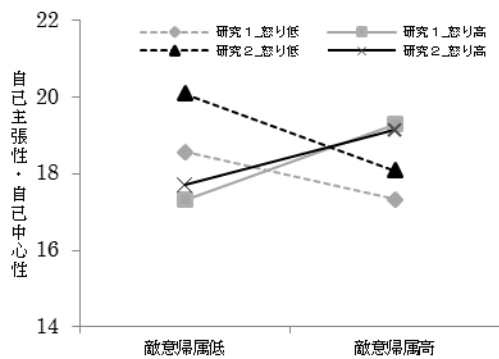


Figure3-7-4 自己主張性・自己中心性の交互作用の効果

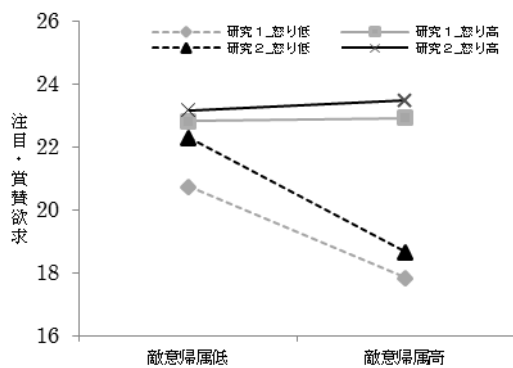


Figure3-7-5 注目・賞賛欲求の交互作用の効果

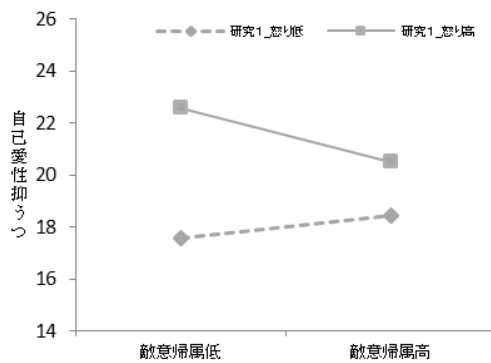


Figure3-7-6 自己愛性抑うつの交互作用の効果

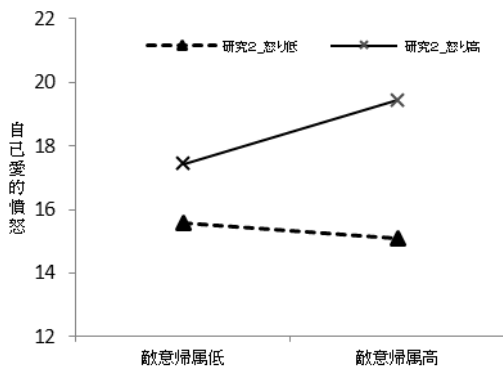


Figure3-7-7 自己愛的憤怒の交互作用の効果

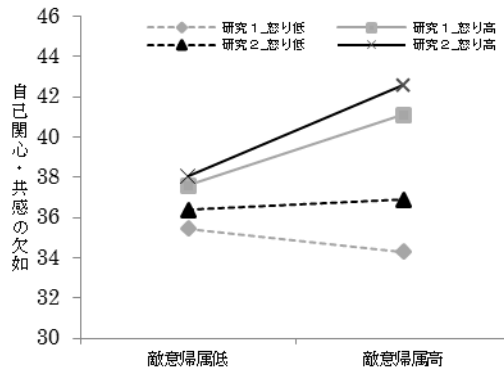


Figure3-7-8 自己関心・共感の欠如の交互作用の効果

その他、自己愛性抑うつについては有意な負の交互作用が示され、この点も仮説を支持する結果と考えられた。ただし、単純傾斜の分析の結果、怒りが高い場合の敵意帰属が負の効果のみが有意となった。また、自己愛的憤怒については怒りの主効果のみがみられ、交互作用は有意とはならなかった。

### 第 3 項 研究 2

研究 1 で提起された自尊感情を統制した分析、ならびに、研究 1 の結果の再現性を検証するため、研究 1 の調査尺度に自尊感情尺度を追加した質問紙を男性大学生に実施し



た。

## 1) 方法

①調査手続き 研究1と同様の手法で2014年6月～7月の期間に質問紙調査を実施した。調査協力者は、関西圏の大学生男性293名（平均年齢19.33歳，SD=1.15）であった。なお，研究1との調査協力者の重複はない。

②調査内容 (a)研究1と同様に，敵意帰属と怒りの測定には第4節で作成したによる場面想定法の尺度，自己愛的傾向の測定にあたっては自己愛人格尺度短縮版（谷，2006），自己関心・共感性の欠如尺度（原田，2009）を用いた。(b)自尊感情の測定には，Rosenberg(1965)の山本・松井・山成（1982）による邦訳版を用いた。

## 2) 結果

①基本統計量と相関係数の算出 各尺度項目の度数分布を確認したところ，極端なL型分布を示すものはみられなかった。そこで，研究1と同様に，場面想定法による測定については敵意帰属得点，怒り得点を算出した。また，自己愛人格尺度と自己関心・共感性の欠如尺度については先行研究に従って尺度得点を算出した。なお，自尊感情尺度については，1項目のみ（もっと自分自身を尊敬できるようになりたい）他の項目との関連が低いものが含まれていることが指摘されていることから（谷，2001），当該の項目を除外した残りの9項目で自尊感情得点を算出した。各得点の平均値と標準偏差，信頼性係数，ならびに，各尺度間の相関係数をTable 3-7-3に示す。今回の結果でも，調査Iと同様に敵意帰属と怒りにおける $\alpha$ 係数が低いものにとどまったが，項目数の少なさの影響によるものと考えられた。また，相関係数の結果では，研究1と比較すると数値がやや小さくなっ

Table 3-7-3  
研究2における各尺度の記述統計，尺度間相関および信頼性係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	下位尺度間相関								$\alpha$ 係数
			1	2	3	4	5	6	7	8	
1. 敵意帰属	27.82	7.01	-								.67
2. 怒り	19.74	4.27	.34 **	-							.67
3. 有能感・優越感	18.56	6.32	-.02	-.04	-						.86
4. 自己主張性・自己中心性	19.05	5.78	-.03	-.09	.34 **	-					.80
5. 注目・賞賛欲求	22.25	6.30	-.04	.15 **	.39 **	.25 **	-				.86
6. 自己愛性抑うつ	20.45	5.65	.09	.21 **	-.14 *	-.09	.38 **	-			.75
7. 自己愛的憤怒	17.10	5.46	.18 **	.29 **	-.01	.19 **	.28 **	.40 **	-		.79
8. 自己関心・共感の欠如	38.83	10.49	.19 **	.20 **	.08	.17 **	.23 **	.09	.45 **	-	.83
9. 自尊感情	30.97	6.99	-.06	-.07	.63 **	.25 **	.07	-.42 **	-.25 **	-.06	.83

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

ているものの、敵意帰属、ならびに、怒りと他の尺度得点の関連ではほぼ同様の結果が示された。

②自己愛的傾向に対する敵意帰属の効果の検討 自己愛的傾向に対する、怒りを調整変数とする敵意帰属の効果を検討するため、自己愛人格尺度の各下位尺度、ならびに、自己関心・共感性の欠如尺度を目的変数、敵意帰属と怒りを予測変数とする、交互作用項を含む階層重回帰分析を実施した。分析にあたっては、Aiken & West (1991) の手法を用いた。結果を Table 3-7-4 に示す。

以上の結果、自己愛性抑うつを除くすべての下位尺度で有意な交互作用が得られた。そこで、研究 1 と同じ方法で単純傾斜の分析を行った(Figure 3-7-3~Figure 3-7-8)。有能感・優越感では、怒りが高い場合にも低い場合にも有意な敵意帰属の効果は得られなかった(順に  $\beta=.11, ns$ ;  $\beta=-.17, ns$ )。また、自己主張性・自己中心性では、怒りが高い場合には有意な効果が得られなかったが ( $\beta=.12, ns$ )、怒りが低い場合に敵意帰属の有意な負の効果がみられた ( $\beta=-.17, p<.05$ )。注目賞賛欲求については、怒りが高い場合には有意な効果が得られなかったが ( $\beta=.02, ns$ )、怒りが低い場合に敵意帰属の有意な負の効果がみられた ( $\beta=-.29, p<.01$ )。さらに、自己愛的憤怒では、怒りが高い場合に有意な正の効果がみられたのに対し ( $\beta=.19, p<.01$ )、怒りが低い場合には有意な値とはならなかった ( $\beta=-.04, ns$ )。最後に、自己関心・共感性の欠如については、怒りが高い場合に敵意帰属の有意な正の効果がみられたのに対し ( $\beta=.22, p<.01$ )、低い場合には有意な効果は見られなかった ( $\beta=.02, ns$ )。自己愛性抑うつには、怒りの有意な正の主効果のみがみられた。

一方、今回の分析では、有能感・優越感で有意な敵意帰属の効果がみられず、自己主張

Table 3-7-4  
研究 2 における階層的重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

目的変数	有能感・優越感		自己主張性・自己中心性		注目・賞賛欲求	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
敵意帰属	-.002	-.030	.005	-.025	-.100	<b>-.132 *</b>
怒り	-.041	-.006	-.095	-.057	<b>.186 **</b>	<b>.226 **</b>
敵意帰属×怒り		<b>.163 **</b>		<b>.179 **</b>		<b>.187 **</b>
$R^2$	.002	.027 *	.009	.039 **	.032 **	.065 **
$R^2$ 変化量		.025 **		.030 **		.033 **
目的変数	自己愛性抑うつ		自己愛的憤怒		自己関心・共感の欠如	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
敵意帰属	.014	.007	.094	.071	<b>.140 *</b>	.120
怒り	<b>.208 **</b>	<b>.216 **</b>	<b>.256 **</b>	<b>.286 **</b>	<b>.150 *</b>	<b>.175 **</b>
敵意帰属×怒り		.038		<b>.138 *</b>		<b>.116 *</b>
$R^2$	.045 **	.047 **	.109 **	.244 **	.057 **	.069 **
$R^2$ 変化量		.001		.018 *		.013 *

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

Table 3-7-5

研究2における自尊感情を統制した階層的重回帰分析の結果（標準偏回帰係数）

目的変数	有能感・優越感			自己主張性・自己中心性			注目・賞賛欲求		
	Step 1	Step 2	Step 3	Step 1	Step 2	Step 3	Step 1	Step 2	Step 3
自尊感情	.63 **	.63 **	.64 **	.25 **	.24 **	.25 **	.06	.07	.08
敵意帰属		.02	.00		.02	-.02		-.10	-.13 *
怒り		-.01	.03		-.08	-.04		.19 **	.23 **
敵意帰属×怒り			.17 **			.18 **			.19 **
$R^2$	.40 **	.40 **	.43 **	.06 **	.07 **	.10 **	.00	.04 *	.07 **
$R^2$ 変化量		.00	.03 **		.01	.03 **		.03 **	.03 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ 

性・自己中心性と注目・賞賛欲求では怒りが低い場合にのみ有意な効果がみられた。以上の肯定的な内容の下位尺度については、研究1で適度な肯定的自己評価としての自尊感情の影響が想定された。そこで自尊感情の影響を統制した階層重回帰分析を行った。Step 1において自尊感情、Step 2で敵意帰属と怒り、Step 3で敵意帰属と怒りの交互作用項を投入した。結果をTable 3-7-5に示す。その結果、有能感・優越感、自己中心性・自己主張性ではいずれでも有意な交互作用が得られた。単純傾斜の分析の結果、有能感・優越感では怒り高群において敵意帰属の有意な正の効果 ( $\beta=.14, p<.01$ )、怒り低群で有意な負の効果 ( $\beta=-.13, p<.05$ ) がえられた。自己主張性・自己中心性においては怒りが高い場合に有意な効果が得られたが ( $\beta=.14, p<.05$ )、低い場合には有意とはならなかった ( $\beta=-.16, ns$ )。注目・賞賛欲求では、怒りが高い場合には敵意帰属の有意な効果とはならず ( $\beta=.03, ns$ )、怒りが低い場合に有意な負の効果がみられた ( $\beta=-.28, p<.01$ )。

### 3) 考察

以上のように研究1と同様の手法で自己愛的傾向に対する敵意帰属の効果を検討したところ、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己愛的憤怒、自己関心・共感性の欠如で有意な正の交互作用が検証された。この場合の正の交互作用は、怒りが高くなればなるほど、敵意帰属の正の方向への効果が強まることを示唆しており、本研究の基本的な仮説を支持するものである。

単純傾斜の分析の結果、有能感・優越感では敵意帰属の有意な効果が示されず、また、自己主張性・自己中心性、賞賛・注目欲求については、怒りが低い場合にのみ敵意帰属の有意な負の効果が示された。これらの下位尺度について、研究1で適度な肯定的自己評価としての自尊感情の影響が推測された。そこで、自尊感情の影響を統制した分析を行ったところ、有能感・優越感では、怒りが高い場合の有意な正の効果と怒りが低い場合の有意な負の効果、ならびに、自己主張性・自己中心性では怒りが高い場合の有意な正の効果

得られた。以上の結果は、本研究仮説を支持するものである。他方で、注目・賞賛欲求については、自尊感情の影響を統制しても怒りが低い場合の効果しか得られなかった。また、自己関心・共感性の欠如では、怒りが高い場合に敵意帰属の有意な正の効果がみられたが、この結果も本研究の仮説を支持するものと考えられた。

他方、今回の結果では、自己愛的憤怒でも有意な交互作用がみられた。単純傾斜の分析の結果、怒りが高い場合に有意な敵意帰属の正の効果がみられた。このことは、敵意帰属が高まる際に、それに対して怒りで反応すると、周囲の侮辱や否定的な評価に憤怒する傾向が高まることを示唆しており、本研究の仮説に一致するものである。反面、自己愛性抑うつでは有意な交互作用がみられず、仮説を支持する結果は得られなかった。

結果の再現性については、交互作用の効果について、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己関心・共感性の欠如で研究1と同様に有意な結果が再現された。単純傾斜の分析では、注目・賞賛欲求、自己関心・共感性の欠如で同じ結果が再現された。有能感・優越感、自己主張性・自己中心性では異なる結果となったが、自尊感情を統制した分析では、研究1と同様の結果が再現されるとともに、有能感・優越感に対する怒り高群における有意な正の効果が検証された。自己愛性抑うつでは有意な交互作用が再現されず、自己愛的憤怒では研究1と異なって交互作用が有意となった。

#### 第4項 総合考察

本研究では、怒りを調整変数とする自己愛的傾向に対する敵意帰属の効果を検討した。研究1においては、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目・賞賛欲求、自己愛性抑うつ、自己関心・共感性の欠如で有意な交互作用が検出された。単純傾斜分析の結果、有能感・優越感と注目・賞賛欲求では、怒りが低い場合に有意な敵意帰属の負の効果が、自己主張性・自己中心性と自己関心・共感性の欠如では、怒りが高い場合の敵意帰属の有意な正の効果がみられた。自己愛性抑うつでは、怒りが高い場合の敵意帰属の有意な負の効果がみられた。次に、自尊感情を統制した分析、ならびに、研究1の結果の再現性を検討するために研究2をおこなった。その結果、有能感・優越感、自己主張性・自己中心性、注目賞賛欲求、自己愛的憤怒、自己関心・共感性の欠如にて有意な交互作用が検出された。単純傾斜分析の結果、注目賞賛欲求と自己関心・共感性の欠如では研究1の結果が再現された。有能感・優越感、自己主張性・自己中心性については研究1と異なる結果となったが、自尊感情を統制した結果、怒りが高い場合の敵意帰属の有意な正の効果が得られた。

有能感・優越感，ならびに，自己主張性・自己中心性については，研究1と研究2のいずれでも有意な交互作用がみられたが，単純傾斜の分析では怒りが低い場合の敵意帰属の有意な負の効果しかみられないことがあった。しかし，自尊感情を統制した分析では，怒りが高い場合の敵意帰属の有意な正の効果がえられた。以上の結果の背景には，肯定的自己評価の異質性が関連しているものと思われる。Bushman & Baumeister (1998)は，肯定的な自己評価に異質な要因が混在している可能性を指摘し，事実に基づく正確な自己評価である自尊感情と，非現実的に誇張された感情的評価としての自己愛の影響を想定している。実際本研究でも，自己愛傾向の上記の下位尺度と自尊感情との間に有意な正の相関係数が得られており，特に有能感・優越感については強い正の相関がみられた。あわせて，敵意帰属と自尊感情の間では有意ではないものの負の相関係数が得られている。以上のことから，有能感・優越感，ならびに，自己主張性・自己中心性の得点には自尊感情の要因が合わさっており，かつ，敵意帰属は怒りの調整効果に関わりなく自尊感情を低下させる傾向があるので，怒りが高い場合においては敵意帰属の効果が希釈され，怒りが低い場合の敵意帰属の負の関連が検出されやすかったと考えられる。

一方で，注目・賞賛欲求では，自尊感情を統制した分析でも怒りが低い場合の敵意帰属の負の効果しか有意とはならなかった。この点については，近年特に注目されている自己愛の下位類型が関連している可能性が考えられる。近年の自己愛に関する研究は，過度に肯定的に評価された誇大な自己イメージを中核にしつつも，その対人関係への現れに基づいて，相手の反応に気づくことがない無関心型と，他者の反応を過剰に気にする過剰警戒型に分類する趨勢にある (Gabbard, 2000)。そして，これまでの研究の中では，注目・賞賛欲求は，無関心型と過剰警戒型の両者の性質を併せ持つもの (谷, 2004a,b)，あるいは，過剰警戒型の性質により近いものと位置づけられている (小塩, 2002)。その意味では，他者からの働きかけに敏感に反応する方向での影響が出やすく，他者の敵意を認知した際にもそれを受け入れて低下する側面の効果が検出されやすかった可能性が考えられる。

自己関心・共感性の欠如に対しては，怒りが高い場合の敵意帰属の正の効果が検証された。一見するところ，敵意帰属が高くなるだけでこのような側面は強まりそうではあるが，今回の結果では，そのような効果は怒りが高まるときだけであることが示唆された。つまり，単に相手を敵意的な対象として体験するだけでなく，それに対して怒りで対抗する時に相手に対する搾取的態度や共感の欠如が増すといえる。このことは，敵意的に認知

された相手から身を守るため、怒りの感情をもって相手の存在価値を否定することが他者への共感性を低下させ、搾取的な考え方に向かわせることを示唆していると考えられる。以上のような自己愛的傾向の不適應的な側面は攻撃性や気分不安定さに結びつくことが示されており (Emmons, 1987), 上記の関連は自己愛的傾向の高い人が示す問題行動について重要な知見をもたらすものといえる。

一方、自己愛性抑うつについては、研究1でのみ有意な交互作用がみられた。単純傾斜分析の結果、怒りが高い場合に敵意帰属の負の効果が示された。このことは、敵意帰属が高い場合に怒りによって対抗することで自己愛的抑うつが抑制できることを示唆している点で、仮説の一部を支持するものである。しかし、敵意帰属の高まりに対して怒りで対抗できない場合に、自己愛性抑うつが高まるとの仮説は支持されなかった。また、自己愛的憤怒については、研究2において有意な交互作用が検出され、怒りが高い場合に敵意帰属の正の効果がみられた。このことは、敵意帰属の高まりに対して怒りで対抗する場合に自己愛的憤怒が高まることを示唆している点で仮説を支持するものである。ただし、以上の結果はいずれも一方の調査でしか検証されず、今後の研究においてその再現性が検討されなければならない。

以上のように見てくると、本研究では前述した仮説モデルをおおむね支持する結果が得られたといえる。これらの関連からは、全体的には、自己愛傾向の高い青年が、日常的な他者との衝突を相手の敵意によるものと認知しやすく、それに怒りの感情で対抗することで、何とか肯定的な自己イメージを維持しようと奮闘する姿をうかがい知ることができる。言い換えるならば、他者からの攻撃を常に恐れており、そのような怯えに対して勢いづき虚勢を張っている姿こそが若者の自己愛的な姿の実像であることを教えている。このように、一見するところ自分勝手なうぬぼれや他者への無配慮さとみえる態度の背景に、他者と接することから生じる不安や怯えが関連していることを知ることは、自己愛的な問題を抱える青年を支援していくうえで極めて重要な観点といえる。近年になり他者との結びつきを体験することが自己愛的傾向の高い人が示す攻撃性を緩和するとの知見を示す研究がみられるが (Konrath, Bushman, & Campbell, 2006), 本研究の結果も現実的な他者との接触の中で信頼やつながりを実感することの大切さを提起するものである。

ただし、本研究にはいくつかの課題が残されている。今回の結果では、多くの階層的重回帰分析の結果において有意な決定係数がみられたものの、その値は小さいものであった。このことは、今回導入した予測変数、ならびに、交互作用項が自己愛的傾向を説明す

るうえで十分なものとはいえないことを示唆している。また、同様に交互作用が有意になった場合にでも、単純傾斜の分析で得られた値もかなり小さなものとなった。このことも予測変数としての敵意帰属の効果が必ずしも大きくないことを示唆している。以上のような結果となった原因のひとつに予測変数の不足があげられる。Baumeister 他 (1996) の自己本位性脅威モデルでは、誇張された自己像や自己評価、自己評価の不安定性、不確かさ、他者依存性など自己に関するさまざまな要因が想定されている。それらの要因はいずれも自己愛的傾向に対して主要な役割を担うものであるが、測定の困難さもあって本研究では導入することができなかった。このような予測変数の不足のため、全般的な説明率の低さに結びついたものと想定される。今後の研究ではそれらの要因も導入することで、自己愛的傾向に対する説明力の向上に努める必要がある。もう一点としては、今回敵意帰属と怒りの測定に用いた場面想定法の影響が考えられる。場面想定法は、敵意帰属研究で用いられる主要な測定方法であり、多数の研究で仮説を支持する頑健な結果を生み出しているものの、得られる値が比較的小さいことが指摘されている (Orbio de Castro et al., 2002)。背景には、提示される具体的な場面内容による影響や社会的望ましさに基づく抑制の影響が想定される。つまり、場面想定法は具体的な対人挑発場面を提示し、その場の認知判断を問うものであるため、どうしても調査協力者の日常的な生活環境や生活体験の様相に影響を受けやすいものと考えられる。また、敵意帰属や怒りの体験は、基本的にはかなりネガティブな体験の部類に属するもので、特に対人関係における攻撃性に関わるものでもあるので、社会的望ましさの影響を受けることが多分に想定される。以上の要因が重なって信頼性が低下しやすく、そのことが敵意帰属研究にみられる数値の小ささをもたらしているものと推定される。今回の2度の調査においても敵意帰属、怒りともに信頼性係数が比較的小さなものとなった。このような信頼性の低さは、特に階層的重回帰分析を用いた交互作用の検討に際しては結果の希釈化をもたらしやすいことが示唆されている (Cohen et al., 2003)。本研究においてもそのことの影響が大きかったものと思われる。この点では、今後より信頼性の高い測定方法を用いて調査を行うことでより大きな効果を得られることが期待される。

## 第4章 総合的考察

### 第1節 本研究の概要

本研究では、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向に着目し、その心理構造を解明することを通じて、青年期一般の心理発達に関する知見を得ることを目的とした。第1章においては、先行研究の検討を通じて青年期の自己意識、ならびに、対人関係の発達を概観し、本研究に必要となる基礎的な発達心理学的知見を整理するとともに、その過程における対人恐怖傾向と自己愛傾向の位置づけを論じた。それを受けて、第2章においては、自己への意識関心の観点から、対人恐怖傾向と自己愛傾向の背景に、過度に肯定的に評価された理想自己と、それに比して否定的に評価された現実自己の二重構造を仮定し、4篇の調査研究によりその妥当性を検討した。その結果、対人恐怖傾向と理想自己－現実自己不一致、自尊感情の水準と不安定性、自己不一致の不安定性との関係において仮説を支持する結果を得た。そして、その結果をもとに自己の二重構造を基礎とする理論モデルを仮定し、分散構造分析を通じてその妥当性を検証した。

第3章では、前章までの成果を受けて、対人恐怖傾向と自己愛傾向に否定的な対人関係の特徴を見出すとともに、誇大自己、ならびに、自己愛概念に関する批判的検討をおこない、それら背景に発達初期の幼若な心理が関わることを推定した。そのうえで、これらの問題を解明するために心理発達に関する原体験理論を援用し、その観点から見た青年期の心理発達への基礎的理解に基づいて、対人恐怖傾向と自己愛傾向における否定的な他者認知に関する理論的仮説を作成した。加えて、自己臭恐怖を示した事例のロールシャッハ検査法の解析を通じて、対人恐怖に関わる理論的仮説に整合する特徴を確認した。そのうえで、対人恐怖傾向、自己愛傾向それぞれに特有の対人場面における否定的な他者の意図の解釈として嫌悪判断と敵意帰属を取り上げ、場面想定法による測定法を作成し信頼性と妥当性を検証した。加えて、それらと対人恐怖傾向、自己愛傾向の関連を検討するために、一般青年を対象とする調査研究を実施したが、嫌悪判断と対人恐怖傾向の間では仮説通りの関連がみられたものの、敵意帰属と自己愛傾向の間では積極的な関連は見られなかった。そこで、前者については、嫌悪判断と対人恐怖傾向との関連についてより詳細に探究するために、対人恐怖傾向に対する効果について、広く心的障害と関連をもつとされている自動思考との比較検討をおこなった。その結果、嫌悪判断と自動思考の双方が対人恐怖傾向に影響することを仮定するモデルが採択された。一方、後者については、改めて自



自己愛傾向と敵意帰属の関連について検討した結果、怒りを調整変数とする関連が仮定された。そこで、自己愛傾向尺度を目的変数とし、敵意帰属と怒りの交互作用を含む重回帰分析を実施した結果、仮説を支持する有意な交互作用が検出された。

以上のように、本研究では、自己と対人関係の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を検討した。これらの知見は、青年期における心理発達に有用な理解をもたらすものと考えられる。本章では、本研究によって得られたこれまでの成果を総括するとともに、そこで明らかになった青年期の心理発達について検討を加える。さらに本研究の限界と今後の展望について論じる。

## 第2節 自己の観点から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向の特徴

対人恐怖は、従来日本における独自の心的障害として多くの注目を集めてきた病態であり、対人場面における緊張や羞恥、その他過剰な身体反応の訴えと、そのことによる他者から否定的評価に対する不安と懸念、結果として生じる対人場面の回避傾向を特徴とする(笠原, 2011)。一方、自己愛人格は、Freudをはじめとする精神分析療法の分野を中心に始まった概念であり、今日では、行動面や空想面における誇大感や万能感、特権意識や賞賛欲求の強さ、他者に対する共感性の低さや搾取的態度を主特徴とする人格障害の一型として理解されている(American Psychiatric Association, 2013)。このように、対人恐怖と自己愛人格は、もともとは精神・心理臨床の分野において取り扱われる概念であったが、同時に青年期心性と密接な関連があることも指摘されてきた。そのため、一般青年にみられる対人恐怖傾向、自己愛傾向としてもこれまで多くの研究がなされてきた(笠原, 1977; 小塩, 2004)。

上記のような対人恐怖傾向と自己愛傾向は、表面的にはほぼ正反対といえるような特徴を示している。対人恐怖傾向においては、自己に関する意識は否定的で萎縮的であり、対人場面においても抑制的、回避的傾向が目立つのに対し、自己愛傾向においては、自己に関する意識はむしろ過度に肯定的で誇大的であり、対人場面においては傲慢で自己中心的な振る舞いが目立つ。そのような意味で、両者はかなり異なった特徴を示しているといえる。しかしながら、それぞれの先行研究を詳細に検討すると、必ずしもそのように単純ではないことがわかる。つまり、対人恐怖傾向の萎縮的で否定的な自己意識の背景に、意地っ張りや強気ともいえるような意識がかいま見られたり(森田, 1960; 内沼, 1977)、逆に、自己愛傾向の誇大的で膨張した自己意識の背景に、過敏で傷つき易い側面がみられること

が指摘されているのである (Gabbard, 2000)。以上の流れを受けて、岡野 (1998) は、自己愛人格障害と対人恐怖症の背景に理想自己と恥ずべき自己の分極化された自己の構造を仮定し、それらの間での変動が不安定な自己イメージや自尊感情を生み出すものと論じた。本研究では、この岡野(1998)の仮説を基礎にしつつ、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向を生み出し維持する要因として、過度に肯定的に評価された誇大な理想自己と、それに比して否定的で萎縮的なものと評価された現実自己の二重構造を仮定し、以下の調査研究を通じてその妥当性を検討した。

第 1 章第 2 節 (研究 1) では、一般青年男女を対象に対人恐怖傾向と理想自己—現実自己不一致との関係を検討した。自己不一致の測定にあたっては、個々人によって理想自己の重要な側面が異なる可能性を踏まえ、そのことを反映できる個性選択的方法により理想自己と現実自己の不一致を測定した。対人恐怖傾向の各得点を目的変数とする重回帰分析を実施した結果、“精神的強さ”と“社交性”の側面における自己不一致の大きさが対人恐怖傾向に正の効果を及ぼしていることが示された。以上の結果は、対人恐怖傾向が高い人ほど理想自己と現実自己のズレを大きく体験していることを示唆しており、自己の二重構造の仮説を支持する結果であるといえる。また、“社交性”だけでなく“精神的強さ”の側面の不一致が有意な効果を及ぼしていた点については、岡野 (1998) が、自己愛人格や対人恐怖にみられる分極化された自己の構造を、境界例人格にみられる“良い—悪い”の二極構造と比較して、“強い—弱い”という特徴を指摘しているが、その知見に一致するものであると考えられた。

第 2 章第 3 節 (研究 2-1) では、自己の二重構造から必然的に生じると考えられる自尊感情の不安定性との関連を検討した。自尊感情の不安定性の測度として日常生活内での反復評価に基づく生活内評価法と自己報告法の 2 つが用いられた。自尊感情の水準と不安定性を要因とした 2 要因分散分析を実施した結果、生活内評価法を用いた場合には、対人恐怖傾向尺度の中の“否定的な公的自意識”に、自己愛傾向尺度の中の“権威性・他者の操作”と“自己耽溺”に、仮説を支持する自尊感情の不安定性の効果がみられた。一方、自己報告式により自尊感情の不安定性を測定した結果について、むしろ仮説とは逆に不安定性が低いほうが、対人恐怖傾向や自己愛傾向が高くなることが示唆された。前者の結果は、自尊感情の不安定性が高いほど対人恐怖傾向、自己愛傾向が高くなることを部分的にでも示唆するものであり、自己の二重構造の仮説に整合する結果が得られことになる。一方、後者の結果については、研究仮説に反するものであるが、このことは対人恐怖傾向や自己愛傾

向に特有の否認や回避の影響が考えられた。また、第4節(研究2-2)では、同様にして得られた現実自己像、ならびに、理想自己の繰り返し評定データを基に、対人恐怖心性、ならびに、自己愛傾向と理想自己-現実自己不一致の不安定性との関係を検討した。両者の相関係数を検討した結果、対人恐怖傾向の“否定的な公的自意識”と“向性”、“情緒安定性”、“誠実性”の側面における自己不一致の不安定性が正の相関を示した。また、自己愛的傾向の“自己耽溺”と“向性”、“情緒安定性”、“過敏性”の側面における自己不一致の不安定性、また、“特権性・特殊性”と“強靱性”、“過敏性”の側面における自己不一致の安定性との間に正の相関が得られた。以上の結果も本研究の仮説を部分的に支持するもとと考えられた。

以上の結果を受けて、第2章第5節(研究3)では、自己の二重構造から対人関係の諸問題が発生するとの仮説を含むモデルを作成し、共分散構造分析を実施してその妥当性を検討した。従来の対人恐怖傾向関連、ならびに、自己愛傾向関連の諸尺度等を参考に、対人恐怖傾向と自己愛傾向度を同時に測る尺度項目群を作成し、探索的因子分析で7因子解を抽出した。それをもとに下位尺度を構成し、これまで検討してきた理論にしたがって、誇大自己、萎縮自己、対人的傷つき易さの3つの潜在変数を含む影響モデルを作成した。同時に、比較対照のために、対人恐怖傾向と自己愛傾向がそれぞれ別々の因子により規定されるという2因子モデルも検討した。共分散構造分析によりパス係数の推定、ならびに、モデルの適合度の算出を行ったところ、前者のモデルについてはすべてのパスについて有意な係数が得られるとともに、良好な適合度が示された。一方で、2因子モデルについてもすべてのパス係数が有意とはなったものの、適合度に問題があることが示唆された。以上の結果より、自己の二重構造と対人関係上の問題を仮定するモデルの妥当性が支持された。

以上の一連の研究により、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向の背景に、過度に肯定的に評価された誇大な理想自己と、それに比して否定的に評価された萎縮的な現実自己の二重構造が影響しているとの仮説がおおむね支持された。これらの構造においては、基本的に誇大的な理想自己の影響で現実自己が受容されにくいため、自己像は全般的に不明確で不安定化しやすく、そのことが対人場面におけるさまざまな問題に結びついていると考えられる。その中で、自己愛傾向が高い人は、どちらかといえば現実自己の方を強く拒否して、理想自己の方に自分を同一化させることで安定は計っているものの、現実場面においてはどうしても現実経験は避けられず、一時的な傷つき体験や憤怒の表出に至るものと推測される。一方、対人恐怖傾向が高い人は、否定的な現実自己の方に自分自身を同一化し

ており、対人場面はその現実自己に直面する場となって大変な苦痛を経験するが、かといって、背景には理想自己へのあこがれがあるため、それが周囲の人たちとの間で承認されることを望んで、対人関係から完全に引き下がることにはなりにくい。以上のいずれにおいても、自己像の不明確さ、不安定さにより対人場面は葛藤的な場となり、諸種の対人関係上の問題が生じてくるものと理解される。

### 第3節 対人関係の観点からみた対人恐怖傾向と自己愛傾向

第3章では、対人関係の観点からみた対人恐怖傾向と自己愛傾向の解明に取り組んだ。まず、第2章までで取り上げてきた自己の二重構造が基本的には誇大自己から生じるものであることから、先行知見をもとに誇大自己と自己愛の概念を批判的に検討し、それらが臨床場面において、あるいは、精神分析の歴史的な経緯において社会的に構成されてきた概念であることを論じた。そのうえで、そのような成熟した視座を前提としない場合、辻（2003, 2008）による原体験理論から対人恐怖と自己愛人格の心理はよく理解されることを提起した。

以上の考察から、青年期の発達、ならびに、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向について原体験理論からの理解を試みた。そして、青年期においては原体験から見分けと区別の発達に伴って、それが自分の見分けと区別にまで到達するが、その際に葛藤や内的にもつれの体験が生じるために、青年は通常不安や恐れを感情を体験するものと理解された。通常の青年期発達では、この不安や恐れは一体化して体験の受け皿となっている同世代同年輩の友人関係と合一化して体験され、このことがチャム関係に代表される密着した友人関係を生むと考えられた。それに対して、対人恐怖傾向では、同じように現実の自分がみえることで生じてきた不安や恐れを受動的に嫌がり回避しようとする点に特徴があり、そのような嫌悪感や忌避感を周囲の友人関係に合一化して体験するため、“嫌われている”、“避けられている”と体験しやすくなると推測された。他方、自己愛傾向では、そのような不安や恐れに対して能動的に排斥しようとする点に特徴があり、不安や恐れを感情、それに対する否定的な評価、ならびに、怒りや攻撃性を周囲の他者に合一化して体験して、身の周りの他者は否定的で敵意的、無価値なものと体験されると推測された。以上のように考えると、対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の特徴が理解されるものと思われる。第3節（研究4）において、自己臭恐怖を示した事例のロールシャッハ検査法の結果について、典型的に受動的な反応特性を示した強迫性障害のロールシャッハ検

査法結果との比較検討を通じて、対人恐怖症の上記の心理特徴を確認した。本章では、このように推定される対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる対人場面における否定的な他者認知について続く4編の実証的な調査研究により検討した。

第4節(研究5)では、対人恐怖傾向における否定的な他者認知の表れとして、対人葛藤場面における否定的な他者の意図の判断傾向として嫌悪判断を概念化し、自己愛傾向にみられるそれとして敵意帰属を引用して、場面想定法によるそれぞれの測定法の作成に取り組んだ。嫌悪判断が生じやすい対人疎外場面と敵意帰属が生じやすい対人挑発場面を構成し、各場面への自由記述回答の分析を通じて、それぞれの場面对する認知と情緒反応の特徴を検討した。そして、そのデータを基に対人疎外場面3場面、対人挑発場面3場面で構成される他者意図判断測定法を作成し、一般青年男女を対象とする調査を通じて妥当性の検討をおこなった。その結果、いずれにおいても攻撃性や公的自意識、相互作用不安との間で妥当性を支持する結果が得られた。

第5節(研究6)では、以上のように作成した意図判断測定法を用いて、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向との関連を検討した。一般青年を対象に質問紙調査によりこれらの関係を検討したところ、嫌悪判断と対人恐怖傾向の間では仮説通りの有意な関連が検証された。しかしながら、敵意帰属と自己愛傾向についてはかなり弱い関連しか見いだされず、仮説を支持するに十分な結果は得られなかった。以上のことから、対人恐怖傾向についてはより詳細な認知の偏りとの関連の検討が必要であると考えられた。一方、自己愛傾向については、調査方法、研究仮説等の再検討が求められた。

第6節(研究7)では、前節の結果を受けて、対人恐怖傾向における認知の偏りの特徴をより詳細に検討するため、心的障害に広く関連する認知の偏りとされる自動思考に着目し、嫌悪判断と自動思考の対人恐怖傾向に対する効果を検討した。対人疎外場面による他者意図判断測定法と対人恐怖心性尺度を含む質問紙を一般青年男女に実施し、共分散構造分析を用いてモデルの検討をおこなった。仮説モデルとしては、嫌悪判断と自動思考がそれぞれ独立的に対人恐怖傾向の対応する側面に影響を及ぼすと仮定するモデル1と、両者がともに対人恐怖傾向のそれぞれの側面に効果を及ぼすことを仮定するモデル2を作成し検討したところ、両モデルともに許容しうる適合度を示したものの、モデル2のほうがより優れた適合を示した。以上の結果から、対人恐怖に対しては嫌悪判断と自動思考の両者が効果を及ぼしていることが検証された。このことは、嫌悪判断と自動思考の両者が対人恐怖傾向の発生と維持に関わることを示唆している。ただし、対人恐怖傾向のそれぞれの

側面への効果を詳しく見ると、嫌悪判断のほうがより大きな影響を与えているものと考えられた。以上のような結果は、前述の原体験理論から見た対人恐怖傾向の理解に符合するものと考えられた。

一方で、自己愛傾向と敵意帰属の関連については、第4節の結果から再検討の必要性が示された。そこで測定法の信頼性の問題、ならびに、理論的仮説の問題、性差の影響が示唆されたので、前者については、想定場面の数を4場面を増やすとともに、敵意帰属の計算方法に修正を加えた。後者については、Kernberg (1975)の自己愛人格障害に関する理論を検討し、自己愛傾向に対する敵意帰属の効果に対して、怒りの情緒反応が調整変数として参加することが示唆された。つまり、怒りの情緒反応が強い場合、敵意的な他者の認知に対して対抗することで理想的で誇大的な自己意識を中心とする自己愛傾向が高まるのに対し、怒りの情緒反応が弱い場合、そのような対抗ができずに自己愛的抑うつが高まるといった関連が予想された。上記の関連を検証する目的で、研究1では、対人挑発場面による意図判断測定法と自己愛傾向尺度を含む調査質問紙を青年期の男性を対象に実施した。そして、得られたデータに交互作用項を含む階層重回帰分析を実施した結果、自己愛傾向の“有能感・優越感”、“自己主張性・自己中心性”、“注目・賞賛欲求”、“自己愛抑うつ”、“自己関心・共感性の欠如”で仮説通りの有意な交互作用が検出された。このことは、怒りの情緒反応の高低により、敵意帰属の自己愛傾向に対する効果が異なり、怒りが高いほうが低い場合よりも、敵意帰属から自己愛傾向への正の効果が強まる傾向にあることを示唆するものである。ただし、“有能感・優越感”に十分な結果が得られなかったこと、また、結果の再現性を確認する目的で、研究2として前述の尺度に自尊感情尺度を含む調査を一般青年男性を対象に実施した。その結果、おおむね研究1と同様の有意な交互作用が検出されるとともに、自尊感情を統制した分析により“有能感・優越感”についても仮説と一致する結果を得た。以上の結果は、敵意帰属が自己愛傾向に影響を及ぼすに際して、怒りの情緒反応が調整効果を及ぼすとの仮説を支持している。

本章の研究により、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者に対人場面における否定的な認知判断傾向が関連することが示された。それらは、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向を生み出し維持する要因として位置づけられるものと考えられた。

#### 第4節 対人恐怖傾向、自己愛傾向にみる青年期の心理発達の意義

前節までで、本研究の中で実施された調査実証研究より得られた知見を整理した。以下

では、そのような調査実証研究における仮説の生成と結果の検討過程の中で考察された理論的な知見も含めて、第1章において提起した本研究の目的に関する議論をおこなう。

本研究の目的は、対人恐怖傾向と自己愛傾向の検討を通じて、青年期の自己確立を中心とした心理発達課題について検討することにあつた。この点について、第2章で取り組んだ自己の観点から見た諸種の検討は、過度に高く評価された理想自己（誇大自己）と、それに比して低く評価された現実自己（萎縮自己）の二重構造を明らかにした。この心理構造の基本的な特徴は、非現実的に肯定的で誇大な自己イメージの影響で、日常生活の中で現実の自分自身が受け入れ難く体験される点にあるといえる。対人恐怖傾向と自己愛傾向は、表面的には正反対といえるような特徴を示しながらも、このような現実自己の受け入れ難さの構造において共通であると考えられた。そして、青年期を代表する心理的特徴である対人恐怖傾向と自己愛傾向において、それらの特徴が共通して見いだされたことは、広く青年期の心理発達にみられる困難さの一端がこのような現実自己の受け入れ難さに起因することを示唆しているものと考えられる。幼少期において馴染んできた思いの世界の中で、理想的な自分自身がそのまま実現されることを願う気持ちが強いために、現実の自分自身はどこかなじみのない不自然なものと体験されやすい。そのため、自分だけが周囲の人と違うのではないか、普通ではないのではないか、どこか変なところがあるのではないかと不安にならざるを得ず、このことが全般的な過敏さや不安定さ、動揺の大きさに結びついていると考えられるのである。加えて、そのような課題が青年期の課題に結びついているということは、現実の自分自身を認め受け入れることが成人期以降の自立した生活への準備として必要であることを示唆しているものと考えられる。

以上のような見解は、これまでも青年期における完全主義や理想主義、観念主義としてさまざまな立場から指摘されてきたことに近似するものである。そういった意味では、これまでの青年期研究に比してそれほど目新しいものではないかもしれない。ただし、ここで問題となるのは、なぜそのように現実自己を受け入れるのが困難なのかという疑問である。通常一般的に考えても、現実の自分自身を受け入れることはいともたやすいように考えられる。しかしながら、これまで取り上げてきた対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造に関する知見は、むしろそのようにして現実の自分の受け入れることが一般の人々にとってもいかに困難であるかを示唆しているのである。

第3章では、以上の知見をさらに発展させるために対人関係の観点からみた対人恐怖傾向と自己愛傾向の検討をおこなった。対人恐怖傾向と自己愛傾向はともに対人関係におい

て主な問題が出現する。それらの特徴を詳細にみる中で、おもに否定的な他者認知が関連していることが推測された。そして、そのような否定的な他者認知がどのようにして生じるのかについて検討が行われた。その過程で、第2章で取り上げた自己の二重構造の基本的な駆動要因が誇大自己にあることから、従来自己愛研究の中で取り上げられてきた一次性自己愛や誇大自己について批判的に考察を加え、その背景に特に自覚の欠ける幼若な心理があることを論じた。そして、そのことを踏まえて、人間の発達の起点を母体内での胎内体験におく原体験の視座から、青年期の心理発達と対人関係の発達をとらえる考察をおこない、それを基盤にして対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の構造を考察した。その結果、原初的な体験からの見分けと区別の発達として総合的に理解することにより、両者にみられる対人認知の偏りが十分に理解されうると考えられたのである。

以上のような知見は、青年期にみられる現実自己の受容の体験が単に現実の自分を知るといったことではなく、それ以前の発達の中で馴染んできた母子密着の体験世界からの脱却という一連の流れに軌を同じくするものであることを意味している。原体験に由来する一体感の体験の中では、外的現実への対処も自分自身の内面に生じる諸種の欲求や感情への対処も、合一化の対象である母親に委ねておくことができる。そこでは、自分自身が何かをすることはないので、基本的には葛藤や心のもつれ等の心理的負担は生じる度合いが低く、そのことにより不安や恐れなどのネガティブな体験を引き受ける必要もない。一方で、自分自身が母親を中心とする他者から区別された存在であることを知ることは、そういったすべての面における対処を自分で行わなければならないことを意味している。現実の自分に気づくことは、自分自身が他の人々と同じ一人の人間であることを知ることであり、それまでの家庭内ではかけがえのない存在であったはずの自分自身は、その点では他の人々と全く同じ平凡な存在に過ぎないことになる。そのような点に気づくことは、対人関係上の不文律や暗黙のルール、ないしは、社会生活上の規範や規則を守るべき自分自身への弁えや自覚にもつながりうるものではあるが、同時に、そのことからくる精神的負担や窮屈さから様々な面で抵抗感や違和感を体験せざるを得なくなる。以上のような成熟にともなう変化は、青年期に至って急に生じたのではなく、乳幼児期から児童期を経て、特に母子関係を中心とする身近な他者との関係において徐々に形成されてきたものと考えられる。しかしながら、おそらくその集大成を求められるのが青年期であり、その意味ではこの課題の困難さが最も端的に体験されることになるものと思われる。言い換えるならば、



青年期に体験される現実自己の受容の困難さのおおもとは、幼子が母親から分離するときに体験する不安や抵抗が潜んでいる。幼児が母親から離れたときに示す不安と混乱の大きさを見れば、青年が示す現実の自分自身の受け入れ難さの一端を知ることができるのである。

このような青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する検討は、以上に示したような形で青年期の心理発達の重要な局面を考察することを可能としたと考えられる。対人恐怖傾向と自己愛傾向はともに自意識過剰の状態なのであって、自己を意識し始めるようになりながらも、いまだ他者の視点から見た自分自身に重点がある状態といえる。原体験の視座から見れば、自分自身をどのようにみるかも含めて母親の対象に合一的にゆだねられていた段階から、自分で自分自身に目を向けて検討判断できるようになるまでの過渡的な状態にあるものと考えられる。その意味では、対人恐怖傾向と自己愛傾向は、この時期の自己確立への中間段階を典型的に示すものであると言えるのではないだろうか。本研究は、質問紙を用いた調査研究が中心となっており、その意味ではかなり調査協力者から距離のある間接的なデータを使用するものであった。それにもかかわらず、そこから上記の青年期の課題の様相に向けての考察がある程度行えたのは、これらの両傾向が比較的純粋に青年期の過渡的な課題を反映するものであったからではないかと思われる。以上のように考えれば、対人恐怖傾向と自己愛傾向は、青年期の自己確立の課題を解明するうえで最適の主題であったといえる。

## 第5節 対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通性と差異について

本研究の冒頭で、対人恐怖傾向と自己愛傾向は、一見するところ正反対といえるような特徴を示しつつも、背景で共通の構造的特徴がみられることを問題提起した。このことは、第2章においては自己の二重構造であり、その基本的な駆動要因は過度に肯定的に評価された誇大自己であった。そして、その誇大自己の性質について先行研究をもとに検討した結果、自覚を欠く幼若な心理の表れであることが推測され、第3章でそれは原体験に基づく融合合一的な体験世界であることが示された。このような本研究の流れでいえば、対人恐怖傾向と自己愛傾向に感じ取られていた共通性は、結局のところこの原体験心性であったといえる。

原体験世界は、辻（2003, 2008）が示すように葛藤のない体験世界である。そこでは“困る”や“悩む”といったことがなく問題意識を持つこともない。いわばすべてが順調に進むは

ずであって、頓挫や挫折といったことはあり得ないことになる。しかも、人の人生がそのような状態から始まるのだとすると、ある意味誰しもにとってそれが“当たり前”であり“そのようにあるはずであった”とでもいえるようなことになる。最初の状態がそうであったのだとすれば、その後それ以外の体験が生じてくることは予想外であり驚きをもって迎えられることになるであろう。少し言い方を変えれば、原初的な状態が困ることも悩むこともないのであれば、そのようなことが約束されていたはずだという表現も可能なように思われる。

自己愛的な人は、自分自身に関する誇大な意識や万能感を示すものの、それらは何らの根拠もなく主張されるわけではなく、自分自身に関するさまざまな側面に関連づけられるのが普通である。その際、具体的にどのようなことに根拠づけが行われるかには個人による差が大きいものと考えられるが、多くの場合そこにある種の共通の特徴がみられる。つまり、彼らは、自分自身が特別な才能に恵まれていたり、卓越した美貌の持ち主であったり、あるいは、特別な家系や立場であったり、ないしは、生まれ持って優れた地位にあることを夢想する。これらの訴えは、個々の具合的な側面では異なるものの、人間にとって一度手に入ったら失われることはないといった性質を表現しているように思われる。たとえば、才能や知能というのは一般には生まれ持って備わっている能力のように受け取られているし、身体的な美貌は基本的にはあまり大幅な変化なく終生変わることがない。あるいは、家系が優れているとか、生まれ持って優れ地位にあるといったことはまさにそうであって、その人が持って生まれて決して失われないものとして体験されている。いわばそれらは人間にとっての与えられた条件のようなものであって、彼らはそれがあって“自分は普通の人のようには悩んだり困ったりすることはない”と言っているようである。このようにみれば、自己愛的な特徴の背景に原体験心性の働きを見るのは容易である。それは、かつての“悩む”ことも“困る”こともないはずであった原体験世界の名残なのである。

対人恐怖傾向の背景に、そのような理想的で誇大な自己を見出すのは、ここでも原体験の性質が色濃く関連しているからであると思われる。第3章第1節で考察したように、基本的に対人恐怖傾向においては、現実に見えてきた自分自身を“嫌だ”、“避けたい”と体験しており、自分自身については否定的に認知している。しかし、その背景にはやはり前段で触れたのと同様の原体験由来の体験が息づいているのであろう。母体の胎内体験に由来する原体験世界では、自分と自分の受け皿である対人関係とは合一的に体験されていて両者の間に矛盾や葛藤はなく、その延長線上にある家庭内での対人関係を中心に過ごしてき

た場合には、いわばそのような関わりが“当たり前”で“そのはずである”と体験されている。しかしながら、思春期以降人前に出て緊張したり、他者との会話で戸惑ったりする自分に出会って、“こんなはずではなかった”，“不本意だ”といったことを感じ取らざるを得ず、受け取りがたく体験するものと思われる。対人恐怖的な人は、前述のとおり受動的な対応様式が主であるため、不本意な気持ちやふがない思いを積極的に表現することは少ないながらも、治療者を中心とする関わる側が、比較的密な関わりの中でそういった背景的な気持ちに接すると、“理想的な姿を望んでいる”とか、“強気な気持ちを秘めている”と受け取った可能性が考えられるのである。対人恐怖症の治療に長年取り組んだ山下（2011）は、彼らの悩みが実際にはあたらぬことを説明しようとしても、患者たちは自らの苦悩が理解されないことを嘆くばかりであると指摘している。そのような患者たちの訴えの背後には、原体験世界に由来する悩みや苦悩のないはずの体験の喪失があるものと考えられる。

一方で、本研究では対人恐怖傾向と自己愛傾向の差異も明らかになった。第3章で論じたように、対人恐怖的な人は、現実の自分との出会いによる不安や恐怖に対して、それを受け身に回避しようとする受動的な姿勢に特徴があるものと考えられる。対人恐怖傾向では、現実の自分を知ることに伴う葛藤や心のもつれに対して“嫌がり、避ける”という消極的な対応に終始しやすく、また、それだけでなく、そのような心情が周囲の受け皿となる他者に位置付けて体験される中で、周囲からの反応や評価にそのまま影響されやすいという点でも受動的である。周囲からの評価や反応は、本来与えられたひとつの条件に過ぎないはずのものであるが、そのようにして与えられるものがほぼ絶対的といえるほどに重要なものと体験され、対抗したり無視したりといった積極的な対応がとられることはほとんどない。このように、対人恐怖的な人は、内面に生じる否定的感情への対応においても、対人関係を中心とする外的な状況に対する対応においても、ともに受け身な姿勢が目立つものと考えられた。

それに対して、自己愛的な人は、内面的な不安や恐れへの感情に対して、怒りや苛立ちをもってより積極的に排斥していかうとする能動的な姿勢に特徴があると考えられた。自己愛的な人は、不安や恐れへの感情にむしろ苛立ちや怒りでもって対応し、身の回りの人々や事物に攻撃を向けやすい。それらの全般的に否定的な感情が周囲の友人関係に合一的に位置付けられた場合、身の回り的人々は臆病で気が小さく、卑屈で敵意的なものとして体験され、対人場面での葛藤や滞りはすべて他者の問題と位置づけられる。反面、内面的には、自分自身の肯定的な気持ちや思いが活性化しやすく、理想的な自分の姿や行動を自ら思い

浮かべそのような主観的な世界に陶醉するという点でも能動的である。全般的に自己愛的な人は活性が高く勢いづいている点で能動的で積極的な側面が目立つように思われた。

以上のような違いがなぜ生じてくるかについては今後の検討が必要になってくるものと思われる。原体験の観点から見れば、子どもは、内面的な葛藤や心のもつれについてはその処理の方法も含めて、受け皿となる母性的対象と合一化して体験していることになり、そのような一体感の中で母性的対象の処理の仕方を身につけるものと推測されることから、幼少時からの養育態度の違いが能動性と受動性の面での差異に結びつく可能性が考えられる。もちろん、受け皿となるのは何も母親だけではなく、父親や兄弟も含む家族、身近な友だちや学校の先生、その他重要な他者はすべて含まれるので、広く養育環境全体の影響も想定される。一方、近年の大規模な縦断的発達研究では、見知らぬ他者や状況に対する抑制傾向や回避傾向に対する生得的要因の影響を支持する成果が報告されている（Kagan, 1998, 1999）。また、Kernberg(1975)も、境界例人格障害や自己愛人格障害における気質的な衝動性や攻撃性の高さの影響を指摘していることから、一部には生得的要因や体質的要因の影響もあるのかもしれない。その他、文化社会的要因の影響も想定される。従来対人恐怖症は、日本独自の心的障害であるとされており、欧米圏ではほとんどみられることはないと言われていた。このようなこと背景には、日本文化にみられる社会や世間に対する受動的な対応姿勢の優位性が関連していたのかもしれない。一方、自己愛の概念がとくに自己愛人格障害として広く普及したのは、欧米を中心とする西欧圏である。西欧文化では個人の独立性と能動性を尊重する思想信条が優勢であるとされており、その意味での積極性や能動性が自己愛人格障害を生みやすい要因の一つとなっていた可能性もある。

ただし、このような能動性から受動性へと至る軸は、対人恐怖や自己愛人格の問題に限らず、人間の活動のさまざまな局面を構成するものと考えられる。そういった意味では、上記のような個別的な要因に還元しきれない人間のより基本的な性質を反映する可能性もある。また、能動性と受動性は、必ずしも固定的なものではなく、さまざまな状況で変動する性質をもつようにも思われる。つまり、何らかの危機に対して受動的に対応していても、さらい追いつめられると能動的な攻撃に転じるといった変化はさまざまな領域で示されるものであり、従来活発で積極的な状態を維持していたものが、何らかのきっかけに急に抑制的で受け身な状態に落ち込むといったこともしばしば観察される。対人恐怖傾向と自己愛傾向もそういった意味では変動しうる可能性があることになる。そのような変動性の中で、臨床場面を中心として両者の共通性が感じ取られやすかったのではないかと考え

られる。

## 第6節 対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者を取り上げることの意義

冒頭で述べたとおり，本研究では対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者を同時に取り上げて検討をおこなった。いずれの分野でもそれぞれを単独で取り上げた研究は比較的多数であるが，このように両者を同時に取り上げたものは必ずしも多くない。ただ，やはり両傾向を同時に取り上げることで，初めて背景に潜む矛盾や葛藤の構造について幅広い検討が可能となったと考えられる。

第2章で取り上げた自己の二重構造論でも，対人恐怖傾向だけ取り上げていては過度に高く評価された誇大自己の性質には気づくことが難しいものと思われるし，同じく，自己愛傾向のみ取り上げていたのでは，低く評価された萎縮的な自己意識の特徴を詳しく検討することは困難であったように考えられる。対人恐怖傾向は否定的に評価された萎縮自己を，自己愛傾向は過度に肯定的に評価された誇大自己を代表するような行動特性ではあるが，それぞれが単独の要因で成立するものではなく，その背景に矛盾対立する要因が潜んでいた。対人恐怖傾向と自己愛傾向の両傾向を取り上げることで，はじめてそれらの矛盾対立構造を幅広く検討することができたのである。

第3章で行った対人関係の観点から見た検討においても，自己愛傾向からの多くの情報がなければ，原体験に由来する融合合一的な体験の性質はやはり見過ごされがちであったであろう。同時に，対人恐怖傾向を取り上げなければ，見分けと区別の過程で見えてくる否定的な現実の自分の姿の体験を論じることは困難であったように思われる。これらの過程は，原体験の融合合一的な体験世界が優勢な子ども時代から，現実と現実の自分自身を含む見分けと区別が求められる成人期以降の発達段階の過渡的な状態にあたるものである。したがって，青年期特有の発達課題の矛盾葛藤を反映するものであり，両傾向を同時に検討することは，それらの青年期の心理発達の推移を検討することに寄与したものと思われる。

自己の二重構造から見た際の誇大自己と萎縮自己の対立，ならびに，対人関係の特徴から見た際の融合合一的な原体験世界と自己を含む現実への見分けと区別の矛盾葛藤は，理論的に見ても対人恐怖傾向と自己愛傾向だけに限らず，その他の幅広い心の悩みや心的障害に関連するものと考えられる。したがって，対人恐怖傾向と自己愛傾向を同時に取り上げることにより得られた上記の知見は，その他の心の悩みや心的障害を理解することにも

寄与しうるものと考えられる。

## 第7節 本研究の課題と今後の展望

本研究では、対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者を取り上げ、それぞれの心理構造を検討することを通じて、青年期の心理発達に関する知見を得ることを目指した。また、対人恐怖症と自己愛人格障害に関するアナログ研究としての意義も有するものと考えられた。以上の目的のため、自己の観点と対人関係の観点とに分けて、それぞれの観点からの理論的検討を行うとともに、質問紙調査を中心とした仮説の検証を行った。その結果、主に理論的仮説を支持する結果が得られるとともに、その結果の検討を通じて青年期の心理発達、ならびに、対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造に関する有意義な知見が得られた。

しかしながら、本研究の結果には未だ多くの問題が残されており、それに関連して今後のさらなる研究が求められる。第2章第2節（研究1）において、自己の二重構造の仮説に従って、対人恐怖傾向と理想自己—現実自己不一致の関連を検討し、おおむね仮説に一致する結果が得られた。このような検討が可能であったのは、対人恐怖傾向における自己の二重構造では、過度に肯定的に評価された理想自己が通常的理想自己として測定しやすかったことが関連していたものと思われる。その反面、自己愛傾向における自己の二重構造の中では、その一端を構成する過度に否定的に評価された現実自己の方は、通常は意識に上りにくく一般的な現実自己の測定法ではとらえることが困難であることが予想される。そのため、自己愛傾向に関しては、同様の手法で自己の二重構造を検討することができなかった。自己愛傾向については、通常は意識されにくいような現実生活で体験する自己像を的確にとらえる必要がある。今後この点については、測定方法の工夫、臨床事例の報告などを通じてさらに検討する必要がある。

第2章第3節（研究2-1）、ならびに、第4節（研究2-2）では、両傾向と自尊感情の不安定性、ならびに、理想自己—現実自己不一致の不安定性との関連を検討した。その結果、日常生活内で繰り返し自尊感情や自己不一致の評定を行う生活内評定の結果について、対人恐怖傾向と自己愛傾向との関連で仮説を支持する結果が得られた。方法論上の複雑さを考慮すると、このような有意な結果が得られたことは十分に評価できるものと思われる。しかしながら、有意な結果が得られたのがかなり部分的なものにとどまった点については問題が残るものと思われる。とくに、自己不一致との関連について、研究1の結果と不一致な面がみられたことは今後のさらなる検討が求められる。

第2章第5節（研究3）では、これまでの自己の観点から見た研究を踏まえ、対人恐怖傾向と自己愛傾向について自己の二重構造の仮説に基づきモデルを構成し、共分散構造分析を通じて妥当性の検討をおこなった。その結果、誇大自己と萎縮自己の二重構造から対人関係上の傷つき易さが生じるとの仮説モデルが支持された。以上の結果は自己の二重構造の仮説を支持するものと考えられた。しかしながら、対人関係に関する潜在変数は“対人的傷つき易さ”のひとつしか得られなかった。第3章以降の対人関係の観点からの研究においては、対人恐怖傾向と自己愛傾向の対人場面での問題については、否定的な対人認知という共通性を持ちつつも、基本的には別々の性質を持つものとして扱われており、この点とは矛盾する結果であると言える。このような結果となった一つの理由として、使用した尺度項目の影響が考えられる。対人恐怖傾向・自己愛傾向質問項目はもともと比較的多数の質問項目で構成されていたものの、項目分析と因子分析の過程で特に自己愛傾向関連の項目を中心に多数の項目が除外された。このような結果は、NPIを用いた先行研究でも同様に生じており、自己愛傾向の尺度項目群に因子分析等を行った際には生じやすいものではある。しかし、結果的にこのことが因子数の少なさ結びつき、共分散構造分析における観測変数の減少につながったものと考えられる。そのため、とくに対人関係に関わる内容が狭いものとなった可能性が否めない。今後は、項目を工夫する等などの手続きで、できるだけ広い範囲の体験をとらえることで、対人関係上の特性をより広く検討できる可能性があるものと思われる。

第3章第4節（研究5）では、対人恐怖傾向、ならびに、自己愛傾向に特有の否定的な他者認知をそれぞれ嫌悪判断、敵意帰属と概念化し、場面想定法を用いた測定法を開発した。自由記述調査の詳細な分析を通じ、嫌悪判断を引き起こす対人疎外場面、敵意帰属を引き起こす対人挑発場面をそれぞれ3場面ずつ構成し、それぞれに評定尺度を付加したものを青年期男女に実施した。その結果、攻撃性、公的自意識、相互作用不安との間に尺度の妥当性を支持する結果が得られた。以上の結果は本測定法の妥当性を支持するものであるが、それぞれの得点計算にあたっての信頼性が比較的低い値にとどまった。その背景には項目数の少なさによる影響が大きいものと考えられる。この問題を解決するには場面数を増やすことで比較的多数の項目を確保することが考えられる。しかしながら、あまりに多数の否定的な対人場面を提示することは、調査協力者に過度の負担となるだけでなく、反応そのものの歪みも引き起こしかねないものと思われた。その際、場面内容を簡略化してそのような歪みを防ぐことも考えられたが、そのようにすることで場面想定法の利点で

ある実体験との類似性が失われ、紋切り型の回答しか得られなくなることも懸念された。ただ、やはり以上の点は研究上の問題であると考えられるため、今後項目数を工夫したり計算方法を修正するなどして改善が求められる。

第3章第5節（研究6）の結果を受け、第6節（研究7）では対人恐怖傾向と嫌悪判断の関連に関する発展的研究を実施した。否定的な他者認知としての嫌悪判断と、広く心的障害に関連することが知られている認知の偏りとしての自動思考を取り上げ、共分散構造分析により両者の効果を検討した。その結果、嫌悪判断と自動思考の両者が対人恐怖傾向に影響していることが示唆された。これらの結果は、第3章第2節で得られた理論的仮説に対応するものと思われた。ただし、自動思考が関連すると思われる抑うつ症状について、今回は抑うつそのものを測定する尺度は用いず、対人恐怖心性尺度内の抑うつ的な側面を反映する下位尺度によった。そのため、自動思考から対人恐怖傾向に対する効果が高く出やすくなり、結果的に自動思考の影響を過大評価している可能性がある。今後は、抑うつ傾向そのものを測定する尺度を用いて再度検討すべきであると考えられる。

第3章第7節（研究8）では、第5節（研究6）の結果を受けて、自己愛傾向に対する、怒りの情緒反応を調整変数とする敵意帰属の効果を検討した。交互作用項を含む階層的重回帰分析を実施したところ、仮説を支持する有意な交互作用が得られ、単純傾斜の分析でも有意な結果が得られた。そこで、自尊感情を統制した分析、ならびに、結果の再現性を検討するために、再度同調査を実施して分析したところ、ほとんどの交互作用が再現されるとともに、自尊感情を統制した分析では自己愛傾向の肯定的な側面についても仮説を支持する結果が得られた。以上の成果は、先行研究において一致した見解が得られていなかった自己愛傾向と敵意の関連について、新たな知見を追加するものであり、研究として有意な知見であると考えられる。しかしながら、単純傾斜の検定に示される単純傾斜の値はかなり小さなものであり、自己愛傾向全体に対する敵意帰属の効果は弱いものにとどまった。このことには、場面想定法による測定にさまざまな誤差が混入しやすく、かつ、項目数の少なさから信頼性が低いものにとどまったことが関係しているものと思われる。したがって、この点についても今後項目数を増加したり計算方法を工夫したりするなどして改善が望まれる。

本研究の実証的な知見は、ほとんどすべて一般青年を対象とする質問紙調査によっており、この点では臨床症状に関連する対人恐怖傾向と自己愛傾向の研究としては臨床実践上の知見の希薄さが問題視されるかもしれない。確かに、これまでの理論的展開も含めて、



ほとんどが繰り返し実施してきた調査研究の過程で検討され推敲されてきたものであり、その意味で本研究の知見が主に一般青年に対する調査結果に根差すことには相違はない。しかし、同時に、これまで著者が精神科クリニックや精神病院、産業メンタルヘルスや学生相談の中で出会ってきたさまざまな相談者との面接過程に関する繰り返しの検討、ならびに、ロールシャッハ検査法を中心とする検査結果に対する解釈過程の中で、同時に調査研究で明らかとなった問題点や疑問点に関する示唆が多数得られ、そのような中で検討考察されたことも本研究に関わる基礎的な知見となっている。ただし、それらをささえる臨床データはいずれも断片的で離散的なものであるし、同時に多くのものが守秘義務や倫理上の配慮との関係で一般には公開できない。そのような制限のために本稿の中には積極的には取り入れられていないが、特に理論的な検証の多くにはそのような臨床実践の中で得られた知見が深くかかわっていることを付言しておきたい。

## 関連業績一覧

### ◆ 著書（分担執筆）

相澤直樹(2004). 自意識過剰 谷冬彦・宮下一博(編著) さまよえる青少年の心——アイデンティティの病理—— 北大路書房, 43-49.

### ◆ 査読付き論文（学術専門誌）

相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.

相澤直樹 (2003). 強迫性障害の一事例研究——図版任せの観点から—— ロールシヤツハ法研究, **7**, 62-73.

相澤直樹 (2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について——場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性—— 心理臨床学研究, **29**, 365-370.

相澤直樹 (2015). 社交不安に対する対人場面の解釈の偏りと自動思考の効果 心理学研究, **36**(印刷中)

### ◆ 査読付き論文（大学紀要等）

相澤直樹 (2002). 青年期の対人恐怖心性と自己不一致の関係について 神戸大学発達科学部人間科学研究, **10**, 77-88.

相澤直樹 (2009). 対人恐怖と自己愛との関係に関する再整理の試み 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2**, 1-10.

相澤直樹 (2014). 対人恐怖における認知の偏りの内容特定性について——敵意帰属との関連から—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科, **8**, 103-106.

### ◆ 査読無し論文

相澤直樹 (1999). ナルシシズムに関する一考察——現象像・病態像、及び、精神力動論の整理の試み—— 大阪大学教育学年報, **4**, 171-186.

相澤直樹 (2000). ナルシシズム性人格に関する一研究——自尊感情の水準及び不安定性との関係についての実証的研究—— 大阪大学教育学年報, **5**, 99-111.

相澤直樹 (2001). 自己愛性人格に関する一研究(3)——自己不一致の不安定さとの関係について—— 大阪大学教育学年報, **6**, 211-222.

相澤直樹 (2006). 自己愛に関する最近の研究動向(調査実証研究を中心に) 神戸大学発達科学部研究紀要, **14**, 109-123.

相澤直樹 (2008). 自己愛(narcissism)概念の再検討に向けて——フロイトにおける視座の展開に照らして—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **1**, 129-138.

相澤直樹 (2008). 自己愛(narcissism)概念の再検討に向けて——フロイトにおける視座の展開にてらして②—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2**, 149-158.

相澤直樹 (2010). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒的反応について——他者の意図としての敵意と嫌悪に注目して—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**, 1-10.

◆ 学会発表

相澤直樹(2015). 敵意帰属と怒りが自己愛的傾向に与える影響について——怒りを調整変数とする敵意帰属の効果—— 日本発達心理学会第26回大会発表論文集, 349.

以上

## 引用文献一覧

- Abbott, M. J., & Rapee, R. M. (2004). Post-event rumination and negative self-appraisal in social phobia before and after treatment. *Journal of Abnormal Psychology*, **113**, 136-144.
- 足立博・間島竹次郎・小河原竜太郎 (1960). “私は嫌な臭いを発散させている”という患者について 精神神経学雑誌, **62**, 818.
- 相河和佐. (2004). 女子大学生の対人恐怖心性と「顔反応」 ロールシャッハ法研究, **8**, 33-41.
- Aiken, L.S., & West, S.G. (1991) *Multiple Regression: Testing and interpreting interaction*. Newbury Park, CA: Sage.
- 相澤直樹(1997). 対人場面における対人恐怖的な悩みの分析 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 548.
- 相澤直樹(2009). 対人葛藤場面における他者への敵意ならびに嫌悪の位置づけについて——場面想定法による測定の試み—— 日本心理臨床学会第 28 回秋季大会発表論文集, 216.
- Akhtar, N. & Bradley, E.J. (1991). Social information processing deficits of aggressive children: Present findings and implications for social skills training. *Clinical Psychology Review*, **11**, 621-644. doi: 10.1016/0272-7358(91)90007-H
- Akhtar, S., & Thomson, J. A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *The American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.
- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5* (5th ed.) Washington, DC: American Psychiatric Press.
- Ames, L.B., Métraux, R.W., & Walker, R.N. (1959). *Adolescent Rorschach responses: Developmental trends from ten to sixteen years*. NY: Paul B. Hoeber.
- Amin, N., Foa, E. B., & Coles, M. E. (1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behavior Research and Therapy*, **36**, 945-957.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子(1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性,信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392. doi: 10.4992/jjpsy.70.384

- Arieti, S. (1957). *Interpretation of schizophrenia*. NY: Basic Books.
- (アリエティ, S. 加藤正明・河村高信・小坂英世 (訳) (1958). 精神分裂病の心理  
牧書店)
- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢著 (2005). 入門共分散構造分析の実際 講談社
- Asmundson, G. J. G., & Stein, M. B. (1994). Selective processing of social threat in patients with generalized social phobia: Evaluation using a dot-probe paradigm. *Journal of Anxiety Disorders*, **8**, 107-117.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33. doi: 10.1037/0033-295X.103.1.5
- Beck, A.T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. Madison, Conn.: International Universities Press.
- (ベック, A.T. 大野裕(訳) (1990). 認知療法——精神療法の新しい発展—— 岩崎  
学術出版社)
- Bernstein, R. M. (1980). The development of the self-system during adolescence. *The Journal of Genetic Psychology: Research and Theory on Human Development*, **136**, 231-245.
- Blais, M. A., Hilsenroth, M. J., & Castlebury, F. D. (1997). Content validity of the DSM-IV borderline and narcissistic personality disorder criteria sets. *Comprehensive Psychiatry*, **38**, 31-37. doi: 10.1016/S0010-440X(97)90050-X
- Brown, T. A., Campbell, L. A., Lehman, C. L., Grisham, J. R., & Mancill, R. B. (2001). Current and lifetime comorbidity of the DSM-IV anxiety and mood disorders in a large clinical sample. *Journal of Abnormal Psychology*, **110**, 585-599.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219-229. doi: 10.1037/0022-3514.75.1.219
- Bushman, B. J., Baumeister, R. F., Thomaes, S., Ryu, E., Begeer, S., & West, S. G. (2009). Looking again, and harder, for a link between low self-esteem and aggression. *Journal of Personality*, **77**, 427-446. doi: 10.1111/j.1467-6494.2008.00553.x
- Cho, Y., & Telch, M. J. (2005). Testing the cognitive content-specificity hypothesis of social anxiety and depression: An application of structural equation modeling. *Cognitive*

- Therapy and Research*, **29**, 399-416.
- Combs, D.R., Penn, D.L., Wicher, M., & Waldheter, E. (2007). The ambiguous intentions hostility questionnaire (AIHQ): A new measure for evaluating hostile social-cognitive biases in paranoia. *Cognitive Neuropsychiatry*, **12**, 128-143. doi: 10.1080/13546800600787854
- Clark, D. M., & Ehlers, A. (2008). *Workshop of cognitive behavior therapy for social phobia and PTSD*. Tokyo: Seiwa Shoten Publishers.
- (クラーク, D.M.・エーラーズ, A.・丹野義彦(訳) (2008). 対人恐怖と PTSD への認知行動療法——ワークショップで身につける治療技法—— 星和書店)
- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aiken, L. S. (2003). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences* (3rd ed.) Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cook, W. W., & Medley, D. M. (1954). Proposed hostility and Pharisic-virtue scales for the MMPI. *Journal of Applied Psychology*, **38**, 414-418. doi: 10.1037/h0060667
- Crick, N.R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, **7**, 313-322 doi: 10.1017/S0954579400006520
- Crick, N.R. & Dodge, K.A.(1994). A review and reformulation of social information-processing mechanism in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101. doi: 10.1037/0033-2909.115.1.74 .
- Dodge, K.A.(1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51**, 162-170.
- Dodge, K.A., Murphy, R.R., & Buchsbaum, K. (1984). The assessment of intention-cue detection skills in children: Implications for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163-173. doi: 10.2307/1129842
- Dodge, K.A. & Newman, J.P.(1981). Biased decision-making processes in aggressive boys. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 375-379. doi: 10.1037/0021-843X.90.4.375
- Dodge, K.A. & Tomlin, A.M. (1987). Utilization of self-schemas as a mechanism of interpersonal bias in aggressive children. *Social Cognition*, **5**, 280-300.
- Dodge, K.A. & Somberg, D.R. (1987). Hostile attributional biases among aggressive boys are

- exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, **58**, 213-223. doi: 10.2307/1130303
- Ellis, A. (1962). *Reason and Emotion in the Psychotherapy*. NY: Stuart.
- Emmons, R. A. (1984). Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300. doi: 10.1207/s15327752jpa4803\_11
- Emmons, R. A. (1987). Narcissism: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11-17. doi: 10.1037/0022-3514.52.1.11
- 遠藤由美 (1991). 理想自己に関する最近の研究動向——自己概念と適応との関連で——  
上越教育大学研究紀要, **10**,18-36.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (1992). セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求——  
ナカニシヤ出版
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究,  
**48**, 444-453.
- Epps, J. & Kendall, P.C. (1995). Hostile attributional bias in adults. *Cognitive Therapy and Research*, **19**, 159-178.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle: Selected papers (Vol. v. 1, no. 1. Monograph 1)*  
NY: International Universities Press.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル—— 誠信書房)
- Foa, E. B., Franklin, M. E., Perry, K. J., & Herbert, J. D. (1996). Cognitive biases in generalized social phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 433-439.
- Freud, S. (1895) *Studien über Hysterie*.
- (フロイト,S. 懸田克躬 (訳) (1974). ヒステリー研究 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集 7 人文書院, pp.2-229.)
- Freud, S. (1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*.
- (フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次(訳)(1969). 性欲論三篇 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集 5 人文書院, 7-94.)
- Freud, S. (1910). *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci*.
- (フロイト, S. 高橋義孝(訳) (1969) . レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い

出 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）フロイト著作集 3  
人文書院, pp.90-147.)

Freud, S. (1911). *Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides)*.

(フロイト, S. 小此木啓吾(訳)(1983). 自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎・生松敬三(編). フロイト著作集 9 人文書院, pp.283-347.)

Freud, S. (1913). *Totem und Tabu*.

(フロイト, S. 西田越郎(訳)(1969). トーテムとタブー 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）フロイト著作集 3 人文書院, pp.148-281.)

Freud, S. (1914). *Zur Einführung des Narzissmus*.

(フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次(訳)(1969). ナルシシズム入門 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎(編) フロイト著作集 5 人文書院, pp.109-132.)

Freud, S. (1915a). *Triebe und Triebchicksale*.

(フロイト, S. 小此木啓吾（訳）(1970). 本能とその運命 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）フロイト著作集 6 人文書院, pp.59-77.)

Freud, S. (1915b). *Das Unbewußte*.

(フロイト, S. 井村恒郎(訳)(1970). 無意識について 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）フロイト著作集 6 人文書院, pp.87-113.)

Freud, S. (1916-1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*.

(フロイト, S. 懸田克躬・高橋義孝（訳）(1971). 精神分析入門（正・続） 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎・生松敬三 フロイト著作集 1 人文書院)

Freud, S. (1917). *Trauer und Melancholie*.

(フロイト, S. 井村恒郎（訳）(1970). 悲哀とメランコリー 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編）フロイト著作集 6 人文書院, pp.137-149.)

Freud, S. (1920). *Jenseits des Lustprinzips*.

(フロイト, S. 小此木啓吾（訳）(1970). 快感原則の彼岸 生松敬三・井村恒郎・小此



- 木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎（編） フロイト著作集 6 人文書院, pp.150-194.)
- Freud, S. (1921). *Mssenpsychologie und Ich-Analysis*.  
 (フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1970). 集団心理学と自我の分析 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集 6 人文書院, pp.195-253.)
- Freud, S. (1923). *Das Ich und Das Es*.  
 (フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1970). 自我とエス 生松敬三・井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集 6 人文書院, pp.263-299.)
- Freud, S. (1930). *Das Unbehagen in der Kultur*.  
 (フロイト, S. 浜川祥枝 (訳) (1969). 文化への不満 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集 3 人文書院, pp.431-496.)
- 藤井恭子 (2014). 恋愛関係 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック 福村出版, pp.326-338.
- 福田美由紀 (1989). ナルシシズムの基礎的研究-2-NPI [Narcissistic Personality Inventory] の妥当性と信頼性について (教育心理学特集) 教育学科研究年報, **15**, 57-75.
- 福田美由紀・大石史博・篠置昭男 (1987). ナルシシズム的人格の基礎的研究(2)——ナルシシズム的人格目録と PF スタディとの関係について—— 日本教育心理学会総会発表論文集, **29**, 536-537.
- 福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖——自己試練の苦悩から人格成熟へ—— 金剛出版
- Fukunishi, I., Hattori, M., Nakamura, H., & Nakagawa, T. (1995). Hostility is related to narcissism controlling for social desirability: Studies of college students and patients with myocardial infarction. *Journal of Psychosomatic Research*, **39**, 215-220. doi: 10.1016/0022-3999(94)00094-L
- Gabbard, G. O. (2000). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice (3rd ed.)*: Washington, DC: American Psychiatric Press.
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage.  
 (ガーゲン, K. J. 東村知子 (訳) (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit

- Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216. doi: 10.1037/0022-3514.85.2.197
- 原田 新. (2009). 新たな自己愛人格尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2**, 25-32.
- 原田 新 (2012). 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変化 発達心理学研究, **23**, 95-104.
- 原島雅之・小口孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, **47**, 69-77. doi: 10.2130/jjesp.47.69
- Hall, G.S.(1905). *Adolescence: its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*. London: Appleton.
- (ホール, G.S. 中島力造(訳)(1910). 青年期の研究 同文館)
- Handler, L. & Hilsenroth, M. (2006). Rorschach assessment of narcissistic personality disorder. In Huprich, S.K.(Ed.) *Rorschach assessment of the personality disorders*. Mahwah: Lawrence Erlbaum, pp.223-262.
- Hart, P. L., & Joubert, C. E. (1996). Narcissism and hostility. *Psychological Reports*, **79**, 161-162. doi: 10.2466/pr0.1996.79.1.161
- Harter, S. (1998). The development of self-representations. In W. Damon & R.M.Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol.3. Social, emotional, and personality development. 6<sup>th</sup> ed.* NJ: John Wiley & Sons, pp.553-617.
- Heinlich, N., & Hofmann, S. G. (2001). Information processing in social phobia: A critical review. *Clinical Psychology Review*, **21**, 751-770.
- Higgins, E.T., Bond, R.N., Klein, R .N., & Strauman, T.(1986). Self-discrepancies and emotional vulnerability: How magnitude, accessibility, and type of discrepancy influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**,5-15.
- 平石賢二 (2014). 親子関係 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック 福村出版, pp.306-314.
- Hirsch, C. R. & Clark, D. M. (2004). Information-processing bias in social phobia. *Clinical Psychology Review*, **24**, 799-825.
- Hoge, D.R. & McCarthy, J.D. (1983). Issues of validity and reliability in the use of real-ideal discrepancy scores to measure self-regard. *Journal of Personality and Social Psychology*,

44, 1048-1055.

Hollon, S. D., & Kendall, P. C. (1980). Cognitive self-statements in depression: Development of an automatic thoughts questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **4**, 383-395.

Holdwick, D. J., Jr., Hilsenroth, M. J., Castlebury, F. D., & Blais, M. A. (1998). Identifying the unique and common characteristics among the DSM-IV antisocial, borderline, and narcissistic personality disorders. *Comprehensive Psychiatry*, **39**, 277-286. doi: 10.1016/S0010-440X(98)90036-0

Homant, R. & Kennedy, D.B.(2003). Hostile attribution in perceived justification of workplace aggression. *Psychological Reports*, **92**, 185-194.

堀井俊章. (2002). 青年期における対人不安意識の発達の变化 (続報) 山形大学紀要 教育科学, **13**, 79-94.

堀井俊章 (2011). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要I, 教育科学, **13**, 149-156.

堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.

堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報). 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.

保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療意義の検討——ある事例を通して—— 心理臨床学研究, **4**, 15-25.

福井康之 (2007). 青年期の対人恐怖——自己試練の苦悩から人格成熟へ—— 金剛出版

市村美帆 (2011). 自己愛と脆弱な自尊感情 小塩真司・河崎直樹(編著) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— 金子書房, 116-133.

池本奈都・安保恵理子・宮崎球一・根建金男 (2013). 思考の柔軟性, 認知バイアス, 社交不安傾向の関連 早稲田大学臨床心理学研究, **12**, 19-27.

井上和臣 (2011). 認知行動療法からみた病態と介入のポイント 精神療法, **37**, 293-300.

伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, **54**, 222-232.

James, W.(1892). *Psychology, briefer course*.

(ジェームス, W. 今田寛(訳).(1992). 心理学(上) 岩波文庫)

Kagan, J. (1998). *Galen's Prophecy: Temperament in human nature*. Boulder, Colo: Western Press.

- Kagan, J. (1999). The concept of behavioral inhibition. In L. A. Schmidt and J. Schulkin (Eds.) *Extreme fear, shyness, and social phobia: Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes*. NY : Oxford University Press, 3-13.
- (貝谷久宣・不安・抑うつ臨床研究会監訳 (2006) 社会不安障害とシャイネス——発達心理学と神経心理学的アプローチ—— 日本評論社)
- 貝谷久宣 (2010). 社会不安障害 新興医学出版社
- 梶塚隆光・青野哲彦・渡邊吉彦・海野幸治 (1977). ロールシャッハ・テストによる対人恐怖症と境界例の身体像の研究 *ロールシャッハ研究*, XIX, 1-12.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 *パーソナリティ研究*, 14, 80-91. doi: 10.2132/personality.14.80
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 *パーソナリティ研究*, 17, 280-291.  
doi:10.2132/personality.17.280
- 神谷美里 (2000). 対人恐怖的心性とロールシャッハ反応 *ロールシャッハ法研究*, 4, 11-19.
- 狩野裕 (1997). AMOS,EQS,LISRELによるグラフィカル多変量解析——目で見える共分散構造分析—— 現代数学社
- 笠原敏彦 (2005). 対人恐怖と社会不安障害——診断と治療の指針—— 金剛出版
- 笠原嘉 (1972). 正視恐怖・体臭恐怖——主として精神分裂病との境界例について—— 医学書院
- 笠原嘉 (1977). 青年期——精神病理学から—— 中公新書
- 笠原嘉 (2011). 対人恐怖 加藤正明(編) 縮刷版精神医学事典 弘文堂, p.515.
- 片口安史(1987). 改定新・心理検査法——ロールシャッハ・テストの解説と研究—— 金子書房
- 加藤隆勝(1977). 心理モノグラフNo.14 青年期における自己意識の構造 東京大学出版会
- 河合隼雄 (1976). 母性社会日本の病理 中央公論社
- 川崎直樹・小玉正博 (2010). 潜在的自尊心と自己愛傾向との関連——Implicit Association Test及びName Letter Taskを用いたマスク・モデルの検討—— *パーソナリティ研究*, 19, 59-61. doi: 10.2132/personality.19.59
- Kernis, M. H. (2005). Measuring self-esteem in context: The importance of stability of self-

- esteem in psychological functioning. *Journal of Personality*, **73**, 1569-1605. doi: 10.1111/j.1467-6494.2005.00359.x
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013-1022. doi: 10.1037/0022-3514.56.6.1013
- Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C.-R., Berry, A., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204. doi: 10.1037/0022-3514.65.6.1190
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*: Lanham, MD: Jason Aronson Book Rowman & Littlefield.
- 木場清子・榎戸秀昭・越野好文 (1976). 自己臭体験における身体像境界の障害——ロールシャッハ法による検討—— 精神神医学, **18**, 285-292.
- 北山忍 (1995). 文化的自己観と心理プロセス 社会心理学研究, **10**, 153-167.
- 児玉昌久・片柳宏司・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 大学生におけるストレスコーピングと自動思考, 状態不安, 抑うつ症状との関連 ヒューマンサイエンス, **7**, 14-26.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self: A systematic approach to the psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders* (Vol. no. 4). NY: International Universities Press.  
(コフォート, H. 近藤三男・滝川健司・小久保勲(訳)(1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*: NY: International Universities Press.  
(コフォート, H. 本城美恵・山内正美・本城秀次・笠原嘉(訳)(1995). 自己の修復 みすず書房)
- 紺 真理・相澤直樹 (2011). 青年期における攻撃性について——第二の個体化過程と対人葛藤場面における他者の意図の判断から—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **5**, 9-18.
- 近藤章久 (1970). 対人恐怖について——森田を起点として—— 精神医学, **12**, 22-28.
- Konrath, S., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. (2006). Attenuating the link between threatened egotism and aggression. *Psychological Science*, **17**, 995-1001.
- 久木山健一(2000). 大学生の仲間入り場面における社会的情報処理の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 223-234.

- 久木山健一(2002). 社会的情報処理尺度の妥当性に関する試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学) , **49**, 207-215.
- Ladd, E. R., Welsh, M. C., Vitulli, W. F., & Labbé, E. E. (1997). Narcissism and causal attribution. *Psychological Reports*, **80**, 171-178. doi: 10.2466/PRO.80.1.171-178
- Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. (1976). *Vocabulaire de la psychanalyse*. Paris: Presses universitaires de France.  
(ラプランシュ, J.・ポンタリス, J.-B. 村上仁 (監訳) (1997). 精神分析用語辞典みすず書房)
- Liebowitz, M. R., Gorman, J. M., Fyer, A. J., & Klein, D. F. (1985). Social phobia: Review of a neglected anxiety disorder. *Archives of General Psychiatry*, **42**, 729-736. doi: 10.1001/archpsyc.1985.01790300097013
- Lowen, A. (1985). *Narcissism: Denial of the true self*. NY: Macmillan Publishing.  
(ローウェン, A. 森下伸也(訳)(1990). ナルシシズムという病——文化・心理・身体 of 病理—— 新曜社)
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. NY: Basic Books.  
(マラー, M.S.・パイン, F.・バーグマン, A. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳)(1981). 乳幼児の心理的誕生——母子共生と個体化—— 黎明書房)
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Masterson, J. F. (1981). *The narcissistic and borderline disorders: an integrated developmental approach*. NY: Brunner/Mazel.  
(マスターソン, J. F. 富山幸佑・尾崎新(訳) (1990). 自己愛と境界例——発達理論に基づく統合的アプローチ—— 星和書店)
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社会化の心理学／ハンドブック 川島書店, pp.283-296.
- Miers, A. C., Blöte, A. W., Bögels, S. M., & Westenberg, P. M. (2008). Interpretation bias and social anxiety in adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, **22**, 1462-1471.
- Miller, J. D., Hoffman, B. J., Gaughan, E. T., Gentile, B., Maples, J., & Campbell, W. K. (2011). Grandiose and vulnerable narcissism: A nomological network analysis. *Journal of*

- Personality*, **79**, 1013-1042. doi: 10.1111/j.1467-6494.2010.00711.x
- Miller, J. D., Pilkonis, P. A., & Clifton, A. (2005). Self- and Other-Reports of Traits from the Five-Factor Model: Relations to Personality Disorder. *Journal of Personality Disorders*, **19**, 400-419. doi: 10.1521/pedi.2005.19.4.400
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 楠見孝・落合良行(編) 講座生涯発達心理学4 自己への問い直し: 青年期 金子書房, pp.155-184.
- 三好郁男 (1970). 対人恐怖について——「うぬぼれ」の精神病理—— 精神医学, **12**, 29-34.
- 溝上慎一 (2014). 自己意識・自己形成 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック 福村出版, pp.114-126.
- Montemayor, R., & Eisen, M. (1977). The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **13**, 314-319. doi: 10.1037/0012-1649.13.4.314
- Moretti, M.M. & Higgins, E.T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, **12**, 177-196. doi: 10.1207/S15327965PLI1204\_1
- 森岡正芳 (2002). 物語としての面接——ミメシスと自己の変容—— 新曜社
- 森田正馬 (1960). 神経質の本態と療法——精神生活の開眼—— 白揚社
- 森田正馬・高良武久(1953). 赤面恐怖の治し方 白揚社
- Mullins, L. S., & Kopelman, R. E. (1988). Toward an assessment of the construct validity of four measures of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **52**, 610-625. doi: 10.1207/s15327752jpa5204\_2
- 村上靖彦 (1994). 思春期妄想症 精神科治療学, **9**, 265-271.
- 村澤和多里 (2003). ロールシャッハ・テストからみた現代の対人恐怖症 北海道大学大学院教育学研究科紀要, **91**, 163-170.
- 村山久美子 (1979). 自由記述に現われた対人認知の発達的研究-2 心理学研究, **49**, 303-309. doi: 10.4992/jjpsy.49.303

Murray, H.A. (1938). *Explorations in personality*. NY: Oxford University Press.

(マレー, H.A. 外林大作(訳編) (1961). パーソナリティ I 誠信書房)

永井徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析—— サイエンス社

永田利彦 (2009). 社交不安障害の概念の拡大と対人恐怖症 (対人恐怖) こころの科学, **147**, 32-36.

中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, **44**, 9-21.

長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 (1967). 自我と適応の関係についての研究(2) ——Self-Differentialの作成—— 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59-83.

中谷素之 (2013). 自己意識の発達 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.209-214.

中山留美子 (2008). 自己愛的自己調整プロセス——一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて—— 教育心理学研究, **56**, 127-141.

中山留美子 (2010). 自己愛者の自己価値随伴領域 パーソナリティ研究, **19**, 178-180. doi: 10.2132/personality.19.178

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.

成田善弘 (1988). 対人恐怖症——最近の見解—— 高橋良他(編) 現代精神医学大系 (年間版) '88A 中山書店

二宮克美 (2013). 青年期 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.226-231.

西園昌久 (1970). 対人恐怖の精神分析 精神医学, **12**, 375-381.

Novaco, R. W. (1994). Anger as a risk factor for violence among the mentally disordered. In J. Monahan & H. J. Steadman (Eds.), *Violence and mental disorder: Developments in risk assessment*. (pp. 21-59). Chicago: University of Chicago Press.

野崎知子 (2007). 青年期女子における対人恐怖の心性とロールシャッハ反応についての研究 福岡女学院大学大学院紀要 : 臨床心理学, **4**, 31-42.

O'Brien, M. L. (1987). Examining the dimensionality of pathological narcissism: Factor analysis and construct validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports*, **61**, 499-510.



- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 小川捷之 (1974). いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究 横浜国立大学教育紀要, **14**, 1-33.
- 小川捷之・林洋一・永井徹・白石秀人 (1979). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(1) ——比較文化的観点から—— 横浜国立大学教育紀要, **19**, 205-220.
- 小川捷之・木村方美・林洋一 (1980). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(3) ——幼少期の家庭環境と自己像に関する比較文化的検討—— 横浜国立大学教育紀要, **20**, 60-77.
- 小川捷之・永井徹・白石秀人・林洋一 (1979). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(2) —— (a)地域性および(b)幼少期における家族以外の成員との接触・非接触の観点から—— 横浜国立大学教育紀要, **19**, 221-239.
- 大植崇・森山美知子・中谷隆 (2012). 看護師を対象とした ATQ-R (Automatic Thoughts Questionnaire -Revised)短縮版作成と信頼性・妥当性の検討 広島大学保健学ジャーナル, **11**, 20-28.
- 岡田努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**, 69-84.
- 岡田努・永井徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, **60**, 386-389.
- 岡野憲一郎(1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで—— 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾(1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小此木啓吾(1985). 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- 大石史博 (1987). ナルシシズムの心理学的研究-1 人文論究, **37**, 27-44.
- 大石史博 (1988). Narcissistic Personality の研究(1)——MPI, YG 性格検査, EPPS との関係について—— 教育学科研究年報, **14**, 1-6.
- Oltmanns, T. F., Gleason, M. E. J., Klonsky, E. D., & Turkheimer, E. (2005). Meta-perception for pathological personality traits: Do we know when others think that we are difficult? *Consciousness and Cognition: An International Journal*, **14**, 739-751. doi: 10.1016/j.concog.2005.07.001

- Orobio de Castro, B., Veerman, J.W., Koops, W., Bosch, J.D., & Monshouwer, H.J. (2002). Hostile attribution of intent and aggressive behavior: A meta-analysis. *Child Development*, **73**, 916-934.
- 小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究——自尊感情,社会的望ましさとの関連—— 名古屋大學教育學部紀要. 心理学, **44**, 155-163.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情,友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290. doi: 10.5926/jjep1953.46.3\_280
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性,自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係と適応,友人によるイメージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, **50**, 261-270. doi: 10.5926/jjep1953.50.3\_261
- 小塩真司・川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— 金子書房
- 岡林尚子・生和秀敏(1991). 対人不安感尺度の信頼性と妥当性に関する一研究 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, **15**, 1-9.
- Piaget, J. (1949). *La psychologie de l'intelligence (2. éd ed. Vol. no 249 . Section de Philosophie)*. Paris: A. Colin.
- (ピアジェ, J. 波多野完治・滝沢武久(訳)(1960). 知能の心理学 みすず書房)
- Piaget, J.(1964). *Six études de psychologie*. Paris: Denoël.
- (ピアジェ, J. 滝沢武久(訳) (1952). 思考の心理学——発達心理学の6研究—— みすず書房)
- Pulver, S. E. (1970). Narcissism: The term and the concept. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-342. doi: 10.1177/000306517001800204
- Ramsey, A., Watson, P. J., Biderman, M. D., & Reeves, A. L. (1996). Self-reported narcissism and perceived parental permissiveness and authoritarianism. *The Journal of Genetic Psychology: Research and Theory on Human Development*, **157**, 227-238. doi: 10.1080/00221325.1996.9914860
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*,

- 45, 590-590. doi: 10.2466/pr0.1979.45.2.590
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. (1991). Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, **59**, 19-38. doi: 10.1111/j.1467-6494.1991.tb00766.x
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902. doi: 10.1037/0022-3514.54.5.890
- Rathvon, N., & Holmstrom, R. W. (1996). An MMPI-2 portrait of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 1-19. doi: 10.1207/s15327752jpa6601\_1
- Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Cheney, S. (1998). Narcissism, self-knowledge organization, and emotional reactivity: The effect of daily experiences on self-esteem and affect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 75-87. doi: 10.1177/0146167298241006
- Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the Narcissistic Personality Inventory: A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23. doi: 10.1006/jrpe.1995.1001
- Rhodewalt, F., & Peterson, B. (2009). Narcissism. In M. R. Leary & R. H. Hoyle (Eds.), *Handbook of individual differences in social behavior*. NY: Guilford Press, pp. 547-560.
- Rogers, C.R. (1951). *Client-centered therapy: its current practice, implication, and theory*. Boston : Houghton Mifflin.
- (ロージャズ, C.R. 友間不二男(編訳)(1966). ロージャズ全集第3巻サイコセラピー 岩崎学術出版社)
- Rorschach, H., & Morgenthaler, W. (1992). *Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]* (11. Aufl ed.) Bern: Huber.
- (ロールシャッハ, H. 東京ロールシャッハ研究会 (訳) (1958). 精神診断学——知覚診断的実験の方法と結果 (偶然図形の判断) —— 牧書店)
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenfeld, H. (1987). *Impasse and interpretation: therapeutic and anti-therapeutic factors in the psychoanalytic treatment of psychotic, borderline, and neurotic patients*. London: Tavistock.

- (ローゼンフェルト, H. 神田橋條治(監訳)(2001). 治療の行き詰まりと解釈——精神分析療法における治療的/反治療的要因—— 誠信書房)
- 相良麻里 (2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, **15**, 61-63.  
doi: 10.2132/personality.15.61
- 坂本真士・田中江里子・丹野義彦・大野裕 (2004). Beck の抑うつモデルの検討——DAS と ATQ を用いて—— 日本大学心理学研究, **25**, 14-23.
- Schachtel, E. G. (1966). *Experiential foundations of Rorschach's test*. NY: Basic Books.
- (シャハテル, E.G. 空井健三・上芝功博(訳) (1975). ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房)
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1)——コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用—— 電子情報通信学会技術研究報告, **106**, 1-6.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- 清水健司・海塚敏郎 (2005). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究 広島国際大学心理臨床センター紀要, **3**, 23-32.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2006). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, **15**, 67-70. doi: 10.2132/personality.15.67
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16. doi: 10.4992/jjpsy.78.9
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008a). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける自我同一性の様相 心理臨床学研究, **26**, 97-103.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008b). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, **16**, 350-362. doi: 10.2132/personality.16.350
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討：対人恐怖と社会恐怖の異同を通して 教育心理学研究, **58**, 23-33. doi: 10.5926/jjep.58.23
- 清水健司・岡村寿代・川邊浩史 (2011). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける類型の安定性について. 人文科学論集, 人間情報学科編, **45**, 73-79.

- 城月健太郎・野村 忍 (2012). 社会不安に対するコストバイアスと不合理な信念の関連 心身医学, **52**, 229-236.
- Soyer, R. B., Rovenpor, J. L., Kopelman, R. E., Mullins, L. S., & Watson, P. J. (2001). Further assessment of the construct validity of four measures of narcissism: Replication and extension. *The Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied*, **135**, 245-258. doi: 10.1080/00223980109603695
- Spranger, E. (1924). *Psychologie des Jugendalters*. Heidelberg: Quelle & Meyer.  
(シュプランガー, E. 土井竹治(訳) (1937). 青年の心理 刀江書院)
- Steiger, H., Jabalpurwala, S., Champagne, J., & Stotland, S. (1997). A controlled study of trait narcissism in anorexia and bulimia nervosa. *International Journal of Eating Disorders*, **22**, 173-178. doi: 10.1002/(SICI)1098-108X(199709)22:2<173::AID-EAT9>3.0.CO;2-C
- Steinberg, M. S. & Dodge, K.A.(1983). Attributional bias in aggressive adolescent boys and girls. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **4**, 312-321. doi:10.1521/jscp.1983.1.4.312 .
- Stopa, L., & Clark, D. M. (2000). Social phobia and interpretation of social events. *Behavioral Research and Therapy*, **38**, 273-283.
- Stolorow, R.D. & Lachmann, F.M. (1980). *Psychoanalysis of developmental arrests: Theory and treatment*. NY: International University Press.
- Sturman, T. S. (2000). The motivational foundations and behavioral expressions of three narcissistic styles. *Social Behavior and Personality*, **28**, 393-408. doi: 10.2224/sbp.2000.28.4.393
- 須藤春佳 (2010). 前青年期の親友関係「チャム・シップ」に関する心理臨床学的研究 風間書房
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 [self-consciousness scale] 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188. doi: 10.4992/jjpsy.55.184
- 杉浦健 (2000) . 2つの親和動機と対人的疎外間の関係——その発達的变化—— 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- ストレイチー, G. 北山修 (監訳) (2005). フロイト全著作解説 人文書院
- 鈴木英子・有賀美恵子・森野貴輝・北村育子 (2011). 高校生における対人恐怖傾向の関連要因 日本精神保健看護学会誌, **20**, 21-32.
- 鈴木正義・江口純代 (1974). 対人関係の発達 上武正二・辰野千寿・石田恒好・高野清純

- (編). 児童心理学事典 協同出版
- 多田幸司 (2011). 対人恐怖, 社交恐怖の臨床基本データ 精神療法, **37**, 272-280.
- 高木秀明 (2013). 青年期のパーソナリティの諸問題 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.246-252.
- 高橋芳 (1998). ナルシシズム的人格特性について——その下位カテゴリーの検討と防衛規制との関係—— 日本心理臨床学会第17回大会発表論文集, **470**.
- 高井範子 (2008). 青年期における人間関係の悩みに関する検討 太成学院大学紀要, **10**, 85-95.
- 武岡千枝子 (1970). 赤面恐怖症のロールシャッハ反応 ロールシャッハ研究, **XII**, 39-51.
- 田中ネリ・奥村八重子・雨宮淳・雨宮浩・脇要・東條英明・小関英邦・牛山崇・石井靖彦・成田令博・内田安信 (1992). 口臭症の心理特性——第10報ロールシャッハ・テストの所見から—— 日本歯科心身医学会雑誌, **7**(1), 84-91. doi: 10.11268/jjpsd1986.7.84
- 田中康裕・穂苅千恵・福田周・小川捷之 (1994). 青年期における対人不安意識の特性と時代的推移 心理臨床学研究, **12**, 121-131.
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 谷 冬彦 (2004a). 新たなる自己愛人格尺度の作成(1)——因子構造と対人恐怖的心性と弁別性の確認—— 日本心理学会第68回大会発表論文集, **69**.
- 谷 冬彦 (2004b). 新たなる自己愛人格尺度の作成(2)——自我同一性と自尊心との関連から—— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, **52**.
- 谷 冬彦 (2006). 自己愛人格尺度(NPS)短縮版の作成 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, **409**.
- 谷 冬彦 (2008). 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学——認知行動理論の最前線—— 日本評論社
- 豊田秀樹 (1992). SASによる共分散構造分析 東京大学出版会
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析〈入門編〉——構造方程式モデリング—— 朝倉書店
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析——構造方程式モデリング[Amos編]—— 東京図書

- Tremblay, P.F. & Belchevski, M. (2004). Did the instigator intend to provoke? A key moderator in the relation between trait aggression and aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, **30**, 409-424.
- Tschanz, B. T., & Rhodewalt, F. (2001). Autobiography, reputation, and the self: On the role of evaluative valence and self-consistency of the self-relevant information. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 32-48. doi: 10.1006/jesp.2000.1433
- 辻 悟 (1972). 思春期精神医学 金原出版
- 辻 悟 (1978). 性格検査——投映法—— 金子仁郎・原俊夫・保崎秀夫(編) 現代精神医学体系 4A1 : 精神科診断学 Ia 中山書店, 177-293.
- 辻 悟 (1981). 治療精神医学の道程 治療精神医学研究所・関西カウンセリングセンター
- 辻 悟 (1997). 『孵りそびれた人々』以後——関係土俵着想を中心に—— 第166回治療精神医学オープンセミナー講演記録 (未公刊)
- 辻 悟 (2003). ころへの途——精神・心理臨床とロールシャッハ学—— 金子書房
- 辻 悟 (2008). 治療精神医学の実践——ころのホームとアウェイ—— 創元社
- 辻 悟・福永知子 (1999). ロールシャッハ・スコアリング——阪大法マニュアル—— 金子書房
- 辻岡美延 (1965). 新性格検査法——YG性格検査—— 竹井機器工業
- 都筑学 (2013). 時間的展望 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編) パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp.210-220.
- 内沼幸雄 (1977). 対人恐怖の人間学——恥・罪・善悪の彼岸—— 弘文堂
- 内沼幸雄(1997). 対人恐怖の心理 講談社学術文庫
- Vassilopoulos, S. P., & Banerjee, R. (2008). Interpretations and judgments regarding positive and negative social scenarios in childhood social anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **46**, 870-876.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597. doi: 10.1037/0022-3514.61.4.590
- Witte, T. H., Callahan, K. L., & Perez-Lopez, M. (2002). Narcissism and anger: an exploration of underlying correlates. *Psychological Reports*, **90**, 871-875.
- 山下格 (1982). 対人恐怖の診断的位置づけ 臨床精神医学, **11**, 797-804.
- 山下格 (2011). 私の対人恐怖・社交恐怖の臨床 精神療法, **37**, 312-313.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**,64-68.

吉澤寛之 (2005). 社会的情報処理モデルによる反社会的行動研究の統合的考察——心理学的・生物学的・社会学的側面を中心として—— 名古屋大学大学院教育人間発達科学研究紀要 (心理発達科学), **52**, 95-122.

湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性——現実への不適応と虚構への没入をふまえて—— 犯罪心理学研究, **41**, 27-36.